

た。何故と云ふに、江抽齋の勤王は既に久しく定まつてゐたからである。

その六十

江抽齋の勤王は其源委を詳にしない。しかし抽齋の父允成に至つて、師柴野栗山に啓發せられたことは疑を容れない。允成の栗山に從學した年月は明でないが、栗山が五十三歳で幕府の召に應じて江戸に入つた天明六年には、允成が丁度二十三歳になつてゐた。家督してから二年の後である。允成が栗山の門に入つたのは、恐らくは其後久しきを経ざる間の事であつたらう。これは栗山が文化四年十二月朔に七十四歳で歿したとして推算したものである。

允成の友にして抽齋の師たりし市野迷庵が勤王家であつたことは、其詠史の諸作に徴して知ることが出来る。此詩は維新後森根園が刊行した。抽齋は宮に家庭に於て王室を尊崇する心を養成せられたのみでなく、又迷庵の説を聞いて感奮したらしい。

抽齋の王室に於ける、常に耿耿の心を懐いてゐた。そして曾て一たびこれがために身命を危くしたことがある。保さんはこれを母五百に聞いたが、慍むらくは其月日を詳にしない。しかし本所に於ての出来事で、多分安政三年の頃であつたらしいと云ふことである。

三人は互に目語して身を起し、刀の櫛に手を掛けて抽齋を圍んだ。そして云つた。我等の言を信ぜぬと云ふは無禮である。且重要な御使を承つてこれを果さずして還つては面目が立たない。主人はどうしても金をわたさぬか。すぐに返事をせよと云つた。

抽齋は坐したままで暫く口を噤んでゐた。三人が偽の使だと云ふことは既に明である。しかしこれと格闘することは、自分の欲せざる所で、又能はざる所である。家には若黨が在り諸生が在る。抽齋はこれと呼ばうか、呼ぶまいかと思つて、三人の氣色を覗つてゐた。

此時廊下に足音がせず、障子がすうつと開いた。主客は齊く愕き胎た。

その六十一

刀の櫛に手を掛けて立ち上つた三人の客を前に控へて、四疊半の端近く坐してゐた抽齋は、客から目を放さずに、障子の開いた口を斜に見遣つた。そして妻五百の異様な姿に驚いた。

五百は僅に腰巻一つ身に著けたばかりの裸體であつた。口には懐劍を銜へてゐた。そして闕際に身を屈めて、縁側に置いた小桶二つを両手に取り上げるところであつた。小桶からは湯氣が立ち升つてゐる。縁側を戸口まで忍び寄つて、障子

或日手島良助と云ふものが抽齋に一の秘事を語つた。それは江戸にある某貴人の窮迫の事であつた。貴人は八百兩の金が無いために、將に苦境に陥らんとしてをられる。手島はこれを調達せんと欲して奔走してゐるが、これを獲る道が無いと云ふのであつた。抽齋はこれを聞いて慨然として獻金を思ひ立つた。抽齋は自家の窮乏を口實として、八百兩を先取することの出来る無盡講を催した。そして親戚故舊を會して金を醸出せしめた。

無盡講の夜、客が已に散じた後、五百は沐浴してゐた。明朝金を貴人の許に齎さんがためである。此金を上る日は豫め手島をして貴人に稟さしめて置いたのである。

抽齋は忽ち刺豚の聲を聞いた。仲間が誰何すると、某貴人の使だと云つた。抽齋は引見した。來たのは三人の侍である。内密に旨を傳へたいから、人拂をして貰ひたいと云ふ。抽齋は三人を奥の四疊半に延いた。二人の言ふ所によれば、貴人は明朝を待たずして金を獲ようとして、此使を發したと云ふことである。

抽齋は應ぜなかつた。此秘事に與つてゐる手島は、貴人の許にあつて職を奉じてゐる。金は手島を介して上ることを約してある。面を識らざる三人に交付することは出来ぬと云ふのである。三人は手島の來ぬ事故を語つた。抽齋は信ぜないと云つた。

を開く時、持つて來た小桶を下に置いたのであらう。

五百は小桶を持つたまま、つと一間に進み入つて、夫を背にして立つた。そして沸き返るあがり湯を感つた小桶を、右左の二人の客に投げ付け、銜へてゐた懐劍を把つて鞘を拂つた。そして床の間に背にして立つた一人の客を睨んで、「どろぼう」と一聲叫んだ。

熱湯を浴びた二人が先に、櫛に手を掛けた刀をも抜かず、座敷から縁側へ、縁側から庭へ逃げた。跡の一人も續いて逃げた。

五百は仲間や諸生の名を呼んで、「どろぼう、どろぼう」と云ふ聲を其間に挿んだ。しかし家に居合せた男等の馳せ集るまでには、三人の客は皆逃げてしまつた。此時の事は後後まで江抽齋の家の一話になつてゐたが、五百は人の其功を稱する毎に、慍ちて席を離れたさうである。五百は幼くて武家奉公をしはじめた時から、七首一口だけは身を放さずに持つてゐたので、湯殿に脱ぎ棄てた衣類の傍から、それを取り上げることは出来たが、衣類を身に纏ふ違は無かつたのである。

翌朝五百は金を貴人の許に持つて往つた。手島の言によれば、これは獻金としては受けられぬ、唯借上になるのであるから、十箇年賦で返済すると云ふことであつた。しかし手島が江抽齋を訪うて、お手元不如意のために、今年返金せら

れぬと云ふことが数度あつて、維新の年に至るまでに、還された金は些許であつた。保さんが金を受け取りに往つたこともあるさうである。

此一條は保さんもこれを語ることを躊躇し、わたくしもこれを書くことを躊躇した。しかし抽齋の誠心をも、五百の勇氣をも、かくまで明に見ることの出来る事實を湮滅せしむるには忍びない。ましてや貴人は今は世に亡き御方である。あからさまに其人を斥さず、略其事を記すのは、或は妨が無からうか。わたくしはかう思惟して、抽齋の勤王を説くに當つて、遂に此事に言ひ及んだ。

抽齋は勤王家ではあつたが、攘夷家ではなかつた。初め抽齋は西洋嫌で、攘夷に耳を向けかねぬ人であつたが、前に云つたとほりに、安積良齋の書を讀んで悟る所があつた。そして竊に漢譯の博物窮理の書を閲し、ますます洋學の廢すべからざることを知つた。當時の洋學は主に蘭學であつた。嗣子の保さんに蘭語を學ばせることを遺言したのはこれがためである。

抽齋は漢法醫で、丁度蘭法醫の幕府に公認せられると同時に世を去つたのである。此公認を贏ち得るまでには、蘭法醫は社會に於いて奮闘した。そして彼等の攻撃の衝に當つたものは漢法醫である。其應戰の跡は漢蘭酒話、一夕醫話等の如き書に徴して知ることが出来る。抽齋は敢て言を其間に挟ま

思想を齎し來つた蘭法醫との間に、厭ふべき葛藤を生ずることを免れなかつたかも知れぬが、或は又彼の多紀苦庭の手に出でたと云ふ無名氏の漢蘭酒話、平野草齋の一夕醫話等と趣を殊にした、眞面目な漢蘭醫法比較研究の端緒が此に開かれたかも知れない。

抽齋の日常生活に人に殊なる所のあつたことは、前にも折に觸れて言つたが、今遺れるを拾つて二三の事を擧げようと思ふ。抽齋は病を以て防ぎ得べきものとした人で、常に養生に心を用ゐた。飯は朝午各三碗、夕二碗半と極めてゐた。しかも其碗の大きさとこれに飯を盛る量とが嚴重に定めてあつた。殊に晩年になつては、嘉永二年に津輕信嗣が抽齋の此習慣を聞き知つて、長尾宗右衛門に命じて造らせて賜はつた碗のみを用ゐた。其形は常の碗より稍大きかつた。そしてこれに飯を盛るに婢をして盛らしむるときは、過不及を免れぬと云つて、飯を小さい櫃に取り分けさせ、櫃から碗に盛ることを、五百の役目にしてゐた。朝の未嘗汁も必ず二碗に限つてゐた。

菜蔬は最も菜飯を好んだ。生で食ふときは大根おろしにし、煮て食ふときはふろふきにした。大根おろしは汁を棄てず、醬油などを掛けなかつた。

濱名納豆は絶やさずに蓄へて置いて食べた。魚類では方頭魚の未嘗漬を嗜んだ。鱈も喜んで食べた。

なかつたが、心中之が爲に憂へ悶えたことは、想像するに難からぬのである。

その六十二

わたくしは幕府が蘭法醫を公認すると同時に抽齋が歿したと云つた。此公認は安政五年七月初の事で、抽齋は翌八月の末に歿した。

是より先幕府は安政三年二月に、蕃書調所を九段坂下元小姓組番頭格竹本水正正愷の屋敷跡に創設したが、これは今の外務省の一部に外國語學校を兼たやうなもので、醫術の事には關せなかつた。越えて安政五年に至つて、七月三日に松平藤庵守齋彬家來戸塚靜海、松平肥前守齋正家來伊東玄朴、松平三河守慶倫家來遠田澄庵、松平駿河守勝道家來青木春岱に奥醫師を命じ、二百俵三人扶持を給した。之が幕府が蘭法醫を任用した權輿で、抽齋の歿した八月廿八日に先づこと、僅に五十四日である。次いで同じ月の六日に、幕府は御醫師即ち官醫中有志のものは「阿蘭醫術兼學政候とも不苦候」と令した。翌日又有馬左兵衛佐道純家來竹内玄同、徳川賢吉家來伊東貞齋が奥醫師を命ぜられた。此二人も亦蘭法醫である。抽齋が若し生きながらへてゐて、幕府の聘を受けることを肯じたら、此等の蘭法醫と肩を比べて仕へなくてはならなかつたであらう。さうなつたら舊思想を代表すべき抽齋は、新

饅は時時食べた。間食は殆全く禁じてゐた。しかし稀に飴と上等の煎餅とを食ふことがあつた。

抽齋が少壯時代は毫も酒を飲まなかつたのに、天保八年に三十三歳で弘前に住つてから、防寒のために飲みはじめたことは、前に云つたとほりである。さて一時は晚酌の量が稍多かつた。其後安政元年に五十歳になつてから、猪口に三つを踰えぬことにした。猪口は山内忠兵衛の贈つた品で、宴に赴くにはそれを懐にして家を出た。

抽齋は決して冷酒を飲まなかつた。然るに安政二年に地震に逢つて、ふと冷酒を飲んだ。其後は偶飲むことがあつたが、これも三杯の量を過ぎなかつた。

その六十三

鰻を嗜んだ抽齋は、酒を飲むやうになつてから、鰻酒と云ふことをした。茶碗に鰻の蒲焼を入れ、些しのたれを注ぎ、熱酒を湛へて蓋を覆つて置き、少選してから飲むのである。抽齋は五百を娶つてから、五百が少しの酒に堪へるの、勸めてこれを飲ませた。五百はこれを旨がつて、兄榮次郎と妹増長尾宗右衛門とに傳め、又比良野貞固に飲ませた。此等の人人は後に皆鰻酒を飲むことになつた。

飲食を除いて、抽齋の好む所は何かと問へば、讀書と云はなくてはならない。古刊本、古抄本を講窮することは、抽齋

終生の事業であるから、ここに算せない。醫書中で素問を愛して、身邊を離さなかつたことも亦同じである。次は説文である。晩年には毎月説文會を催して、小島成齋、森根園、平井東堂、海保竹逕、喜多村栲窓、栗本鋤雲等を集へた。竹逕は名を元起、通稱を辨之助と云つた。本稻村氏で漁村の門人となり、後に養はれて子となつたのである。文政七年の生で、抽齋の歿した時、三十五歳になつてゐた。栲窓は名を直寛、字を土栗と云ふ。通稱は安齋、後父の稱安政を襲いだ。香城は其晩年の號である。經を安積良齋に受け、醫を齋壽館に學び、父槐園の後を承けて幕府の醫官となり、天保十二年には三十八歳で齋壽館の教諭になつてゐた。栗本鋤雲は栲窓の弟である。通稱は哲三、栗本氏に養はるるに及んで、瀨兵衛と改め、又瑞見と云つた。嘉永三年に二十九歳で奥醫師になつてゐた。

説文會には島田篁村も時列席した。篁村は武藏國大崎の名主島田重規の子である。名は重禮、字は敬甫、通稱は源六郎と云つた。良齋、漁村の二家に從學してゐた。天保九年生であるから、嘉永、安政の交には猶十代の青年であつた。抽齋の歿した時、篁村は丁度二十になつてゐたのである。抽齋の好んだ小説は、赤本、菟藪本、黄表紙の類であつた。想ふにその自ら作つた呂后千夫は黄表紙の體に倣つたものであらう。

その六十四

劇を好む抽齋は又照葉狂言をも好んださうである。わたくしは照葉狂言と云ふものを知らぬので、青青園伊原さんに問ひに遣つた。伊原さんは喜多川季莊の近世風俗志に、此演戲の起原沿革の載せてあることを報じてくれた。

照葉狂言は嘉永の頃大阪の蕩子四五人が創意したものである。大抵能樂の間の狂言を模し、衣裳は素襖、上下、鬘斗目を用ゐ、科白には歌舞伎狂言、俄、踊等の状をも交へ取つた。安政中江戸に行はれて、寄場はこれのために難番した。照葉とは天爾波俄の訛略だと云ふのである。

伊原さんはこの照葉の語原は覺東ないと云つてゐるが、いかにも飄ち信じ難いやうである。

能樂は抽齋の樂み見る所で、少い頃謡曲を學んだこともある。偶弘前の人村井宗興と相逢ふことがあると、抽齋は共に一曲を温習した。技の妙が人の意表に出たさうである。俗曲は少しく長唄を學んでゐたが、これは謡曲の妙に及ばざること遠かつた。

抽齋は鑑賞家として古畫を翫んだが、多く買ひ集むることをばしなかつた。谷文晁の教を受けて、實用の圖を作る外に、往往自ら人物山水をも畫いた。

古武鑑、古江戸圖、古錢は抽齋の聚珍家として蒐集した所

抽齋がいかにも劇を好んだかは、劇神仙の號を襲いだと云ふを以て、想見することが出来る。父允成が屢戲場に入出したさうであるから、殆ど遺傳と云つても好からう。然るに嘉永二年に將軍に謁見した時、要路の人が抽齋に忠告した。それは目見以上の身分になつたからは、今より後市中の湯屋に往くことと、芝居小屋に立ち入ることとは遠慮するが宜しいと云ふのであつた。遷江の家には浴室の設があつたから、湯屋に往くことは禁せられても差支が無かつた。しかし觀劇を停められるのは、抽齋の苦痛とする所であつた。抽齋は隠忍して姑く忠告に従つてゐた。安政二年の地震の日に觀劇したのは、足掛七年振であつたと云ふことである。

抽齋は森根園と同じく、七代目市川團十郎を鼻眞にしてゐた。家に傳はつた俳名三升、白猿の外に、夜雨庵、二九亭、壽海老人と號した人で、葦屋町の芝居茶屋三右衛門の子、五世團十郎の孫である。抽齋より長すること十五年であつたが、抽齋に一年遅れて、安政六年三月二十三日に七十歳で歿した。

次に鼻眞にしたのは五代目澤村宗十郎である。源平、源之助、訥升、宗十郎、長十郎、高助、高賀と改稱した人で、享和元年に生れ、嘉永六年十一月十五日に五十三歳で歿した。抽齋より長すること四年であつた。四世宗十郎の子、脱道のために脚を截つた三世田之助の父である。

である。わたくしが初め古武鑑に媒介せられて抽齋を識つたことは、前に云つたとほりである。

抽齋は碁を善くした。しかし局に對することが少であつた。これは自ら傲めて耽らざらんことを欲したのである。

抽齋は大名の行列を觀ることを喜んだ。そして家家の鹵簿を記憶して忘れなかつた。新武鑑を買つて、其圖に着色して自ら娛んだのも、是がためである。此嗜好は喜多靜廬の祭禮を看ることを喜んだのと頗る相類してゐる。

角兵衛獅子が門に至れば、抽齋が必ず出て見たことは、既に言つた。

庭園は抽齋の愛する所で、自ら剪刀を把つて植木の刈込をした。木の中では御柳を好んだ。即ち爾雅に載せてある樛である。雨師、三春柳なども云ふ。これは早く父允成の愛してゐた木で、抽齋は房を移すにも、遺愛の御柳だけは常に居る室に近い地に栽ゑ替へさせた。居る所を觀柳書屋と名づけた。柳字も、楊柳では無い、樛柳である。これに反して柳原書屋の名は、お玉が池の家が柳原に近かつたから命じたのであらう。

抽齋は晩年に最も雷を嫌つた。これは二度まで落雷に遭つたからであらう。一度は新に娶つた五百と道を行く時の事であつた。陰つた日の空が二人の頭上に於て裂け、そこから一道の火が地上に降つたと思ふと、忽ち耳を貫く音がして、二

人は地に僣れた。一度は躋壽館の講師の詰所に休んである時の事であつた。詰所に近い圃の前の庭へ落雷した。此時則に立つて小便をしてゐた伊澤柏軒は、前へ倒れて、門齒二枚を朝顔に打ち付けて折つた。此の如くに反覆して雷火に脅されたので、抽齋は雷聲を惡むに至つたのであらう。雷が鳴り出すと、蚊蚋の中に坐して酒を呼ぶことにしてゐたさうである。

抽齋の此弱點は偶森枳園がこれを同じうしてゐた。枳園の壽藏碑の後に門人青山道醇等の書した文に、「夏月畏雷震、發聲之前必先知之」と云つてある。枳園には今一つ厭なものがあつた。それは蛭蟪であつた。夜行くのに、道に蛭蟪があると、闇中に於てこれを知つた。門人の隨ひ行くものが、燈火を以て照し見て驚くことがあつたさうである。これも同じ文に見えてゐる。

その六十五

抽齋は平姓で、小字を恆吉と云つた。人と成つた後の名は全善、字は道純、又子良である。そして道純を以て通稱とした。其號抽齋の抽字は、本籍に作つた。擗、擗、抽の三字は皆相通するのである。抽齋の手澤本には擗齋校正の篆印が殆必ず捺してある。

別號には觀柳書屋、柳原書屋、三亦堂、目耕肘齋齋、今未

是翁、不求甚解翁等がある。その三世劇神仙と稱したことは、既に云つたとほりである。

抽齋は嘗て自ら法諡を撰んだ。容安院不求甚解居士と云ふのである。此字面は妙ならずとは云ひ難いが、餘りに抽象的である。これに反して抽齋が妻五百のために撰んだ法諡は妙極まつてゐる。半千院出藍終葛大姉と云ふのである。半千は五百、出藍は紺屋町に生れたこと、終葛は葛飾郡で死ぬることである。しかし世事の轉變は逆観すべからざるもので、五百は本所で死ぬることを得なかつた。

この二つの法諡は孰れも石に彫られなかつた。抽齋の墓には海保漁村の文を刻した碑が立てられ、又五百の遺骸は抽齋の墓穴に合葬せられたからである。

大抵傳記は其人の死を以て終るを例とする。しかし古人を景仰するものは、其苗裔がどうなつたかと云ふことを問はずにはゐられない。そこでわたくしは既に抽齋の生涯を記し畢つたが、猶筆を投ずるに忍びない。わたくしは抽齋の子孫、親戚、師友等のなりゆきを、これより下に書き付けて置かうと思ふ。

わたくしは此記事を作るに許多の障礙のあることを自覺する。それは現存の人に言ひ及ぼすことが漸く多くなるに従つて、忌諱すべき事に撞着することも亦漸く頻なることを免れぬからである。此障礙は上に抽齋の經歷を敘して、その安政

中の末路に近づいた時、早く既に頭を擡げて來た。これからは、これが彌筆端に纏繞して、厭ふべき拘束を加へようとするであらう。しかしわたくしは縦しや多少の困難があるにしても、書かんと欲する事だけは書いて、此稿を完うする積である。

遷江の家には抽齋の歿後に、既に云つたやうに、未亡人五百、陸、水木、傳六、翠暫、嗣子成善と矢鳥氏を冒した優善とが遺つてゐた。十月朔に才に二歳で家督相續をした成善と、他の五人の子との世話をして一家の生計を立てて行かなくてはならぬのは、四十三歳の五百であつた。

遺子六人の中で差當り問題になつてゐたのは、矢鳥優善の身の上である。優善は不行跡のために、二年前に表醫者から小普請醫者に貶せられ、一年前に表醫者介に復し、父を喪ふ年の二月に纒に故の表醫者に復することが出来たのである。

しかし當時の優善の態度には、まだ眞に改悛したものとは看做しにくい所があつた。そこで五百は且暮周密に其舉動を監視しなくてはならなかつた。

残る五人の子の中で、十二歳の陸、六歳の水木、五歳の專六はもう讀書、習字を始めてゐた。陸や水木には、五百が自ら句讀を授け、手跡は手を把つて書かせた。專六は近隣の杉四郎と云ふ學究の許へ通つてゐたが、これも五百が復習させることに骨を折つた。又專六の手本は平井東堂が書いたが、

これも五百が臨書だけは手を把つて書かせた。午餐後日の暮れかかるまでは、五百は子供の背後に立つて手習の世話をしたのである。

その六十六

邸内に棲はせてある長尾の一家にも、折折多少の風波が起る。さうすると必ず五百が調停に往かなくてはならなかつた。其争は五百が商業を再興させようとして勸めるのに、安が躊躇して決せないために起るのである。宗右衛門の長女敬はもう二十一歳になつてゐて、生得稍勝氣なので、母をして五百の言に従はしめようとする。母はこれを拒みはせぬが、さればとて實行の方へは、一步も踏み出さうとはしない。ここに争は生ずるのであつた。

さてこれが鎖撫に當るものが五百でなくてはならぬのは、長尾の家でまだ宗右衛門が生きてゐた時からの習慣である。五百の言には宗右衛門が服してゐたので、其妻や子もこれに抗することをば敢てせぬのである。

宗右衛門が妻の妹の五百を、嘗抽齋の配偶として尊敬するのみでなく、かくまでに信任したには、別に來歴がある。それは或時宗右衛門が家庭のチランとして大いに安を虐待して、五百の嚴い忠告を受け、涙を流して罪を謝したことがあつて、それから後は五百の前に項を屈したのである。

宗右衛門は性質亮直に過るとも云ふべき人であつたが、彌積持であつた。今から十二年前の事である。宗右衛門はまだ七歳の銚に讀書を授け、此子が大きくなつたら士の女房にする云つてゐた。銚は記性があつて書を善く讀んだ。かう云ふ時に、宗右衛門が酒氣を帯びてゐると、銚を側に引き附けて置いて、忍耐を教へると云つて、戲のやうに煙管で頭を打つことがある。銚は初め忍んで黙つてゐるが、後には「お父つさん、厭だ」と云つて、手を舉げて打つ眞似をする。宗右衛門は怒つて「親に手向をするか」と云ひつつ、銚を拳で亂打する。或日から云ふ場合に、安が停めようとすると、宗右衛門はこれをも髪を攫んで拉き倒して亂打し、「出て往け」と叫んだ。

安は本宗右衛門の戀女房である。天保五年三月に、當時阿部家に仕へて金吾と呼ばれてゐた、まだ二十歳の安が、宿に下つて堺町の中村座へ芝居を看に往つた。此時宗右衛門は安を見初めて、芝居がはねてから追尾して行つて、紺屋町の日野屋に入るのを見極めた。同意の山内榮次郎の家である。さては榮次郎の妹であつたと云ふので、直ちに人を遣つて縁談を申し込んだのである。

かうしたわけで貰はれた安も、拳の下に崩れた丸鬘を整へる違もなく、山内へ逃げ歸る。榮次郎の忠兵衛は廣瀬を名告る前の頃で、會津屋へ調停に往くことを面倒がる。妻はおい

らん濱照がなれの果で何の用にも立たない。偶邊江の家から來合せてゐた五百に、「どうかして遣つてくれ」と云ふ。五百は姉を宥め謙して、横山町へ連れて往つた。

會津屋に往つて見れば、敬はらうろろ立ち廻つてゐる。銚はまだ泣いてゐる。妻の出た跡で、更に酒を呼んだ宗右衛門は、氣味の悪い笑顏をして五百を迎へる。五百は徐に詫言を言ふ。主人はなかなか聴かない。暫く語を交へてゐる間に、主人は次第に饒舌になつて、光陰萬丈當るべからざるに至つた。宗右衛門は好んで故事を引く。偽書孔叢子の孔氏三世妻を出したと云ふ説が出る。祭仲の女雍姫が出る。齋藤太郎左衛門の女が出る。五百はこれを聞きつつ思案した。これは負けてゐては際限が無い。例を引いて論ずることなら、こつちにも言分がないことはない。そこで五百も論陣を張つて、旗鼓相當つた。公父文伯の母季敬妻を引く。顔之推の母を引く。終に大雅思齊の章の「刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦」を引いて、宗右衛門が雌雉の和を破るのを責め、聲色共に厲しかつた。宗右衛門は屈服して「なぜあなたは男に生れなかつたのです」と云つた。

長尾の家に争が起る毎に、五百が來なくてはならぬと云ふことになるには、かう云ふ來歴があつたのである。

その六十七

抽齋の致した翌年安政六年には、十一月二十八日に矢島優善が濱町中屋敷詰の奥通にせられた。表醫者の名を以て信順の側に侍することになつたのである。今尙信頼し難い優善が、責任ある職に就いたのは、五百のために心勞を増す種であつた。

抽齋の姉須磨の生んだ長女延の亡くなつたのは、多分此年の事であつたらう。允成の實父稻垣清藏の養子が矢矢清兵衛で、清兵衛の子が飯田良清で、良清の女が此延である。容貌の美しい女で、小舟町の豊節間屋新井屋半七と云ふものに嫁してゐた。良清の長男直之助は早世して、跡には養子孫三郎と、延の妹路とが残つた。孫三郎は幕府の徒目附であつた。

抽齋後の第二年は萬延元年である。成善はまだ四歳であつたが、夙くも濱町中屋敷の津輕信順に近習として仕へることになつた。勿論時時機嫌を伺ひに出るに止まつてゐたであらう。此時新に中小姓になつて中屋敷に勤める矢川文一郎と云ふものがあつて、彈い成善の世話をしてくれた。

矢川には本末兩家がある。本家は長足流の馬術を傳へてゐて、世文内と稱した。先代、文内の嫡男與四郎は、當時順承の側用人になつて、父の稱を襲いでゐた。妻見玉氏は越前國敦賀の城主酒井右京亮忠毗の家來某の女であつた。二百石八人扶持の家である。與四郎の文内に弟があり、妹があつて、

彼は宗兵衛と云ひ、此を岡野と云つた。宗兵衛は分家して、近習小姓倉田小十郎の女みつを娶つた。岡野は順承附の中臈になつた。實は妾である。

文一郎は此宗兵衛の長子である。其母の姉妹には林有的の妻、佐竹永海の妻などがある。佐竹は初め山内氏五百を娶らんとして成らず、遂に矢川氏を納れた。某の年の元日に佐竹は山内へ廻禮に來て、庭に立つてゐた五百の手を搦らうとすると、五百は其手を強く引いて放した。佐竹は庭の池に墜ちた。山内では佐竹に榮次郎の衣服を著せて歸した。五百は後に抽齋に嫁してから、兩國中村樓の書畫會に往つて、佐竹と邂逅した。そして佐竹の數人の藝妓に圍まれてゐるのを見て「佐竹さん、相變らず英雄色を好むとやらですな」と云つた。佐竹は頭を掻いて苦笑したさうである。

文一郎の父は早く世を去つて、母みつは再嫁した。そこで文一郎は津輕家に縁故のある淺草常福寺にあづけられた。これは嘉永四年の事で、天保十二年生の文一郎は十一歳になつてゐた。

文一郎は寺で人と成つて、澀江家で抽齋の亡くなつた頃、本家の文内の許に引き取られた。そして成善が近習小姓を仰付けられる少し前に、二十歳で信順の中小姓になつたのである。文一郎は頗る姿貌があつて、心自らこれを持んでゐた。當

時吉原の狎妓の許に足繁く通つて、遂に夫婦の誓をした。或夜文一郎はふと醒めて、傍に臥してゐる女を見ると、一眼を大きく睜開いて眠つてゐる。常に美しいとばかり思つてゐた面貌の異様に變じたのに驚いて、肌を粟を生じたが、忽又魔夢に脅されてゐるのではないかと疑つて、遽に身を起した。女が醒めて、どうしたのかと問うた。文一郎が答は未だ半ならざるに、女は満臉に紅を潮して、偏盲のために義眼を装つてゐることを告げた。そして涙を流しつつ、舊盟を破らずにゐてくれと頼んだ。文一郎は陽にこれを話して歸つて、それ切此女と絶つたさうである。

その六十八

わたくしは少時の文一郎を傳ふるに、辭を費すこと稍多きに至つた。これは單に文一郎が釋い成善を扶掖したからでは無い。文一郎と澀江氏との關係は、後に漸く緊密になつたからである。文一郎は成善の姉婿になつたからである。文一郎さんは赤坂藪町に現存してゐる人ではあるが、恐くは自ら往事を談ずることを喜ばぬであらう。其少時の事蹟には二つの活きた典據がある。一つは矢川文内の二女お鶴さんの話で、一つは保さんの話である。文内には三子二女があつた。長男俊平は宗家を嗣いで、其子番平さんが今淺草向柳原町に住してゐるさうである。俊平の弟は録平、録平である。女子は長

を鐵と云ひ、次を鑑と云ふ。鑑は後に名を鶴と更めた。中村勇左衛門即ち今弘前桶屋町にゐる範一さんの妻で、其子の範さんとわたくしとは書信の交通をしてゐるのである。

成善は此年十一月朔に海保漁村と小島成善との門に入つた。海保の塾は下谷練堀小路にあつた。所謂傳經廬である。下谷は卑濕の地なるにも拘らず、庭には梧桐が栽ゑてあつた。これは漁村が其師大田錦城の風を慕つて植ゑさせたのである。當時漁村は六十二歳で、躋壽館の講師となつてゐた。又陸奥國八戸の城主南部遠江守信順と越前國鯖江の城主間部下總守詮勝とから五人扶持つづの俸を受けてゐた。しかし躋壽館に於ても、家塾に於ても、大抵養子竹逕が代講をしてゐたのである。

小島成善は藩主阿部正寧の世には、辰の口の上屋敷にゐたが、安政四年に家督相續をした賢之助正教の世になつてから、昌平橋内の上屋敷にゐた。今の神田淡路町である。手習に來る兒童の數は頗る多く、二階の三室に机を並べて習ふのであつた。成善が相識の兄弟子には、嘉永二年生で十二歳になる伊澤鐵三郎がゐた。柏軒の子で、後に徳安と稱し、維新後に磐と更めた人である。成善は手に鞭を執つて正面に坐してゐて、筆法を誤ると、鞭の尖で指し示した。そして兒童を倦ましめざらんがためであらうか、諧謔を交へた話をした。其相手は多く鐵三郎であつた。成善はまだ幼いので、海保へ

往くにも、小島へ往くにも、若黨に連れられて行つた。鐵三郎にも若黨が附いて來たが、これは父が奥詰醫師になつてゐるので、従者らしく附いて來たのである。

抽齋の墓碑が立てられたのも此年である。海保漁村の墓誌は其文が頗る長かつたのを、豐碑を築き起して世に傲るが如き狀をなすのは、主家に對して憚があると云つて、文字を識る四五人の故舊が來て、胥議して、斧鉞を加へた。其文の事を傳へて完からず、又間實に悖るものさへあるのは、此筆削のためである。

建碑の事が畢つてから、澀江氏は臺所町の邸を引き拂つて龜澤町に移つた。これは淀川過書船支配角倉與一の別邸を買つたのである。角倉の邸宅は飯田町竊木坂下にあつて、主人は京都で勤めてゐた。龜澤町の邸には庭があり池があつて、そこに稻荷と和合神との祠があつた。稻荷は龜澤稻荷と云つて、初午の日には參詣人が多く、縁日商人が二十餘の浮舖を門前に出すことになつてゐた。そこで角倉は邸を賣るに、初午の祭をさせると云ふ條件を附けて賣つた。今相生小學校になつてゐる地所である。

これまで澀江の家に同居してゐた矢島優善が、新に本所緑町に一戸を構へて分立したのは、龜澤町の家を澀江氏の移ると同時にあつた。

その六十九

矢島優善をして別に一家なして自立せしめようと云ふことは、前年即ち安政六年の末から、中丸昌庵が主として勸説した所である。昌庵は抽齋の門人で、多才能辯を以て儕輩に推されてゐた。文政元年生であるから、當時四十三歳になつて、食祿二百石八人扶持、近習醫者の首位に居つた。昌庵はかう云つた。「優善さんは一時の心得違から貶黜を受けた。しかし幸に過を改めたので、一昨年故の地位に復り、昨年は奥通をさへ許された。今は抽齋先生が亡くなられてから、もう二年立つて、優善さんは二十六歳になつてゐる。わたくしは去年からさう思つてゐるが、優善さんの奮つて自ら新にすべき時は今である。それには一家を構へて、責を負つて事に當らなくてはならない」と云つた。既にして二三のこれに同意を表すものも出來たので、五百は危みつつ此議を納れたのである。比良野貞固は初め昌庵に反對してゐたが、五百が意を決したので、復争はなくなつた。

優善の移つた緑町の家は、渾名を鳩醫者と呼ばれた町醫佐久間某の故宅である。優善は妻鐵を家に迎へ取り、下女一人を雇つて、三人暮しになつた。

鐵は優善の養父矢島玄碩の二女である。玄碩、名を優藤と云つた。本抽齋の優善に命じた名は允善であつたのを、矢島

氏を肩すに及んで、養父の優字を襲用したのである。玄碩の初の妻某氏には子が無かつた。後妻壽美は龜高村喜左衛門と云ふものの妹で、假親は上總國一宮の城主加藤遠江守久徽の醫官原雲庵である。壽美が二女を生んだ。長を環と云ひ、次を鐵と云ふ。嘉永四年正月二十三日に壽美が死し、五月二十四日に九歳の環が死し、六月十六日に玄碩が死し、跡には僅に六歳の鐵が遺つた。

優善は此時矢島氏に入つて末期養子となつたのである。そして其媒介者は中丸昌庵であつた。

中丸は當時其師抽齋に説くに、頗る多言を費し、矢島氏の祀を絶つに忍びぬと云ふを以て、抽齋の情誼に懇へた。なぜと云ふに、抽齋が次男優善をして矢島氏の女婿たらしむるのは大なる犠牲であつたからである。玄碩の遺した女鐵は重い痘瘡を患へて、癩痕滿面、人の見るを厭ふ醜貌であつた。

抽齋は中丸の言に動されて、美貌の子優善を鐵に與へた。五百は情として忍び難くはあつたが、事が夫の義氣に出でてゐるので、強ひて争ふことも出来なかつた。

此事のあつた年、五百は二月四日に七歳の棠を失ひ、十五日に三歳の癸巳を失つてゐた。當時五歳の陸は、小柳町の大工の棟梁新八が許に里に遣られてゐたので、それを喚び歸さうと思つてゐると、そこへ鐵が來て抱かれて寝ることになり、陸は翌年まで里親の許に置かれた。

棠は美しい子で、抽齋の女の中では純と棠との容姿が最も人に褒められてゐた。五百の兄榮次郎は棠が踊を見る度に、「食ひ附きたいやうな子だ」と云つた。五百も餘り棠の美しさを云云するので、陸は「お母あ様の姉えさんを褒めるのを聞いてゐると、わたしなんぞはお化のやうな顔をしてゐるとしか思はれない」と云ひ、又棠の死んだ時、「大方お母あ様はわたくしを代に死なせたかつたのだらう」とさへ言つた。

その七十

女棠が死んでから半年の間、五百は少しく精神の均衡を失つて、夕暮になると、窓を開けて庭の闇を凝視してゐることが屢有つた。これは何故ともなしに、闇の裏に棠の姿が見えはせぬかと待たれたのださうである。抽齋は氣遣つて、「五百、お前にも似ないぢやないか。少ししつかりしないか」と勧めた。

そこへ矢島玄碩の二女、優善の未來の妻たる鐵が來て、五百に抱かれて寝ることになつた。螺贏の母は情を矯めて、睡の無い人の子を睡しはぐまなくてはならなかつたのである。さて眠つてゐるうちに、五百はいつか懐にゐる子が棠だと思つて、夢現の境に其體を撫でてゐた。忽ち一種の恐怖に襲はれて目を開くと、痘痕のまだ新しい、赤く引き吊つた鐵の顔が、觸れ合ふ程近い所にある。五百は覺えず咽び泣いた。

た。そして意識の明になると共に、「ほんに優善は可哀さうだ」とつぶやくのであつた。

緑町の家へ、優善が此鐵を通してはひつた時は、鐵はもう十五歳になつてゐた。しかし世馴れた優善は鐵を子供扱にして、詞をやさしくして宥めてゐたので、二人の間には何の衝突も起らずにゐた。

これに反して五百の監視の下を離れた優善は、門を出でては昔の放恣なる生活に立ち歸つた。長崎から歸つた鹽田良三との間にも、定めて聯絡が附いてゐたことであらう。此人達は常に酒家妓樓に出入するのみではなく、常に無頼の徒と會して衰耽の技を闘はした。良三の如きは頭を一つ、籠にして、どてらを被て街上を調歩したことがあるさうである。優善の背後には、もうネメシスの神が通り近づいてゐた。

澀江氏が龜澤町に來る時、五百は又長尾一族のために、本の小家を新しい邸に徙して、そこへ一族を棲はせた。年月は詳にせぬが、長尾氏の二女の人に嫁したのは、龜澤町に來てからの事である。初め長女敬が母と共に坐食するに忍びぬと云つて、媒するもののあるに任せて、猿若町三丁目守田座附の茶屋三河屋力藏に嫁し、次で次女詮も淺草須賀町の呉服商榊屋儀兵衛に嫁した。未亡人安は筆算が出来るので、敬の夫力藏に重寶がられて、茶屋の帳場にすわることになつた。抽齋の藏書は兼て三萬五千部あると云はれてゐたが、此年

龜澤町に徙つて檢すると、既に一萬部に満たなかつた。矢島優善が臺所町の土藏から書籍を搬出するのを、當時まだ生きてゐた兄西善が見附けて、奪ひ還したことがあつた。しかし人目に觸れずに、どれだけ出して賣つたかわからない。或時は優善が書籍を索に繋いで卸すと、街上に友人が待ち受けてゐて持ち去つたさうである。安政三年以後、抽齋の時時病臥することがあつて、其間には書籍の散佚することが殊に多かつた。又人に貸して失つた書も少くない。就中森枳園と其子養眞とに貸した書は多く還らなかつた。成善が海保の塾に入つた後には、海保竹運が數澀江氏に警告して、「大分御藏書印のある本が市中に見えるやうでございますから、御注意なさいまし」と云つた。

抽齋の心に懸けて死んだ躰壽館校刻の醫心方は、此年に完成して、森枳園等は白銀若干を賞賜せられた。

抽齋に洋學の必要を悟らせた安積良齋は、此年十一月二十一日に七十歳で歿した。良齋の歿した時の齡は諸書に異同があつて、中に七十一としたものと七十六としたものが多し。鈴木春浦さんに頼んで、妙源寺の墓石と過去帖とを檢して貰つたが、並に皆これを記してゐない。しかし文集を閲するに、故郷の安達太郎山に登つた記に、干支と年齢のおほよそとが書してあつて、萬延元年に七十六に満たぬことは明白である。子文九郎重允が家を嗣いだ。少い時疥癬のために衰

弱したのを、父が温泉に連れて往つて治したが、文集に見えてゐる。抽齋は良齋のワシントンの論議を讀んで、喜んで反復したさうである。恐くは洋外紀略の「嗚呼話聖東、雖生於戎羯、其爲人、有足多者」云云の一節であつたらう。

その七十一

抽齋歿後第三年は文久元年である。年の初に五百は大きい本箱三つを成善の部屋に運ばせて、戸棚の中に入れた。それから云つた。

「これは日本に僅三部しか無い善い版の十三經註疏だが、お父様がお前のだと仰つた。今年はもう三回忌の来る年だから、今からお前の傍に置くよ」と云つた。

數日の後に矢鳥優善が、活花の友達を集めて會をしたいが、縁町の家には丁度好い座敷が無いから、成善の部屋を借りたといふ云つた。成善は部屋を明け渡した。

さて友達と云ふ數人が来て、汁粉などを食つて歸つた跡で、戸棚の本箱を見ると、其中は空虚であつた。

三月六日に優善は「身持不行跡不埒」の廉を以て隱居を命ぜられ、同時に「御憐憫を以て名跡御立被下置」と云ふことになつて、養子を入れることを許された。

優善の應に養ふべき子を選ぶことをば、中丸昌庵が引き受けた。然るに中丸の歡心を得てゐる近習詰百五十石六人扶持

の醫者に、上原元永と云ふものがあつて、此上原が町醫伊達周禎を推薦した。

周禎は同じ年の八月四日を以て家督相續をして、矢鳥氏、藤二百石八人扶持を受けることになつた。養父優善は二十七歳、養子周禎は文化十四年生で四十六歳になつてゐた。

周禎の妻を高と云つて、已に四子を生んでゐた。長男周碩、次男周策、三男三藏、四男玄四郎が即ち是である。周碩が矢鳥氏を冒した時、長男周碩は生得不調法にして仕官に適せぬと稱して廢嫡を請ひ、小田原に往つて町醫となつた。そこで弘化二年生の次男周策が嗣子に定まつた。當時十七歳である。

是より先優善が隱居の沙汰を蒙つた時、これがために最も憂へたものは五百で、最も憤つたものは比良野貞固である。貞固は優善を面責して、いかにして此辱を雪ぐかと問うた。優善は山田昌榮の塾に入つて勉學したいと答へた。

貞固は先づ優善が改俊の状を見届けて、然る後に入塾せしめると云つて、優善と妻鐵とを自邸に引き取り、二階に住はせた。

さて十月になつてから、貞固は五百を招いて、俱に優善を山田の塾に連れて往つた。塾は本郷弓町にあつた。

此塾の月俸は三分二朱であつた。貞固の謂ふには、これは聊の金ではあるが、矢鳥氏の祿を受くる周禎が當然支出すべ

きもので、又優善の修行中其妻鐵をも、周禎があづかるが好いと云つた。そして此二件を周禎と交渉した。周禎はひどく迷惑らしい答をしたが、後に澁りながらも承諾した。想ふに上原は周禎を矢鳥氏の嗣となすに當つて株の賣渡のやうな形式を用ゐたのであらう。上原は澁江氏に對して餘り同情を有せぬ人で、優善には屁の糞と云ふ渾名をさへ付けてゐたさうである。

山田の塾には當時門人十九人が寄宿してゐたが、未だ幾もあらぬに梅林松彌と云ふものと優善とが塾頭にせられた。梅林は初め抽齋に學び、後此に來たもので、維新後名を潔と改め、明治二十一年一月十四日に陸軍一等軍醫を以て終つた。

比良野氏では此年同藩の物頭二百石稻葉丹下の次男房之助を迎へて養子とした。これは貞固が既に五十歳になつたのに、妻かなが子を生まぬからであつた。房之助は嘉永四年八月二日生で、當時十一歳になつてゐて、學問よりは武藝が好であつた。

その七十二

矢川氏では此年文一郎が三十一歳で本所二つ目の鐵物問屋平野屋の女柳を娶つた。

石塚重兵衛の豊芥子は、此年十二月十五日に六十三歳で歿した。豊芥子が澁江氏の扶助を仰ぐことは、殆ど恒例の如く

になつてゐた。五百は石塚氏にわたす金を記す帳簿を持つてゐたさうである。しかし抽齋は此人の文字を識つて、廣く市井の事に通じ、又劇の沿革を審にしてゐるのを愛して、來り訪ふ毎に歡び迎へた。今抽齋に遅るること三年で世を去つたのである。

人の死を説いて、直ちに其非を擧げんは、後言めく嫌はあるが、抽齋の藏書をして散佚せしめた顛末を尋ねるときは、豊芥子も亦幾分の責を分たなくてはならない。その持ち去つたのは主に歌舞音曲の書、隨筆小説の類である。其他書畫骨董にも、此人の手から商估の手にわたつたものがある。ここに保さんの記憶してゐる一例を擧げよう。抽齋の遺物に圓山應舉の畫百枚があつた。題材は彼の名高い七難七福の圖に似たもので、わたくしは其名を保さんに聞いて記憶してゐるが、少しくこれを筆にすることを憚る。裝潢頗る美にして桐の箱入になつてゐた。此畫と木彫の人形數箇とを、豊芥子は某會に出陳すると云つて借りて歸つた。人形は六歌仙と若衆とで、寛永時代の物だとか云ふことであつた。これは抽齋が「三坊には難人形を遺らぬ代にこれを遺る」と言つたのださうである。三坊とは成善の小字三吉である。五百は度度清助と云ふ若黨を、淺草諏訪町の鎌倉屋へ遣つて、催促して還させようとしたが、豊芥子は言を左右に託して、遂にこれを還さなかつた。清助は本京都の兩替店錢屋の息子で、遊蕩のた

めに親に勘當せられ、江戸に来て江氏へ若黨に住み込んだ。手跡がなかなか好いので、豊芥子の筆耕に備はれることになつてゐた。それゆゑ鎌倉屋への使に立つたのである。森枳園が小野富穀と口論をしたと云ふ話があつて、其年月を詳にせぬが、わたくしは多分此年の頃であらうと思ふ。場所は山城河岸の津藤の家であつた。例の如く文人、畫師、力士、俳優、幫間、藝妓等の大一座で、酒酣なる比になつた。其中には枳園、富穀、矢島優善、伊澤徳安などが居合せた。初め枳園と富穀とは何事かを論じてゐたが、萬事を茶にして世を渡る枳園が、どうしたわけか大いに怒つて、七代目賽のたんかを切り、胖大漢の富穀をして色を失つて席を連れしめたさうである。富穀も亦滑稽趣味に於ては枳園に劣らぬ人物で、臍で煙草を喫むと云ふ隠藝を有してゐた。枳園と此人とがかくまで激烈に衝突しようとは、誰も思ひ掛けぬので、優善、徳安の二人は永く此喧嘩を忘れずにゐた。想ふに貨殖に長じた富穀と、人の物と我物との別に重きを置かぬ、無頓著な枳園とは、其性格に相容れざる所があつたのであらう。津藤即ち播津國屋藤次郎は、名は鱗、字は冷和、香以、鯉角、梅阿彌等と號した。その臺遊を肆にして家産を蕩盡したのは、世の知る所である。文政五年生で當時四十歳である。

此年の抽齋が忌日の頃であつた。小島成齋は五百に勤めて、猶存してゐる蔵書の大半を、中橋埋地の柏軒が家にあづ

けた。柏軒は翌年お玉が池に第宅を移す時も、家財と共にこれを新居に搬び入れて、一年間位鄭重に保護してゐた。

その七十三

抽齋歿後の第四年は文久二年である。抽齋は世にある日、藩主に活版薄葉刷の醫方類聚を獻することにしてゐた。書は喜多村棟窓の校刻する所で、月ごとに發行せられるのを、抽齋は生を終るまで次を逐つて上つた。成善は父の歿後相繼いで納本してゐたが、此年に至つて全部を獻じ畢つた。八月十五日順承は重臣を以て成善に「御召御紋御羽織並御酒御吸物」を賞賜した。

成善は二年前から海保竹逕に學んで、此年十二月二十八日に、六歳にして藩主順承から奨學金二百匹を受けた。主なる經史の素讀を畢つたためである。母五百は子女に讀書習字を授けて半日を費すを常としてゐたが、毫も成善の學業に干渉しなかつた。そして「あれは書物が御飯より好だから、構はなくても好い」と云つた。成善は又善く母に事ふると云ふを以て、賞を受くること兩度に及んだ。

此年十月十八日に成善が筆札の師小島成齋が六十七歳で歿した。成善は朝生徒に習字を教へて、次で阿部家の館に出仕し、午時公退して酒を飲み劇を談ずることを例としてゐた。阿部家では抽齋の歿するに先だつこと一年、安政四年六月十

七日に老中の職に居つた伊勢守正弘が世を去つて、越えて八月に伊豫守正教が家督相續をした。成善が從學してからは、成善は始終正教に侍してゐたのである。後に至つて成善は朝の課業の喧嘩を避け、午後訪うて單獨に教を受けた。そこで成善の觀劇談を聴くこと厭であつた。成齋は卒中で死んだ。正弘の老中たりし時、成齋は用人格で擢でられ、公用人服部九十郎と名を齊らしてゐたが、二人皆同病によつて命を隕した。成齋には二子三女があつて、長男生胤は早世し、次男信之が家を繼いだ。通稱は俊治である。俊治の子は錢之助、錢之助の養嗣子は、今本郷區駒込動坂町にゐる昌吉さんである。高足の一人小此木辰太郎は明治九年に工務省雇になり、十八年内閣屬に轉じ、十九年十二月一日から二十七年三月二十九日まで職を學習院に奉じて、生徒に筆札を授けてゐたが、明治三十八年一月に歿した。

成善が此頃母五百と俱に淺草永住町の覺音寺に詣でたことがある。覺音寺は五百の里方山内氏の菩提所である。歸途二人は藏前通を歩いて桃太郎團子の店の前に來ると、五百の相識の女に邂逅した。これは五百と同じく藤堂家に仕へて、中老になつてゐた人である。五百は久しく消息の絶えてゐた此女と話がしたいと云つて、程近い横町にある料理屋誰袖に案内した。成善も跡に附いて往つた。誰袖は當時川長、青柳、大七などと並稱せられた家である。

三人の通つた座敷の隣に大一座の客があるらしかつた。しかし聲高く語り合ふこともなく、短くや絃歌の響などは起らなかつた。暫くあつて其座敷が遽に騒がしく、多人數の足音がして、跡は又ひつそりとした。

給仕に來た女中に五百が問ふと、女中は云つた。「あれは札差の禮那衆が悪作劇をしてお出なすつたところへ、お辰さんが飛びこんでお出なすつたのでございます。蒔き散らしてあつたお金を其儘にして禮那衆がお逃げなさると、お辰さんはそれを持つてお歸なさいました」と云つた。お辰と云ふのは、後盜をして捕へられた旗本青木彌太郎の妾である。

女中の語り畢る時、兩刀を帯びた異様の男が五百等の座敷に闖入して、「手前等も博奕の仲間だらう、金を持つてゐるなら、そこへ出してしまへ」と云ひつつ、刀を抜いて威嚇した。

「なに、此騙り奴が」と五百は叫んで、懐劍を抜いて起つた。男は初の勢にも似ず、身を翻して逃げ去つた。此年五百はもう四十七歳になつてゐた。

その七十四

矢島優善は山田の塾に入つて、塾頭に推されてから、稍目重するものの如く、病家にも信頼せられて、旗下の家庭にし、特に矢島の名を斥して招請するものさへあつた。五百も

比良野貞固もこれがために頗る心を安んじた。既にして此年二月初午の日となつた。源江氏では龜澤稻荷の祭を行ふと云つて、親戚故舊を集へた。優善も來て宴に列し、清元を語つたり茶番を演じたりした。五百はこれを見て苦しくは思つたが、酒を飲まぬ優善であるから、縦しや少しく興に乗じたからと云つて、後に果を貽すやうな事はあつた。優善が源江の家に来て、其夕方に歸つてから、二三日立つた頃の事である。師山田椿庭が本郷弓町から尋ねて來て「矢島さんはこちらですか、餘り久しく御滞留になりますから、どうなされたかと存じて伺ひました」と云つた。「優善は初午の日にまゐりました切で、あの日には晩の四つ頃に歸りましたが」と、五百は訝かしげに答へた。「はてな。あれから塾へは歸られませんか。」椿庭はかう云つて眉を蹙めた。

五百は即時に人を諸方に馳せて搜索せしめた。優善の所在はすぐ知れた。初午の夜に無銭で吉原に往き、翌日から田町の引手茶屋に潛伏してゐたのである。五百は金を償つて優善を歸らせた。さて比良野貞固、小野富殿の二人を呼んで、いかにこれに處すべきかを議した。幼い成善も、戸主だと云ふので、其席に列つた。貞固は暫く黙してゐたが、容を改めてかう云つた。「此度の處分は只一つしか無いとわたくしは思ふ。玄積さんはわた

に起請文を納めさせたい。悔い改める望の無い男であるから、必ず冥冥の裏に神罰を蒙るであらうと云ふのである。貞固はつくづく聞いて答へた。それは好いお思附である。此度の事に就いては、命乞の仲裁なら決して聴くまいと決心してゐたが、晴がましい死様をさせるには及ばぬと云ふお考は道理至極である。然らば其起請文を書かせて金毘羅に納めることは、姉上にお任せすると云つた。

五百は矢島優善に起請文を書かせた。そしてそれを持つて虎の門の金毘羅へ納めに往つた。しかし起請文は納めずに、優善が行末の事を祈念して歸つた。小野氏では此年十二月十二日に、隱居令圖が八十歳で歿した。五年前に致仕して富殿に家を繼がせてゐたのである。小野氏の財産は令圖の貯へたのが一萬兩を超えてゐたさうである。

その七十五

伊澤柏軒は此年三月に二百俵三十人扶持の奥醫師にせられて、中橋埋地からお玉が池に居を移した。此時新宅の祝宴に招かれた保さんが種種の事を記憶してゐる。柏軒の四女やすは保さんの姉水木と長唄の老松を歌つた。柴田常庵と云ふ肥え太つた醫師は、越中禰一つを身に著けたばかりで、棚の達磨を踊つた。そして宴が散じて歸る途中で、保さんは陣幕久

くしの宅で詰腹を切らせませす。小野さんも、お姉さんも、三坊も、御苦勞ながら御立會下さい。」と言ひ畢つて貞固は緊しく口を結んで一座を見廻した。優善は矢島氏を冒してから、養父の稱を襲いで玄積と云つてゐた。三坊は成善の小字三吉である。富殿は面色土の如くになつて、一語を發することをも得なかつた。

五百は貞固の詞を豫記してゐたやうに、徐に答へた。「比良野様の御意見は御尤と存じます。度度の不始末で、もう此上何と申し聞けやうもございませぬ。いづれ篤と考へました上で、改めてこちらから申し上げませう」と云つた。これで相談は果てた。貞固は何事も無いやうな顔をして、席を起つて歸つた。富殿は跡に残つて、どうか比良野を勘辨させるやうに話をしてくれと、繰り返して五百に頼んで置いて、すこすこ歸つた。五百は優善を呼んで殿に會談の始末を言ひ渡した。成善はどうなる事かと胸を痛めてゐた。翌朝五百は貞固を訪うて懇談した。大要はかうである。昨日の仰は尤至極である。自分は同意せずにはゐられない。これまで行掛りを思へば、優善に此上どうして罪を贖はせよう云ふ道は無い。自分も一死が其分であるとは信じてゐる。しかし晴がましく死なせることは、家門のためにも、君侯のためにも望ましくない。それゆゑ切腹に代へて、金毘羅

五郎が小柳平助に負けた話を聞いた。やすは柏軒の庶出の女である。柏軒の正妻狩谷氏俊の生んだ子は、幼くて死した長男榮助、十八九歳になつて麻疹で亡くなつた長女洲、狩谷権齋の養孫、懷之の養子三右衛門に嫁した次女國の三人だけで、其他の子は皆妾春の腹である。其順序を言へば、長男榮助、長女洲、次女國、三女北、次男磐、四女やす、五女こと、三男信平、四男孫助である。おやすさんは人と成つて後田舎に嫁したが、今は麻布鳥居坂町の信平さんの許にゐるさうである。

柴田常庵は幕府醫官の一人であつたさうである。しかしわたくしの載してゐる武鑑には載せてない。萬延元年の武鑑は、わたくしの蔵本に正月、三月、十月の三種がある。柏軒は正月のにはまだ奥語の部に出てゐて、三月以下には奥醫師の部に出てゐる。柴田は三書共にこれを載せない。維新後に此人は狂言作者になつて竹柴壽作と稱し、五世阪東彦三郎と親しかつたと云ふことである。猶尋ねて見たいものである。

陣幕久五郎の負は當時人の意料の外に出た出来事である。抽齋は角觥を好まなかつた。然るに保さんは彈い時からこれを見ることを喜んで、此年の春場所をも、初日から五日目まで一日も闕かさずに見舞つた。さて其六日目伊澤の祝宴であつた。子の刻を過ぎてから、保さんは母と姉とに連れられ

て伊澤の家を出て歸り掛かつた。途中で若黨清助が迎へて、保さんに「陣幕が負けました」と耳語した。「虚言を衝け」と、保さんは叱した。取組は前から知つてゐて、小柳が陣幕の敵でないことを固く信じてゐたのである。「いいえ、本當です」と、清助は云つた。清助の言は事實であつた。陣幕は小柳に負けた。そして小柳は此勝の故を以て人に殺された。その殺されたのが九つ半頃であつたと云ふから、丁度保さんと清助とが此應答をしてゐた時である。陣幕の事を言つたから、因に小錦の事をも言つて置かう。伊澤のおかえさんに附けられてゐた松と云ふ女があつた。松は魚屋與助の女で、菊、京の二人の妹があつた。此京が岩木川の種を宿して生んだのが小錦八十吉である。保さんは今一つ、柏軒の奥醫師になつた時の事を記憶してゐる。それは手習の師小鳥成齋が、此時柏軒の子鐵三郎に對する待遇を一變した事である。福山侯の家來成齋が、いかに幕府の奥醫師の子を尊敬しなくてはならなかつたかと云ふ、當年の階級制度の豊圖が、明に輝い成善の目前に展開せられたのである。

その七十六

小鳥成齋が神田の阿部家の屋敷に住んで、二階を教場にして、弟子に手習をさせた頃、大勢の兒童が机を並べてゐる前

澤江氏は比良野貞固に謀つて、伊澤家から還された書籍の主なもの津輕家の倉庫にあづけた。そして毎年二度づつ冊干をすることに定めた。當時作つた目録によれば、其部数は三千五百餘に過ぎなかつた。

書籍が伊澤氏から還されて、まだ津輕家にあづけられぬ程の事であつた。森枳園が來て論語と史記とを借りて歸つた。論語は平古止點を施した古寫本で、松永久秀の印記があつた。史記は朝鮮板であつた。後明治二十三年に保さんは鳥田篁村を訪うて、再び此論語を見た。篁村はこれを細川十洲さんに借りて閱してゐたのである。

津輕家では此年十月十四日に、信順が濱町中屋敷に於て、六十三歳で卒した。保さんの成善は枕邊に侍してゐた。

此年十二月二十一日の夜、塙次郎が三番町で刺客の刃に命を隕した。抽齋は常に此人と岡本況齋とに、國典の事を詢ふこととしてゐたさうである。次郎は温古堂と號した。保己一の男、四谷寺町に住む忠雄さんの祖父である。當時の流言に、次郎が安藤對馬守信睦のために廢立の先例を取り調べたと云ふ事が傳へられたのが、此横禍の因をなしたのである。遺骸の傍に、大逆のために天罰を加ふと云ふ捨札があつた。次郎は文化十一年生で、殺された時が四十九歳、抽齋より少きこと九年であつた。

是年六月中旬から八月下旬まで麻疹が流行して、澤江氏の

に、手に鞭を執つて坐し、筆法を正すに鞭の尖を以て指し示し、其間には諧謔を交へた話をしたことは、前に書いた。成齋は話をすると、多く伊澤柏軒の子鐵三郎を相手にして、鐵坊鐵坊と呼んだが、それが意あつてか、どうか知らぬが鐵砲鐵砲と聞いた。弟子等もまた鐵砲さんと呼んだ。

成齋が鐵砲さんを揶揄へば、鐵砲さんも必ずしも師を敬つてばかりはゐない。往往戲言を吐いて尊嚴を冒すことがある。成齋は「おのれ鐵砲奴」と叫びつつ、鞭を揮つて打たうとする。鐵砲は笑つて逃る。成齋は追ひ附いて、鞭で頭を打つ。「ああ痛い、先生ひどいぢやありませんか」と鐵砲はつぶやく。弟子等は面白がつて笑つた。かう云ふ事は殆毎日あつた。

然るに此年の三月になつて、鐵砲さんの父柏軒が奥醫師になつた。翌日から成齋ははつきりと伊澤の子に對する待遇を改めた。例之ば筆法を正すにも、「徳安さん、其點はかうお打なさいまし」と云ふ。鐵三郎は餘程前に小字を棄てて徳安と稱してゐたのである。この新たな待遇は、不思議にも、これを受ける伊澤の嫡男をして忽ち態度を改めしめた。鐵三郎の徳安は甚だしく大人しくなつて、殆はにかむやうに見えた。

此年の九月に柏軒はあづかつてゐた抽齋の藏書を還した。それは九月九日に將軍家茂が明年二月を以て上洛すると云ふ令を發して、柏軒はこれに隨行する準備をしたからである。

龜澤町の家へ、御柳の葉と貝多羅葉とを貰ひに来る人が踵を接した。二樹の葉が當時民間薬として用ゐられてゐたからである。五百は終日應接して、諸人の望に負かざらんことを努めた。

その七十七

抽齋歿後の第五年は文久三年である。成善は七歳で、始て矢の倉の多紀安琢の許に通つて、素問の講義を聞いた。

伊澤柏軒は此年五十四歳で歿した。徳川家茂に隨つて京都に上り、病を得て客死したのである。嗣子鐵三郎の徳安がお玉が池の伊澤氏の主人となつた。

抽齋歿後の第六年は元治元年である。森枳園が躰壽館の講師たるを以て、幕府の月俸を受けることになつた。

第七年は慶應元年である。澤江氏では六月二十日に翠誓が十一歳で夭折した。

比良野貞固は此年四月二十七日に妻かなの喪に遭つた。かなは文化十四年の生で四十九歳になつてゐた。内に儉素を忍んで、外に聲望を張らうとする貞固が留守居の生活は、かなの内助を待つて始て保蔵せられたのである。かなの死後に、親戚僚屬は顔に再び娶らんことを勧めたが、貞固は「五十を踰えた花婿にはなりたくない」と云つて、久しくこれに應ぜずにあつた。

第八年は慶應二年である。海保漁村が九年前に病に罹り、此年八月に其再發に逢ひ、九月十八日に六十九歳で歿したの
で、十歳の成善は改めて其子竹運の門人になつた。しかしこ
れは殆名義のみの變更に過ぎなかつた。何故と云ふに、晩年
の漁村が弟子のために書を講じたのは、四九の日の午後のみ
で、其他の授業は竹運が悉くこれに當つてゐたからである。
漁村の書を講ずる聲は咳腹れてゐるのに、竹運の音吐は清朗
で、しかも能辨であつた。後年に至つて島田篁村の如きも、
講壇に立つときは、人をして竹運の口吻態度を學んでゐはせ
ぬかと疑はしめた。竹運の養父に代つて講説することは、管
に傳經廬に於けるのみではなかつた。竹運は弊衣を著て塾を
出で、漁村に代つて隣壽館に往き、間部家に往き、南部家に
往いた。勢此の如くであつたので、漁村歿後に至つても、練
堀小路の傳經廬は舊に依つて繁榮した。
多年江氏に寄食してゐた山内豐覺の妾收は、此年七十七
歳を以て、五百の介抱を受けて死んだ。

その七十八

抽齋の姉須磨が飯田良清に嫁して生んだ女二人の中で、長
女延は小舟町の新井屋半七が妻となつて死に、次女路が残つ
てゐた。路は痘瘡のため貌を傷られてゐたのを、多分此年の
頃であつただらう、三百石の旗本で戸田某といふ老人が後妻

に迎へた。戸田氏は旗本中に頗る多いので、今考へることが
出来にくい。良清の家は、須磨の生んだ長男直之助が天折し
た跡へ孫三郎と云ふ養子が来て繼いでから、もう久しうなつ
てゐた。飯田孫三郎は十年前の安政三年から、武鑑の徒目附
の部に載せられてゐる。住所は初め湯島天澤寺前としてあつ
て、後には湯島天神裏門前としてある。保さんの記憶してゐ
る家は願祥院前の猿飴の横町であつたさうである。孫三郎は
維新後静岡縣の官吏になつて、良政と稱し、後又東京に入つ
て、下谷車坂町で終つたさうである。

比良野貞固は妻かなが歿した後、稻葉氏から來た養子房之
助と二人で、鏝暮しをしてゐたが、無妻で留守居を勤めるこ
とは出来ぬと説くものが多いので、貞固の心が稍動いた。此
年の頃になつて、媒人が表坊主大須と云ふものの女照を娶れ
と勧めた。武鑑を檢するに、慶應二年に勤めてゐた此氏の表
坊主父子がある。父は玄喜、子は玄悦で、龜町三軒家の同じ
家に住んでゐた。照は玄喜の女で、玄悦の妹ではあるまい
か。

貞固は津輕家の留守居役所で使つてゐる下役杉浦喜左衛門
を遣つて、照を見させた。杉浦は老實な人物で、貞固が信任
してゐたからである。照に逢つて來た杉浦は、盛んに照の美
を賞して、其言語其舉止さへいかにもしとやかだと云つた。
結納は取り換された。婚禮の當日に、五百は比良野の家に

往つて新婦を待ち受けることになつた。貞固と五百とが窓の
下に對坐してゐると、新婦の轎は門内に昇り入れられた。五
百は轎を出る女を見て驚いた。身の丈極めて小さく、色は黒
く、鼻は低い。その上口が尖つて齒が出てゐる。五百は貞固
を顧みた。貞固は苦笑をして、「お姉えさん、あれが花よめ
御ですぜ」と云つた。
新婦が來てから杯をするまでには時が立つた。五百は杉浦
の居らぬのを怪んで問ふと、よめの來たのを迎へて、すぐに
比良野の馬を借りて、どこかへ乗つて往つたと云ふことであ
つた。

暫らくして杉浦は五百と貞固との前に出て、額を汗を拭ひ
つつ云つた。「實に分疏がございませぬ。わたくしはお照殿
にお近づきになりたいと、先方へ申し込んで、先方からも委
細承知したと云ふ返事があつて參つたのでございませぬ。其席
へ立派にお化粧をして茶を運んで出て、暫時わたくしの前に
すわつてゐて、時候の挨拶をいたしたのは、兼て申し上げた
ほどの美しい女でございました。今日參つたよめ御は、其日
に菓子鉢か何か持つて出て、闔の内までちよつとはひつた切
で、すぐに引き取りました。わたくしはよめやあれがお照殿
であらうとは、存じませなんだ。餘りの間違でございませぬ
で、お馬を借用して、大須家へ駆け付け尋ねましたところ
が、御挨拶をさせた女は照のお引合せをいたさせた件のよめ

でございますと云ふ返答でございませぬ。全くわたくしの粗忽
で」と云つて杉浦は又額の汗を拭つた。

その七十九

五百は杉浦喜左衛門の話の聞いて色を變じた。そして貞固
に「どうなさいませぬか」と問うた。
杉浦は傍から云つた。「御破談になさるより外ございませ
ぬ。わたくしがあの日に、あなたがお照様でございませぬ
と、一言念を押して置けば宜しかつたのでございませぬ。全く
わたくしの粗忽で」と云ふ目に涙を浮べてゐた。

貞固は又いてゐた手をほだいて云つた。「お姉えさん御心
配なさいませぬ。杉浦も悔まぬが好い。わたしは此儘婚禮を
することに決心しました。お坊主を恐れるのではないが、喧
嘩を始めるのは面白くない。それにわたしはもう五十を越し
てゐる。器量好みをする年でもない」と云つた。

貞固は遂に照と杯をした。照は天保六年生で、嫁した時三
十二歳になつてゐた。醜いので縁遠かつたのであらう。貞固
は妻の里方と交るに、多く形式の外に出でなかつた。照と結
婚した後間もなく其弟玄孫を愛するやうになつた。大須玄孫
は學才があるのに、父兄はこれに助力せぬので、貞固は書籍
を買つて與へた。中には八尾板の史記などのやうな大部のも
のがあつた。

此年弘前藩では江戸定府を引き上げて、郷國に歸らしむることに決した。抽齋等の國勝手議が、此時に及んで纔に行はれたのである。しかし澁江氏と其親戚とは先づ江戸を發する群には入らなかつた。

抽齋歿後の第九年は慶應三年である。矢島優善は本所緑町の家を引き拂つて、武蔵國北足立郡川口に移り住んだ。知人があつて、此土地で醫業を營むのが有望だと勧めたからである。しかし優善が川口にゐて醫を業としたのは、僅の間である。「どうも獨身で田舎にゐて見ると、土臭い女がたかつて来て、うるさくてならない」と云つて、龜澤町の澁江の家に歸つて同居した。當時は優善は三十三歳であつた。

比良野貞固の家では、此年後妻照が柳と云ふ子を生んだ。第十年は明治元年である。伏見、鳥羽の戰を以て始まり、東北地方に押し詰められた佐幕の餘力が、春より秋に至る間に漸く衰滅に歸した年である。最後の將軍徳川慶喜が上野寛永寺に入つた後に、江戸を引き上げた弘前藩の定府の幾組があつた。そして其中に澁江氏がゐた。

澁江氏では三千坪の龜澤町の地所と邸宅とを四十五兩に賣つた。疊一枚の價は二十四文であつた。庭に定所、抽齋父子の遺愛の木たる榎柳がある。神田の火に逢つて、幹の二大枝に岐れてゐるその一つが枯れてゐる。神田から臺所町へ、臺所町から龜澤町へ徙されて、幸に凋れなかつた木である。又

山内豐覺が遺言して五百に贈つた石燈籠がある。五百も成善も、此等の物を棄てて去るに忍びなかつたが、さればとて木石を百八十二里の遠きに致さんことは、王侯富豪も難んずる所である。ましてや一身の安きをだに期し難い亂世の旅である。母子はこれを奈何ともすることが出来なかつた。

食客は江戸若くは其界限に寄るべき親族を求めて去つた。奴婢は、弘前に隨ひ行くべき若黨二人を除く外、悉く暇を取つた。かう云ふ時に、年老いたる男女の往いて投すべき家の無いものは、慙むべきである。山内氏から來た牧は二年前に死んだが、跡にまだ妙了尼がゐた。

妙了尼の親戚は江戸に多かつたが、此時になつて誰一人引き取らうと云ふものが無かつた。五百は一時當惑した。

その八十

澁江氏が本所龜澤町の家を立ち退かうとして、最も處置に困んだのは妙了尼の身の上であつた。此老尼は天明元年の生れで、己に八十八歳になつてゐる。津輕家に奉公したことはあつても生れてから江戸の土地を離れたことの無い女である。それを弘前へ伴ふことは、五百がためにも望ましくない。又老いさらばひたる本人のためにも、長途の旅をして知人の無い遠國に往くのはつらいのである。本妙了は特に澁江氏に縁故のある女ではない。神田豐島町

の古著屋の女に生れて、眞壽院の女小姓を勤めた。さて暇を取つてから人に嫁し、夫を喪つて剃髪した。夫の弟が家を嗣ぐに及んで、初め戀愛してゐたために今憎惡する戸主に虚遇せられ、それを耐へ忍んで年を経た。亡夫の弟の子の代になつて、虚遇は前に倍し、剩へ眼病を憂へた。これが弘化二年で、妙了が六十三歳になつた時である。

妙了は眼病の治療を請ひに抽齋の許へ來た。前年に來り嫁した五百が、老尼の物語を聞いて氣の毒がつて、遂に食客にした。それから澁江の家にて子供の世話をし、中にも棠と成善とを愛した。

妙了の最も近い親戚は、本所相生町に石灰屋をしてゐる弟である。しかし弟は澁江氏の江戸を去るに當つて姉を引き取ることを拒んだ。其外今川橋の飴屋、石原の釘屋、箱崎の呉服屋、豐島町の足袋屋なども、皆縁類でありながら、一人として老尼を世話をしようと云ふものは無かつた。

幸に妙了の女姪が一人富田十兵衛と云ふものの妻になつてゐて、夫に小母の事を話すと、十兵衛は快く妙了を引き取ることを諾した。十兵衛は伊豆國菫山の某寺に寺男をしてゐるので妙了は菫山へ往つた。

四月朔に澁江氏は龜澤町の邸宅を立ち退いて、本所横川の津輕家の中屋敷に徙つた。次で十一日に江戸を發した。此日は官軍が江戸城を收めた日である。

一行は戸主成善十二歳、母五百五十三歳、陸二十二歳、水木十六歳、専六十五歳、矢島優善三十四歳の六人と若黨二人とである。若黨の一人は岩崎駒五郎と云ふ弘前のもので、今一人は中條勝次郎と云ふ常陸國土浦のものである。

同行者は矢川文一郎と淺越一家とである。文一郎は七年前の文久元年に二十一歳で、本所二つ目の鐵物間屋平野屋の女柳を娶つて、男子を一人まうけてゐたが、弘前行の事が極まると、柳は江戸を離れることを欲せぬので、子を連れて里方へ歸つた。文一郎は江戸を立つた時二十八歳である。

淺越一家は主人夫婦と女とで、若黨一人を連れてゐた。主人は通稱を玄隆と云つて、百八十八石六人扶持の表醫者である。玄隆は少い時不行迹のために父永壽に勘當せられてゐたが、永壽の歿するに及んで末期養子として後を承け、次で抽齋の門人となり、又抽齋に紹介せられて海保漁村の塾に入つた。天保九年の生れで、抽齋に従學した安政四年には二十歳であつた。其後澁江氏と親んでゐて、共に江戸を立つた時は三十一歳である。玄隆の妻よりは二十四歳、女ふくは當歳である。

ここに此一行に加はらうとして許されなかつたものがある。わたくしはこれを記するに當つて、當時の社會が今と殊なることの甚だしきを感じる。奉公人が臣僕の關係になつてゐたことは勿論であるが、出入の職人商人も亦情誼が頗る

厚かつた。澀江の家に出入する中で、職人には飾屋長八と云ふものがあり、商人には飾屋久次郎と云ふものがあつた。長八は澀江氏の江戸を去る時墓木拱してゐたが、久次郎は六十歳の大翁になつて生存へてゐたのである。

その八十一

飾屋長八は單に澀江氏の出入だと云ふのみではなかつた。天保十年に抽齋が弘前から歸つた時、長八は病んで治療を請うた。其時抽齋は長八が病のために業を罷めて、妻と三人の子とを養ふことの出来ぬのを見て、長八に住はせて衣食を給した。それゆゑ長八は病が癒えて業に就いた後、長く澀江氏の恩を忘れなかつた。安政五年に抽齋の歿した時、長八は葬式の世話をして家に歸り、例に依つて晩酌の合を傾けた。そして「あの旦那様がお亡くなりなすつて見れば、己もお供をして好いな」と云つた。それから二階に上がつて寝たが、翌朝起きて來ぬので、女房が往つて見ると、長八は死んでゐたさうである。

飾屋久次郎は本ほて振の肴屋であつたのを、五百の兄榮次郎が鼻風にして、資本を興へて料理店を出させた。幸に酢久の庖丁は評判が好かつたので、十ばかり年の少い妻を迎へて、天保六年に倅豊吉をまうけた。享和三年生の久次郎は當時三十三歳であつた。後九年にして五百が抽齋に嫁したの

と云ふ果を有するに過ぎぬ淺越玄隆とをば先に立たせて、澀江家が跡に残つた。

五百等の乗つた五挺の駕籠を矢島優善が率領して、若黨二人を連れて、石橋驛に掛かると、仙臺藩の哨兵線に出合つた。銃を擬した兵卒が左右二十人づつ轡を挟んで、一つ一つ戸を開けさせて誰何する。女の轡は仔細なく通過させたが、成善の轡に至つて、審問に時を費した。此晩に宿に著いて、五百は成善に女裝させた。

出羽の山形は江戸から九十里で、弘前に至る行程の半である。常の旅には此に來ると祝ふ習であつたが、五百等はわざと旅店を避けて鰻屋に宿を求めた。

その八十二

山形から弘前に往く順路は、小坂峠を踰えて仙臺に入るのである。五百等の一行は仙臺を避けて、板谷峠を踰えて、米澤に入る事になつた。しかし此道筋も安全では無かつた。上山まで往くと、形勢が甚だ不穩なので、數日間滞留した。

五百等は路用の金が竭きた。江戸を發する時、多く金を携へて行くのは危険だと云つて、金銀を長持五十荷餘りの底に布かせて舟廻しにしたからである。五百等は上山で、やうやう陸を運んで來た些の荷物の過半を賣つた。これは金を得ようとしたばかりではない。問道を進むことに決したので、嵩

で、久次郎は澀江氏にも出入することになつて、次第に親しくなつてゐた。

澀江氏が弘前に徙る時、久次郎は切に供をして往くことを願つた。三十四歳になつた豊吉に、母の世話をさせることにして置いて、自分け單身澀江氏の供に立たうとしたのである。此望を起すには、弘前で料理店を出さうと云ふ企業心も少し手傳つてゐたらしいが、六十六歳の翁が二百里足らずの遠路を供に立つて行かうとしたのは、主に五百を尊崇する念から出たのである。澀江氏では故なく久次郎の願を御けることが出来ぬので、藩の當事者に伺つたが、當事者けこれを許すことを好まなかつた。五百は用人河野六郎の内意を承けて、久次郎の隨行を謝絶した。久次郎はひどく落膽したが、翌年病に罹つて死んだ。

澀江氏の一行は本所二つ目橋の畔から高瀬舟に乗つて、堅川を漕がせ、中川より利根川に出で、流山、柴又等を経て小山に著いた。江戸を距ること僅に二十一里の路に五日を費した。

近衛家に縁故のある津輕家は、西館孤清の斡旋に依つて、既に官軍に加はつてゐたので、路の行手の東北地方は、秋田の一藩を除く外、悉く敵地である。一行の澀江、矢川、淺越の三氏の中では、澀江氏は人数も多く、老人があり少年少女がある。そこで最も身輕な矢川文一郎と、乳飲子を抱いた妻

高になる荷は持つてゐられぬからである。荷を賣つた錢は固より路用の不足を補ふ額には上らなかつた。幸に弘前藩の會計方に落ち合つて、五百等は少しの金を借ることが出来た。上山を發してからは人煙稀なる山谷の間を過ぎた。繩梯子に縋つて斷崖を上下したこともある。夜の宿は旅人に餅を賣つて茶を供する休息所の類が多かつた。宿で物を盗まれることも數度に及んだ。

院内峠を踰えて秋田領に入つた時、五百等は少しく心を安んずることを得た。領主佐竹右京大夫義堯は、弘前の津輕承昭と共に官軍方になつたからである。秋田領は無事に過ぎた。

さて矢立峠を踰え、四十八川を渡つて、弘前へは往くのである。矢立峠の分水嶺が佐竹、津輕兩家の領地界である。そこを少し下ると、碓^{いづ}關と云ふ關があつて番人が置いてある。番人は關札を檢してから、始めて感勲な詞を使ふのである。人が雲表に聳ゆる岩木山を指して、あれは津輕富士で、あの麓が弘前の城下だと教へた時、五百等は覺えず涙を翻して喜んださうである。

弘前に入つてから、五百等は土手町の古著商伊勢屋の家に、藩から一人一日金一分の爲向を受けて下宿することになり、そこに半年餘りゐた。船廻しにした荷物は、程經て後に著いた。下宿屋から街に出づれば、土地の人が江戸子江戸子

と呼びつつ跡に附いて来る。當時警を麻糸で結び、地織木綿の衣服を著た弘前の人人の中へ、江戸育の五百等が交つたのだから、物珍らしく思はれたのも怪むに足りない。殊に成善が江戸でもまだ少かつた蝙蝠傘を差して出ると、見るものが堵の如くであつた。成善は蝙蝠傘と懐中時計とを持つてゐた。時計は識らぬ人さへ紹介を求めて見に来るので、数日のうちに弄り毀されてしまつた。

成善は近習小姓の職があるので、毎日登城することになつた。宿直は二箇月に三度位であつた。

成善は歴史を兼松石居に學んだ。江戸で海保竹逕の塾を辭して、弘前で石居の門を敲いたのである。石居は當時既に塾居を免されてゐた。醫學は江戸で多紀安琢の教を受けた後、弘前では別に人に師事せずにあつた。

戦争は既に所所に起つて、飛脚が日ごとに情報を齎した。共に弘前へ来た矢川文一郎は、二十八歳で従軍して北海道に向ふことになつた。又淺越玄隆は南部方面に派遣せられた。此時淺越の下に附屬せられたのが、新に町醫者から五人扶持の小普請醫者に抱へられた。蘭法醫小山内元洋である。弘前では是より元洋學稽古館に蘭學堂を設けて、官醫と町醫との子弟を教育してゐた。これを主宰してゐたのは江戸の杉田成卿の門人佐佐木元俊である。元洋も亦杉田門から出た人で、後建と稱して、明治十八年二月十四日に中佐相當陸軍一等軍

醫正を以て廣島に終つた。今の文學士小山内薫さんと畫家岡田三郎助さんの妻八千代さんとは建の遺子である。矢島優善は弘前に留まつてゐて、戦地から後送せられて来る負傷者を治療した。

その八十三

澁江氏の若黨の一人中條勝次郎は、弘前に來てから思ひも掛けぬ事に遭遇した。

一行が土手町に下宿した後二三月にして暴風雨があつた。弘前の人は暴風雨を岩木山の神が祟を作すのだと信じてゐる。神は他郷の人が來て土著するのを惡んで、暴風雨を起すと云ふのである。此故に弘前の人は他郷の人を排斥する。就中丹後の人と南部の人とを嫌ふ。なぜ丹後の人を嫌ふかと云ふに、岩木山の神は古傳説の安壽姫で、己を虐使した山椒太夫の郷人を嫌ふのださうである。又南部の人を嫌ふのは、神も津輕人のバルチキユリズムに感化せられてゐるのかも知れない。

暴風雨の後数日にして、新に江戸から徙つた家家に沙汰があつた。若し丹後、南部等の生のものが紛れ入つてゐるなら、嚴重に取り糺して國境の外に逐へと云ふのである。澁江氏の一行では中條が他郷のものとして目指された。中條は常陸生だと云つて申し解いたが、役人は生國不明と認めて、こ

れに立退を諭した。五百は已むことを得ず、中條に路用の金を與へて江戸へ還らせた。

冬になつてから澁江氏は富田新町の家に遷ることになつた。そして知行は當分の内六分引を以て給すると云ふ達しがあつて、實は宿料食料の外何の給與もなかつた。これが後二年にして秩祿に大削減を加へられる發端であつた。二年前から逐次に江戸を引き上げて來た定府の人達は、富田新町、新寺町新割町、上白銀町、下白銀町、鹽分町、茶畑町の六箇所に分れ住んだ。富田新町には江戸子町、新寺町新割町には大矢場、上白銀には新屋敷の異名がある。富田新町に澁江氏の外、矢川文一郎、淺越玄隆等が居り、新寺町新割町には比良野貞固、中村勇左衛門等が居り、下白銀町には矢川文内等が居り、鹽分町には平井東堂等が居つた。

此頃五百は專六が就學問題のために思を勞した。專六の性質は成善とは違ふ。成善は書を讀むに人の催促を須たない。そしてその讀む所の書は自ら擇ぶに任せることが出来る。それゆゑ五百は彼が兼松石居に従つて歴史を攻めるのを見て、毫も容喙せずにあつた。成善が儒となるも亦可、醫となるも亦不可なる無しとおもつたのである。これに反して專六は多く書を読むことを好まない。書に對すれば、先づ有用無用の詮議をする。五百は此子には儒となるべき素質が無いと信じ

た。五百は弘前の城下に就いて、專六が師となすべき醫家を物色した。そして親方町に住んでゐる近習醫者小野元秀を獲た。

その八十四

小野元秀は弘前藩士對馬幾次郎の次男で、小字を常吉と云つた。十六七歳の時、父幾次郎が急に病を發した。常吉は半夜馳せて醫師某の許に往つた。某は家にゐたのに、來り診することを肯ぜなかつた。常吉は此時父のために憂へ、某のために惜んで、心にこれを牢記してゐた。後に醫となつてから、人の病あるを聞くことに、家の貧富を問はず、地の遠近を論ぜず、食ふときには箸を投じ、臥したるときには被を蹴て起ち、徑ちに往いて診したのは、少時の苦き經驗を忘れなかつたためださうである。元秀は二十六歳にして同藩の小野秀徳の養子となり、其長女そのに配せられた。

元秀は忠誠にして廉潔であつた。近習醫に任せられてからは、詰所に入出入するに、朝には人に先んじて行き、夕には人に後れて反つた。そして公退後には士庶の病人に接して、絶て倦む色が無かつた。

稽古館教授にして、五十石町に私塾を開いてゐた工藤他山は、元秀と親善であつた。これは他山が未だ仕途に就かなかつた時、元秀が其貧を知つて、糶を受けずして懇に治療した

時からの交である。他山の子外崎さんも元秀を識つてみたが、これを評して温潤良玉の如き人であつたと云つてゐる。五百が専六をして元秀に從學せしめたのは、實に其人を獲たものと謂ふべきである。

元秀の養子完造は木山崎氏で、蘭法醫伊東玄朴の門人である。完造の養子芳甫さんは本鳴海氏で、今弘前の北川端町に住んでゐる。元秀の實家の裔は弘前の徒町川端町の對馬銃藏さんである。

専六は元秀の如き良師を得たが、慍むらくは心、醫となることを欲せなかつた。弘前の人は、毎に圓頂の専六が筒袖の衣を着、短袴を穿き、赤毛布を纏つて銃を負ひ、山野を跋渉するのを見た。これは當時の兵士の服裝である。

専六は兵士の間交を求めた。兵士等は呼ぶに醫者銃隊の名を以てして、頗るこれを愛好した。

時に弘前に従つた定府中に、山澄吉藏と云ふものがあつた。名を直清と云つて、津輕藩が文久三年に江戸に遣つた海軍修行生徒七人の中で、中小姓を勤めてゐた。築地海軍操練所で算數の學を修め、次で塾の教員の列に加はつた。弘前に従つて間もなく、山澄は煩隊司令官にせられた。兵士中身を立てんと欲するものは、多く此山澄を師として洋算を學んだ。専六も亦藤田潛、柏原隆藏等と共に山澄の門に入つて、洋算簿記を學ぶこととなり、いつとなく元秀の講筵には臨ま

なくなつた。後山澄は海軍大尉を以て終り、柏原は海軍少將を以て終つた。藤田さんは今攻玉舎長をしてゐる。攻玉舎は後に近藤眞琴の塾に命ぜられた名である。初め麹町八丁目の鳥羽藩主稻垣對馬守長和の邸内にあつたのが、中ごろ築地海軍操練所内に移るに及んで、始めて攻玉塾と稱し、次で芝神明町の商船疊と、芝新錢座の陸地測量練習所とに分離し、二者の總稱が攻玉舎となり、明治十九年に至るまで、近藤が自らこれを經營してゐたのである。

その八十五

小野富穀と其子道悦とが江戸を引き上げたのは、此年二月二十三日で、道中に二十五日を費し、三月十八日に弘前に著いた。澀江氏の弘前に入るに先つこと二箇月足らずである。矢島優善が隠居させられた時、跡を襲いだ周禎の一家も、此年に弘前へ従つたが、その江戸を發する時、三男三藏は江戸に留つた。前に小田原へ往つた長男周禎と、此三藏とは、後にカトリック教の宣教師になつたさうである。弘前へ往つた周禎は表醫者奥通に進み、其次男で嗣子にせられた周策も亦日見の後表醫者を命ぜられた。

抽齋の姉須磨の夫飯田良清の養子孫三郎は、此年江戸が東京と改稱した後、靜岡藩に赴いて官吏となつた。森積園は此年七月に東京から福山に遷つた。當時の藩主は

文久元年に伊勢守正教の後を承けた阿部主計頭正方であつた。

優善の友鹽田良三は此年浦和縣の官吏になつた。是より先良三は、優善が山田棟庭の塾に入つたのと殆同時に伊澤柏軒の塾に入つて、柏軒に其才の馮銳なるを認められ、節を折つて書を讀んだ。文久三年に柏軒が歿してから家に歸つてゐて、今仕官したのである。

此年箱館に據つてゐる榎本武揚を攻めんがために、官軍が發向する中に、福山藩の兵が参加してゐた。伊澤棟軒の嗣子棠軒はこれに従つて北に赴いた。そして澀江氏を富田新町に訪うた。棠軒は福山藩から一粒金丹を買ふことを託せられてゐたので、此任を果たす旁、故舊の安否を問うたのである。棠軒、名は信淳、通稱は春安、池田全安が離別せられた後に、棟軒の女かえの婿となつたのである。かえは後に名をそのと更めた。おそのさんは現存者で、市谷富久町の伊澤徳さんの許にゐる。徳さんは棠軒の嫡子である。

抽齋歿後の第十一年は明治二年である。抽齋の四女陸が矢川文一郎に嫁したのは、此年九月十五日である。

陸が生れた弘化四年には、三女棠がまだ三歳で、母の懷を離れなかつたので、陸は生れ落ちるとすぐに、小柳町の大工の棟梁新八と云ふものの家へ里子に遣られた。さて嘉永四年に棠が七歳でなくなつたので、母五百が五歳の陸を呼び返さ

うとすると、偶矢島氏鐵が來たのを抱いて寝なくてはならなくなつて、陸は還ることを得なかつた。翌五年にやうやう還つた陸は、色の白い愛らしい六歳の少女であつた。しかし五百の胸をば棠を惜む情が全く占めてゐたので、陸は十分に母の愛に浴することが出来ずに、母に對しては頗る自ら御遜してゐなくてはならなかつた。

これに反して抽齋は陸を愛撫して、身邊に居らせて使役しつつ、或時五百に云つた。「己はこんな丈夫だから、どうもお前よりは長く生きてゐさうだ。それだから今の内に、かうして陸を爲込んで置いて、お前に先へ死なれた時、此子を女房代りにする積だ。」

陸は又兄矢島優善にも愛せられた。鹽田良三も亦陸を愛する一人で、陸が手習をする時、手を把つて書かせなどした。抽齋が或日陸の清書を見て、「良三さんのお清書が旨く出来たな」と云つて褒めたことがある。

陸は小さい時から長歌が好で、寒夜に裏庭の築山の上に登つて、獨り寒聲の修行をした。

その八十六

抽齋の四女陸は此家庭に生長して、當時尙其境遇に甘んじ、毫も婚嫁を急ぐ念が無かつた。それゆゑ嘗て一たび飯田寅之丞に嫁せんことを勧めたものもあつたが、事が調はな

つた。寅之丞は當時近習小姓であつた。天保十三年壬寅に生れたからの名である。即ち今の飯田巽さんで、巽の字は明治二年己巳に二十八になつたと云ふ意味で選んだのださうである。陸との縁談は媒が先方に告げずに澀江氏に勧めたのではなからうが、餘り古い事なので、巽さんは己に忘れてゐるらしい。然るに此度は陸が遂に文一郎の聘を卻けることが出来なくなつた。

文一郎は最初の妻柳が江戸を去ることを欲せぬので、一人の子を付けて里方へ還して置いて弘前へ立つた。弘前に来た直後に、文一郎は二度目の妻を娶つたが、未だ幾ならぬにこれを去つた。此女は西村與三郎の女作であつた。次で、箱館から歸つた頃からであらう。陸を娶らうと思ひ立つて、人を遣して請ふこと數度に及んだ。しかし澀江氏では軋ち動かさなかつた。陸には舊に依つて婚嫁を急ぐ念が無い。五百は文一郎の好人物なることを熟知してゐたが、これを増にすることば望まなかつた。かう云ふ事情の下に、兩家の間には稍久しく緊張した關係が続いてゐた。

文一郎は壯年の時パツシヨンの強い性質を有してゐた。その陸に對する要望はこれがために頗る熱烈であつた。澀江氏では、若し其請を納れなかつたら、或は兩家の間に事端を生じはすまいかと慮つた。陸が遂に文一郎に嫁したのは、此疑懼の犠牲になつたやうなものである。

此結婚は、名義から云へば、陸が矢川氏に嫁したのであるが、形迹から見れば、文一郎が婿入をしたやうであつた。式を行つた翌日から、夫婦は終日澀江の家にて、夜更けて矢川の家へ寢に歸つた。これは文一郎が新に馬廻になつた年で二十九歳、陸は二十三歳であつた。

矢島優善は、陸が文一郎の妻になつた翌月、即ち十月に土手町に家を持つて、周禎の許にゐた鐵を迎へ入れた。これは行懸りの上から當然の事で、五百も傍から世話を焼いたのである。しかし二十三歳になつた鐵は、もう昔日の如く夫の甘言に謙されては居らぬので、此土手町の住ひは優善が身上のクリジス起す場所となつた。

優善と鐵との間に、夫婦の愛情の生ぜぬことは、固より豫期すべきであつた。しかし密に愛情が生ぜざるのみではなく、二人は忽ち讎敵となつた。そしてその争ふには、鐵がいつも攻勢を取り、物質上の利害問題を提げて夫に當るのであつた。「あなたがいくじが無いばかりに、あの周禎のやうな男に矢鳥の家を取られたのです」此句が幾度となく反復せられる鐵が論難の主眼であつた。優善がこれに答へると、鐵は冷笑する。舌打をする。

此争は週を累ね月を累ねて歇まなかつた。五百等は百方調停を試みたが何の功をも奏せなかつた。五百は已むことを得ぬので、周禎に交渉して再び鐵を引き

取つて貰はうとした。しかし周禎は容易に應ぜなかつた。澀江氏と周禎が方との間に、幾度となく交換せられた要求と拒絶とは、押問答の姿になつた。

此住反の最中に忽ち優善が失踪した。十二月二十八日に土手町の家を出て、それ切歸つて來ぬのである。澀江氏では、優善が閨を排せんがために酒色の境に運れたのだらうと思つて、手分をして料理屋と妓樓とを搜索させた。しかし優善のありかはどうしても知れなかつた。

その八十七

比良野貞固は江戸を引き上げる定府の最後の一組三十戸ばかりの家族と共に、前年五六月の交安濟丸と云ふ新造帆船に乗つた。然るに安濟丸は海に泛んで間もなく、舵機を損じて進退の自由を失つた。乗組員は某地より上陸して、許多の辛苦を嘗め、此年五月にやうやう東京に歸つた。

さて更に米監スルタン號に乗つて、此度は無事に青森に著した。佐藤彌六さんは當時の同乗者の一人ださうである。弘前にある澀江氏は、貞固が東京を發したことを聞いてゐたのに、いつまでも到着せぬので、どうした事かと案じてゐた。殊に比良野助太郎と書した荷札が青森の港に流れ寄つたと云ふ流言などがあつて、愈心を惱まする媒となつた。そのうち此年十二月頃に青森から發した貞固の手書が來た。其中

に安濟丸の故障のため一たび去つた東京に引返し、再び米監に乗つて來たことを言つて、さて金を持つて迎へに來てくれと云つてあつた。一年餘の間無益な往反をして、貞固の盤纏は僅に一分銀一つを剩してゐたのである。

弘前に來てから現金の給與を受けたことの無い澀江氏では、此書を得て途方に暮れたが、船廻しにした荷の中に、刀劍のあつたのを三十五振質に入れて、金二十五兩を借り、それを持つて往つて貞固を弘前へ案内した。貞固の養子房之助は此年に手廻を命ぜられたが、藩制が改まつたので、久しく此職に居ることが出来なかつた。

抽齋發後の十二年は明治三年である。六月十八日に弘前藩士の秩祿は大削減を加へられ、更に醫者の降等が令せられた。祿高は十五俵より十九俵までを十五俵に、二十俵より二十九俵までを二十俵に、三十俵より四十九俵までを三十俵に、五十俵より六十九俵までを四十俵に、七十俵より九十九俵までを六十俵に、百俵より二百四十九俵までを八十俵に、二百五十俵より四百九十九俵までを百俵に、五百俵より七百九十九俵までを百五十俵に、八百俵以上を二百俵に減ぜられたのである。そして從來石高を以て給せられてゐたものは、其儘俵と看做して同一の削減を行はれた。そして土分を上士、中士、下士に班つて、各班に大少を置いた。二十俵を少下士、三十俵を大下士、四十俵を少中士、九十俵を大中士、

百五十俵少上士、二百俵を大上士とすると云ふのである。江江氏は原祿三百石であるから、中の上に位する筈で、小祿の家比ぶれば、受くる所の損失が頗る大きい。それでも江江氏はこれを得て満足する積であつた。

然るに醫者の降等の令が出て、それが江江氏に適用せられることになつた。本成善は醫者の子として近習小姓に任せられてゐるには違無い。しかし未だ曾て醫として仕へたことはない。しかのみならず、令の出づるに先だつて、十四歳を以て藩學の助授にせられ、生徒に經書を授けてゐる。これは師たる兼松石居が已に屏居を免されて藩の醫學を拜したので、其門人も亦奉用せられたのである。且先例を按ずるに、齒科醫佐藤春益の子は、單に幼くして家督したために、平士にせられてゐる。況や成善は分明に儒職にさへ就いてゐるのである。成善が此令を己に適用せられようと思はなかつたのも無理は無い。

しかし成善は念のために大參事西館孤清、少參事兼大隊長加藤武彦の二人を見て意見を叩いた。二人皆成善は醫として視るべきものではないと云つた。武彦は前の側用人兼用人清兵衛の子である。何ぞ料らん。成善は醫者と看做されて降等に逢ひ、三十俵の祿を受くることとなり、剩へ士籍の外にありなどとさへ云はれたのである。成善は抗告を試みたが、何の功をも奏せなかつた。

その八十八

何故に儒を以て仕へてゐる成善に、醫師降等の令を適用したかと云ふに、それは想像に難くはない。江江氏は世儒を兼ねて、命を受けて經を講じてはゐたが、家は本醫道の家である。成善に至つても、幼い時から多紀安琢の門に入つてゐた。又已に弘前に來た後も、醫官北岡太淳、手塚元瑞、今春碩等は成善に兼て醫を以て仕へんことを勧め、かう云ふ事を言つた。「弘前には少壯者中に中村春臺、三上道春、北岡有格、小野圭庵の如きものがある。其他小山内元洋のやうに新に召し抱へられたものもある。しかし江戸定府出身の少い醫者が無い。ちと醫業の方をも出精してはどうだ」と云つた。且令の發せられる少し前の出來事で、成善が津輕承昭に醫として遇せられてゐた證據がある。六月十三日に、藩知事承昭は職を大星場に習せさせた。承昭は五月二十六日に知事に任せらる。統譯の盛んに起つた時、第五大隊の醫官小野道秀が病を發した。承昭は傍に侍した成善をして小野に代らしめた。此の如く江江氏の子が醫を善くすることは、上下皆信じてゐたと見える。しかしこれがために、現に儒を以て仕へてゐるものを不幸に陥れたのは、同情が關けてゐたと謂つても好からう。

矢島優善は前年の暮に失踪して、江江氏では疑懼の間に年

を送つた。此年一月二日の午後、石川驛の人が二通の手紙を持つて來た。優善が家を出た日に書いたもので、一は五百に宛て、一は成善に宛ててある。竝に訣別の書で、所所涙痕を印してゐる。石川は弘前を距ること一里半を過ぎぬ驛であるが、使のものは命ぜられたとほりに、優善が驛を去つた後に手紙を届けたのである。

五百と成善とは、優善が雪中に行き備みはせぬか、病み臥しはせぬかと氣遣かつて、再び人を備つて搜索させた。成善は自ら雪を冒して、石川、大崎、倉立、碓關等を隅なく尋ねた。しかし蹤跡は絶て知れなかつた。

優善は東京をさして石川驛を發し、此年一月二十一日に吉原の引手茶屋湊屋に著いた。湊屋の上さんは大分年を取つた女で、常に優善を「蝶はん」と呼んで親んでゐた。優善は此女をたよつて住つたのである。

湊屋に皆と云ふ娘があつた。此みいちゃんは美しいので、茶屋の呼物になつてゐた。みいちゃんは津藤に縁故があるとか云ふ河野某を檀那に取つてゐたが、河野は遂にみいちゃんを娶つて、優善が東京に著いた時には、今戸橋の畔に藝者屋を出してゐた。屋號は同じ湊屋である。

優善は吉原の湊屋の世話で、山谷堀の箱屋になり、主に今戸橋の湊屋で抱へてゐる藝者等の供をした。四箇月半ばかりして、或人の世話で、優善は本所緑町の安

田と云ふ骨董店に入替した。安田の家では主人禮助が死んで、未亡人政が寡居してゐたのである。しかし優善の骨董商時代は箱屋時代より短かつた。それは政が優善の妻になつてもなくみまかつたからである。

此頃前に浦和縣の官吏となつた鹽田良三が、權大屬に墮つて聽訟係をしてゐたが、優善を縣令に薦めた。優善は八月十八日を以て浦和縣出仕を命ぜられ、典獄になつた。時に年三十六であつた。

その八十九

專六は兵士との交が漸く深くなつた。此年五月にはとうとう「於軍務局樂手稽古被仰付」といふ沙汰書を受けた。さて樂手の修行をしてゐるうちに十二月二十九日に山田源吾の養子になつた。源吾は天保中津輕信順が未だ致仕せざる時、側用人を勤めてゐたが、旨に忤つて永の暇になつた。しかし他家に仕へようと云ふ念もなく、商估の業をも好まぬので、家の菩提所なる本所中の郷の普賢寺の一房に僦居し、日ごとに街に出でて謠を歌つて錢を乞うた。

この純然たる浪人生活が三十年ばかり續いたのに、源吾は刀劍、紋附の衣類、上下等を葛籠一つに收めて持つてゐた。承昭は此年源吾を召し還して、二十俵を給し、目見以下の士に列せしめ、本所横川邸の番人を命じた。然るに源吾は年

老い身満んで久しく職に居り難いのを慮つて、養子を求めた。

此時源吾の親戚に戸澤維清と云ふものがあつて、専六を其養子に世話をした。戸澤は五百に説くに、山田の家世の本卑くなかつたのと、東京勤の身を立つるに便なるを以てし、又かう云つた。「それに専六さんが東京にあると後に成善さんが上京することになつても御都合が宜しいでせう」と云つた。成善は等を降され祿を減せられた後、東京に往つて恥を雪がうと思つてゐたからである。

戸澤がかう云つて勤めた時、五百は容易にこれに耳を傾けた。五百は戸澤の人と爲りを喜んでゐたからである。戸澤維清通稱は八十吉、信順在世の日の側役であつた。才幹あり氣爽ある人で、恭謙にして抑損し、些の學問さへあつた。然るに酒を被るときは剛愎にして人を凌いだ。信順は平素命じて酒を絶たしめ、用幣置しきに至ることにこれに酒を飲ましめ、命を當局に傳へさせた。戸澤は當局の一語を得ないでは歸らなかつたさうである。

或時戸澤は公事を以て旅行した。物書松本甲子藏がこれに随つてゐた。駕籠の中に坐した戸澤が、ふと側を歩く松本を見るときは草鞋の緒が足背を破つて、鮮血が流れてゐた。戸澤は急に一行を止まらせて、大聲に「甲子藏」と呼んだ。「はつ」と云つて松本は轎扉に近づいた。戸澤は「ちと内用があ

るから遠慮いたせ」と云つて、供のものを避け、松本に草鞋を脱がせて、強ひて轎中に坐せしめ自ら松本の草鞋を著け、さて轎丁を呼んで昇いで行かせたさうである。これは松本が保さんに話した事で、保さんは又戸澤と其弟星野傳六郎とも識つてゐた。戸澤の子米太郎、星野の子金藏の二人は曾て保さんの教を受けたことがある。

戸澤の勧誘には、此年弘前に著した比良野貞固も同意したので、五百は遂にこれに従つて、専六が山田氏に養はるることを諾した。其事の決したのは十二月二十九日、専六が船の青森を發したのが翌三十日である。此年専六は十七歳になつてゐた。然るに東京にある養父源吾は、専六が尙舟中にある間に病歿した。

矢川文一郎に嫁した陸は、此年長男萬吉を生んだが、萬吉は夭折して弘前新寺町の報恩寺なる文内が母の墓の傍に葬られた。抽齋の六女水木は此年馬役村田小吉の子廣太郎に嫁した。時に年十八であつた。既にして矢島周禎が琴瑟調はざることを五百に告げた。五百は己むことを得ずして水木を取り戻した。

小野氏では此年富殿が六十四歳で致仕し、子道悦が家督相續をした。道悦は天保七年生で、三十五歳になつてゐた。中丸昌庵は此年六月二十八日に歿した。文政元年生の人だ

から、五十三歳を以て終つたのである。弘前の城は此年五月二十六日に藩廳となつたので、知事津輕承昭は三之内に遷つた。

その九十

抽齋後の第十三年は明治四年である。成善は母を弘前に遣して、單身東京に往くことに決心した。その東京に往かうとするのは、一には降等に遭つて不平に堪へなかつたからである。二には滅祿の後舊に依つて生計を立てて行くことが出来ぬからである。その母を弘前に遺すのは、脱藩の疑を避けんがためである。

弘前藩は必ずしも官費を以て少壯者を東京に遣ることを嫌はなかつた。これに反して私費を以て東京に往かうとするものがあると、藩は口々に其人の脱藩を疑つた。況や家族をさへ伴はうとすると、此疑は益深くなるのであつた。

成善が東京に往かうと思つてゐるのは久しい事で、屢これを師兼松石居に謀つた。石居は機を見て成善を官費生たらしめようと誓つた。しかし成善は今徐にこれを待つことが出来なくなつたのである。

さて成善は私費を以て往くことを敢てするのであるが、猶母だけは遣して置くことにした。これは己むことを得ぬからである。何故と云ふに、若し成善が母と俱に往かうと云つた

なら、藩は放ち遣ることを聽さなかつたであらう。

成善は母に約するに、他日東京に迎へ取るべきことを以てした。しかし藩の必ずこれを阻格すべきことは、母子皆知るを知つてゐた。約めて言へば、弘前を去る成善には母を質とするに似た恨があつた。

藩が脱籍者の輩出せんことを恐るるに至つたのは、二三の忌むべき實例があつたからである。其首に居るものは彼の勘定奉行を罷めて米穀商となつた平川半治である。當時此の如く財利のために士籍を遁れようとする氣風があつたことは、霧江氏も亦親しくこれを驗することを得た。或人は五百に説いて、東京兩國の中村樓を買はせようとした。今千兩の金を投じて買つて置いたなら、他日鉅萬の富を致すことが出来よう云つたのである。或人は東京神田須田町の某賣藥株を貸はせようとした。此株は今廉價を以て贖ふことが出来て、即日から月收三百兩乃至五百兩の利があると云つたのである。五百のこれに耳を假さなかつたことは固よりである。

當時藩職に居つて、津輕家をして士を失はざらしめんと欲し、極力脱籍を防いだのは、大參事西館孤清である。成善は西館を訪うて、東京に往くことを告げた。西館はおほよそかう云つた。東京に往くは好い。學業成就して弘前に歸るなら、我等はこれを任用することを吝まぬであらう。しかし半途にして母を迎へ取らんとするが如きことがあつたなら、そ

れは郷土のために謀つて忠ならざることを證するものである。我善はこれを許さぬであらうと云つた。成善は悲痛の情を抑へて西館の許を辭した。

成善は家祿を割いて、其五人扶持を東京に送致して貰ふことを、當路の人に請うて允された。それから長持一棹の錦繪を書畫兼骨董商近竹に賣つた。これは淺草藏前の兎桂等で、二十枚百文位で買つた繪であるが、當時三枚二百文乃至一枚百文で賣ることが出来た。成善は此金を得て、半は留めて母に餵り、半はこれを旅費と學費とに充てた。

成善が弘前で暇乞に廻つた家の中、最も別を惜んだのは兼松石居と平井東室とであつた。東室は左膝下に瘤を生じたので、自ら瘤瘡と號してゐたが、別に臨んで、もう再會は覺東ないと云つて落涙した。成善の去つた翌年、明治五年九月十六日に東室は鹽分町の家に歿した。年は六十である。四女乙女が家を繼いだ。今東京神田裏神保町に住んで、琴の師匠をしてゐる平井松野さんが此乙女である。

その九十一

成善は藩學の職を辭して、此年三月二十一日に、母五百と水杯を酌み交して別れ、駕籠に乗つて家を出た。水杯を酌んだのは、當時の状況より推して、再會の期し難きを思つたからである。成善は十五歳、五百は五十六歳になつてゐた。抽

齋の歿した時は、成善はまだ少年であつたので、此時始めて親子の別の悲しさを知つて、輦中で聲を發して泣きたくなるのを、やうやう堪へ忍んださうである。

同行者は松本甲子藏であつた。甲子藏は後に忠章と改稱した。父を庄兵衛と云つて、素比良野貞固の父文藏の若黨であつた。文藏はその様直なのを愛して津輕家に薦めて足輕にして貰つた。其子甲子藏は才學があるので、藩の公用局の史生に任用せられてゐたのである。

弘前から旅立つものは、石川驛まで駕籠で来て、ここで親戚故舊と酒を酌んで別れる習であつた。成善を送るものは、句讀を授けられた少年等の外、矢川文一郎、比良野房之助、服部善吉、菱川太郎などであつた。後に服部は東京で時計職工になり、菱川は辻新次さんの家の學僕になつたが、二人共に已に世を去つた。

成善は四月七日に東京に著いた。行李を卸したのは本所二つ目の藩邸である。是より先成善の兄専六は、山田源吾の養子になつて東京に来て、まだ父子の對面をせぬ間に死んだ源吾の家に住んでゐた。源吾は津輕承昭の本所横川に設けた邸をあつかつてゐて、住宅は本所割下水にあつたのである。其外東京には五百の姉安が兩國藥研堀に住んでゐた。安の女二人のうち、敬は猿若町三丁目芝原茶屋三河屋に、銓は藏前須賀町の呉服屋柗屋儀平の許にゐた。又専六と成善との兄優

善は、程遠からぬ浦和にゐた。

成善の舊師には多紀安琢が矢の倉に居り、海保竹逕がお玉が池にゐた。竹逕は維新の初に官吏になつて、此邸を伊澤鐵三郎の徳安が手から買ひ受けて練屏小路の湿地にあつた、床の低い、疊の腐つた家から移り住んだ。獨家宅が改まつたのみでは無い。常に弊衣を着てゐた竹逕が、其頃から絹布を被るやうになつた。しかし幾もなく、當時の有力者山内豊信等の斥くる所となつて官を罷めた。成善は四月二十二日に再び竹逕の門に入つたが、竹逕は前年に會陰に膿瘍を發したために、稍衰弱してゐた。成善は久し振にその易や毛詩を講ずるのを聴いた。多紀安琢は維新後困窮して、竹逕の扶養を蒙つてゐた。成善は屢其安否を問うたが、再び素問を學ぼうとはしなかつた。

成善は英語を學ばんがために、五月十一日に本所相生町の共立學舎に通ひはじめた。父抽齋は遺言して蘭語を學ばしめようとしたのに、時代の變遷は學ぶべき外國語を易ふるに至らしめたのである。共立學舎は尺振八の經營する所である。振八、初の名を仁壽と云ふ。下總國高岡の城主井上筑後守正胤の家來鈴木伯壽の子である。天保十年に江戸佐久間町に生れ、安政の末年に尺氏を冒した。田邊太一に啓發せられて英學に志し、中濱萬次郎、西吉十郎等を師とし、次で英米人に親交し、文久中佛米二國に遊んだ。成善が從學した時は三十

三歳になつてゐた。

その九十二

成善は四月に海保の傳經廬に入り、五月に尺の共立學舎に入つたが、六月から更に大學南校にも籍を置き、日課を分割して三校に往來し、猶放課後にはフルベツタの許を訪うて教を受けた。フルベツタは本和蘭人で亞米利加合衆國に民籍を有してゐた。日本の教育界を開拓した一人である。

學資は弘前藩から送つて来る五人扶持の中、三人扶持を賣つて辨ずることが出来た。當時の相場で一箇月金二兩三分二朱と四百六十七文であつた。書籍は英文のものは初より新に買ふことを期してゐたが、漢書は弘前から抽齋の手澤本を送つて貰ふことにした。然るに此書籍を積んだ舟が、航海中七月九日に暴風に遭つて覆つて、抽齋の會て蒐集した古刊本等の大部分が海若の有に歸した。

八月二十八日に弘前縣の幹督が成善に命ずるに神社調掛を以てし、金二兩二分二朱と二匁二分五厘の手當を給した。此命は成善が共立學舎に入ることを屈けて置いたので、同時に「缺席開屆の委頓」と云ふ形式を以て學舎に傳へられた。是より先七月十四日の詔を以て慶藩置縣の制が布かれたので、弘前縣が成立してゐたのである。

矢島優善は浦和縣の典獄になつてゐて、此年一月七日に唐

津藩士大澤正の女嫁を娶つた。嘉永二年生で二十三歳である。是より先前妻は幾多の葛藤を経た後に離別せられてゐた。

優善は七月十七日に庶務局詰に轉じ、十月十七日に判任史生にせられた。次で十一月十三日に浦和縣が廢せられて、其事務は埼玉縣に移管せられたので、優善は十二月四日を以て更に埼玉縣十四等出仕を命ぜられた。

成善と俱に東京に來た松本甲子藏は、優善に薦められて、同時に十五等出仕を命ぜられたが、後兵事課長に進み、明治三十二年二月二十八日に歿した。弘化二年生であるから、五十五歳になつたのである。

當時縣吏の權勢は盛なものであつた。成善が東京に入つた直後に、まだ浦和縣出仕の典獄であつた優善を訪ふと、優善は等外一等出仕宮本半藏に駕籠一挺を宰領させて成善を縣の界に迎へさせた。成善が駕籠に乗つて、戸田の渡しに掛かると、渡船場の役人が土下座をした。

優善が庶務局詰になつた頃の事である。或日優善は宴會を催して、前年に自分が供をした今戸橋の湊屋の抱藝者を始とし、山谷堀で顔を識つた藝者を漏なく招いた。そして酒闌なる時、「己はお前方の供をして、大ぶ世話になつたことがあるが、今日は己もお客だぞ」と云つた。大丈夫志を得たと云ふ概があつたさうである。

縣吏の間には當時飲宴が盛行はれた。浦和縣知事間島多道の催した懇親會では、鹽田良三が野呂松狂言を演じ、優善が莫大小の襦袢袴下を着て夜這の眞似をしたことがある。間島は通稱萬次郎、尾張の藩士である。明治二年四月九日に刑法官判事から大宮縣知事に轉じた。大宮縣が浦和縣と改稱せられたのは、其年九月廿九日の事である。

此年の暮、優善が埼玉縣出仕になつてからの事である。某村の戸長は野菜一車を優善に獻じたいと云つて持つて來た。優善は「己は賄賂は取らぬぞ」と云つて卻けた。

戸長は當惑顔をして云つた。「どうも此野菜を此儘持つて歸つては、村の人民共に對して、わたくしの面目が立ちませぬ。」
「そんなら買つて遣らう」と、優善が云つた。

戸長はやうやう天保錢一枚を受け取つて、野菜を車から卸させて歸つた。

優善は廉い野菜を買つたからと云つて、縣令以下の職員に分配した。

縣令は野村盛秀であつたが、野菜を買ふと同時に此頗末を聞いて、「矢島さんの流儀は面白い」と云つて褒めたさうである。野村は初め宗七と稱した。薩摩の士で、浦和縣が埼玉縣となつた時、日田縣知事から轉じて埼玉縣知事に任ぜられた。間島冬道は去つて名古屋縣に赴いて、參事の職に就いた。

が、後明治二十三年九月三十日に御歌所寄人を以て終つた。又野村は後明治六年五月二十一日に此職に於て歿したので、長門の士參事白根多助が一時縣務を代行した。

その九十三

山田源吾の養子になつた專六は、まだ面會もせぬ養父を喪つて、其遺跡を守つてゐたが、五月一日に至つて藩知事津輕承昭の命を拜した。「親源吾給祿二十俵無相違被遣」と云ふのである。さて源吾は謁見を許されぬ職を以て終つたが、六月二十日に專六は承昭に謁見することを得た。これは成善が内意を承けて願書を呈したためである。

專六は成善に紹介せられて、先づ海保の傳經廬に入り、次で八月九日に共立學舎に入り、十二月三日に梅浦精一に從學した。

此年六月七日に成善は名を保と改めた。これは母を懷ぶが故に改めたので、母は五百の字面の雅ならざるがために、常に伊保と署してゐたさうである。矢島優善の名を優と改めたのも、此年である。山田專六の名を脩と改めたのは、別に記載の微すべきものは無いが、稍後の事であつたらしい。

此年十二月三日に保と脩とが同時に斬髪した。優は何時斬髪したか知らぬが、多分同じ頃であつただらう。優は少し早く東京に入り、程なく東京を距ること遠からぬ浦和に往つて

官吏をしてゐたが、必ずしも二弟に先だつて斬髪したとは云ひ難い。紫の紐を以て髻を結ふのが、當時の官吏の頭飾で、優が何時まで其髻を愛惜したかわからない。人は或は抽齋の子供が何時斬髪したかを問ふことを須るぬと云ふかも知れない。しかし明治の初に男子が髪を斬つたのは、獨逸十八世紀のツオップが前に斷たれ、清朝の辮髪が後に斷たれたと同じく、風俗の大變遷である。然るに後の史家は其年月を知るに苦むかも知れない。わたくしの如きは自己の髪を斬つた年を記してゐない。保さんの日記の一條を此に採録する所以である。

此の年十二月二十二日に、本所二つ目の弘前藩邸が廢せられたために、保は弟山田脩が本所割下水の家に同居した。

海保竹連の妻、漁村の女が此年十月二十五日に歿した。

抽齋歿後の第十四年は明治五年である。一月に保が山田脩の家から本所横綱町の鈴木きよ方の二階へ徙つた。鈴木は初め船宿であつたが、主人が死んでから、未亡人きよ方が席貸をする事になつた。きよは天保元年生で、此年四十三歳になつてゐた。當時善く保を遇したので、保は後年に至るまで音信を斷たなかつた。是より先保は弘前にある母を呼び迎へようとして、藩の當路者に諮ること數次であつた。しかし津輕承昭の知事たる間は、西館等が前説を固守して許さなかつた。前年慶藩の詔が出て、承昭は東京に居ることになり、縣

政も亦頗る草まつたので、保は又當路者に詰つた。當路者は復五百の東京に入ることを阻止しようとはしなかつた。唯保が一諸生を以て母を養はんとするのが怪むべきだと云つた。それゆゑ保は矢島優に願書を作らせて呈した。縣廳はこれを可とした。五百はやうやう弘前から東京に来ることになつた。

保が東京に遊學した後の五百が寂しい生活には、特に記すべき事は無い。只前年慶應前に、弘前姐林の山林地が濹江氏に割與せられたのみである。これは士分の者に授産の目的を以て割與した土地に剩餘があつたので、當路者が士分として扱はれざる醫者にも恩恵を施したのである。此地面の授受は淺越支陸が五百の委託によつて處理した。

五百が弘前を去る時、村田廣太郎の許から歸つた水木を伴はなくてはならぬことは勿論であつた。其外陸も亦矢川文一郎と俱に五百に附いて東京へ行くことになつた。

文一郎は弘前を發する前に、津輕家の用達商人工藤忠五郎蕃寛次男蕃徳を養子にして弘前に残した。蕃寛には二子二女があつた。長男可次は森甚平の士籍、又次男蕃徳は文一郎の士籍を譲り受けた。長女お連さんは蕃寛の後を繼いで、現に弘前の下白銀町に矢川寫眞館を開いてゐる。次女おみきさんは岩川氏友彌さんを婿に取つて、本町一丁目角にエム矢川寫眞所を開いてゐる。蕃徳は郵便技手になつて明治三十七年十

月二十八日に歿し、養子文平さんが其後を襲いだ。

その九十四

五百は五月二十日に東京に著いた。そして矢川文一郎、陸の夫婦並に村田氏から歸つた水木の三人と俱に、本所横網町の鈴木方に行季を節した。弘前からの同行者は武田代次郎と云ふものであつた。代次郎は勅定奉行武田準左衛門の孫である。準左衛門は天保四年十二月二十日に斬罪に處せられた。津輕信順の下で笠原近江が政を擅にした時の事である。

五百と保とは十六箇月を隔てて再會した。母は五十七歳、子は十六歳である。脩は刺下水から、優は浦和から母に逢ひに来た。

三人の子の中で、最も生計の餘裕があつたのは優である。優は此年四月十二日に權小屬になつて、月給僅に二十五圓である。これに當時の潤澤なる巡回旅費を加へても、尙七十圓許に過ぎない。しかし其意氣は今の勅任官に匹敵してゐた。優の家には二人の食客があつた。一人は妻の弟大澤正である。今一人は生母の兄岡西支亭の次男養支である。支亭の長男玄庵は曾て保の胸衣を服用したと云ふ顯病者で、維新後間もなく世を去つた。次男が此養支で、當時氏名を更めて岡寛齋と云つてゐた。優が登壇すると、その使役する給仕は故舊中田某の子、敬三郎である。優が推薦した所の縣吏に

は、十五等出仕松本甲子藏がある。又敬三郎の父中田某、脩の親戚山田健三、曾て濹江氏の若黨たりし中條勝次郎、川口に開業してゐた時の相識宮本半藏がある。中田以下は皆月給十圓の等外一等出仕である。其他今の清浦子が縣下の小學教員となり、縣廳の學務課員となるにも、優の推薦が與つて力があつたとかで、「矢島先生奎吾」と書して尺牘數通が遺つてゐる。一時優の救援に籍つて衣食するもの數十人の衆きに至つたさうである。

保は下宿屋住ひの諸生、脩は廢藩と同時に横川邸の番人を罷められて、これも一戸を構へてゐると云ふだけで矢張諸生であるのに、獨り優が官吏であつて、しかも此の如く應分の權勢をさへ有してゐる。そこで優け母を勤めて、浦和の家に迎へようとした。「保が卒業して濹江の家を立てるまで、せめて四五年の間、わたくしの所に來てみて下さい」と云つたのである。

しかし五百は應せなかつた。「わたくしも年は寄つたが、幸に無病だから、浦和に住つて樂をしなくても好い。それよりは學校に通ふ保の留守居でもしませう」と云つたのである。

優は猶勸めて已まなかつた。そこへ一粒金丹の稍大きい註文が來た。福山、久留米の二箇所から來たのである。金丹を調製することは、始終五百が自らこれに任じてゐたので、此

度も亦直に調査に著手した。優は一旦浦和へ歸つた。

八月十九日に優は再び浦和から出て來た。そして母に云ふには、必ずしも浦和へ移らなくても好いから、兎に角見物がてら泊りに來て貰ひたいと言ふのであつた。そこで二十日に五百は水木と保とを連れて浦和へ往つた。

是より先保は高等師範學校に入ることを願つて置いたが、其採用試験が二十二日から始まるので、獨り先に東京に歸つた。

その九十五

保が師範學校に入ることを願つたのは、大學の業を卒ふるに至るまでの資金を有せぬがためであつた。師範學校は此年始めて設けられて、文部省は上等生に十圓、下等生に八圓を給した。保は此給費を仰がんと欲したのである。

然るに此に一つの障礙があつた。それは師範學校の生徒は二十歳以上に限られてゐるのに、保はまだ十六歳だからである。そこで保は森枳園に相談した。

枳園は此年二月に福山を去つて諸國を漫遊し、五月に東京に來て湯島切通しの借家に住み、同じ月の二十七日に文部省十等出仕になつた。時に年六十六である。

枳園は餘程保を愛してゐたものと見え、東京に入つた第三日に横網町の下宿を訪うて、切通しの家へ來いと云つた。保

が二三日往かずにゐると、枳園は又来て、なぜ来ぬかと問うた。保が尋ねて行つて見ると、切通しの家は店造で、店と次の間と豪所とがあるのみで、枳園は其店先に机を据えて書を讀んでゐた。保が覺えず、「賣卜者のやうぢやありませんか」と云ふと、枳園は面白げに笑つた。それから湯島と本所との間に、往來が絶えなかつた。枳園は厩保を山下の鷹鍋、駒形の川村などに連れて往つて、酒を被つて世を罵つた。

文部省は當時頗る多く名流を羅致してゐた。岡本況齋、榊原琴洲、前田元温等の諸家が皆九等乃至十等出仕を拜して、月に四五十圓を給せられてゐたのである。

保が枳園を訪うて、師範生徒の年齢の事を言ふと、枳園は笑つて、「なに年の足りない位の事は、己がどうにか話を附けて遣る」と云つた。保は枳園に託して願書を呈した。

師範學校の採用試験は八月二十二日に始まつて、三十日に終つた。保は合格して九月五日に入學することになつた。五百は入學の期日に先つて、浦和から歸つて來た。

保の同級には今の末松子の外、加治義方、古渡資秀などがゐた。加治は後に渡邊氏を冒し、小説家の群に投じ、繪入自由新聞に讀物を出したことがある。作者名は花笠文京である。古渡は風采揚らず、舉止迂拙であつたので、これと交るものは殆保一人のみであつた。本常陸國の農家の子で、地方に初生兒を窒息させて殺す陋習があつたために、將に害せられ

「いや。難有いがもう済まして來ましたよ。今淺草見附の所を遣つて來ると、旨さうな茶飯餅掛を食べさせる店が出來てゐました。そこに腰を掛けて、茶飯を二杯、餅掛を二杯食べました。どつちも五十文づつで丁度二百文でした。廉いぢやありませんか」と、優は云つた。女主人が氣さくだと稱するの、此調子を斥して言つたのである。

その九十六

此年には弘前から東京に出て來るものが多かつた。比良野貞固もその一人で、或日突然保が横網町の下宿に來て、「今著いた」と云つた。貞固は妻照と六歳になる女柳とを連れて來て、百本棧の側に繋がせた舟の中に遣して置いて、獨り上陸したのである。さて差當り保と同居する積りだと云つた。

保は即座に承引して、「御遠慮なく奥さんやお嬢さんをお連下さい。追附母も弘前から參る筈になつてゐますから」と云つた。しかし保は竊に心を苦めた。なぜと云ふに、保は鈴木女主人に月二兩の下宿代を拂ふ約束をしてゐながら、學資の方が足らぬ勝なので、まだ一度も拂はずにゐた。そこへ遽に三人の客を迎へなくてはならなくなつた。それが餘の人ならば、宿料を取ること出來よう。貞固は己が主人となつては、人に錢を使はせたことがないのである。保はどうしても四人前の費用を辨せなくてはならない。これが苦勞の一つ

んとして僅に免れたのださうである。東京に來て桑田衛平の家の學僕になつてゐて、それから此學校に入つた。齡は保より長すること七八歳であるのに、級の席次は迥に下にゐた。しかし保はその人と爲りの沈著なのを喜んで、厚くこれを遇した。此人は卒業後に佐賀縣師範學校に赴任し、暫くして罷め、慶應義塾の別科を修め、明治十二年に新潟新聞の主筆になつて、一時東北政論家の間に重ぜられたが、其の年八月十二日に虎列拉を病んで歿した。其の後を襲いだのが尾崎學堂さんださうである。

此頃矢島優は暇を得る毎に、浦和から母の安否を問ひに出た。そして土曜日には母を連れて浦和へ歸り、日曜日に車で送り還した。土曜日に自身で來られぬ時は、迎の車をおこすのであつた。

鈴木女主人は次第に優に親んで、立派な、氣さくな増那だと云つて褒めた。當時の優は黒い鬚髯を蓄へてゐた。嘗て黒田伯清隆に謁した時、座に少女があつて、良久しく優の顔を見てゐたが、「あの小父さんの顔は倒に附いてゐます」と云つたさうである。鬚毛が薄くて髯が濃いので、少女は腮を頭と視たのである。優は此容貌で洋服を著け、時計の金鎖を胸前に垂れてゐた。女主人が立派だと云つた筈である。

或る土曜日に優が夕食頃に來たので、女主人が「浦和の檀那、御飯を差上げませうか」と云つた。

である。又此界限ではまだ絲鬚奴のお留守居を見識つてゐる人が多い。それを横網町の下宿に舍らせるのが氣の毒でならない。これが保の苦勞の二つである。

保はこれを忍んで數箇月間三人を款待した。そして殆日日貞固を横山町の尾張屋に連れて往つて馳走した。貞固は養子房之助の弘前から來るまで、保の下宿にゐて、房之助が著いた時、一しよに本所緑町に家を借りて移つた。丁度保が母親を故郷から迎へる頃の事である。

矢川文内も此年に東京に來た。淺越玄陸も來た。矢川は質店を開いたが成功しなかつた。淺越は名を隆と更めて、或は東京府の吏となり、或は本所區役所の書記となり、或は本所銀行の事務員となりなどした。淺越の子は三人あつた。江戸生の長女ふくは中澤彦吉の弟彦七の妻になり、男子二人の中、兄は洋畫家となり、弟は電信技手となつた。

五百と一しよに東京に來た陸が、夫矢川文一郎の名を以て、本所緑町に砂糖店を開いたのも此年の事である。長尾の女敬の夫三河屋力藏の開いてゐた猿若町の引手茶屋は、此年十月に新富町に移つた。守田勘彌の守田座が二月に府廳の許可を得て、十月に開演することになつたからである。

此年六月に海保竹進が歿した。文政七年生であるから、四十九歳を以て終つたのである。前年來復辨之助と稱せずして、名の元起を以て行はれてゐた。竹進の歿した時、家に遺

つたのは養父漁村の妻某氏と竹遷の子女各一人とである。嗣子繁松は文久二年生で、家を繼いだ時七歳になつてゐた。竹遷が歿してからは、保は島田篁村を漢學の師と仰いだ。天保九年に生れた篁村は三十五歳になつてゐたのである。

抽齋歿後の第十五年は明治六年である。二月十日に瀧江氏は當時の第六大區六小區本所相生町四丁目に僦居した。五百が五十八歳、保が十七歳の時である。家族は初め母子の外に水木がゐるばかりであるが、後には山田脩が来て同居した。脩は此頃喘息に悩んでゐたので、刺下水の家を疊んで、母の世話になり来たのである。

五百は東京に来てから早く一戸を構へたいと思つてゐたが、現金の貯は殆盡きてゐたので、奈何ともすることが出来なかつた。既にして保が師範學校から月額十圓の支給を受けることになり、五百は世話をするものがあつて、不本意ながらも、藝者屋のために裁縫をして、多少の賃銀を得ることになつた。相生町の家は此に至つて始めて借りられたのである。

その九十七

保は前年來本所相生町の家から師範學校に通つてゐたが、此年五月九日に學校長が生徒一同に寄宿を命じた。これは工事中であつた寄宿舎が落成したためである。しかも此命令には期限が附してあつて、來六月六日に必ず舎内に徙れと云ふ

ことであつた。

然るに保は入舎を欲せないので、「母病氣に付當分の内通學御許可相成度」云々と云ふ願書を呈して、鷹に依つて本所から通つてゐた。母の病氣と云ふのは虚言では無かつた。五百は當時眼病に罹つて苦んでゐた。しかし保は單に五百の目疾の故を以て入舎の期を延ばしたのでは無い。

保は師範學校の授くる所の學術が、自己の攻めんと欲する所のものと同相反してゐるのを見て、竊に退學を企ててゐた。それゆゑ舎外生から舎内生に轉じて、學校と自己との關係の一段の緊密を加ふることを嫌ふのであつた。

學校は米人スコットと云ふものを雇ひ來つて、小學の教授法を生徒に傳へさせた。主として練習させるのは子母韻の發聲である。發聲の正しいものは上席に居らせる。訛つてゐるものは下席に居らせる。それゆゑ東京人、中國人などは材能がなくとも重んぜられ、九州人、東北人などは材能があつても輕んぜられる。生徒は多く不平に堪へなかつた。中にも東京人某は、己が上位に置かれてゐるにも拘らず、此教授法では延壽大夫が最優等生になる」と罵つた。

保は英語を操ひ英文を讀むことを志してゐるのに、學校の現状を見れば、所望に愜ふ科目は絶て無かつた。又縱ひ未來に於て英文の科が設けられるにしても、共に入學した五十四人の過半は純平たる漢學諸生だから、スペルリングや第一リ

イデアから始められなくてはならない。保は此等の人人と歩調を同じうして行くのを堪へ難く思つた。

保はどうにかして退學したいと思つた。退學してどうするかと云ふと、相識のフルベツクに請うて食客にして貰つても好い。又誰かのボオイになつて海外へ連れて行つて貰つても好い。モオレエ夫婦などの如く、現に自分を愛してゐるものもある。頼みさへしたら、ボオイに使つてくれぬこともあるまい。こんな夢を保は見えてゐた。

保は此の如くに思惟して、校長、教師に敬意を表せず、校則、課業を遵奉することを怠り、早晚退學處分の我頭上に落ち來らんことを期してゐた。校長諸葛信澄の家に刺を通ぜない。其家が何町にあるかをだに知らずにゐる。教師に遅れて教場に入る。數學を除く外、一切の科目を温習せずに、只英文のみを讀んでゐる。

入舎の命令をば此狀況の下に接受した。そして保はかう思つた。若し入舎せずにゐたら、必ず退學處分が降るだらう。さうなつたら、再び頂天立地の自由の身となつて、隨意に英學を研究しよう。勿論切角贏ち得た官費は絶えてしまふ。しかし書肆萬卷樓の主人が相識で、翻譯書を出してくれようと云つてゐる。早速翻譯に著手しようと思ふのである。萬卷樓の主人は大傳馬町の袋屋龜次郎で、是より先保の初て譯したカッケンボスの小米國史を引き受けて、前年これを發行した

ことがある。

保は此計畫を母に語つて同意を得た。しかし矢島優と比良野貞固とが反對した。その主なる理由は、若し退學處分を受けて、氏名を文部省雜誌に載せられたら、拭ふべからざる汚點を履歷の上に印するだらうと云ふにあつた。

十月十九日に保は隠忍して師範學校の寄宿舎に入つた。

その九十八

矢島優は此年八月二十七日に少屬に陞つたが、次で十二月二十七日には同官等を以て工部省に轉じ、鑛山に關する事務を取扱ふことになり、芝罘平町に來り住した。優の家にあつた岡寛齋も、優に推舉せられて工部省の雇員になつた。寛齋は後明治十七年十月十九日に歿した。天保十年生であるから、四十六歳を以て終つたのである。寛齋は生れて妻貌があつたが、痘を病んで容を毀られた。醫學館に學び、又抽齋、枳園の門下に居つた。寛齋は枳園が壽藏碑の後に書して、「余少時曾在先生之門、能知其爲人、且學之廣博、因竊錄先生之言行及字學醫學之諸說、別爲小冊子」と云つてゐる。わたくしは其書の存否を審にしない。寛齋は初め伊澤氏かえの生んだ池田全安の女梅を娶つたが、後これを離別して、陸奥國磐城平の城主安藤家の臣後藤氏の女いつを後妻に納れた。いつは二子を生んだ。長男俊太郎さんは今本郷西片町に住んで、陸

軍省人事局補任課に奉職してゐる。次男篤次郎さんは風間氏を冒して、小石川宮下町に住んでゐる。篤次郎さんは海軍機關大佐である。

陸は此年矢川文一郎と分離して、砂糖店を閉ぢた。生計意の如くならざるがためであつたらう。文一郎が三十三歳、陸が二十七歳の時である。

次で陸は本所緑町に看板を懸けて杵屋勝久と稱し、長唄の師匠をすることになつた。

矢島周禎の一族も亦此年に東京に遷つた。周禎は靈岸島に住んで醫を業とし、優の妻織は本所相生町二丁目橋通に玩具店を開いた。周禎は素眼科なので五百の目の治療を此人に頼んだ。

或日周禎は嗣子周策を連れて澁江氏を訪ひ、東脩を納めて周策を保の門人とせんことを請うた。周策は已に二十九歳、保は僅に十七歳である。保は其意を解せなかつたが、是を問へば周策をして師範學校に入らしむる準備をなさんがためであつた。保は喜び諾して、周策をして試験諸科を温習せしめ且是に漢文を授けた。周策は後生徒の第二次募集に應じて合格し、明治十年に卒業して山梨縣に赴任したが、幾もなく精神病に罹つて罷められた。

緑町の比良野氏では房之助が、實父稻葉一夢齋と共に骨董店を開いた。一夢齋は丹下が老後の名である。貞固は月に數

度淺草黒船町正覺寺の先學に詣でて、歸途には必ず澁江氏を訪ひ、五百と昔を談じた。

抽齋歿後の第十六年は明治七年である。五百の眼病が荏苒として治せぬので、矢島周禎の外に安藤某を延いて療せしめ、數月にして治する事を得た。

水木は此年深川佐賀町の洋品商兵庫屋藤次郎に再嫁した。二十二歳の時である。

妙了尼は此年九十四歳を以て菫山に歿した。

澁江氏は此年感應寺に於て抽齋の爲に法要を営んだ。五百、保、矢島優、陸、水木、比良野貞固、飯田良政等が來會した。

澁江氏の秩祿公債證書は此年に交付せられたが、削減を経た祿を一石九十九錢の割を以て換算した金高は、固より言ふに足らぬ小額であつた。

抽齋歿後の第十七年は明治八年である。一月二十九日に保は十九歳で師範學校の業を卒へ、二十六日に文部省の命を受けて濱松縣に赴くこととなり、母を奉じて東京を發した。

五百、保の母子が立つた後、山田脩は龜澤町の陸の許に移つた。水木は猶深川佐賀町にゐた。矢島優は此頃家を疊んで三池に出張してゐた。

その九十九

數月の後、保は高町の坂下、紺屋町西端の雜貨商江州屋速見平吉の離座敷を借りて遷つた。此江州屋も今猶在るさうである。

矢島優は此年十月十八日に工部少屬を罷めて、新聞記者になり、魁新聞、眞砂新聞等のために、主として演劇欄に筆を執つた。魁新聞には山田脩が俱に入社し、眞砂新聞には森積園が共に加盟した。根園は文部省の官吏として、醫學校、工學寮等に通勤しつつ、旁ら新聞社に寄稿したのである。

抽齋歿後の第十八年は明治九年である。十月十日に濱松師範學校が静岡師範學校濱松支部と改稱せられた。是より先八月二十一日に濱松縣を廢して静岡縣に并せられたのである。しかし保の職は故の如くであつた。

此年四月に保は五百環曆の賀進を催して縣令以下の祝を受けた。五百の姉長尾氏安は此年新宮座附の茶屋三河屋で歿した。年は六十二であつた。此茶屋の株は後敬の夫力蔵が死ぬるに及んで、他人の手に渡つた。

比良野貞固も亦此年本所緑町の家で歿した。文化九年生であるから、六十五歳を以て終つたのである。其後を襲いだ房之助さんは現に緑町一丁目に住んでゐる。

小野富穀も亦此年七月十七日に歿した。年け七十であつた。子道悦が家督相續をした。

保は母五百を奉じて濱松に著いて、初め暫くの程は旅店にゐた。次で母子の下宿料月額六圓を拂つて、下垂町の郷宿山田屋和三郎方にゐることになつた。郷宿とは藩政時代に訴訟などのために村民が城下に出た時舍る家を謂ふのである。又諸國を遊歴する書畫家等の滯留するものも、大抵此郷宿にゐた。山田屋は大きい家で、庭に肉桂の大木がある。今も猶現存してゐるさうである。

山田屋の向ひに山喜と云ふ居酒屋がある。保は山田屋に移つた初に、山喜の店に大皿に蒲焼の盛つてあるのを見て、五百に「あれを買つて見ませうか」と云つた。

「賢澤をお言ひでない。鰻は此土地でも高からう」と云つて、五百は止めようとした。

「まあ、聞いて見ませう」と云つて、保は出て行つた。價を問へば、一錢に五串であつた。當時濱松邊で暮しの立ち易かつたことは、此に由つて想見することが出来る。

保は初め文部省の辭令を持つて縣廳に往つた。濱松縣の官吏は過半舊幕人で、薩長政府の文部省に對する反感があつて、學務課長大江孝文の如きも、頗る保を冷遇した。しかし良久しく話してゐるうちに保が津輕人だと聞いて、少しく面を和げた。大江の母は津輕家の用人梅野求馬の妹であつた。後大江は縣令林厚徳に懇して、師範學校を設けることにし、保を教頭任用した。學校の落成したのは六月である。

多紀安孫も亦此年一月四日に五十三歳で歿した。名は元孫、號は雲從であつた。其後を襲いだのが上總國夷隅郡總元村に現存してゐる次男晴之助さんである。

喜多村栲窓も亦此年十一月九日に歿した。栲窓は抽齋の歿した頃奥醫師を罷めて大塚村に住んでゐたが、明治十年十二月に卒中し、右半身不隨になり、此に迄つて終つた。享年七十三である。

抽齋歿後の第十九年は明治十年である。保は濱松表早馬町四十番地に一戸を構へ、後又幾ならずして元城内五十七番地に移つた。濱松城は本井上河内守正直の城である。明治元年に徳川家が新に此地に封ぜられたので、正直は翌年上總國市原郡鶴舞に徙つた。城内の家屋は皆井上家時代の重臣の第宅で、大手の左右に列つてゐた。保は其一つに母を居らせることが出来たのである。

此年七月四日に保の奉職してゐる静岡師範學校濱松支部は變則中學校と改稱せられた。

兼松石居は此年十二月十二日に歿した。年六十八である。絶筆の五絶と和歌とがある。「今日吾知免。亦將騎鶴遊。上帝實殊命。使爾永相休。」一年浪のち騒ぎつる世をうみの岸を離れて舟漕ぎ出でむ。」石居は酒井石見守忠方の家來屋代某の女を娶つて、三子を生ませた。長子良、字は止所が家を嗣いだ。號は厚朴軒である。良の子成器は陸軍砲兵大尉であ

る。成器さんは下總國市川町に住んでゐて厚朴軒さんも其家に居る。

その百

抽齋歿後の第二十年は明治十一年である。一月二十五日津輕承昭は藩士の傳記を編輯せしめんがために、下澤保躬をして澁江氏に就いて抽齋の行狀を徴さしめた。保は直ちに録呈した。所謂傳記は今存する所の津輕舊記傳類ではあるまいか。わたくしは未だ其書を見ざるが故に、抽齋の行狀が採擇せられしや否やを審にしない。

保の奉職してゐる濱松變則中學校は此年二月二十三日に中學校と改稱せられた。

山田脩は此年九月二日に、母五百に招致せられて濱松に來た。是より先五百は脩の喘息を氣遣つてゐたが、脩が矢鳥優と共に魁新聞の記者となるに及んで、その保に寄する書に卯飲の語あるを見て、大いにその健康を害せんを懼れ、急に命じて濱松に來らしめた。しかし五百は獨り脩の身體のためにのみ憂へたのでは無い。その新聞記者の惡徳に化せられんことを慮つたのである。

此年四月に岡本況齋が八十二歳で歿した。

抽齋歿後の二十一年は明治十二年である。十月十五日保は學問修行のため職を辭し、二十八日に聽許せられた。これ

は慶應義塾に入つて英語を學ばんがためである。

是より先保は深く英語を窮めんと欲して、未だ志を遂げずにあつた。師範學校に入つたのも、其業を卒へて教員となつたのも、皆學費給せざるがために、已むことを得ずして爲したのである。既にして保は慶應義塾の學風を仄聞し、頗る福澤諭吉に傾倒した。明治九年に國學者阿波の人某が、福澤の著す所の學問のすすめを駁して、書中の「日本は慕爾たる小國である」の句を以て祖國を辱むるものとなすを見るに及んで、福澤に代つて一文を草し民間雜誌に投じた。民間雜誌は福澤の經營する所の日刊新聞で、今の時事新報の前身である。福澤は保の文を採録し、手書して保に謝した。保は此より福澤に識られて、これに適從せんと欲する念が愈切になつたのである。

保は職を辭する前に、山田脩をして居宅を索めしめた。脩は九月二十八日に先づ濱松を發して東京に至り、芝區松本町十二番地の家を借りて、母と弟を迎へた。

五百、保の母子は十月三十一日に濱松を發し、十一月三日に松本町の家に著いた。此時保と脩とは再び東京に在つて母の膝下に侍することを得たが、獨り矢鳥優のみは母の到着するを待つことが出来ずに北海道へ旅立つた。十月八日に開拓使御用掛を拜命して、札幌に在勤することとなつたからである。

隲は母と保との濱松へ往つた後も龜澤町の家で長唄の師匠をしてゐた。此家には兵庫屋から歸つた水木が同居してゐた。勝久は水木の夫であつた畑中藤次郎を頼もしくないと見定めて、まだ脩が濱松に往かぬ先に相談して、水木を手元へ連れ戻したのである。

保等が濱松から東京に來た時、二人の同行者があつた。一人は山田要藏、一人は中西常武である。

山田は遠江國敷知郡都築の人である。父を喜平と云つて、疊間屋である。其三男要藏は元治元年生の青年で、澁江の家から濱松中學校に通ひ、卒業して東京に來たのである。時に年十六であつた。中西は伊勢國度會郡山田岩淵町の人中西用亮の弟である。愛知師範學校に學んで卒業し、濱松中學校の教員になつてゐた。これは職を罷めて東京に來た時二十七八歳であつた。山田も中西も、保と同じく慶應義塾に入らんと欲して、共に入京したのである。

その百一

保は東京に著いた翌日、十一月十四日に慶應義塾に往つて、本科第三等に編入せられた。同行者の山田は、保と同じく本科に、中西は別科に入つた。後山田は明治十四年に優等を以て卒業して、一時義塾の教員となり、既にして伊東氏を冒し、衆議院議員に選ばれ、今は某銀行、某會社の重役をし

てゐる。中西は別科を修めた後に郷に歸つた。

保は慶應義塾の生徒となつてから三日目に、萬來舎に於て福澤諭吉を見た。萬來舎は義塾に附屬したクラブ様のもので、福澤は毎日午後に来て文明論を講じてゐた。保が名を告げた時、福澤は昔年の事を語り出でてこれを善遇した。

當時慶應義塾は年を三期に分ち、一月から四月までを第一期と云ひ、五月から七月までを第二期と云ひ、九月から十二月までを第三期と云つた。保が此年第三期に編入せられた第三等は猶第三級と云はんがごとくである。月の末には小試験があり、期の終には又大試験があつた。

森沢園は此年十二月一日に大藏省印刷局の編修になつた。身分は准判任御用掛で、月給四十圓であつた。局長得能良介は初め八十圓を給せよう云つたが、森沢園は辭して云つた。多く給せられて早く罷められむよりは、少く給せられて久しく勤めたい。四十圓で十分だと云つた。局長はこれに従つて、特に寄宿として森沢園を優遇し、土蔵の内に疊を敷いて事務を執らせた。此土蔵の鍵は森沢園が自ら保管してゐて、自由にこれに出入した。壽藏碑に、「日日入局、不知老之將至、殆爲金馬門之想云」と記してある。

抽齋校後の第二十二年は明治十三年である。保は四月に第二等に進み、七月に破格を以て第一等に進み、遂に十二月に全科の業を終へた。下等の同學生には渡邊修、平賀敏があつた。

人は主に小幡篤次郎であつた。保は猶進んで英語を窮めたい志を有してゐたが、濱松にあつた日に衣食を節して貯へた金があつたので、遂に給を俵錢に仰がざることを得なくなつた。

此年も亦卒業生の決口は頗る多かつた。保の如きも第一に三重日報の主筆に擬せられて、これを辭した。これは藤田茂吉に三重縣廳が金を出してゐることを聞いたからである。第二に廣島某新聞の主筆、は保が初め其任に當らうとしてゐたが、次で出来た學校の地位に心を傾けたために、中途にして交渉を絶つた。

學校の地位と云ふのは、愛知中學校長である。招聘の事は阿部泰藏と會談して定まり、保は八月三日に母と水木とを伴つて東京を發した。諸生山田要藏は此時慶應義塾に寄宿した。

その百二

保は三河國寶祿郡國府町に著いて、長泉寺の隱居所を借りて住んだ。そして九月三十日に愛知縣中學校長に任ずと云ふ辭令を受けた。

保が學校に往つて見ると、二つの急を要する問題か前に横はつてゐた。教則を作ることに斷則を作ることである。教則は案を具して文部省に呈し、其認可を受けなくてはならぬ

り、又同じ青森縣人に芹川得一、工藤儀助があつた。上等の同學生には大養毅さんの外、矢田續、安場男爵があり、又同縣人に坂井次永、神尾金彌があつた。後の二人は舊會津藩士であつた。

萬來舎では今の金子子爵、其他相馬永胤、目賀田男爵、鳩山和夫等が法律を講ずるので保も聞いた。

山田脩は此年電信學校に入つて、松本町の家から通つた。陸の勝久が長唄を人に教ふる旁、音樂取調所の生徒となつたのも亦此年である。音樂取調所は當時創立せられたもので、後の東京音樂學校の萌芽である。此頃水木は勝久の許を去つて母の家に來た。

此年又藤村義苗さんが濱松から來て澀江氏に寓した。藤村は舊幕臣で、濱松中學校の業を卒へ、遠江國中泉で小學校訓導をしてゐたが、外國語學校で露語生徒の入学を許し、官費を給すると聞いて、其試験を受けに來たのである。藤村は幸に合格したが、後に露語科が廢せられてから、東京高等商業學校に入つて其業を卒へ、現に某某會社の重役になつてゐる。

松本町の家には五百、保、水木の三人がゐて、諸生には山田要藏と此藤村とが置いてあつたのである。

抽齋校後の二十三年は明治十四年である。當時慶應義塾の卒業生は世人の争つて聘せんと欲する所で、其世話をする

い。罰則は學校長が自ら作り自ら施すことを得るのである。教則の案は直ちに作つて呈し、罰則は不文律となして、生徒に自力の徳教を誨へた。教則は文部省が輒く認可せぬので、往復數十回を累ね、とうとう保の在職中には制定せられずになりました。罰則は果して必要で無かつた。一人の誹違者をも出さなかつたからである。

長泉寺の隱居所は次第に賑しくなつた。初め保は母と水木との二人の家族があつたのみで、寂しい家庭をなしてゐたが、寄寓を請ふ諸生を、一人容れ、二人容れて、幾もあらぬに六人の多きに達した。八田郁太郎、稻垣親康、島田壽一、大矢尋三郎、菅沼岩藏、溝部惟幾の人人である。中にも八田は後に海軍少將に至つた。菅沼は諸方の中學校に奉職して、今は濱松にゐる。最も奇とすべきは溝部で、或日偶然來て泊り込み、それなりに淹留した。夏日給に給羽織を着て恬として恥ぢず、又苦悶の態をも見せない。人皆その長門の人なるを知つてゐるが、曾て自ら年齒を語つたことが無いので、その幾歳なるかを知るものが無い。打ち見る所は保と同年位であつた。溝部は後農商務省の職員となり、地方官に轉じ、栃木縣知事に至つた。

當時保は一人の友を得た。武田氏、名は準平で、保が國府の學校に聘せられた時、中に立つて駱駝した阿部泰藏の兄である。準平は國府に住んで醫を業としてゐたが、醫家を以て

著れずに、卻つて政客を以て聞えてゐた。

準平は是より先愛知縣會の議長となつたことがある。某年に縣會が畢つて縣吏と議員とが懇親の宴を開いた。準平は平素縣令國貞廉平の施設に懐なかつたが、宴開なる時、國貞の前に進んで杯を獻じ、さて「お殺は」と呼びつつ、國貞に背いて立ち、衣を擧げて尻を露したさうである。

保は國府に来てから、此準平と相識になつた。既にして準平が兄弟にならうと勧めた。保は謙つて父子になる方が適當であらうと云つた。遂に父子と稱して杯を交した。準平は四十四歳、保は二十五歳の時である。

此時東京には政黨が争ひ起つた。改進黨が成り、自由黨が成り、又帝政黨が成つて、新聞紙は早晚此等の結黨式の舉行せらるべきことを傳へた。準平と保とは國府にあつてかう云つた。「東京の政界は華華しい。我等田舎に住んでゐるものは、淵に臨んで魚を羨むの情に堪へない。しかし大なるものは成るに難く、小なるものは成るに易い。我等も申らに似せて穴を掘り、一の小政黨を結んで、東京の諸先輩に先んじて式を擧げようではないか」と云つた。此政黨の雛形は進取社と名づけられて、保は社長、準平は副社長であつた。

その百三

抽賣後後の第二十四年は明治十五年である。一月二日に保

の内巡查を二人だけ附けて上げませう」と云ふのである。

保は彼の小結社の故を以て、刺客が手を動したものは信ぜなかつた。しかし暫くは人の勸に従つて巡查の護衛を受けてゐた。五百は例の懷劍を放さず持つてゐて、保にも弾を填めた拳銃を備へさせた。進取社は準平が死んでから、何の活動をもなさず解散した。

保は京濱毎日新聞の寄書家になつた。毎日は島田三郎さんが主筆で、東京日日新聞の福地櫻痴と論争してゐたので、保は島田を助けて戦つた。主なる論題は主權論、普通選挙論等であつた。

普通選挙論では外山正一が福地に應援して、「毎日記者は盲目蛇におぢざるものだ」と云つた。これは島田のペンサムを普通選挙論者となしたるは無學のためで、ペンサムは實は制限選挙論者だと云ふのであつた。そこで保はペンサムの憲法論に就いて、普通選挙を可とする章句を鈔出し、「外山先生は盲目蛇におぢざるものだ」と云ふ鸚鵡返しを報復をした。此等の論戦の後、保は島田三郎、羽間守一、肥塚龍等に識られた。後に京濱毎日の社員になつたのは、此縁故があつたからである。

保は十二月九日に學校の休暇を以て東京に入つた。實は國府を去らんとする意があつたのである。

此年矢島優は札幌にあつて、九月十五日に瀧江氏に復籍し

の友武田準平が刺客に殺された。準平の家には母と妻と女一人とがゐた。女の婿秀三は東京帝國大學醫科大學の別科生になつてゐて、家にはゐなかつた。常に諸生が居り、僕が居つたが、皆新年に暇を乞うて歸つた。此日家人が寢に就いた後、浴室から火が起つた。唯一人暇を取らずにゐた女中が驚き醒めて、煙の厨を單むるを見、引窓を開きつつ人を呼んだ。浴室は庖厨の外に接してゐたのである。準平は女中の聲を聞いて、「なんだ、なんだ」と云ひつつ、手に行燈を提げて厨に出て來た。此時一人の引廻かっぱを被た男が暗中より起つて、準平に近づいた。準平は行燈を指して奥に入つた。引廻の男は尾いて入つた。準平は奥の廊下から、兩戸を蹴脱して庭に出た。引廻の男は又尾いて出た。準平は身に十四箇所の創を負つて、庭の檜の下に墜れた。檜は老木であつたが、前年の暮、十二月二十八日の夜、風の無いに折れた。準平はそれを見て、新年を過ぎてから辭に挽かせよう云つてゐたものである。家人は槍が識をなしたなど云つた。引廻の男は誰であつたか、又何故に準平を殺したか、終に知るこゝが出来なかつた。

保は報を得て、馳せて武田の家に向つた。警察署長佐藤某がある。郡長竹本元優がある。巡查數人がゐる。佐藤はかう云ふのである。「武田さんは進取社の事のために殺されなかつたかと思ひます。瀧江さんも御用心なさるが好い。當分

た。十月二十三日に其妻が歿した。年三十四であつた。

山田脩は此年一月工部技手に任ぜられ、日本橋電信局、東京府電信局等に勤務した。

その百四

抽賣後後の第二十五年は明治十六年である。保は前年の暮に東京に入つて、假に芝田町一丁目十二番地に住んだ。そして一面愛知縣廳に辭表を呈し、一面府下に職業を求めた。保は先づ職業を得て、次で免龍の報に接した。一月十一日には攻玉舎の教師となり、二十五日には慶應義塾の教師となつて、午前に慶應義塾に往き、午後には攻玉舎に往くことにした。攻玉舎は舎長が近藤眞琴、幹事が藤田潜で、生徒中には後に海軍少將に至つた秀島某、海軍大佐に至つた笠間直等があつた。慶應義塾は社頭が福澤諭吉、副社頭が小幡篤次郎、校長が濱野定四郎で、教師中に門野幾之進、鎌田榮吉等があり、生徒中に池邊吉太郎、門野重九郎、和田豊治、日比翁助、伊吹晋太等があつた。愛知縣中學校長を免する辭令は二月十四日を以て發せられた。保は芝島森町一番地に家を借りて、四月五日に國府から還つた母と水木とを迎へた。

勝久は相生町の家で長唄を教へてゐて、山田脩は其家から府廳電信局に通動してゐた。そこへ優が開拓使の職を辭して札幌から歸つたのが八月十日である。優は無妻になつてゐる

ので、勝久に説いて師匠を罷めさせ、専ら家政を掌らせた。八月中の事であつた。保は客を避けて京濱毎日新聞に寄する文を草せんがために、一週日程の間柳島の帆足謙三といふものの家に起臥してゐた。烏森町の家には水木を遣して母に侍せしめ、且優、脩、勝久の三人をして交る交る其安否を問はしめた。然るに或夜水木が帆足の家に來て、母が病氣と見えて何も食はなくなつたと告げた。

保が家に歸つて見ると、五百は床を敷かせて寝てゐた。「只今歸りました」と保は云つた。
「お歸りかえ」と云つて五百は微笑した。
「おつ母様、あなたは何も上らないさうですね。わたくしは暑くてたまりませんから、氷を食べます。」
「そんなら序にわたしのも取つておくれ。」五百は氷を食べた。

翌朝保が「わたくしは今朝は生卵にします」と云つた。
「さうかい。そんならわたしも食べて見よう。」五百は生卵を食べた。

午になつて保は云つた。「けふは久し振で、洗ひに水貝を取つて、少し酒を飲んで、それから飯にします。」
「そんならわたしも少し飲まう。」五百は洗ひで酒を飲んだ。其時のもう平日の如く起きて坐つてゐた。
晩になつて保は云つた。「どうも夕方になつてこんなに風

がちつとも無くては凄き切れません。これから汐湯に遣入つて、湖月に寄つて涼んで來ます。」
「そんならわたしも往くよ。」五百は遂に汐湯に入つて、湖月で飲食した。

五百は保が久しく歸らぬがために物を食はなくなつたのである。五百は女子中では棠を愛し、男子中では保を愛した。曩に弘前に留守をしてゐて、保を東京に遣つたのは、意を決した上の事である。それゆゑ能く年餘の久しきに堪へた。これに反して歸るべくして歸らざる保を日毎に待つことは、五百の難んずる所であつた。此時五百は六十八歳、保は二十七歳であつた。

その百五

此年十二月二日に優が本所相生町の家に歿した。優は職を罷める時から心臓に故障があつて、東京に遷つて清川支道の治療を受けてゐたが、屋内に靜坐してゐれば別に苦惱も無かつた。歿する日には朝から物を書いてゐて、午頃「ああ草臥れた」と云つて仰臥したが、それ切り起たなかつた。岡西氏徳の生んだ、抽齋の次男は此の如くにして世を去つたのである。優は四十九歳になつてゐた。子は無い。遺骸は感應寺に葬られた。

優は蕩子であつた。しかし後に身を吏籍に置いてからは、

微官に居つたにも拘らず、頗る材能を見した。優は情誼に厚かつた。親戚朋友の其恩惠を被つたことは甚だ多い。優は筆札を善くした。其書には小島成齋の風があつた。其他演劇の事は此人の最も精通する所であつた。新聞紙の劇評の如きは、森沢園と優とを開拓者の中に算すべきであらう。大正五年に珍書刊行會で公にした劇界珍話は飛蝶の名が署してあるが、優の未定稿である。

抽齋歿後の第二十六年は明治十七年である。二月十四日に五百が烏森の家に歿した。年六十九であつた。

五百は平生病むことが少かつた。抽齋歿後に一たび眼病に罹り、時時疝痛を患へた位のものである。特に明治九年遠曆の後には、殆無病の人となつてゐた。然るに前年の八月中、保が家に歸らぬを患へて絶食した頃から、稍心身違和の徴があつた。保等はこれがために憂慮した。さて新年に入つて見ると、五百の健康状態は好くなつた。保は二月九日の夜母が天鈿羅蕎麥を食べて巨燧に當り、史を談じて更の闌なるに至つたことを記憶してゐる。又翌十日にも午食に蕎麥を食へたことを記憶してゐる。午後三時頃五百は煙草を買ひに出た。二三年前からは、子等の諫を納れて、單身戸外に出ぬことにしてゐたが、當時の家から煙草店へ往く道は、烏森神社の境内であつて、車も通らぬゆゑ、煙草を買ひにだけは單身で往つた。保は自分の部屋で書を讀んで、これを知らずにゐた。暫

くして五百は煙草を買つて歸つて、保の背後に立つて話をし出した。保は且讀み且答へた。初てドイツ語を學ぶ頃で、讀んでゐる書はシエツフェルの文典であつた。保は母の氣息の促進してゐるのに氣が附いて、「おつ母様、大そうせかせかしますね」と云つた。
「ああ年のせいだらう、少し歩くと息が切れるのだよ。」五百はかう云つたが、矢張話を罷めずにあつた。
「おつ母様、どうかなすつたのですか。」保はかう云つて背後を顧みた。
五百は火鉢の前に坐つて、稍首を傾けてゐたが、保は其姿勢の常に異なるのに氣が附いて、急に起つて傍に往き、顔を覗いた。

五百の目は直視し、口角からは涎が流れてゐた。
保は「おつ母様、おつ母様」と呼んだ。
五百は「ああ」と一聲答へたが、人事を省せざるもの如くであつた。
保は床を敷いて母を寢させ、自ら醫師の許へ走つた。

その百六

澀江氏の住んでゐた烏森の家からは、存生堂と云ふ松山棟庵の出張所が最も近かつた。出張所には片倉某と云ふ醫師が

住んでゐた。保は存生堂に騙け付けて、片倉を連れて家に歸つた。存生堂からは松山の出張をも請ひに遣つた。

片倉が一應の手當をした所へ、松山が来た。松山は一診して云つた。「これは腦卒中で右半身不随になつてゐます。出血の部位が重要部で、其血量も多いから回復の望はありませぬ」と云つた。

しかし保は其言を信じたくなかつた。一時空を視てゐた母が今は人の面に注目する。人が去れば目送する。枕邊に置いてあるハンカチーフを左手に把つて疊む。保が傍に寄る毎に、左手で保の胸を撫でさへした。

保は更に印東支得をも呼んで見せた。しかし所見は松山と同じで、此上手當のしやうは無いと云つた。

五百は遂に十四日の午前七時に絶息した。

五百の晩年の生活は日日印刷したやうに同じであつた。祈禱の時を除く外は、朝五時に起きて掃除をし、手水を使い、佛壇を拜し、六時に朝食をする。次で新聞を讀み、暫く讀書する。それから午餐の支度をして、正午に午餐する。午後には裁縫し、四時に至つて女中を連れて家を出る。散歩がてら買物をするのである。魚菜をも大抵此時買ふ。夕餉は七時である。これを終れば、日記を附ける。次で又讀書する。倦めば保を呼んで棋を圍みなどすることもある。寢に就くのは十時である。

年ばかり立つうちに、パアレエの萬國史、カッケンボスの米國史、ホオセツト夫人の經濟論等をぼつぼつ讀むやうになつた。

五百の抽齋に嫁した時、婚を求めたのは抽齋であるが、此間には或秘密が句藏せられてゐたさうである。それは抽齋をして婚を求むるに至らしめたのは、阿部家の醫師石川貞白が勧めたので、石川貞白をして勧めしめたのは、五百自己であつたと云ふのである。

その百七

石川貞白は初の名を磯野勝五郎と云つた。何時の事であつたか、阿部家の武具係を勤めてゐた勝五郎の父は、同僚が主家の具足を質に入れたために、永の暇になつた。その時勝五郎は兼て醫術を伊澤榛軒に學んでゐたので、直ぐに氏名を改めて剃髮し、醫業を以て身を立てた。

貞白は澠江氏にも山内氏にも往來して、抽齋を識り五百を識つてゐた。弘化元年には五百の兄榮次郎が吉原の娼妓濱照の許に通つて、遂にこれを娶るに至つた。其時貞白は濱照が身受の相談相手となり、其假親となることをさへ諾したのである。當時兄の措置を喜ばなかつた五百が、平生青眼を以て貞白を見なかつたことは、想像するに餘がある。

或日五百は使を遣つて貞白を招いた。貞白はおそるおそる

隔日に入浴し、毎月曜日髪を洗つた。寺には毎月一度詣で、親と夫との忌日には別に詣でた。會計は抽齋の世にあつた時から自らこれに當つてゐて、死に迫るまで廢せなかつた。そして其節儉の用意には驚くべきものがあつた。

五百の晩年に讀んだ書には、新刊の歴史地理の類が多かつた。兵要日本地理小志は其文が簡潔で好いと云つて、傍に置いてゐた。

奇とすべきは、五百が六十歳を踰えてから英文を讀みはじめた事である。五百は頗る早く西洋の學術に注意した。其時期を考ふるに、抽齋が安積良齋の書を讀んで西洋の事を知つたよりも早かつた。五百はまだ里方にゐた時、或日兄榮次郎が鮮久に奇な事を言ふのを聞いた。「人間は夜逆さになつてゐる」云々と云つたのである。五百は怪んで、鮮久が去つた後に兄に問うて、初て地動説の講釋を聞いた。其後兄の机の上に氣海觀瀾と地理全志とのあるのを見て、取つて讀んだ。

抽齋に嫁した後、或日抽齋が「どうも天井に蠅が糞をして困る」と云つた。五百はこれを聞いて云つた。「でも人間も夜は蠅が天井に止まつたやうになつてゐるのだと申しますね」と云つた。抽齋は妻が地動説を知つてゐるのに驚いたさうである。

五百は漢譯和譯の洋説を讀んで懐ぬので、とうとう保にスベルリングを教へて貰ひ、程なくキルソンの讀本に移り、一日野屋の閨を跨いだ。兄の非行を幫けてゐるので、妹に諷められはせぬかと懼れたのである。

然るに貞白を迎へた五百には、いつもの元氣が無かつた。「貞白さん、けふはお頼申したい事があつて、あなたをお招いたしました」と云ふ、態度が例になく慇懃であつた。

何事かと問へば、澠江さんの奥さんの亡くなつた跡へ、自分を世話をしてはくれまいかと云ふ。貞白は事の意表に出でたのに驚いた。

是より先日野屋では五百に壻を取らうと云ふ議があつて、貞白はこれを與り知つてゐた。壻に擬せられてゐたのは、上野廣小路の呉服店伊藤松坂屋の通番頭で、年は三十三であつた。榮次郎は妹が自分達夫婦に懐ぬのを見て、妹に壻を取つて日野屋の店を譲り、自分は濱照を連れて隠居しようとしたのである。

壻に擬せられてゐる番頭某と五百となら、旁から見ても好配偶である。五百は二十九歳であるが、打見には二十四五しか見えなかつた。それに抽齋はもう四十歳に満ちてゐる。貞白は五百の意の在る所を解するに苦んだ。

そこで五百に問ひ質すと、五百は只學問のある夫が持たたいと答へた。其詞には道理がある。しかし貞白はまだ五百の意中を讀み盡すことが出来なかつた。

五百は貞白の氣色を見て、かう言ひ足した。「わたくしは

婿を取って此世帯を譲つて貰ひたくはありません。それよりか澧江さんの所へ往つて、あの方に日野屋の後見をして戴きたいと思ひます。」

貞白は膝を拍つた。「なる程なる程。さう云ふお考ですか。宜しい。一切わたくしが引き受けませう。」

貞白は實に五百の深慮遠謀に驚いた。五百の兄榮次郎も、姉安の夫宗右衛門も、聖堂に學んだ男である。若し五百が尋常の商人を夫としたら、五百の意志は山内氏にも長尾氏にも輕んぜられるであらう。これに反して五百が抽齋の妻となると、榮次郎も宗右衛門も五百の前に項を屈せなくてはならぬ。五百は里方のために謀つて、勞少くして功多きことを得るであらう。且兄の當然持つて居るべき身代を、妹として譲り受けると云ふことは望ましい事では無い。さうして置いては、兄の隠居が何事をしようかと、これに喉を容れることが出来ぬであらう。永久に兄を徳として、その爲すが儘に任せてゐなくてはなるまい。五百は此の如き地位に身を置くことを欲せぬのである。五百は潔く此家を去つて澧江氏に適き、しかも澧江氏の力を藉りて、此家の上に監督を加へようとするのである。

貞白は直に抽齋を訪うて五百の願を告げ、自分も詞を添へて抽齋を説き動した。五百の婚嫁は此の如くにして成就したのである。

て刻せられ、又經籍訪古志が清國使館に於て、刻せられて此等の事業は枳園がこれに當つてゐたから、其家は昔の如くに貧しくはなかつた。しかし此年一月に大藏省の職を罷めて、今は月給を受けぬことになつてゐるので、再び記者たらんと欲するのであつた。

保は枳園の求に應じて、新聞社に紹介し、二三篇の文章を社に交付して置いて、十三日に又社用を帯びて遠江國濱松に往つた。然るに用事は一箇所に於て果すことが出来なかつたので、犬居に往き、掛塚から汽船豊川丸に乗つて歸京の途に就いた。そして航海中に暴風に遭つて、下田に滞留し、十二月十六日にやうやう家に歸つた。

机上には又森氏の書信があつた。しかしこれは枳園の手書ではなくて、其計音であつた。

枳園は十二月六日に水谷町の家に致した。年は七十九であつた。枳園の終焉に當つて、伊澤徳さんは枕邊に侍してゐたさうである。印刷局は前年の功勞を忘れず、葬送の途次柩を官衙の前に駐めしめ、局員皆出でて禮拜した。枳園は音羽洞雲寺の先塋に葬られたが、此寺は大正二年八月に集鴨村池袋丸山千六百五番地に徙された。池袋停車場の西十町許で、府立師範學校の西北、祥雲寺の隣である。わたくしは洞雲寺の移轉地を尋ねて得ず、これを大槻文彦さんに問うて始めて知つた。此寺には枳園六世の祖からの墓が並んでゐる。わたくし

その百八

保は此年六月に京濱毎日新聞の編輯員になつた。これまでは其社と只寄稿者としての連繋のみを有してゐたのであつた。當時の社長は沼間守一、主筆は島田三郎、會計係は波多野傳三郎と云ふ顔觸で、編輯員には肥塚龍、青木匡、丸山名政、荒井泰治の人人がゐた。又矢野次郎、角田眞平、高梨哲四郎、大岡育造の人人は社友であつた。次で八月に保は攻玉社の教員を罷めた。九月一日には家を芝櫻川町十八番地に移した。

脩は此年十二月に工部技手を罷めた。

水木は此年山内氏を冒して芝新錢座町に一戸を構へた。

抽齋後の第二十七年は明治十八年である。保は新聞社の種種の用務を辨ずるために、屢旅行した。十月十日に旅から歸つて見ると、森枳園の五日に寄せた書が机上にあつた。面談したい事があるが、何時往つたら逢はれようかと云ふのである。保は十一日の朝枳園を訪うた。枳園は當時京橋區水谷町九番地に住んでゐて、家族は子婦大槻氏えふ、孫女くわりの二人であつた。嗣子養眞は父に先つて歿し、くわりの妹りうは既に人に嫁してゐたのである。

枳園は京濱毎日新聞の演劇欄を擔任しようと思つて、保に紹介を求めた。是より先谷榎齋の箋註倭名抄が印刷局に於

の參詣した時には、おくわうさんと大槻文彦さんとの名を記した新しい卒塔婆が立ててあつた。

枳園の後は其子養眞の長女おくわうさんが襲いだ。おくわうさんは女流畫家で、淺草永住町の上田政次郎と云ふ人の許に現存してゐる。おくわうさんの妹おりうさんは嘗て割剛氏某に嫁し、後未亡人となつて、淺草聖天横町の基督教會堂のコンシエルジュになつてゐた基督教徒である。

保は枳園の計を得た後、病のために新聞記者の業を罷め、遠江國周智郡大居村百四十九番地に轉籍した。保は病のため一時卒倒することがあつたので、松山棟庵が勸めて都會の地を去らしめたのである。

その百九

抽齋後の第二十八年は明治十九年である。保は靜岡安西一丁目南裏町十五番地に移り住んだ。私立靜岡英學校の教頭になつたからである。校主は藤波其助と云ふ人で、雇外國人にはカツシデエ夫妻、カツキング夫人等がゐた。當時の生徒で今名を知られてゐるものは山路愛山である。通稱は彌吉、淺草堀田原、後には鳥越に住んだ幕府の天文方山路氏の裔で、元治元年に生れた。此年二十三歳であつた。

十月十五日に保は舊幕臣靜岡縣士族佐野常三郎の女松を娶つた。戸籍名は一である。保は三十歳、松は明治二年正月十

六日生であるから十八歳であつた。

小野富毅の子道悦が、此年八月に虎列拉を病んで歿した。道悦は天保七年八月朔に生れた。經書を萩原樂亭に、筆札を平井東堂に、醫術を多紀荷庭と伊澤柏軒とに學んだ。父と共に仕へて表醫者奥通に至り、明治三年に弘前に於て藩學の小學教授に任ぜられ、同じ年に家督相續をした。小學教授とは素讀の師を謂ふのである。しかし保が助教になつてゐたのは藩學の儒學部で、道悦が小學教授になつてゐたのは其醫學部である。道悦も父祖に似て貨殖に長じてゐたが、終生主に守成を事としてゐた。然るに明治十一年の交、道悦が松田道夫の下にあつて、金澤裁判所の書記をしてゐると、其留守に妻が東京にあつて投機のために多く金を失つた。其後道悦は保が重野成齋に紹介して、修史局の雇員になつてゐたのである。子道太郎は時事新報社の文選をしてゐたが、父に先つて死んだ。

尺振入も亦此年十一月二十八日に歿した。年は四十八であつた。

抽齋歿後の第二十九年は明治二十年である。保は一月二十七日に静岡で發行してゐる東海鳴鐘新報の主筆になつた。英學校の職は故の如くである。鳴鐘新報は自由黨の機關で、前島豊太郎と云ふ人を社主としてゐた。五年前に禁獄三年、罰金九百圓に處せられて世の耳目を驚した人で、天保六年の生

その百十

抽齋歿後の第三十一年は明治二十二年である。一月八日に保は東京博文館の求に應じて、履歷書と寫眞並に文稿とを寄示した。これが保の此書肆のために書を著すに至つた端緒である。交渉は漸く歩を進めて、保は次第に鳴鐘新報社に遠かり、博文館に近いた。そして十二月廿七日に新報社に告ぐるに、年末を待つて主筆を辭することを以てした。然るに新報社に保に退社後續社説を草せんことを請うた。

脩の嫡男終吉が此年十二月一日に鷹匠町二丁目之菅江塾に生れた。即ち今の岡家家の菅江終吉さんである。抽齋歿後の第三十二年は明治二十三年である。保は三月三日に静岡から入京して、龜町有樂町二丁目二番地竹の舎に寄寓した。静岡を去るに臨んで、瀬江塾を閉ぢ、英學校、英華學校、文武館三校の教職を辭した。只鳴鐘新報の社説は東京

であるから、五十四歳になつてゐた。次で保は七月一日に静岡高等英華學校に聘せられ、九月十五日に又静岡文武館の囑託を受けて、英語を生徒に授けた。

抽齋歿後の第三十年は明治二十一年である。一月に東海鳴鐘新報は改題して東海の二字を除いた。同じ月に中江兆民が静岡を過ぎて保を訪うた。兆民は前年の暮に保安條例に依つて東京を逐はれ、大阪東雲新聞社の聘に應じて西下する途次、静岡には來たのである。六月三十日に保の長男三吉が生れた。八月十日に私立瀬江塾を鷹匠町二丁目に設ることを認可せられた。

脩は七月に東京から保の家に來て、静岡警察署内巡查講習所の英語教師を囑託せられ、次で保と共に瀬江塾を創設した。是より先脩は瀬江氏に復籍してゐた。

脩は瀬江塾の設けられた時妻さだを娶つた。静岡の人福島竹次郎の長女で、縣下駿河國安倍郡豊田村曲金の素封家海野壽作の娘分である。脩は三十五歳さだは明治二年八月九日生であるから二十歳であつた。

此年九月十五日に、保の許に匿名の書が届いた。日を期して決闘を求むる書である。其文體書風が悪作劇とも見えぬので、保は多少の心構をして其日を待つた。静岡の市中では此事を聞き傳へて種種の噂が立つた。さて其日になると、早朝に前田五門が保の家に來て助力をしようとして申し込んだ。五門

は本五左衛門と稱して、世祿五百七十二石を食み、下谷新橋脇に住んでゐた舊幕臣である。明治十五年に保が三河國國府を去つて入京しようとした時、五門は懇親會に於て保と相識になつた。初め函右日報社主で、今大務新聞顧問になつてゐる。保は五門と共に終日匿名の敵を待つたが、敵は遂に來なかつた。五門は後明治三十八年二月二十三日に歿した。天保六年の生であるから、年を享くること七十一であつた。

その百十

脩は此年五月二十九日に單身入京して、六月に飯田町補習學會及神田猿樂町有終學校の英語教師となつた。妻子は七月に至つて入京した。十二月に脩は鐵道廳第二部備員となつて、遠江國磐田郡袋井驛に勤務することとなり、又家を擧げて京を去つた。

明治二十四年には保は新居を神田仲猿樂町五番地に卜して、七月十七日に起工し、十月一日にこれを落した。脩は駿河國駿東郡佐野驛の驛長助役に轉じた。抽齋歿後の第三十二年である。

二十五年には保の次男繁次が二月十八日に生れ、九月二十三日に夭した。感應寺の墓に示教童子と刻してある。脩は七月に鐵道廳に解僱を請うて入京し、芝愛宕下町に住んで、京橋西紺屋町秀英舎の漢字校正係になつた。脩の次男行晴が生れた。此年は抽齋歿後の第三十四年である。二十六年には保の次女冬が十二月二十一日に生れた。脩が此年から俳句を作ること始めた。「皮足袋の四十に足を踏

込みぬ」の句がある。二十七年には脩の次男行晴が四月十三日に三歳にして歿した。陸が十二月に本所松井町三丁目四番地福島某の地所に新築した。即ち今の居宅である。長唄の師匠としての此人の経歴は、一たび優のために頓挫したが、其後は繁榮して今日に至つてゐる。猶下方に詳記するであらう。二十八年には保の三男純吉が七月十三日に生れた。二十九年には脩が一月に秀英舎市ヶ谷工場の歐文校正係に轉じて、牛込二十騎町に移つた。此月十二日に脩の三男忠三さんが生れた。三十年には保が九月に根本羽嶽の門に入つて易を問ふことを始めた。長井金風さんの言に據るに、羽嶽の師は野上陳令、陳令の師は山本北山ださうである。栗本鋤雲が三月六日に七十六歳で歿した。海保漁村の妾が歿した。三十一年には保が八月三十日に羽嶽の義道館の講師になり、十二月十二日に其評議員になつた。脩の長女花が十二月に生れた。島田篁村が八月二十七日に六十一歳で歿した。抽齋歿後の第三十五年乃至第三十九年である。

その百十一

わたくしは此に前記を續いで抽齋歿後四十一年以下の事を擧げる。明治三十三年五月二日には保の三女乙女さんが生れた。三十四年には脩が吟月と號した。俳諧の師二世桂の本琴絲女の授くる所の號である。山内水木が一月二十六日に歿

した。年四十九であつた。福澤諭吉が二月三日に六十八歳で歿した。博文館主大橋佐平が十一月三日に六十七歳で歿した。三十五年には脩が十月に秀英舎を退いて京橋宗十郎町の國文社に入り、校正係になつた。脩の四男末男さんが十二月五日に生れた。三十六年には脩が九月に静岡に往つて、安西一丁目南裏と瀬江塾を再興した。縣立静岡中學校長川田正淑の勸に従つて、中學生のために温習の便宜を謀つたのである。脩の長女花が三月十五日に七歳で歿した。三十七年には保が五月十五日に神田三崎町一番地に移つた。三十八年には保が七月十三日に荏原郡品川町南品川百五十九番地に移つた。脩が十二月に静岡の瀬江塾を閉ぢた。川田が宮城縣第一中學校長に轉じて、静岡中學校の規則が變更せられ、瀬江塾は存立の必要なきに至つたのである。伊澤柏軒の嗣子磐が十一月二十四日に歿した。鐵三郎が徳安と改め、維新後に又磐と改めたのである。磐の嗣子信治さんは今赤坂氷川町の姉婿清水夏雲さんの許にゐる。三十九年には脩が入京して小石川久堅町博文館印刷所の校正係になつた。根本羽嶽が十月三日に八十五歳で歿した。四十年には保の四女紅葉が十月二十二日に生れて、二十八日に夭した。これが抽齋歿後の第四十八年に至るまでの事略である。

かし五日までは博文館印刷所の業を廢せなかつた。六日に至つて咳嗽甚しく、發熱して就寐し、終に加答兒性肺炎のため命を損した。嗣子終吉さんは今の下瀬谷の家に移つた。わたくしは脩の句稿を左に鈔出する。類句を避けて精選するが如きは、其道に専ならざるわたくしの能くする所では無い。讀者の指隨を得ば幸であらう。

その百十二

山畑や霞の上の銀づかひ
鷹塚に菜の花咲ける彌生哉
海苔の香や麥染染むる縁の先
切胤のつひに流るる小川かな
陽炎と共にちらつく小鮎哉
いつ見ても初物らしき白魚かな
牡丹切て心さびしき夕かな
大西瓜眞つ二つにぞ切られける
山寺は星より高き燈籠かな
稻妻の跡に手ぬるき星の飛ぶ
秋は皆物の淡きに唐介子
手も出さで机に向ふ寒さ哉
物賣の皆頭巾著て出る夜哉
凧や土器乾く石燈籠
雪の日や鶏の出で来る炭俵
明治四十四年には保の三男純吉が十七歳で八月十一日に死

んだ。大正二年には保が七月十二日に麻布西町十五番地に、八月二十八日に同區本村町八番地に移つた。三年には九月九日に今の牛込船河原町の家に移つた。四年には保の次女多が十月十二日に二十三歳で歿した。これが抽齋歿後の第五十二年から第五十六年に至る事略である。

抽齋の後裔にして今に存してゐるものは、上記の如く、先づ指を牛込の瀬江氏に屈せなくてはならない。主人の保さんは抽齋の第七子で、繼嗣となつたものである。經を漁村、竹運の海保氏父子、島田篁村、兼松石居、根本羽嶽に、漢醫方を多紀雲從に受け、師範學校に於て教育家として養成せられ、共立學舎、慶應義塾に於て英語を研究し、濱松、静岡にあつては或は校長となり、或は教頭となり旁新聞記者として政治を論じた。しかし最も大いに精力を費したものは、書肆博文館のためにする著作翻譯で、その刊行する所の書か、通計約百五十部の多きに至つてゐる。其書は隨時世人を提擧した功はあるにしても、概皆時尙を追ふ書估の誅求に憑じて筆を走らせたものである。保さんの精力は徒費せられたと謂はざることを得ない。そして保さんは自らこれを知つてゐる。畢竟文士と書估との關係はミユチユアリズムであるべきのに、實はバラジチスムになつてゐる。保さんは生物學上の亭

主役をしたのである。

保さんの作らんと欲する書は、今猶計畫として保さんの意中にある。曰く日本私刑史、曰く支那刑法史、曰く經子一家言、曰く周易一家言、曰く讀書五十年、この五部の書が即ち是れである。就中讀書五十年の如きは、實に計畫として存在するのみでは無い。其原本が既に堆を成してゐる。これは一種のビブリオグラフィイで、保さんの博渉の一面を窺ふに足るものである。著者の志す所は嚴君の經籍訪古志を廓大して、古より今に及ぼし、東より西に及ぼすにあると謂つても、或は不可なることが無からう。保さんは果して能く其志を成すであらうか。世間は果して能く保さんをして其志を成さしむるであらうか。

保さんは今年大正五年に六十歳、妻佐野氏お松さんは四十八歳、女乙女さんは十七歳である。乙女さんは明治四十一年以降、鶴木清方に就いて書を學び、又大正三年以還跡見女學校の生徒になつてゐる。

第二には本所の澤江氏がある。女主人は神齋の四女陸で、長唄の師匠杵屋勝久さんが是である。既に記したる如く、大正五年には七十歳になつた。

陸が始めて長唄の手ほどきをして貰つた師匠は日本橋區馬喰町の杵屋勝三郎で、馬場の鬼勝と稱せられた名人である。これは嘉永三年陸が僅に四歳になつた時だと云ふから、まだ小

砂糖店を開いた後に、長唄の師匠として自立するに至つたのも、同じ稲葉氏が援助したのである。

本所には二百石取以上の旗本で、稲葉氏を稱したものが四軒ばかりあつたから、親しく其子孫に就いて質さなくては、どの家かわからぬが、陸を庇護した稲葉氏には、當時四十何歳の未亡人の下に、一旦人に嫁して歸つた家附の女で四十歳の一人、松さん、駒さんの兄弟があつた。此松さんは今千秋と號して書家になつてゐるさうである。

陸が小家に移つた當座、稲葉氏の母と娘とは、湯屋に往くにも陸をさそつて往き、母が背中を洗つて遣れば、娘が手を洗つて遣ると云ふやうにした。髪をも二人で毎日種種の鬘に結つて遣つた。

さて稲葉の未亡人の云ふには、若いものが坐食してゐては悪い。心安い砂糖問屋があるから、砂糖店を出したが好からう。醫者の家に生れて陸は秤目を知つてゐるから丁度好いと云ふことであつた。砂糖店は開かれた。そして繁昌した。品も好く、秤も好いと評判せられて、客は遠方から來た。汁粉屋が買ひに來る。養繻屋が買ひに來る。小松川もたりからわざわざ來るものさへあつた。

或日貴婦人が女中大勢を連れて店に來た。そして冰糖糖、金米糖などを買つて、陸に言つた。「士族の女で健氣にも商賣を始めたものがあると云ふ噂を聞いて、わたしはわざわざ

柳町の大工の棟梁新八の家へ里子に遣られてゐて、そこから稽古に通つたことであらう。

母五百も聲が好かつたが、陸はそれに似て美聲だと云つて、勝三郎が褒めた。節も好く記えた。三味線は「宵は待ち」を弾く時、早く既に自ら調子を合せることが出來、めりや十字黒髪位に至ると、師匠に連れられて、所所の大波に住つた。

勝三郎は陸を教へるに、特別に骨を折つた。月六齋と目を期して、勝三郎が喜代藏、辰藏二人の弟子を伴つて、お玉が池の澤江の邸に向くと、其日には陸も里親の許から歸つて待ち受けてゐた。陸の波が畢ると、二番位演奏があつて、其上で酒飯が出た。料理は必ず青柳から爲出した。嘉永四年に澤江氏が本所裏所町に移つてからも、此出稽古は繼續せられた。

その百十三

澤江氏が一旦弘前に徙つて、其後東京と改まつた江戸に再び還つた時、陸は本所練町に砂糖店を開いた。これは初め商賣を初めようと思つて土著したのではなく、唯稲葉と云ふ家の門の片隅に空地があつたので、そこへ小家を建てて住んだのであつた。さて此家に住んでから、稲葉氏と親しく交ることになり、其勸奨に由つて砂糖店をば開いたのである。又

買ひに來ました。どうぞ中途で罷めないで、辛抱をし徹して、人の手本になつて下さい」と云つた。後に聞けば、藤堂家の夫人ださうであつた。藤堂家の下屋敷は兩國橋詰にあつて、當時の主人は高嶽、夫人は一族高嶽の女であつた筈である。

或日又五百と保とが寄席に往つた。心打は圓朝であつたが、話の本題に入る前に、かう云ふ事を言つた。「此頃練町では、御大家のお嬢様がお砂糖屋をお始になつて、殊の外御繁昌だと申すことでございます。時節柄結構なお思立で、誰もさうありたい事と存じます」と云つた。話の中に所謂心學を説いた圓朝の面目が窺はれる。五百は聽いて感慨に堪へなかつたさうである。

此砂糖店は幸か不幸か、繁昌の最中に閉ぢられて、陸は世間の同情に酬ふことを得なかつた。家族關係の上に除き難い障礙が生じたためである。

商業を廢して間暇を得た陸の許へ、稲葉の未亡人は話に來て、談は偶長唄の事に及んだ。長唄は未亡人が曾て稽古したことがある。陸には飯よりも好な道である。一しよに波つて見ようではないかと云ふことになつた。未だ一段を終らぬに、世話好の未亡人は驚歎しつつかう云つた。「あなたは素人ぢやないではありませんか。是非師匠におなりなさい。わたしが一番に弟子入をします。」

その百十四

稻葉の未亡人の詞を聞いて、陸の意は稍動いた。藝人になると云ふことを憚つてはゐるが、どうにかして生計を営むものとする、自分の好む藝を以てしたのであつた。陸は母五百の許に往つて相談した。五百は思の外容易く許した。陸は師匠岸屋勝三郎の勝の字を請ひ受けて勝久と稱し、公に稟して鑑札を下付せられた。其時本所龜澤町左官庄兵衛の店に、似合はしい一戸が明いてゐたので、勝久はそれを借りて看板を懸けた。二十七歳になつた明治六年の事である。

此龜澤町の家の隣には、吉野と云ふ象牙職の老夫婦が住んでゐた。主人は町内の若い衆頭で、世馴れた、俠氣のある人であつたから、女房と共に勝久の身の上を引き受けて世話をした。「まだ町住ひの事は御存じないのだから、失禮ながらわたし達夫婦でお指圖をいたして上げます」と云つたのである。夫婦は朝表口の揚戸を上げてくれる。晩に又卸してくれる。何から何まで面倒を見てくれたのである。

吉野の家には二人の女があつて、姉をふくと云ひ、妹をかねと云つた。老夫婦は即時に此姉妹を入門させた。おかねさんは今日本橋大阪町十三番地に住む水野某の妻で、子供をも勝久の弟子にしてゐる。吉野は勝久の事を町住ひに馴れぬと云つた。勝久は嘗て砂

糖店を出してゐたことはあつても、今所謂愛敬商賣の師匠となつて見ると、自分の物馴れぬことの甚しきに氣附かすにはあられなかつた。これまで自分を「お陸さん」と呼んだ人が、忽ち「お師匠さん」と呼ぶ。それを聞く毎にぎくりとして、理性は呼ぶ人の詞の妥當なるを認めながら、感情は其人を意地悪のやうに思ふ。砂糖屋でゐた頃も、八百屋、肴屋にお前と呼ぶことを遠慮したが、當時はまだ其辭を紆曲にして直ちに相手を斥して呼ぶことを避けてゐた。今はあらゆる職業の人に交つて、誰をも檀那と云ひ、お上さんと云はなくてはならない。それがどうも口に出憎いのであつた。或時吉野の主人が「好く氣を付けて、人に高ぶるなんぞと云はれないやうになさいよ」と忠告すると、勝久は急所を刺されたやうに感じたさうである。

しかし勝久の業は豫期したよりも繁昌した。未だ幾くもあらぬに、弟子の数は八十人を踰えた。それに上流の名家に招かれることが漸く多く、後には殆毎日のやうに、晝の稽古を終つてから、諸方の邸へ車を馳せることになつた。

最も數往つたのは程近い藤堂家である。此邸では家族の人の誕生日、其外種種の祝日に、必ず勝久を呼ぶことになつてゐる。藤堂家に次いで、細川、津輕、稻葉、前田、伊達、牧野、小笠原、黒田、本多の諸家で、勝久は鼻眞になつてゐる。

稻葉家へは師匠勝三郎が存命中に初て連れて往つた。其邸は青山だと云ふから、豊後國臼杵の稻葉家で、當時の主公久通に麻布土器町の下屋敷へ招かれたのであらう。連中は男女交りであつた。立三味線は勝三郎、脇勝秀、立唄は坂田仙八、脇勝久で、皆稻葉家の名指であつた。仙八は亡人、今の勝五郎前名勝四郎の父である。番組は鶴龜、初時雨、喜撰で、末に好として勝三郎と仙八とで狸囃を演じた。

その百十五

細川家に勝久の招かれたのは、相弟子勝秀が紹介したのである。勝秀は曾て肥後國熊本までも此家の人人に伴はれて往つたことがあるさうである。勝久の初て招かれたのは今戸の別邸で、當日は立三味線が勝秀、外に脇二人、立唄が勝久、外に脇唄二人、其他鳴物連中で、悉く女藝人であつた。番組は勸進帳、吉原雀、英執著獅子で、末に好として石橋を演じた。

細川家の當主は慶順であつたらう。勝久が部屋に下つてゐると、そこへ津輕侯が来て、「瀬江の女の陸がゐると云ふことだから逢ひに来たよ」と云つた。連の女等は皆驚いた。津輕承昭は主人慶順の弟であるから、其日の客になつて來てゐたのであらう。

長唄が畢つてから、主客打交つての能があつて、女藝人等は陪觀を許された。津輕侯は船辨慶を舞つた。勝久を細川家に介致した勝秀は、今は亡人である。

津輕家へは細川別邸で主公に謁見したのが縁となつて、瀬江陸として屢召されることになつた。いつも獨往つて弾きもし、歌ひもすることになつてゐる。老女歌野、お部屋おたつの人人が馴染になつて、陸を引き廻してくれるのである。

稲葉家へは師匠勝三郎が存命中に初て連れて往つた。其邸は青山だと云ふから、豊後國臼杵の稻葉家で、當時の主公久通に麻布土器町の下屋敷へ招かれたのであらう。連中は男女交りであつた。立三味線は勝三郎、脇勝秀、立唄は坂田仙八、脇勝久で、皆稻葉家の名指であつた。仙八は亡人、今の勝五郎前名勝四郎の父である。番組は鶴龜、初時雨、喜撰で、末に好として勝三郎と仙八とで狸囃を演じた。

演奏が畢つてから、勝三郎等は花園を観ることを許された。園はただ廣く珍奇な花卉が多かつた。園を過ぎて菜園に入ると、其傍に竹藪があつて、筍が糞り生じてゐた。主公が藝人等に、「お前達が自分で抜いただけは、何本でも持つて歸つて好いから、勝手に抜け」と云つた。男女の藝人が争つて抜いた。中には、筍が抽けると共に、屏餅を擲くものもあつた。主公はこれを見て興に入つた。筍の周囲の土は豫め掘り起して、鬆めた後に又掻き寄せてあつたさうである。それでも藝人等は容易く抜くことを得なかつた。家苞には筍を多く賜はつた。抜かぬ人も其數には洩れなかつた。

前田家、伊達家、牧野家、小笠原家、黒田家、本多家へも次第に呼ばれることになつた。初て往つた頃、前田家が宰相慶寧、伊達家が龜三郎、牧野家が金丸、小笠原家が豊千代丸、黒田家が少將慶賢、本多家が主膳正康稷の時であつたらう。しかしわたくしは維新後に於る華賣家世の事に精しく

ないから、若し誤謬があつたら正して貰ひたい。
勝久は看板を懸けてから四年目、明治十年四月三日に、兩國中村樓で名弘の大波を催した。波の場間口の天幕は深川五本松門弟中、後幕は魚河岸間屋今和と縁町門弟中、水引は牧野家であつた。其外家元門弟中より紅白縮緬の天幕、杵勝名取男女中より縹包絹の後幕、勝久門下名取女中より中形縮緬の大額、親密連女名取より茶籠子丸帯の掛地、木場轟真中より白縮緬の水引が贈られた。役者はおもひおもひの意匠を凝したびらを寄せた。縁故のある華族の諸家は皆金品を遣つて、中には、女を遣したのもあつた。勝久が三十一歳の時の事である。

その百十六

勝久が本所松井町福島某の地所に、今の居宅を構へた時は、師匠勝三郎が喜んで歌を詠じて自ら書し、表装して貼つた。勝久は此歌に本づいて歌曲松の榮を作り、兩國井生村樓で新曲開きをした。勝三郎を始として、杵屋一派の名流が集まつた。曲は奉書摺の本に爲立てて客に頒たれた。緒餘に四つの海を著した抽齋が好尚の一面は、圖らずも其女陸に藉つて此の如き發展を遂げたのである。これは明治二十七年十二月で、勝久が四十八歳の時であつた。
勝三郎は尋で明治二十九年二月五日に歿した。年は七十七

遂に萬歳を生じて離縁せられた。

是に於て二世勝三郎の長男金次郎は、父の遺業を繼がなくてはならぬことになつた。金次郎は親戚と父の門人等々に強要せられて退學し、好まぬ三味線を手を取つて、杵勝分派諸老輩の鞭策の下に、いやいやながら腕を磨いた。

金次郎は遂に三世勝三郎となつた。初め此勝三郎は學校教育が果をなし、目に丁字なき儕輩の忌む所となつて、杵勝同窓會幹事の一人たる勝久の如きは、前途のために手に汗を握ること數であつたが、固より些の學問が技藝を妨げる筈はないので、次第に家元たる聲價も定まり、羽翼も成つた。

明治三十六年勝久が五十七歳になつた時の事である。三世勝三郎が鎌倉に病臥してゐるので、勝久は勝秀、勝きみと共に、二月二十五日に見舞ひに往つた。儼居は海光山長谷寺の座敷である。勝三郎は病が兎角佳候を呈せなかつたが、當時驗杖に扶けられて寺門を出で、勝久等に近傍の故蹟を見せることが出来た。勝久は遊覽の記を作つて、病牀の耐草にもと云つて遣つた。雜誌道楽世界に、杵屋勝久は學者だと書いたのは、此頃の事である。三月三日に勝三郎は病の未だ癒えざるに東京に還つた。

その百十七

三世勝三郎の病は東京に還つてからも癒えなかつた。當時

であつた。法蓋を花菱院照譽東成信士と云ふ。東成は其諱である。墓は淺草藏前西福寺内眞行院にある。原ぬるに長唄杵屋の一派は俳優中村勘五郎から出て、其宗家は世喜三郎又六左衛門と稱し、現に日本橋坂本町十八番地にあつて名跡を傳へてゐる。所謂植木店の家元である。三世喜三郎の三男杵屋六三郎が分派をなし、其門に初代佐吉があり、初代佐吉の門に和吉があり、和吉の後を初代勝五郎が襲ぎ、初代勝五郎の後を初代勝三郎が襲いだ。此勝三郎は終生名を更めずにあつて、勝五郎の稱は門人をして襲がしめた。次が二世勝三郎東成で、小字を小三郎と云つた。即ち勝久の師匠である。

二世勝三郎にけ子女各一人があつて、姉をふさと云ひ、弟を金次郎と云つた。金次郎は「己は藝人なんぞにはならない」と云つて、學校にばかり通つてゐた。二世勝三郎は終に臨んで子等に遺言し、勝久を小母と呼んで、後事を相談するが好いと云つたさうである。

二世勝三郎の馬喰町の家け、長女ふさに婿を迎へて繼がせることになつた。婿は新宿の岩松と云ふもので、養父の小字小三郎を襲ぎ、中村樓で名弘の會を催した。未だ幾くならぬに、小三郎は養父の小字を名告ることを屑しとせず、三世勝三郎たらんことを欲した。しかし先代勝三郎の門人は杵勝同窓會を組織してゐて、技藝の小三郎より勝れてゐるものが多

勝三郎は東京馬喰町であつたので、高足弟子たる淺草森田町の勝四郎をして主として其事に當らしめた。勝四郎は即ち今の勝五郎である。然るに勝三郎は東京座に於ける勝四郎の勤振に懐かなかつた。そして病のために氣短になつてゐる勝三郎と勝四郎との間に、次第に縋ひ難い齟齬を生じた。

五月に至つて勝三郎は房州へ轉地することを思ひ立たが、出發に臨んで自分の去つた後に於ける杵勝分派の前途を氣遣つた。そして分派の永續を保證すべき男女名取の盟約書を作らせようとした。勝久の世話をしてゐる女名取の間には、これをを作るに何の故障もなかつた。しかし勝四郎を領袖としてゐる男名取等は、先づ師匠の怒が解けて、師匠と勝四郎との交は昔の如き和熟を見るに至るまでは、盟約書に調印するとは出来ぬと云つた。此時勝久は病める師匠の心を安んずるには、男女名取總員の盟約を完成するに若くはないと思つて、師家と男名取等との間に往來して調停に努力した。

しかし勝三郎は遂に釋然たるに至らなかつた。六月十六日に勝久が馬喰町の家元を訪うて、重ねて勝四郎のために請ふ所があつたとき、勝三郎は涙を流して怒り、「小母さんほどこれまで此病人に忤ふ氣ですか」と云つた。勝久は此に至つて復奈何ともすることが出来なかつた。

六月二十五日の朝、勝三郎は靈岸島から舟に乗つて房州へ立つた。妻みつが同行した。即ち杵勝分派のものが女師匠と

呼んでゐる人である。見送の人人は勝三郎の姉ふさ、いそ、
てる、勝久、勝ふみ、藤二郎、それに師匠の家にある兼さん
と云ふ男、上總屋の親方、以上八人であつた。勝三郎の姉ふ
さは後に、日本橋濱町一丁目二世勝三郎の建てた隠居所に
住んで、獨身で暮してゐるので、杵勝分派に濱町の師匠と呼
ばれてゐる人である。

此棧橋の別には何となく落莫の感があつた。病み衰へた勝
三郎は終に男名取總員の和熱を見るに及ばずして東京を去つ
た。そしてそれが再び歸らぬ旅路であつた。

勝久は家元を送つて四日の後に病に臥した。七月八日には
女師匠が房州から歸つて、勝久の病を問うた。十二日に勝久
は馬喰町と濱町とへ留守見舞の使を遣つて勝三郎の房州から
鎌倉へ遷つたことを聞いた。

九月十一日は小雨の降る日であつた。鎌倉から勝三郎の病
が革だと報じて来た。勝久は腰部の拘攣のために、寢がへり
だに出来ず、便所に往くにも、人に抱かれて往つてゐた。そ
こへ此報が来たので、勝久はしばらく戰慄して已まなかつ
た。しかし勝久は自ら勵まして常に親しくしてゐる勝ふみを
呼びに遣つた。介抱旁同行することを求めたのであつた。二
人は新橋から汽車に乗つて、鎌倉へ往つた。勝三郎は此夕に
世を去つた。年は三十八であつた。法座を蓮生院齋譽智才信
士と云ふ。

その百十八

九月十二日に勝久は三世勝三郎の柩を茶毗所まで見送つ
て、そこから車を停車場に驅り、夜東京に還つた。勝三郎が
歿した後に、杵勝分派の團結を維持して行くには、一刻も早
く除かなくてはならぬ障礙がある。それは勝三郎の生前に、
勝久等が百方調停したにも拘らず、宥されずにしまつた高足
弟子勝四郎の勘氣である。勝久は鎌倉にある間も、東京へ歸
る途上でも、須臾もこれを忘れることが出来なかつた。

十三日の味爽に、勝久は森田町の勝四郎の家へ手紙を遣つ
た。「定めし御聞込の事は存じ候へども、杵屋御家元様は
御死去被遊候。夫に付私共は今日午後四時御同所に相寄候事
に御座候。此際御前様御心底は奈何に候哉。私存じ候には、
同刻御自身の思召にて馬喰町へ御出被成候方宜敷候様存じ
候。田原町へ一寸御立寄被成候て御出被成度存じ候。さ候は
ば及ばずながら奈何様にも御都合宜敷様可致候。先は右申入
候。」田原町とは勝四郎に亞く二番弟子勝治郎の家を謂つた
のである。勝治郎は昨今病のために引き籠つて、杵勝同窓會
をも脱けてゐる。

勝四郎の返事には、好意は有難いが、何分これまでの行懸
上單身では出向かれぬと云つて来た。そこで十造、勝助の二
人が森田町へ迎へに往くことになつた。

馬喰町の家では、此日通夜のために、亡人の親戚を始とし
て、男女の名取が皆集まつてゐた。勝久は濱町の師匠と女師
匠とに請ふに、亡人に代つて勝四郎を免すことを以てした。
濱町の師匠は亡人の姉ふさ、女師匠は三十六歳で未亡人とな
つた亡人の妻みつである。二人の女は許諾した。そこへ勝四
郎は出向いて来て、勝三郎の木位を拜し、終香を手向けた。
勝四郎は木位の前を退いて男女の名取に挨拶した。葛藤は此
に全く解けた。これが明治三十六年勝久が五十七歳の時の事
で、勝久は終始病を力めて此調停の衝に當つたのである。勝
久が病の本復したのは此年の十二月である。

杵勝同窓會はこれより後談垂の根を絶つて、男女名取中か
らは名を勝五郎と更めた勝四郎が推されて幹事となり、女名
取中からは勝久が推されて同じく幹事となつてゐる。勝四郎
の名は今飯田町住の五番弟子が襲いでゐる。一番弟子勝四郎
改勝五郎、二番勝治郎、三番勝松改勝右衛門、四番勝吉改勝
太郎、五番勝四郎、六番勝之助改和吉である。

二世勝三郎の花菱院が三年忌には、男女名取が梵鐘一箇を
西福寺に寄附した。七年忌には金百圓、幕一帳男女名取中、
葡萄鼠縮緬女名取中、大額並黒絹夢想拾羽織勝久門弟中、
十三年忌が三世の七年忌を繰り上げて併せ修せられたときは
は、木魚一對、嘉前花立並香立男女名取中、十七年忌には
蓮華形皿十三枚男女名取中の寄附があつた。又三世勝三郎の

その百十九

蓮生院が三年忌には經箱六箇經本人男女名取中、十三年忌に
は袈裟一領家元、天蓋一箇男女名取中の寄附があつた。此等
の文字は、人が或はわたくしの何故にこれを條記して煩を厭
はざるかを怪むであらう。しかしわたくしは勝久の手記を閱
して、所謂藝人の師に事ふることの厚きに驚いた。そして此
善行を埋没するに忍びなかつた。若しわたくしが虚禮に瞞過
せられたと云ふ人があつたらわたくしは敢て問ひたい。さう
云ふ人は果して一切の善行の動機を看破することを得るだ
らうかと。

勝久の人に長唄を教ふること、今に迄るまで四十四年であ
る。此間に勝久は名取の弟子僅に七人を得てゐる。明治三十
二年には倉田ふでが杵屋久羅となつた。三十四年には遠藤さ
とが杵屋勝久美となつた。四十三年には福原さくが杵屋勝久
女となり、山口はるが杵屋勝久利となつた。大正二年には加
藤たつが杵屋勝久満となつた。三年には細井のりが杵屋勝久
代となつた。五年には伊藤あいが杵屋勝久纏となつた。此外
に大正四年に名取になつた山田政次郎の杵屋勝丸もある。然
しこれは男の事ゆゑ、勝久の弟子ではあるが、名は家元から
取らせた。今の教育は都て官公私立の學校に於て行ふことに
なつてゐて、勢集團教育の法に従はざることを得ない。そし

て其弊を極ふには、只個人教育の法を參取する一途があるのみである。是に於て世には往往昔の儒者の家塾を夢みるものがある。然るに所謂藝人に名取の制があつて、今猶牢守せられてゐることに想ひ及ぶものが鮮い。尋常許取の藩は、藝人が或は人の誦を辭することを得ざる所であらう。しかし夫の名取に至つては、その背で輕輕しく假借せざる所であるらしい。若しさうでないものなら、四十四年の久しい間に、賀を勝久に委ねた幾百人の中で、能く名取の班に列するものが獨り七八人のみではなかつたであらう。

勝久の陸は宮に長唄を稽古したばかりではなく、幼くして琴を山勢氏に學び、誦を藤間ふぢに學んだ。陸の誦に使ふ衣裳小道具は、澀江の家では十二分に取り揃へてあつたので、陸と共に誦る子が手廻り兼ねる家の子であると、澀江氏の方で其相手の子の支度をもして遣つて誦らせた。陸は善く誦つたが、其嗜好が長唄に傾いてゐたので、誦は中途で罷められた。

陸は遠州流の活花を學んだ。碁象棋をも母五百に學んだ。五百の碁は二段であつた。五百は曾て薙刀をさへ陸に教へたことがある。

陸の讀書筆札の事は既に記したが、稍長するに及んでは、五百が近衛豫樂院の手本を授けて臨書せしめたさうである。陸の裁縫は五百が教へた。陸が人と成つてから後は、澀江

の家では、重ねものから不斷著まで、殆外へ出して裁縫させたことがない。五百は常に、「爲立は陸に限る。爲立屋の爲事は悪い」と云つてゐた。張物も五百が尺を手にして指圖し、布目の毫も歪まぬやうに陸に張らせた。「善く張つた切は新しい反物を裁つたやうでなくてはならない」とは五百の恒の詞であつた。

髪を剃り髪を結ぶことにも、陸は早く熟練した。剃ることは尼妙了が「お陸様が剃つて下さるなら、頭が缺だらけになつても好い」と云つて頭を委せてゐたので馴れた。結ぶことは、お牧婆あやの髪を、前髪に張の無い、小さい祖母子に結つたのが手始で後には母の髪、妹の髪、女中達の髪までも結び、我髪は固より自ら結つた。唯餘所行の我髪だけ母の手を煩はした。弘前に従つた時、淺越玄陸、前田善二郎の妻、松本甲子蔵の妹などは、菓子折を持つて来て、陸に髪を結つて貰つた。陸は禮物を卻けて結つて遣り、流行の飾をさへ贈つた。

陸は生得おとなしい子で、泣かず怒らず、饒舌することもなかつた。しかし言動が快活なので、馴れ者として家人にも他人にも喜ばれたさうである。その人と成つた後に、志操が堅固で、義務心に富んでゐることは、長唄の師匠としての經歷に徴して知ることが出来る。

牛込の保さんの家と、其保さんを、父抽齋の繼嗣たる故を

以て、終始「兄いさん」と呼んでゐる本所の勝久さんの家の外の外に、現に東京には第三の澀江氏がある。即ち下澀谷の澀江氏である。

下澀谷の家は脩の子終吉さんを當主としてゐる。終吉は圖案家で、大正三年に津田青楓さんの門人になつた。大正五年に二十八歳である。終吉には二人の弟がある。前年に明治薬學校の業を卒へた忠三さんが二十一歳、末男さんが十五歳である。此三人の生母福島氏おさださんは靜岡にゐる。牛込のお松さんと同齡で、四十八歳である。

静

人物

静。伊豫前司義経の妾

紅の髪にて垂髪を上ぐ。白の練緯の小袖。紅綾の單。色々の菊を織りたる秋重の衣に、龍騰重の小袿を着く。壱折りたる體。赤地錦に紫糸の紐附きたる懸守。襪。市女笠を持つ。笠に菜の垂絹。

磯ノ禪師。静が母。

薄き垂髪を白き平鬘にて上ぐ。白き小袖に香色の單。青紅葉の小袿。壱折、水晶の珠數。市女笠に薄青の垂絹。安達新三郎清恒。

一寸斑の烏帽子掛したる折烏帽子。片身替の小袖に、縹地に秋野を摺りたる直垂上下。赤木柄に胴金入れたる刀。紺地に白く月を出したる扇。關。

難色三人。

折烏帽子。裾に白く引兩筋を附けたる直垂。燦袋を附けたる黒造の刀。

漁師數人。

折烏帽子、竹笠など。色々の手細。四布袴に腰袋。怪しき漁師。

茶筌髪に烏帽子なし。裾に目結の手細。淺黄の四布袴。腰袋。後腰に小刺刀に燦袋。

少女數人。

髪は垂髪を紅薄襟にて結べる、紅の髪にて上げたるなど。小袖は白、薄紅梅など。衣は襷紅葉、萩など。

怪しき少女。紅の髪にて髪を上ぐ。白き練貫の小袖。濃色の袴。紫霞の衣。蘇枋骨の透扇。

第一場

(文治二年閏七月二十九日)

由比の浦。前の方、波打際。見物より左手の空に夕照。漁船一艘砂の上に引上げあり。舟に稍大いなる香。脱したる鱧。舞臺中央奥まりたる處に松の木一本。

漁師數人舟の周匝につぎひある。怪しき漁師、群を離れて、ひさり松の木に凭り掛かりある。骨格違ましく、眼大いに、額骨高く、腮方なり。幕開きたる時より終まで腕を組み、動かずにある。目は遠き處を凝視す。

漁師の會話

(會話は舟の周匝なる漁師共、誰さ定まりたることなく、低く沈みたる調子にて言ふ。その間怪しき漁師は詞なし。)

- 今日も好い天氣だった。
- 風がない。
- 波がない。
- その癖漁がない。
- もう幾日になるだらう。
- 十日かなあ。
- なに、二十日あまりだ。
- いや、丁度一月になる。
- 聞なんといふものゝある年は直な事はない。
- いや、めでたい年だ。
- いや。悪い年だ。
- 沖に出ても駄目だから、出ないが好い。
- 又五郎丸とかいふ小舎人を掴まへて来たといふぢやない

か。

○何になるものか。

○肝心の人は掴まりつこはない。

○しつ。

(一同低く笑ふ。暫く黙す。)

○綺麗な女だなあ。

○誰が。

○誰つて、知れた事よ。京から掴まへて来た白拍子よ。

○いつまで置くのだらう。

○分かるものか。

○お宮へ連れて行かれる處を見たが、綺麗な女だなあ。

○舞が上手だよ。

○好い聲ださうだ。

○大鳥居まで聞えたさうだ。

○判官様の事を歌つたので、お上でお怒なされたさうだ。

○焼けたのだ。

○しつ。

(一同又低く笑ふ。暫く黙す。)

○もう餘つ程になるなあ。

○藤の花の咲いてゐた時だった。

○いつまで留めて置くのだらう。

○分かるものか。

- 風はない。
- 波もない。
- 出たつて漁がないから駄目だ。
- いつまでこんな工合だらう。
- 分かるものか。

(夕照消えて、舞臺急に暗くなる。右手より安達新三郎空色の産衣に包みたる赤子を抱きて出づ。雑色三人。一人は太刀を持つ。背後に、火を點さざる松火を持てる。繩を持てるこの二人續けり。漁師等、詞なく左手に急ぎ入る。怪しき漁師は身を動かすことなく、その目は依然遠き處を凝視す。安達は歩調急に左手に行き、立ち留まり、漁師等の跡を見送る。雑色三人は舟の處に留まる。安達は歩調緩く舟の處に歸る。三人共怪しき漁師を見ることなし。安達、繩を持てる雑色を頭もて使ひ、聲低く。)

安達。そこらに手頃な石があらう。

(その雑色、松の木あたりに行き、怪しき漁師とは異なる世界に住するもの、如く、互に相見ることなく、石一つ拾ひて、兩手にて持ち、安達が前に返る。安達頷いて指圖して舟の傍に置かせ、聲低く) その石を縛れ。

(その雑色石を繩にて十字に縛る。)

その石を舟に入れい。
(その雑色、兩手にて石を縛りたる繩の端を持ち、石を吊りて舟に入る。安達頷もて石を舟に入れし雑色、火を點さざる松火を持てる雑色を使ひ、聲低く。)

その舟を水に卸せ。
(雑色の一人は松火を置き、二人にて舟を波打際より海に押し出だす。安達、松火を持ちたりし雑色を頭もて使ひ、聲低く。)

お前陸にをれ。
(安達、太刀を持てる雑色と繩を持ちたりし雑色とに頭にて指圖し、隨ひ來させ、赤子を抱きて舟に乗る。繩を持ちたりし雑色、繩を裝ふ。陸に残れる雑色、煙にて火を切り、松火に火を移さんとする。)

怪しき漁師。(忽ち莊重なる語氣にて) 殺せ。右の手の邪魔になると云つて、左の手を切る。切つた左の手の力を右の手に添へようとする。右の手を大事にするが好い。右の手の指を大事にするが好い。己は左の手を惜みはせん。左の手の指を惜みはせん。忘れるなよ。己は右の手も惜みはせん。右の手の指も惜みはせん。

繩の雑色、繩を裝ひ畢る。松火の雑色、燃ゆる松火を斷して立つ。松火の火怪しき漁師の顔を照す。安達は徐

かに赤子を香の中に置く。繩を裝ひ畢りし雑色繩を掴みて身構す。)

殺せ。

(舞臺廻る)

第二場

(文治二年九月十六日)

鎌倉の旅宿の座敷。季秋の朝。右手に胸形障子。その背後より左手に餘りて手掛附襖。それより左は總て紙張の壁。舞臺の中央、壁の前に黒棚。その傍に雙陸盤。馬子を入れたる錦の袋を添ふ。黒棚の左手に軸臺と稱する籠めきたる物を据う。その前に根來塗の經机。机の上には火取香爐を中に、右櫃を挿せる花瓶、左蔀繪の香盒。軸臺の左手、程好き處に柱。

囃ノ禪師旅姿にて、市女笠を膝の脇に置き、右手に倚りて据わり、低き曲物の火桶に手を觸しある。珠敷を左の手に掛く。少女數人、前に集へり。怪しき少女、一人離れて左手の柱に凭り掛かり、据わりある。年は十五六。氣高き容貌。始より終まで身じろかず。その視線は一座のものの頭の上を越して空を視る。

少女の會話

(會話は誰さ定まりたることなく、優しく低き聲にてなす。囃ノ禪師は首を垂れる。怪しき少女は動かさず、黙す。)

○とうとう十六日になつたのね。

○わたし、毎日指で勘定してゐたわ。

○待つてたの。

○あら。誰が待つてもんですか。もう幾日あると云つて、勘定したのだけ。

○厭になつてしまふ。

○寂しくなるわ。

○朝の内は寒いことね。(疎む)

○わたし、赤ちゃんがいつまでも生れなければ好いと思つたわ。

○さうは行かないわ。

○赤ちゃんの事を言ひつこなしよ。

○おう。さうさう。

○おう寒。(兩袖を掻き合す。)

○子供は寒がるものぢや無いつて。

○子供ぢや無いわ。

(一同低く笑ふ。)

○どうなすつたでせう。

○氣分が悪いから、少し横になつてゐて、直つたら、お支度

をするを仰やつたわ。
 ○額を押へて入らつしやつたの。
 ○お宮へ入らつしやる時もさうだつたわねえ。
 ○あそこのお庭に藤の花が咲いてゐましたわ。
 ○御堂へ入らつしやる時は、すぐにお支度が出来ましたわね。
 ○雨が降つてゐたのね。
 ○梅雨だつたわ。
 ○大姫様はお好なのよ。
 ○似て入らつしやるわ。
 ○大姫様の下すつた物は、大事にして入らつしやることね。
 ○御息所の下すつたお召は、いつか解いて、人形のにしろと云つて、わたし達に下すつたわね。
 ○あゝ卯ノ花重のね。
 ○大姫様がお好でないといひわ。
 ○何故。
 ○戴けるから。
 ○怒張ねえ。
 ○(一同低く笑ふ。)

○有る積なの。起ちて經机の前に行き、香盒より沈を取り出だし、香爐に焚く。一縷の烟立ち升る。空しき龍に向ひて拜む。
 ○わたしも拜むわ。
 ○わたしも拜むわ。
 ○(一同空しき龍に向ひて拜む。)

磯ノ禪師。(徐かに首を擡ぐ。)赤ちやんがさぞ喜びませう。今に姉さんが出て来て来てお暇乞をするでせう。皆さん、ちといつものやうに、雙六でもしてお遊なさい。
 少女の一人。え。
 今一人。え。
 (二人の少女起ちて、先づ馬子の袋を持ち出だし、次に雙陸盤を竪に舞臺の真中に据点、二人右左に向き合ふ。他の少女等取り巻く。)

右の少女。(馬子の袋より馬子を取り出だし、盤の上に置き、筒を盤の左の方に寄せて置き相手を見る。)わたしが白よ。
 左の少女。あら。何故。
 右。此間爲たとき勝つたのですもの。
 左。わたしも此間勝つたわ。
 右。ぢや、兩拳。

左。(同時に。)じやあんけんぼん。
 右。(左の少女駒刀を出だす。右の少女、紙を出だす。)

左。やつぱりわたしよ。
 右。憎らしいこと。
 (二人馬子を分け、石飾をなす。左の少女、筒を取り上げ、采を振りはじめ。龍の前なる香爐ゆるやかに烟を立てて、舞臺の上暫く采を振る音も、馬子を打つ音を聞く。磯ノ禪師は再び首を垂れて黙す。怪しき少女身じろきせざるこゝ初の如し。折々少女一人起ちて、香をくべ添ふるこゝあり。以下同じ。安達新三郎下手より出づ。雑色一人太刀を持ちて隨ふ。安達、頭もて雑色に指圖し、退場せしめ、怪しき少女の右前のあたりに立ち留まる。磯ノ禪師と安達と顔を見合せ思入あり。)

安達。はあ。もうお支度が出来ましたね。(輕きアイロニイの調子。)憎まれものが又來ましたよ。上の仰せだから致し方がない。併し御心配には及びません。今日は只御出立の様子を見届けて来いといふことです。(座に着く。)

少女二人居直る。雙六を打つ少女二人は、ちよと見たるのみにて、構はずに打ちあふる。他の少女は囁き合ひなごす。

磯ノ禪師。(据わりたる儘にて、首を擡ぐ。)御苦勞様でござ

います。お勤で遊ばした事を、お恨申しは致しません。安達。さう仰やると、一層心苦しいのですよ。どうも役なぞをしてゐますと、進んでやるやうな事は少くて、爲方なしにするやうな事が多いものです。それを思へば、軍をしてゐる間は氣樂ですな。(間。)併しあなた方も、やうやうの事で都へお歸になるやうになりましたから、兎に角御安心でせう。櫻の花の咲く頃から、菊が咲いてしまふまでは、随分長い間ですから、上の仰せとは云ひながら、窮屈な思をして、こんな處にお出なさつて、さぞ御困りでしたらう。

磯ノ禪師。(珠數をつまぐる。いゝえ。どこにをりましても、同じ火宅の中でございます。窮屈な事はございません。安達。静さんはどうなさいました。)

磯ノ禪師。先刻支度を致し掛けて、頭痛が致すと申しますので、少し休んでからに致せと申して置きました。それで、もうこちらへ出て参る頃でございます。

右の少女。(喜ばしげに。)無地勝よ。
 左の少女。あら(間。)もうわたし厭だわ。
 今一人の少女。そんならわたし打つわ。
 (これ迄の少女入り更はる。)

左手にゐる少女の一人。(右手駒形障子の背後を見込みて。)姉えさん。
 その隣の少女。あら。本當にね。

(一同胸形障子の背後を見込む。盤に對したる二人は、ちよと見て、又雙陸を打つ。靜、右の手に菓の垂絹を垂れたる市女笠を持ち、徐かに胸形障子の背後より廻り出す。)

靜。(安達と目を見合せ、思入あり。靜は輕きアイロニイを帯びたる、諦念の態度。安達は、これもアイロニイを帯びたる、物馴れて機智ある侍の態度。靜、磯ノ禪師に。)おつ母さん。濟まなかつたのね。長い間待たせて。(市女笠を傍に置き、火桶の向うに、正面を向きて据わる。)

磯ノ禪師。なんのお前。わたしは皆さんの遊ぶのを見てゐました。それは好いが安達様が、わたし共が立つのを見届けに、さつきから来て入らつしやるよ。

靜。(安達に。)ほんに失禮を致しました。(輕く會釋す。)まあ、重ね重ね色々なお世話様になりますことね。

安達。いや、なんと云はれても爲方がありません。三月にお宿をしてから、もう半年餘りのお馴染です。(眞面目に、沈みたる調子。)わたしだつて、木や石ではありません。こなひだの晩のやうなお役を勤めたくはない。いつその事、頭でも剃りこくつてしまはうかと思ふのですが、さうした處でどうでせう。そりやあ、其時は氣分がさつぱりするでせう。痛快でせう。(靜次第に注意して聞く。併し坊主の生活なんといふものも、存外詰まらないものではない

すでせう。そしてこちらへ引かれて參つて、お化粧をして、衣裳を着飾つて、舞を舞つたり、歌つたりしますでせう。それもまあ好いとして、女の子なら助けて遣る、男の子なら殺すと仰やつた。その赤さんが男の子で、それを殺されてしまつたのに、まだ阿容々々とかうしてゐます。死んでしまひも致しません。尼法師にもなりません。人間らしい考が無いと云つて、人様を責めるには、それより先自分で自分を責めなくてはなりません。まあ、さうしたものでございますまいか。

安達。なる程、それはそんなものだ。併し、ね、靜さん。その美しい黒髪をあなたが切らずにお置きなされるのも、そのつやつやした玉の肌を焼刃を當てずにお置きなされるのも、わたしなんぞの目から見れば、不思議な事はないのです。わたしなんぞの心には、そのあなたの心持が好く分つてゐるのです。(靜微笑む。)侍の意氣地では、切死をするも好い。腹を切つて死ぬるも好い。併し命を惜みさへしなければ、死ななくても好いのです。それも再び世に出たい、身を立てたいと思ふのを目當にしてながらへてゐるのが好いと云ふのではありません。目當なんぞはなくても好い。一度火に當てれば、壞れてしまふ器もある。百年割れない器もある。喜怒哀樂の火の中を、大股に歩いて行く人もあつて好い筈です。男には限りません。女だつてさうぢやあ

でせうか。此間營中に召された西行法師は、月花に心を動かすことがあると、三十一字を作るばかりだと、云はれたさうですが、ありやあやつぱり歌が詠めるもんだから、それを性命にして遣つてゐるのですね。まあ、あんなのは好い。御門跡を擁立したり、寺領の高を争つたり、加持や祈禱を商賣にして、手柄顔をするやうになつてはお話にならない。世を捨てた先に世がある。俗を逃れた先に俗があるのですね。詰まらないぢやありませんか。

靜。まあ、あなたなんぞも、そんな事を思つて入らつしやるの。(思入。)

安達。意外ですか。

靜。(正直に。)えゝ。全く。

安達。さうでせう。都では探偵をする。鎌倉では首斬役をする。そんな人間の腹の中には、人間らしい考は無いと思つてお出でしたらう。

靜。それをさうでないとは申しませんわ。ですけれど、ね。わたしを身勝手ばかし考へて、人様の事を悪く思ふやうな女だと思つて入らつしやる、それは違つてゐますわ。あなたの仰やるやうに申せば、わたしの身の上はどうでせう。思ふお方には別れてしまふ。(間。愁の思入)そのお方が又世に出て入らつしやるといふことは、先づ覺束ないのでございますね。それに阿容々々と生きながらへてゐま

りませんか。貴い玉は多くは出ない。優れた人物も同じ事です。あなたなんぞが尼になつたり、自害をしたりしないのは、實に頼もしいと云ふものです。

靜。(寂しき微笑)まあ。大變です事ね。それではあなたね。わたしの中の事を、わたしより好く御存じな

磯ノ禪師。(珠數をつまぐる。)安達様の仰やる事は、わたくし杯には分かりません。小さい時から孝行な娘でござい

ます。わたくしがゐるうちには、靜は自害も致しません。尼法師にもなりません。世を捨てるなんぞといふことは、年を取つてからの事でございませう。(間。)大さう遅くなりま

した。靜や。お前の氣分が好いやうなら、もうそろそろ行きませうね。(市女笠を取りて立ち上がる。)

(盤に對する少女手を止む)

右の少女。もう入らつしやるの。

少女一同。入らつしやるの。

(靜、笠を持ちて立つ。安達も次いで座を立つ。)

靜。(少女等を見廻す)皆さん。今日は好く来て下さつたの

ね。いつかわたしの教へて上げた、あの吉野山の歌を、お

別にもう一度歌つて聞かせて下さいね。皆さん、お厭。

右の少女。歌ひますわ。さあ。

少女一同。(据わりたる儘にて歌ふ。)

病院横町の殺人犯(ボオ)

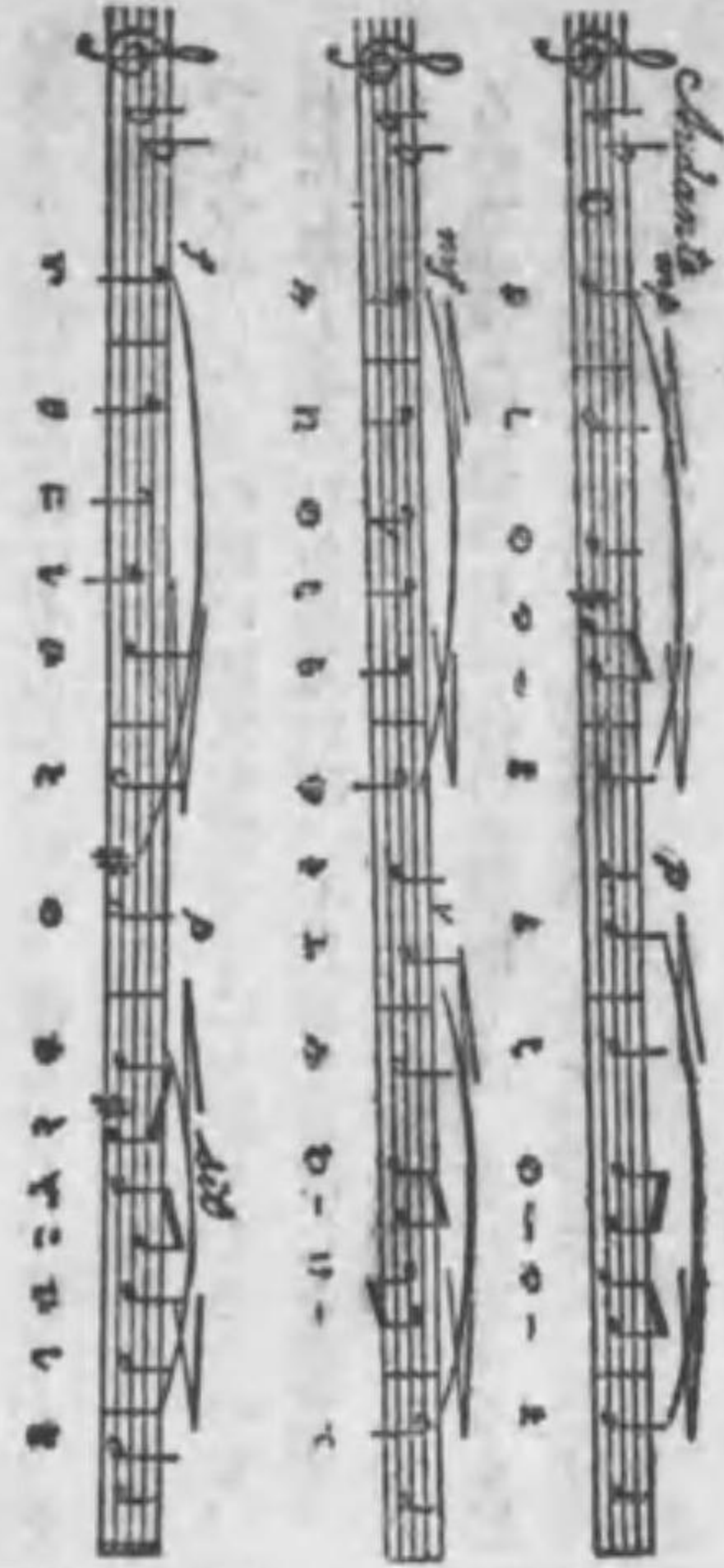
千八百〇十年の春から夏に掛けてパリイに滞留してゐた時、己はオオギエスト・ドユバンと云ふ人と知合になつた。まだ年の若いこの男は良家の子である。その家柄は貴族と云つても好い程である。然るに度度不運な目に逢つて、ひどく貧乏になつた。そのために意志が全く挫けてしまつて、自分で努力して生計の恢復を謀らうとしなくなつた。幸に債權者共が好意で父の遺産の一部を残して置いてくれたので、この男はその利足でけちな暮しをしてゐる。贅澤と云つては書物を買つて讀む位のものである。この位の贅澤をするのはパリイではむづかしくは無い。

己が始てこの男に逢つたのは、モンマルトル町の小さい本屋の店であつた。偶然己とこの男とが同じ珍書を捜してゐたのである。その時心易くなつて、その後度度逢つた。一體フランス人は正直に身の上話をするものだが、この男も自分の家族の話に己に聞かせた。それを己はひどく面白く思つた。それに己はこの男の博覧に驚いた。又この男の空想が如何にも豊富で、一種天稟の威力を持つてゐるので、己の靈はそれ

に引き入れられるやうであつた。丁度その頃己は或る目的のためにパリイに滞留してゐたので、かう云ふ男と交際するのは、その目的を遂げるにひどく都合が好いと思つた。その心持を己は打ち明けた。そこでとうとう己がパリイに滞留してゐる間、この男が一しよに住つてくれることになつた。二人の中では己の方が比較的融通が利くので、家賃は己が拂ふことにして妙な家を借りた。それはフォオブル・サン・ジェルマンの片隅の寂しい所にある雨風にさらされて見苦しくなつて、次第に荒れて行くばかりの家である。なんでもこの家に就いては、或る迷信が傳へられてゐるのださうだつたが、我々は別にそれを穿鑿もしなかつた。二人はこの家を借りて、丁度その頃の陰氣な二人の心持に適するやうに内部の裝飾を施した。

若しその頃二人がこの家の中でしてゐた生活が世間に知られたら、二人は狂人と看做されたかも知れない。勿論危険な狂人と思はれはしなかつたらう。二人は誰をもこの家に寄せ付けずゐた。己なんぞは種種の知合があつたのに、この

「よしの山
峯の白雪踏み分けて
入りにし人の
跡ぞ戀しき。」



(歌の間、靜親子と安達悄然として立ちゐる。歌の聲息む。)

怪しき少女。(依然として柱に凭りて身じろみせず。忽ち遠き徹る如く明かなる聲にて。) まだ足跡が消えませぬのね。消えないうちは踏んで入らつしやい。(間。) 足跡はいつか消えますのね。

(怪しき少女の聲には、誰も耳を借すものなし。靜親子行き掛かる。幕。)

書添 吉野山の曲譜を作り給ひしことを南能齋君に、人物の装束、舞臺の調度を考へ給ひしことを關係之助君に謝す。
著者

住家を説いて告げなかつた。ドユパンの方ではもう數年來パリイで人に交際せずにあつたのである。そんな風で二人は外から邪魔を受けずに暮した。

己の友達には變な癖があつた。どうも癖とでも云ふより外は無い。それは夜が好きなのである。己は次第に友達に馴染んで来て、種種の癖を受け續いで、とうとう夜が好きになつた。然るに夜と云ふ黒い神様はいつもあてはくれぬので、これがあるとなると工夫して晝を夜にした。我我は夜が明けて窓の鐵戸を開けずに、香料を交せて製した蠟燭を二三本焚いてゐる。その蠟燭が怪談染みた微かな光を放つのである。この明りの下で我我はわざと夢見心地になつて、讀んだり書いたり話したりする。その内ほんとうの夜になつたことが時計で知れる。それから二人は手を引き合つて往來へ出て、歩きながら晝間の話の續きをする。又夜更まで所所をうろついて珍しい光明面と闇黒面とを味ふのである。パリイのやうな大都會にはこの両面があつて、我我のやうな局外の觀察者には無限の興味を感じさせるのである。

かう云ふ場合にドユパンは不思議な分析的技能を發揮して己を驚かすことがある。友達はこの技能を發揮して、自分で愉快を感じてゐる。人が誰も見聞してくれなくても好いのである。友達は己の心持を己に打ち明けてゐる。或る時友達は己に笑ひながら云つた。「世間の人は大抵胸に窓を開けてゐる。」

然ドユパンが云つた。「實際あいつは馬鹿に小さい男で、どうしても寄席に出た方が柄に合つてゐるね。」

「無論さうさ。」
己は覺えずこの返事をした。餘り深く考へ込んでゐたので、己は最初この問答をなんの不思議も無いやうに思つた。併しこの問答は己の黙つて考へてゐることの續きになつてゐる。

己はそれに氣が付いたので、びつくりせずにはゐられなかつた。己は眞面目に云つた。

「おい。ドユパン。あんまり不思議ぢや無いか。正直に言ふが、今の話は實際君の口から出て僕の耳に這入つたのだか、どうだかと疑はずにはゐられないね。僕の腹の中で考へてゐたことをどうして君は知つたのだ。君には全く僕が誰の事を思つてゐたと云ふのが分かつたのかい。」

己はかう云つてドユパンが眞にその人が誰だと云ふことを中てたのだか、たしかめて見よと思つた。

「無論シャンチリーの事さ。なぜ君話を途中で止めたのだい。さつき君はあいつが餘り小柄だから、悲壯劇の役を勤めるのは無論だと思つてゐたぢや無いか。」

實際己はさう思つてゐた。シャンチリーと云ふのは元サソンドニイ町の靴屋で、それが俳優になつてゐるのである。

て、僕にその中を覗かせてくれるのだね」と云つた。そしてその證據として、丁度その時己の考へてゐた事をすつかり中てて己を驚かした。

この技能を働かせてゐる時の友達の様子は冷澁で、うはのそらになつてゐるやうで、その目はなんの表情も無く空を見つてゐる。その聲は不斷テノル調であるのにこの時はデスカント調になつてゐる。ちよいと聞くと浮かれてゐるのかと思はれるが、その言語が如何にも明晰で、その思想が如何にも沈著で、決して浮かれてゐるので無いことが分かる。己は友達のさう云ふ様子を見る度に、古代の哲學にある一人二靈説を思ひ出さずにはゐられない。どうも創造的性質のドユパンと分析的性質のドユパンとあるやうなのが、己には面白く思はれた。

かう云つたからと云つて、己が何か秘密を許かうとするのだらうだの、小説を書くだらうだのと思ふのは間違である。このフランス人に就いて己の話すのは簡単な事實に過ぎない。その事實は過度に働いてゐる、事に依つたら病的な悟性かも知れない。當時のこの人の觀察の爲方は次の例を以て人に理解させるのが最も適當であらう。

或る晩のことであつた。我我二人はバレエ・ロイアルの附近の長い、汚い町をぶらぶら歩いてゐた。二人とも何か考へ込んでゐたので、十五分間程一言も物を言はずにゐた。突

そいつが此間クレピリヨンの作のクセルクセスの主人公を動めた。そして非常な悪評を受けたのである。

己は云つた。「どうぞ君僕に言つて聞かせてくれ給へ。一體どんな方法で僕の心が讀めるのだい。若しさう云ふ法があるものなら、それを聞かせてくれ給へ。」詞でけかう云つたが、己の不審はとてつと詞で言ひ現されな程であつた。

友達は云つた。「君あの果物屋を見て、それから靴屋のシャンチリーがクセルクセスだとかその外古代劇に出て来る英雄に不適當だとか云ふことを考へたのだらう。」

「果物屋だつて。どんな果物屋だい、僕にはまるで心當が無いが。」

「それ。さつきの町の曲角で君に打つ付かつた男さ。さうさね。十五分ばかり前だつたかな。」

かう云はれて己は思ひ出した。成程己が町から今立つてゐる抜道に曲り掛かつた時、林檎を盛つた大籠を頭に戴せた男が己に打つ付かつて、己は倒れさうになつたのだ。併しそれとシャンチリーとの間にどんな連絡があるか、己にはまだ分らない。

併しドユパンは決して謙遜きでは無かつた。己に説明して聞かせたところけかうである。「そんなら君に言つて聞かせよう。君に得心の行くやうに思想の連鎖を逆手に手繰つて見よう。まづ君の考へ込んでゐる時、僕が突然聲を掛けた、あの

時を起點として、あれから逆に戻るのだね。そしてあの果物屋の打つ付かつた時まで歸り着けば好いわけだね。この連鎖の主な廉價は一シャンチイ、二オリオン、三ドクトルニコルス、四エビタロス、五立體幾何學、六敷石、七果物屋とから云ふ順序だよ。

思想が轉變して或る歸著點に到達する順序を逆に考へて見ると云ふ事は随分誰でも遣つて見る事である。さう云ふ事は随分面白い。始て遣つて見た人は、その連鎖の始と終とを並べて見て、その二つが非常に懸隔してゐるのに驚くだらう。己は友達の話を聞いて非常に驚いた。それが事實であつたらである。

友達はかう云つた。「もし僕の記憶が誤つてゐなかつたら、君と僕とはC町から曲る前に馬の話をしてゐたね。それ切り物を言はなくなつたのだ。それから角を曲つてこの抜道に出るとたんに、林檎を持つた大籠を頭に載せた果物屋が驅けて来て、君に打つ付かつた。その時君は往來に敷く敷石の積んであるのに足を踏み掛けた。その石がぐら付くと、君はすべつて少し足を挫いた。その時君は腹を立てて、何か口の内でつぶやいて、積んである石を一目見て、それから黙つて歩き出した。僕は別段君に注意してゐたわけでも無いが、どうもこの頃物を觀察するのが癖になつてゐるもんだから爲方が無い。そこで見てゐると、君は下を向いて歩いてゐる。そして

句に就いては、僕が前に君に話した事がある。僕の云つたのは、この詩句はオリオン星の事を指したもので、オリオンの古い名はユリオンだつたと云つたね。この説明はその時の事情から推すと、君が忘れずにゐるものと考へられるのだね。そこで君はどうしてもオリオン星を見ると同時に、俳優シャンチイの事を思ひ出さずにはゐられないと、僕は考へたね。この推察が當つたと云ふことは、そのとたんに君の唇に現れた微笑で證明することが出来たのだ。君はあの時靴屋上がりのシャンチイが劇評家にひどく退治られたのを思ひ出したのだね。それまで君は背中を圓くして歩いてゐたところ、丁度その時君は背中を眞つ直ぐにして元氣よく歩き出した。そこで僕は察したね。君はシャンチイが小男だと云ふ事を考へたのだと察したね。丁度その時僕は君に聲を掛けたのだ。そしてあいつは小柄だ、寄席にでも出るより外爲方が無いと云つたのさ。」

ドユバンの觀察法がどんなものだと云ふ事は大體この一例で分かるだらう。

この事があつてから暫く立つた後である。我我二人は一しよにガゼット・デ・トリビュノオ新聞を讀んでゐた。そしてふいと左の記事に目が留まつた。

「驚歎すべき殺人事件。昨夜三時頃サン・ロッキユス區の住民は稍久しく連続して聞えたる恐しき叫聲に夢を破られた

腹立たしげに敷石の穴や隙間を見てゐる。そこで君が敷石の事を考へてゐると云ふことが分かつたのだね。するとマルチン町の所に來た。あそこには試験的に助狀に切つて噛み合せるやうにした石が敷いてあつた。それを見た時、君の顔色が晴やかになつて、君は口の内で何やら言つた。君の唇を見ると、その詞が「ステレオメトリー」と云ふ詞らしかつた。立體幾何學だね。あの敷石を見てそんな名を付けるのは、随分大袈裟だつたには相違無いよ。君はその詞を口にした跡で、直ぐに「アトオム」と云ふ事を考へた。元子だね。極微だね。それから哲學者エビタロスの教義を思ひ出した。ところが此間君と哲學談をした時、お互にかう云ふことを言つたね。あの君子風のグレンシア人は空想で説を立てたのだが、近世コスモゴイの研究が出来てから、天體の發展が分かつて来て、エビタロスの説いた事が事實的に證明せられたと云つたね。そこで君がエビタロスの教義を思ひ出したからには、君はそれと同時に、多分オリオン星の霧を仰向いて見るだらうと、僕は考へた。君は果して仰向いて天を見た。そこで僕の推測の當つたのが分つた。ところでそのふあのミュゼエと云ふ雑誌に俳優シャンチイを嘲つた諷刺的批評が出たね。あの批評の中にシャンチイが靴屋を止めて舞臺に出た時、名を變へたことを冷かしてラテンの詩句が引いてあつた。Perdidit antiquum litera prima sonum と云ふのだね。この詩

り。その叫聲は病院横町の一家屋の第四層にて發したるもの如くなりき。その家はレスパネエ夫人とその娘との二人の住所なり。最初尋常の手段にて表口より入らんとせしに、戸締のため入ること能はずして、多少の時間を經過し、鄰家のもの八九人と憲兵二人とは、遂に鐵の棒を以て戸を破りて屋内に入ることを得たり。その隙に叫聲は息みたり。最初の梯子を駆け上がる時、人人は二人若くは數人の荒荒しき聲にて何事かを言ひ争ふを聞けり。その聲は家の上層にて發したるもの如くなりき。第二の梯子に達せし時は、その聲も又止み、屋内には何等の物音も聞えざりき。人人は手分けをなし、各室を搜索せり。第四層屋の背後なる大部屋は内より戸を鎖しあるを以て、更にその戸を破壊したり。これに入りたる人人はその慘狀を見て恐怖し且つ錯愕したり。

室内の狀況は狼藉を極めたり。家具は總て破壊し、所所に投げ散らしあり。一の寢臺の敷布團を引き出し、室の中央に放棄したるを見る。一の椅子の上に血まぶれの剃刀あり。カミン爐の上に血の著きたる白髪二三束あり。髪は頗る長く、暴力にて引き抜きたるものと見えたり。床の上にナポレオン銀貨四箇黄玉を嵌めたる耳環一箇、銀の大匙三箇、アルジェリイ合金の小匙三箇の外、金貨四千フランを二袋に入れたるものあり。卓の抽斗抜き出しありて、手を著けたるものと見ゆれども、猶許多の物件の残りをを見る。鐵製小金庫一箇

敷布圍の下にあり。(寝臺の下にはあらず)。金庫は開きありて、鍵は鑰の孔に差したる儘なり。金庫内には古き手紙若干と餘り重要とも見えざる書類とあるのみ。

女主人レスバネエ夫人の行方は最初不明なりき。既にして人人はカミン爐の上に多量の煤あるを見て、試に爐中を檢せしに、人の想像にも及ばざる程の殘酷なる事實を發見せり。女主人の娘の屍體倒さまに爐の煙突に押し込みありしことこれなり。頭を下にして、非常なる暴力を以て狭き煙突内に押し込みたるなり。體には猶温みありき。皮膚を檢するに許多の擦傷あり。多くは強ひて煙突に押し込みし時生じたるものなるべく、その一部分は引き出だす時生じたらんも知るべからず。顔には引き掻きたる如き深き傷あり。前頸部には指尖にて壓したる如き深き痕あり。又暗紫色なる斑あり。これ等は絞殺したるにはあらずやと想像せしむ。

人人は屋内所を精密に搜索せしに、前記の他には別に發見する所無きを以て屋後なる中庭に出でたり。中庭は石を敷き詰めあり。この中庭に女主人の屍體ありき。前頸部より非常に深く切り込みたる創あり。僅に項の皮少許にて首と胴と連りたる故、屍體を掻ぐる時、首は胴より離れたり。首もその他の體部も甚しく損傷しあり。就中胴と手足とは、殆人の遺骸とは認められざる程變形せり。

右の恐るべき殺人犯は何者の所爲なるか。余等の探知した

る限にては、その筋に於て未だ何等の手掛りをも得ざるもの如し。」

翌日の新聞には、この殘酷なる犯罪に關したる記事の續を載せたり。その文に曰く。

「病院横町の悲劇、古來未曾有の慘事たる本件に關し、審問を受けたる者數人あり。何人の告條も本件に光明を投射するに足らずと雖、左に一一これを列記せんとす。

ボオリイヌ・ドユブウルは洗濯を業とする婦人なるが、次の申立をなせり。本人はレスバネエ夫人及びその娘と相知ること三年に及べり。これレスバネエ家の洗濯物を引受けたるが爲なり。老婦人と娘とは平生仲好く暮し互に鄭重に取扱ひたり。洗濯代は滞無く潤澤に拂ひくれたり。生活費は如何なる財源より出でたるか知らず。風聞に依れば、夫人は巫女を業とし、人の爲に禍福を占ひ、その謝金を貯へたりと云ふ。本人は洗濯物を受け取りに往き、又返しに往きし時、來客ありしを見たること無し。母子が全く奉公人を使ひをらざりしことは確實なり。家屋には第四層の外、何處にも家財を備へあらざりしもの如し。

たる家に移住してより六年餘になれり。彼家屋には初め寶石商の住めるありて、その人は上層の諸室を種種の賃借人に貸しむたり。元來家屋はレスバネエ夫人の所有なりしに、寶石商これを借り受けをり、濫に上層を他人に又貸したる故、夫人はその所爲に憤焉たるものあり。終に自ら屋内に移り來てそれより上層を何人にも貸すこと無かりき。老夫人は子供らしくなりたり。本人は前後六年の間にレスバネエ家の娘に五六回會見せり。母子とも社交を避けるたり。世評に依れば財産家なりしもの如し。本人は鄰家の人の口より老人が巫女なりしことを聞きしが信ぜざりき。老夫人の家に出入する人は殆絶無にて、母子の外出するを見掛けし外には、門番の男の顔を一二回見たると醫師の出入するを八九回見たるとを記憶するのみ。

その外近鄰の人數人の申立あれども皆大同小異なりき。人の全く出入せざる家なれば、母子に親族の現存せるものありや否やを知るもの無し。家の前側の窓は曾て開きありたることを無し。中庭に向ひたる窓はいつも閉ぢありて、只第四層の奥の廣間の窓のみ開きありき。家は堅牢なる建築にて未だ古びをらず。

イジドオル・ミユゼエと云ふ憲兵卒の申立は次の如し。本人は午前三時頃レスバネエ家に呼ばれたり。戸口に到着せし時には、二三十人の人屋内に押し入らんとしてひしめきゐた

り。本人は已むことを得ず銃劍を用ひて扉を開きたり。鐵棒を用ひしにあらざり。扉は觀音開にて、おとしの如きもの上下ともに無かりしゆを銃劍にて開くことは容易なりき。叫聲は扉を開くまで聞えたりしが、開き終りし時突然止みたり。叫聲は一人なりや數人なりや明かならざりしが、必死になりて發せしもの如くなりき。高聲を長く引きたり。忙はしげに短く發したる聲にはあらざりき。本人は戸口にありし數人と共に梯子を登りたり。第一の梯子を登り終りし時、二人の聲を聞き分くることを得たり。二人は聲高に物を争ふもの如くなりき。一人の聲はあららかにそつげなく聞えたり。今一人の聲は一種異様な鋭き聲なりき。前の人の詞は一語を辨別することを得たるが、その人はフランス人なりしもの如し。無論女子にはあらざりき。外道と叫び、馬鹿と叫びしを辨別したるなり。後の人は外國人なりしが如し。男女の別明かならず。何國の語とも決し難けれども、恐はスバニア語なりしならんか。本人の申し立てたる室内の状況は余等が昨日の紙上に記したるところと異なること無し。

アンリイ・ドユワルは鄰家の飾職にして、主に銀細工をなせり。その申立次の如し。本人は屋内に最初に入りたる中の一人なり。初めの状況は憲兵卒ミユゼエの申立に同じ。屋内に入りたる數人は、内より扉を鎖したり。これ深更なるに拘らず多數の人、戸口に集りあて籠み入らんとしたればなり。

本人は彼異様に鋭き聲を發せし人をイタリア人ならんと思へり。本人の推測するところにては、その人のフランス人にあらず。本人の推測するところにては、たしかに男子の聲なりとも云ひ難けれども、婦人の聲とは思はれずと云へり。發音に依りてイタリア語ならんと推測したれども、本人はイタリア語を解せざるゆゑ、何事を言ひしか分からざりきと云へり。本人は平生二人の女子と親しく交り、詞を交しし事あるゆゑ、彼の鋭き聲の母子の聲にあらざる事は疑を容れずと云へり。

オオデンハイメルは飲食店の主人にして、その申立次の如し。本人は法廷より召喚せられしものにあらず。陳述のため自ら進んで法廷に向きたるものなり。本人はフランス語を善くせざるゆゑ通譯に由りて申し立てたり。本人はアムステルダムに生れしものなり。本人は彼屋内にて叫聲の起りたる時町を通り掛かりしものなり。叫聲の聞えしは數分間と覺ゆ。恐くは十分間位なりならん。高聲を長く引きたるものにて氣味悪く、神經を震盪するが如き響なりき。本人は屋内に入りたる數人の中なり。屋内の事に關する申立は前數人と略同じけれども、只一箇條相違せり。本人の推測するところによれば、彼の鋭き聲は男の聲にて、たしかにフランス人なりきと覺ゆと云へり。但し何事を言ひしか明かならず。忙はしげなる高聲にて調子不揃なりき。激怒若しくは恐怖に由りて調子を高めたるもの如く聞き激されたり。前には鋭き聲

と云ひしが、鋭しと云ふ形容は當らざるやも知れずと云へり。今一人のそつけない聲は度度外道と呼び、畜生と呼び、こらと呼びしを記憶すといへり。

ジュウル・ミニオオは銀行業者にして、ドロレヌヌ町なるミニオオ父子商會の名前主なり。老ミニオオの方なり。その申立次の如し。レスパネエ夫人は若干の財産ありて、これを商會に預托せしは八年前なりき。時特別に小口預をなしし事あるのみにて、最初に預けし元金をば曾て引き出したること無し。然るに變事ありし三日前に、夫人自身にて商會に來り、四千フランを引き出したり。この金額は金貨にて拂ひ渡すこととし使を以て居宅に送り届けたりと云ふ。

アドルフ・ルボンハミニオオ父子商會の雇人にて、その申立次の如し。本人は前記の日正午頃四千フランの金貨を二袋に入れ、それを持ちてレスパネエ夫人に隨ひ、その居宅に往きたり。戸口の戸を開きし時、娘出でて一袋を受け取りしゆゑ、今一袋は老夫人の手に渡したり。渡し終りて暇乞し、直ちに家を出でたり。街上にては何人にも邂逅せざりき。病院横町は狭き町にて人通少し云云。

キリアム・バアドと稱する裁縫職の申立次の如し。本人は最初に戸口より入りし數人の中なり。イギリス生にて二年以來パリイに住せり。屋内に入りたる後、本人は他の二三人と共に、先に立ちて梯子を登りたり。その時物争するが如き二

人の聲を聞きたり。そつけない聲の主はフランス人なりと思へり。詞は種種聞き取りしが、多くは忘れたり。只畜生と云ひ、外道と云ひしことだけは、度度明かに聞きしゆゑ忘れず。或る瞬間には數人争闘せるもの如くなりき。床を掻くが如く響るが如き響を聞きたり。彼の異様な聲はそつけない男の聲より高く聞えたり。本人の考にては、異様の聲の主は斷じてイギリス人にあらずきと覺ゆ。或はドイツ人なりしかと思はる。尤も本人はドイツ語を解せず。男女いづれか不明なれども、或は女子なりしやも知れずと云へり。

上記の證人中再び呼び出されたるもの四人の申立に依れば、レスパネエ家の娘の屍體を發見せし室の戸は、人人のその前に至りし時、内より鎖しありきと云ふ。室内は斷然として、人の呻吟する聲その他の物音を聞かざりき。扉をこじ開けたる時は何人もあらざりき。意は前側のものも後側のものも鎖して内より鎖を卸しありたり。二室の界の戸は鎖しありたれども、鎖は卸しありき。前房より廊下に出づる口の戸は鎖して鎖を卸し、鍵を内側に挿しありき。第四層の廊下の衝當に小部屋あり。屋の前面に向へり。この室の戸は大きく開きありたり。この室には古びたる寢臺、行李等を多く藏しあり。その品品は一一運び出して、綿密に取調べられたり。その他屋内は隅隅まで検査を経ざる所無し。彼の煙突も念のため十分に掃除せしめられたり。この家屋は四層立にし

てその上に屋根裏の數室あり。屋根裏の室より屋根に出づる口には上下に開閉する扉あり。この扉は釘著になしありて、數年來開きしこと無きもの如くなりき。最初に物争の聲を聞きし瞬間より、レスパネエ家の娘の屍體を發見せし室の戸をこじ開けし時に至るまでの時間の長短は數人の申立一致せず。或は三分間位なりきと云ひ、或は又少くも五分間なりきと云へり。彼室の扉を開くことはさ程容易にはあらざりしもの如し。

アルフォンゾ・ガルシオは葬儀屋營業者にして、病院横町に住せり。このスペイン人の申立次の如し。本人は最初に屋内に入りし數人の中なり。然るに梯子をば登らざりき。これ平生神經質なるがゆゑに、慘狀を見て興奮せんことを恐れしがゆゑなり。物争をなす人の聲は聞えたり。そつけない聲は男子にてフランス人なりきと思はる。その語をば聞き取ること能はざりき。鋭き聲の主はイギリス人なりしこと確實なりと云へり。本人はイギリス語を解せざれども、發音に由りて判斷したりと云ふ。

アルベルト・モンタニは菓子商なり。その申立次の如し。本人は最初に梯子を登りし一人なり。疑はしき二人の聲を聞けり。そつけない聲はフランス人なりきと思はる。數語をばたしかに聞き取りたり。鋭き聲の方は一語をも解せざりき。この聲の主は不揃なる調子にて早口に饒舌たり。或は

ロシア人なりしかと云へり。その他前記数人の申立に符合せり。本人はイタリア人にて、ロシア人と對話せしこと無しと云ふ。

再び呼び出されたる証人数人の申立に依れば、第四層屋の諸室のカミン爐は皆甚だ狭くして人の逃れ出づべき容積を有せずと云へり。然れども屋内の煙突は皆尋常煙突掃除人の使用するが如き圓筒形の煤刷毛を以て上下とも十分に掃除せられたり。屋内には裏梯子無きを以て、人人の表梯子より登る間に、何人も階上より逃れ去りし筈無し。煙突内にねぢ込みありし娘の屍體は、如何にも無理にねぢ込みしものと見え、これを引き出だすには四五人の男力を合せて纔に出すことを得たり。

ボオル・ドユマアは屍體檢案のため召喚せられし醫師なり。その申立次の如し。本人の呼び出されしは拂曉なりき。二人の屍體は娘の屍體を發見せし室の藥布團の上に置かれたりき。娘は擦過創及び挫傷の爲に甚しく變形しむたり。この損傷は煙突に押し込み、又引き出だしたる爲に生ぜしならん。喉頭は全く壓碎しありたり。腕の直下に數箇の爪痕及び暗紫色の斑點ありき。これ指にて強く壓したるがために生ぜしものならん。顔は腫脹せるため甚しき醜形を呈せり。兩眼球は眼蓋より突出しむたり。舌は半噛み切りありたり。上腹部に大いなる挫傷あり。恐くは膝頭にて壓したるものならん。

本人の斷定に依れば、レスパネエ家の娘は未詳の數人の絞殺するところとなりしならん云ふ。母の屍體も又甚しく損傷せられたり。右上半肢及び右下半肢のあらゆる骨は多少挫折せられたり。左脛骨及び左胸の諸肋骨は粉碎せられたり。その他全身に挫傷及皮下出血多く、一見恐るべき状態を示せり。此の如き損傷を來したるを見れば、脅力ある男子ありて、手に棍棒、鐵棒、椅子等の如き大いなる、重き、鈍き器を取り、それにて打撃したるものと推測せらる。如何なる武器を以てすとも、女子の力にては此の如き加害をなすこと能はざるべし。母の首は檢案の際全く軀幹より切り放し且つ挫滅しありたり。頸を切るには極めて鋭き器を以てしたるならん。或は剃刀なりしかと云へり。

アレクサンドル・エチアンヌは外科醫にして、ドユマアと共に屍體の檢案を命ぜられし助手なり。この醫師は總てドユマアの證言を是認し、又その斷定に同意を表せり。

以上の外証人として出廷せし人数は少からざれども、特殊なる事實は發見せられざりき。假に本事件を殺人犯なりとせんに、古來パリイ市中に於て此の如く事體暗黒にして、細部分までも不可思議なる殺人犯を出だしたること無し。今に至るまで警察は何等の手掛りをも有せずと云ふ。これ此の如き刑事問題にありては殆ど例無き事實なりとす。又警察以外の方面より見るに、これ亦この恐怖すべき出來事に對して説明

の片影をだに捉へ得たるもの無し」
新聞の夕刊には、聖ロッキュウス町ではまだ人心が洶々としてゐると云ふ事、犯罪の場所を再應綿密に調べたり、續いて證人を呼び出して審問したりしたが、いづれも得る所が無かつたと云ふ事などが出てゐる。その次に又銀行の小使アアドルフ・ルボンが逮捕せられたと云ふ事が書き添へてあつた。前に新聞に出た申立の外に、別段嫌疑の痕は無いのに未決檻に入れられたのである。

この事件の經過にドユバンはひどく興味を持つてゐるらしく見えた。少くもこの男の舉動を見て、己はさう云ふ推定を下だすことが出來たのである。かう云ふ場合の常として、ドユバンはこの事件の事を毫も口にしない。やつとルボンが縛られたと云ふ記事を読んだ時になつて、ドユバンは據に口を開いて、己にどう思ふと云つた。

己の意見は當時パリイの市民が一般に懷抱してゐた意見と同じである。この事件は到底解釋すべからざる秘密たる事は免れない。下手人の行方を捜し出す手段は所詮あるまいと云ふのである。

ドユバンは己の返事を聞いた上で云つた。「どうせ證人の申立なんぞは淺薄なもので、それに由つて搜索の手段を見出だすことは出來ないよ。パリイの警察は敏活だと世間で褒められてゐるが、あれは狡猾だと云ふに過ぎないね。何か捜さ

うとする時には、その利那利那の思付で手段を極める。その外には手段が無いのだ。大抵どうすると云ふ方針の数が極まつてゐて、何事もそれに當て嵌める。だからどうかするとちつとも實際に適合しない方針を取るようになる。笑話に或人が寢衣を着て音楽を聞いた事があつたので、その後音楽の好く聞えない時には、その寢衣を出させて著て見ると云ふことがある。パリイの警察もどうかするとこれと同じやうな滑稽を遺るのだね。成程既往に溯つて見ると、パリイの警察が好結果を得たことも澤山あるよ。だがそれは只念を入れて忍耐して捜し出したか、又は八方に手を出して捜し出したかの二つに過ぎない。この二つが駄目になると、警察はどんなに骨を折つても成功することが出來ないのだ。あのキドックなんぞは物を考へ當てること即ち射物がひどく上手で、忍耐してそれを追跡して往くのだ。ところがあいつの思量はなんの素養も無いのだから、考へ外れが澤山ある。そしてその間違つた方向に例の忍耐を以て固著してゐるのだから溜まらない。それにあいつは對象物を目の傍に持つて來て視る。流義だから、或る一二點を如何にも鋭く見るが、全體を遠觀することが出來ない。とかく物を餘り深く見ようとするとさうなるのだ。ところがいつでも井戸の中さへ覗けば眞理が得られると云ふものではないからね。僕なんぞは反對に考へてゐる。あらゆる重大な發見は大抵淺い所にあるのだね。人はその眞理

を谷間に求めたがるが、それよりか寧ろ山の頂に求めた方が好いのだ。この関係は天體を観察する方法を見ても分かる。人がどんな間違をするか、その間違が何から起るか云ふことが、天體の例で説明すると分かるのだ。星なんぞを見るのに、それを注視しないで、ざつと横目で見るのが好い。さうすると星が目の網膜の外圍部に映る。そこは中心部よりも微弱な光線を知覚するに適してゐる。そこで星の形もその光も一番はつきり分かる。それを注視すれば注視するほど星の光は濁つて来る。無論注視した時の方が、目に受ける光線は量が多いが、それを感じる事が鈍いから無駄になる。それに反して横目でちよいと見ると、少い量の光線に對する感受性が鋭敏なので却て好く見える。それと同じ道理で深くをくつた搜索法は人の思量を鈍らせて混雜させる。金星位な星だつてぢかにちつと見詰めてゐると、とうとう天の何處にもゐなくなつてしまふよ。そこであの殺人事件だがね。あれに就いて考案を立てるには、まづ我我ばかりの手で特別な搜索をしなくてはならないね。そいつが随分面白からうと思ふよ。」

ドユバンがから云つた時、あのいまはしい犯罪の形跡を尋ねるのが面白からうと云ふのを、己は随分異様に感じた。併し黙つてゐた。友達は語を繼いだ。

「それにあのルボンと云ふ男には、僕は一度世話になつた事がある。だからあいつを救つて遣るのは、僕のためには報恩

になるのだ。とにかく君と一しよに犯罪の場所を實驗しようぢや無いか。幸僕は警視を知つてゐるからあそこへ往つて見るだけの許可を得るのは造作は無いや。」

友達はかう云つて直ぐにそれだけの手續を實行した。そこで我我二人は早速病院横町へ出向いた。この横町はリシュリヨオ町と聖ロッキユウス町とを連接した狭い道で、パリの横町の中で、一番貧乏臭い横町の一つである。我々の住んでゐる所から聖ロッキユウス町までの距離は大ぶるので、我が病院横町に到着したのは午後遅くなつてからである。犯罪のあつた家は容易に見付かつた。それは大勢の人がその向側の人道に集つてゐて、なんの意味も無く物珍らしげに鎖された意を見詰めてゐたからである。家はパリの普通の建築で、中央に歩道があつて、その横手に引戸の付いた意がある。そこが門番のゐる所である。我々は直ぐに目當の家に這入らずに、まづその前を通り抜けて横町に曲つて、家の背後に出た。その間ドユバンは目當の家は勿論、その近郊の大家をも綿密に見てゐた。己はそれを無駄な事のやうに思つた。それから我々は再び家の裏口に戻つて、ベルを鳴らして警察の認可證を見せた。番をしてゐた役人が、我我を家の中へ入れた。我々は梯子を登つて、例のレスパネエ家の娘の死骸があつたと云ふ室に這入つた。そこに今は母親の死骸も一しよに置いてあるのである。己の目に這入つたのはガゼット。

デトリビュノオ新聞に書いてあつたやうなことだけであつた。ドユバンは何もかも綿密に検査した。二人の女の體をも見た。それから残の部屋部屋を歩いて見て、とうとう中庭に出た。その間憲兵が一人我我に離れずにどこまでも付いて來た。ドユバンの検査は日の暮れるまで掛かつた。役人に暇乞をして歸道に掛かつてから、ドユバンは或る新聞の發送所に立ち寄つた。

ドユバンと云ふ男が妙な癖のある男だといふことは、己はもう話した筈だ。だから己は何事も友達の勝手にさせて置く。その晩にはなぜだか知らぬがドユバンは病院横町の殺人事件の話をわざと避けてしないうやうにしてゐた。それから翌日の午頃になつてドユバンは突然己に言つた。「君はあのいまはしい場所で、何か特別な事に気が付きはしなかつたかね。」

その「特別な」と云ふ詞の調子が己には妙に聞えて、なぜだか知らぬが、己はぞつとした。己は云つた。「いや。どうも特別な事は僕には發見せられなかつたね。僕の氣の付いたのは、大抵新聞に書いてあつた位の事だね。」

友達は云つた。「どうも僕の考へたところでは、ガゼットなんぞはあの事件の非常に氣味の悪い方面に、まるで氣が付いてゐないのだね。だが新聞紙の下らない意見なんぞは度外視するとして、僕の考では人が解釋すべからざる秘密だと

思つてゐる廉が、却てその秘密を許し易くするわけになるのだね。あの事件の行はれた周圍の状況は、搜索すべき區域を極狭く、はつきりと限つてくれるから、僕は都合が好いと思ふ。なぜ警察がまごまごしてゐるかと思ふと、あの場合に人を殺すだけの動機はよしや推測することが出来るとしても、なぜあれ程慘酷な殺し態をしなくてはならなかつたかと云ふ動機がどうしても見付からないからだ。娘の殺されてゐた部屋に誰もゐなかつたと云ふ事實、それから梯子を登つて行つた人と擦れ違はずに、人間があの家から逃げ出す筈が無いと云ふ推測、この二つのものと、多くの人の聞いたと云ふ爭論の聲とを結び付けることはどうしても出来ない。そこで警察は途方にくれてゐる。それからあの部屋が極端に荒されてあつたと云ふ事や、娘の死骸が頭を下にして煙突にねぢ込んであつたと云ふ事や、母親の死骸に恐しい創が付けてあつたと云ふ事や、その外僕が今更繰り返すまでも無い若干の事實が、評判の警察官の鋭敏を横道に引き込んで、警察官は全然觀察力を失はされてしまつた。その横道に引き入れられたと云ふのは外でも無い。これは極粗笨な、ありふれた誤謬だね。即ち單に尋常でない事と深い秘密とを混同するのだね。ところが目の開いたものから見ると、その尋常でないこと云ふ事柄が却て眞理の街を教へる筈になるのだね。かう云ふ場合に搜索をするには、「どう云ふ事が行はれたか」と云ふより

は寧ろ「行はれた事の中で、どれだけが前例の無い事か」と云ふところに著眼しなくては行けない。いづれ僕はこの謎を容易に解いて見せる。いや、もう解いてゐると云つても好い。ところがその容易なところ、警察なんぞの目で解き出すべからざるものと認むるところと一致してゐるのだね。」

この詞を聞いた時、己は呆れて詞もなく友達の顔を見詰めてゐた。

かう言ひ掛けて友達は入口の戸を顧みた。それから語を繼いだ。「實は僕は今客を待つてゐる。その客と云ふのは多分下手人ではあるまいが、少くもあの血醒い事件に或る關係を有してゐる人物なのだ。僕の推察では、その男は犯罪の最も重大な部分に對する責任は持つてゐないだらう。大抵僕の推理は適中する積りだ。僕の謎を解く手段は、今来る客を基礎にしてゐるのだから、これが適中しなくてはならないのだ。もうそろそろ来るさうなものだと思ふが、それはどうかすると来ないかも知れない。併し先づ僕は来る方だと思ふ。そこで来たらそいつを逃さないやうにしなければならぬ。見給へ。ここに拳銃が二つある。君も僕も打つ事は知つてゐる。これが用に立つかも知れないのだよ。」

己はその拳銃を手に取つたが、なんのためにさうしたのか分からなかつた。又友達と言つてゐる事も、十分腑に落ちなかつた。ドユバンは構はずに饒舌り續けてゐる。それが獨

語のやうな調子である。こんな時の友達の様子が、餘所に氣を取られたやうな、不思議な様子だと云ふ事は、己は前に話した筈だ。友達は己を相手に物を言つてゐるのに、その格別大聲でも無い聲が、なんだか餘程遠い所にある人を相手にして物を言つてゐるやうな一種の調子になつてゐる。その目はなんの表情も無く向うの壁を見詰めてゐるのである。

「あの梯子を登つて行く人達が聞いたと云ふ、喧嘩をしてゐたものの聲が女親子の聲で無いと云ふ事は、證人の申立てで證明せられてゐると云つても好からう。さうして見るとお婆あさんが娘を殺して置いて自殺しただらうと云ふ推察は、頭から問題にならない。こんな事を言ふのは餘計な事だが、順序を正して話すために、僕は言つて置くのだ。お婆あさんには娘の死骸を煙突の中へ押し込む腕力もあるまいし、又お婆あさんの體の創を見ても、自分で付けられる創で無いことは分かる。さうして見ると第三者の下手人が無くてはならない。この下手人は單獨で無いことが、例の物争をした聲で分かる。まあ、新聞の中であの聲のことを言つてゐる申立を讀み返して見給へ。一一皆讀んで見なくても好い。目立つたところを繰り返して見れば好い。そこで君には何か特別な事が目に留まりはしないかね。」

を出したものに就いては證人毎に變つた判断をしてゐると云ふ點だと答へたのである。

「君の云ふのは證言其ものであつて、その目立つのが何物だと云ふことにはなつてゐない。さうして見ると君にはその特別なところが分らないらしいが、たしかに特別なところがあるのだよ。君の云ふ通りどの證人も所謂そつけない聲に就いては異論が無かつた。ところが所謂鋭い聲となると區區なことを云つてゐる。イタリア人とか、イギリス人とか、スペイン人とか、フランス人とか云ふが、要するにその申立をした人が自國の人で無くて、外國の人だと思つたのだ。假令はフランス人の云ふには、あれは多分スペイン人であつたらう。若し自分にスペイン語が分かつたら、何を言つたか、一言や二言は分かつたに違ひ無いと云ふ。又フランス語を知らないで、通譯を以て申し立てたオランダ人は、その鋭い聲をフランス人だらうと云ふ。ドイツ語の分らないイギリス人はドイツ語だらうと云ふ。イギリス語の分らないスペイン人は、發音から推測してイギリス人だらうと云ふ。ロシア人の談話を聞いたことの無いイタリア人はロシア語だらうと云ふ。イタリア語の分らない、今一人のフランス人はイタリア語だらうと云ふ。これも發音から推測したのだ。さうして見ると所謂鋭い聲は餘程異常な不思議な聲だつたに相違無い。つまりヨオロッパ中のどの國の人も自國では

そんな聲を聞いた事が無いのだ。そこで君はその聲の主をア

ジア人かアフリカ人かであつたかも知れないと云ふだらう。まづさう云ふ人種はバリエには餘り多く見掛けない。それはともかくも僕は君に證人共の申立の中で、三人の言つた事に注意して貰ひたい。一人はその聲が叫ぶやうであつて鋭いと云ふのも當らないかも知れないと云つてゐた。跡の二人は忙しく不整調に饒舌つたと云つてゐる。どの證人も言語や言辭らしい音調を聞き分けたものが無い。これだけの説明をしたところで、君はその中からどれだけの判断を下すか知らないが、僕は證人共の説明した聲の性質から、この問題の研究に一定の方針を立てるだけの根據を見出だしたと斷言することを憚らない。僕は僕の推理が唯一の正しいものだと思ふ。そしてその推理から或る嫌疑が出て来るのだ。僕はその嫌疑に本づいてあの部屋を見るにも特別な點に注意したのだ。」

「まあ、お互に今あの部屋に這入つたと想像して見給へ。そこで何を捜したら好いだらう。どうしても下手人の逃げた道と、どうして逃げたと云ふ手段とが先に立たなくてはならぬ。そこで君だつて僕だつて奇怪不思議な事、超自然の事があるとは信ぜない。これは無論の話だね。そこでレスパネエ夫人と娘とは決して怪物に殺されたのでは無いとすると、その下手人は血もあり肉もあるもので、それが逃げるには、自然の道に由つて逃げなくてはならない。ところでどうして

逃げただらう。まづ片端からあらゆる逃道を数へて見よう。大勢の人が梯子を登つて行く時、下手人の仲間、あの娘の死骸のあつた室かその鄰室かにゐたに相違無い。して見るとこの二つの室から外へ通ずる道を考へて見れば好いわけだ。警察では床板や壁や天井まで目を著けて板なんぞを剝いで探つて見たらしい、だから秘密な出口なぞの人の目に付かずにしまつたものの無いことは分かる。ところが僕は役人共の目に信頼することが出来ないから、自分の目で見直した。二つの室から廊下へ通ずる二つの戸口があるが、その戸は締めてあつたのだ。戸の鍵には内から鍵が挿し込んであつた。そこでカミン爐はどうだ。爐の中を見ると、火床の上八尺乃至十尺位の所までは通常の廣さになつてゐる。併しそれから上は細くなつてゐて、猫でも少し大きいのは通られない。これだけ考へて見ると、残つてゐる逃通は窓の外には無い。そこで前面の窓の窓から逃げようと云つたつて、それは往來に集つてゐた大勢の人に見られるから出来ない。下手人はどうしてこの断案は精密な研究から得來つたものであつて見れば、あの窓からは逃げられさうも無いと云ふやうな淺薄な反對を受けても、それでこの断案を翻すわけには行かない。そこでこの不可能らしく見えてゐる事が可能だと云ふことを證明しなくてはならぬ段取になるのだ。」

「あの室には窓が二つある。その一つの窓の側には家具なんぞは置いて無い。窓は全形が見えてゐる。今一つの窓の下部は重くろしい寢臺の頭の方で見えなくなつてゐる。全形の見える分の窓は密閉してあつた。僕の往くまでにもその戸を下から押し上げて開けようとしたものがあつたのだが、どうしても開かなかつたのだ。その窓の枠の左側には可なり大きい錐孔が挿んであつて、それに一本の釘が、殆頭まで打ち込んである。今一つの窓を検査して見ると、やはり同じやうな釘が同じやうに打ち込んである。この窓の戸も下から押し上げようとしたつて上がらない。それだけのことは警察の役人も遣つて見て、そこで下手人が窓から逃げた管が無いと決定した。だから役人共はその釘を抜いて窓を開けて見る必要を認めなかつたのだ。」

「ところが僕は今少し立ち入つた研究をした。なぜと云ふに彼の不可能らしい事を可能にするには、この窓の研究を以てするより外に道が無いからだ。」

「僕はこの場合に結論から逆に考へて見た。下手人はこの二つの窓の内、どれかから逃げたに相違無い。逃げたとすれば、その窓を内から締めることは出来なかつた筈だ。警察と役人共もこれだけのことは考へたが、そこで行き止まつた。成程窓は締めてあつた。併しどうかして一旦開いた後に、ひとりで締つたかも知れない。この断案は動かすべからざるも

のだ。僕は全形の見えてゐる窓に往つて釘を抜いて見た。釘は少し力を入れて引つ張ると抜けたが、窓の戸を押し上げることはどうしても出来なかつた。そこでこれはどこかに撥條が隠れてゐるだらうと思つた。釘だけの事を考へると、如何にも不思議らしく見えても、撥條があるとする、解決の道が見付かつた。そこでその撥條を押し上げた。僕はまづそれだけで満足して、窓の戸を押し上げては見なかつた。僕は釘を挿し込んで置いて、注意して窓の工合を見た。假に人がこの窓から逃げて外からその戸を締めたとする、撥條は締まるだらうが、釘は挿さらない。それは簡単な道理で、この道理が僕の研究の區域を一層狭めてくれたことになる。即ち下手人は今一つの窓から逃げたに相違無いのだ。」

「そこで二つの窓を較べて見るのに、全く同じ形をしてゐる。撥條も同じであらう。すると釘はどこかに違つたところが無くてはならない。僕は寢臺の裏布團の上が上がつて、寢臺の頭の方の蔭になつた所を綿密に搜した。手を寢臺の向うに廻して探るうちに、果して撥條が手に障つた。僕はそれを押して見た。撥條の構造は全く前の窓と同じであつた。そこで僕は釘を見た。その大きさは前の窓の釘と同じで、やはり殆釘の頭まで打ち込んである。君はここまで話すと、僕が失望しただらうと思ふかも知れないが、それは僕の推理の工

夫を領解しないのだ。鐵師の詞で言ふと僕は決して血際を見損なつたのでは無い。又血際を尋ねて行く途中で僕は少しもまご付いたのでは無い。僕の推理をして來た思想の連鎖は一節毎に正確なのだ。僕は秘密を究究のところまで追尋して來てゐる。どうしても釘に曰くが無くてはならない。見たところでは釘の形は前の窓の釘と同じだ。併しどうしてもどこかが違つてゐなくてはならない。なぜと云ふに外観が同じだと云ふ位なことで、僕の正確な思想の連鎖は断たれないからだ。」

「そこで僕は釘に手を掛けた。すると釘は折れてゐて、頭に二分五厘許の柄が付いて、ぼろりと抜けて、己の指の間に残つた。柄のそれ以下の部分は錐の挿孔の中に嵌つてゐる。この釘の折れたのは餘程久しい前で無くてはならぬ。なぜと云ふに折目が錆びてゐるからだ。多分釘は槌で打ち込む時折れたのだらう。折れながら打ち込まれて、頭の痕を窓枠の下の方に印するまで這入つたのだらう。己は又その釘の頭を元の通りに錐の孔に嵌めて見た。しつくり嵌つて、折れた釘とは見えない。それから己は撥條を押し上げて窓の戸を二三寸押し上げて見た。窓の戸はすうつと上がる。釘の頭だけが付いて上がる。手を放すと窓の戸は下りてしまふ。釘の頭は依然としてゐる。」

「さうして見ると謎がここまでは解けたと云ふものだ。下手

人は寢臺の置いてある側の窓から逃げたのだ。逃げた跡で窓はひとりでもに締まったのだらう。又窓の外の開戸は逃げた奴がはずみで締まるやうに撥ね返して置いたかも知れぬ。とにかく内の戸は撥ねが利いて跡が旨く締まつてゐたのだ。その締まつてゐたのを、警察は釘のためだと思つて、それから先を研究しなかつたのだね。」

「そこで下手人は窓から出たには相違無いが、出てからどうして下りたかが疑問だ。己は家の外廻を廻つて見た時、そこに氣を付けて見た。丁度あの窓から五尺五寸許の距離に逆雷針から地面へ引いた針金を支へる棒が立つてゐる。併し外から這入るとすると、この棒を登つて往つて、窓に手を掛けることは出来ない。況んや窓から這入ることは出来る筈が無い。ところがあの家の第四層の窓の外枠はこの土地でフェルラアドと云ふ構造になつてゐるのに、己は氣が付いた。この種類の窓枠は、近頃殆ど造るものが無い。リヨンやポルドオの古家でよく見る窓枠なのだ。この構造の窓では、外側の戸は普通の觀音開の戸と違つて、寧ろ室の入口の戸に似てゐる。ただその下半分に横に棧が打つてあるか、又は透かしになつた格子を取り付けてある。どつちにしても手で掴むには都合が好く出来てゐる。そこであの家のあの窓の外枠だが、あれは幅が少くも三尺五寸位ある。我が家が裏から見た時、外の戸は半分開いてゐた。即ち壁の面と直角を形づくつてゐた

のだ。多分警察の奴等も家の裏側を検査したには相違無い。併しあのフェルラアドの幅の廣いのに氣が付かなかつたか、それとも氣が付いてもそれを利用するものがあらうと云ふところまで考へなかつたか、二つの内どつちかだ。要するにこんな所から逃げられる筈が無いと、大早計に極めてしまつたので、この邊は好い加減に見過こしたのだ。ところが己はあの窓を外から見た時、外の戸をびつたり壁まで開くと、針金を支へた棒から二尺の距離に外の窓枠があつて、手が届くと云ふことに氣が付いた。さうして見るとここに非常に輕捷な然も大膽な奴がゐて、あの棒からあの窓枠に飛び付かうとすれば、飛び付かれると云ふことが、己には分かつた。さう云ふ奴が棒を攀ぢ登つて行つて、壁へ付いてゐた外の窓枠の棧にしつかり掴まつて、今まで手を絡んでゐた棒を放して、足で壁を踏まへて體を窓枠にぶら下からせて撥ね返すと窓の外側の戸が締まる。その時窓が開いてゐれば、そいつは窓から室内へ飛び込むことが出来るのだ。」

「そこで君に注意して貰ひたいのは、そんな冒險な事を旨く爲さげけるには、そいつが非常な輕捷な奴で無くてはならぬと云ふ點だ。僕の説明するのはさう云ふ輕捷が不可能で無いと云ふのが一つで、それからこれを爲さげけるのは、非常に輕捷な奴で無くてはならぬと云ふのが二つだ。かう二段に分けて僕の説明を聞き取つて貰はなくてはならないのだね。」

「この説明を聞いたところで、君には多分不得心な處があるだらう。それは窓から這入つて行く奴が非常に輕捷で無くてはならぬ半面には、そんな輕捷な働を要求する爲事を爲さげけるのは困難だらうと疑はなくてはならぬと云ふことがあるからだ。刑事の役人共も大抵さう云ふ考方をするが、それは理性の歩んで行くべき正常な道筋で無いのだ。僕なんぞは只眞理を目掛けて、一直線に進んで行く。この場合に僕が君に對してしてゐる説明は、その非常な輕捷な體と、例の不思議な、鋭い、又は叫ぶやうな聲とを連係させて考へて貰はうとするにあるのだ。あの證人共が區區な聞き取りやうをした、詞に組み立てられてゐなかつた聲と連係させるのだね。」

これまで聞いた時、僕はデュパンの説明が、不確ながら、どうやらほんやり分り掛かつたやうな氣がした。今少しで分りさうになつて、まだ分らないと云ふ點に到着した。好く忘れた事を思ひ出さうとする時、誰にもそんな經驗があるものだが、今少しで思ひ出されさうでやはり思ひ出されないのだ。友達は語を繼いだ。

「僕はあの窓の話をしてゐるうちに、窓を逃道として考へることを止めて、入口として考へることにした。併し僕は這入るにも出るにもあの窓を使つたものと考へてゐるから、それで差支へ無いのだ。そこであの室内の状況を思ひ出して見てください。單筒の抽斗は引き出して、中が掻き廻してあつ

て、何か取つたものらしいが、まだ、跡に品物は澤山残つてゐたと云ふことだつたね。僕が考へると、これは随分不思議な、又馬鹿げた判断だ。跡に残つてゐたと云ふ衣類その外の品物が、抽斗にあつた品物の全部だつたかも知れないぢや無いか。レスパネエ夫人と娘とは、世間と交際をした事も無い。外へもめつたに出ない。さうして見ると衣類なんぞは澤山いらぬ筈だ。それに残つてゐた衣類は、その親子の女の身分としては極上等の衣類だとしなくてはならない。若し賊が衣類を取つたとすると、好い物を残して置く筈が無い。又皆取らずに置く筈が無い。その外金貨四千フランもそつくりあつたと云ふぢや無いか。まさか金貨や上等の衣類を残して置いて、不斷著を背負つて逃げはすまいぢや無いか。然も残つてゐた金貨は夫人がミニオ銀行から引き出して來た金の全額で、それが袋に入れたまま床の上にあつたのだ。警察のやつらは銀行の關係者の證言を土臺にして、金を目當の殺人犯だと狙ひを付けてゐるらしいが、僕の説明をここまで聞いた以上は、君はそんな見當違ひの所に殺人犯の動機があらうなんぞと思はないことにして貰ひたい。世間には前の出來事と後の出來事となんの關係も無い事が幾らもある。金を受け取つて、それからその受け取つた人が三日目に殺されたと云ふより、もつと關係がありさうな關係の無い事が澤山ある。とかく練習の足りない人の思想は偶然と云ふ石に置き易い。

それは恐然の法則、プロバビリチイの法則と云ふものを知らないからだ。あらゆる學科にあの法則で得た發明が澤山あるのだ。三日前に金を受け取つて殺されたとしても、その金が紛失してゐたなら、金と殺人犯との間に偶然以上の關係があるものとも見られよう。さう云ふ場合には殺人犯の動機を金に求めて好からう。併し今の場合で金を動機だとするには、その下手人を非常なぐづだとしなくてはならない。馬鹿だとしなくてはならない。さうしなくては動機と金を一しよに繋つたわけになるのだからね。」

「そこで我我は先づこれまで研究して得た重要な箇條をしつかり捕捉してゐる事とするのだね。即ち不思議な聲と、それから非常な敏捷な體との二つだ。それからその外にはこれと云ふ動機が全然缺けてゐると云ふ事實をも忘れてはならない。そこで我我はあの殺された女達の創のことを考へて見よう。」

「一人の女は素手で絞め殺して、死骸を逆に燂爐の中にねち込んであつた。どうもこれは普通の殺し方では無いね。殊に死骸の隠し方が不思議だ。そんな風に死骸を燂爐の中にねち込むと云ふことは、どうも人間の所爲としては受け取れない。如何に人の性を失つた極悪人のした事としても受け取れない。その上女の體を狭い所へねち込んで、それを引き出すのには數人の力を合せて、やつと引き出されるやうにしたに

は不思議な力が無くなくてはならないのだね。」

「その外非常な力のある奴の爲業だと云ふ證據はまだある。燂爐の縁の上にあつた髪の毛だね。白髪の毛が幾束も根こじに引き抜いてあつたのだ。假令二十本か三十本でも人の髪の毛を一しよに頭から引き抜かうと云ふには、どれだけの力があるか、考へて見給へ。君も僕といつしよにあの髪を見たのだからね。あの髪の毛の根には頭の皮がぎれて食つ付いてゐたわけね。何千本と云ふ髪の毛を一掴にして、皮の付いて来るやうに抜いた力は大したものでは無いか。それからお婆さんの吭の切りやうだね。吭を切つただけなら好いが、頭が胸から切り放してあつた。然もそれが剃刀で遣つたらしいのだね。それだけだつて人間らしくない粗暴な爲業だ。その外夫人の體の挫傷も下手人の力の非常に強い證據になる。ドユマアと云ふ醫者と、エチアンヌと云ふ助手とが鈍い器で付けた創だと云つたが、如何にもその通りで、その鈍い器は、僕の考へでは、あの中庭に敷いてある敷石だ。警察の奴等がそこに氣の付かなかつたのは、例の窓枠に氣の付かなかつたのと同じわけだ。内から釘が挿してあると云ふだけを見て、それから先は考へずに置く」と云ふ流義だね。」

「これまで話した事と、その外室内がひどく荒してあつたと云ふ事を考へ合せて見れば、次の事實が分かるのだ。非常に輕捷だと云ふ事、一人の力とは思はれない程の力があると

云ふ事、人間らしく無い粗暴な事をする」と云ふ事、意味の無い荒しやうをする」と云ふ事、これを合せて見ると、殘酷の中に人間離れのした異様な舉動があるのだ。そこへ誰の耳にも外國人らしく聞えて、詞としては聞き取られない聲を考へ合せて見るのだね。そこで君はどう判断する。どう云ふ考が君には浮んで来る。」

ドユバンにこの問を出された時、己は骨に徹へるやうな氣味悪さを感じた。そして云つた。

「氣違だらうか。どこか近い所にある精神病院を脱け出した躁狂患者だらうか。」

「さうさ。君の判断も一部分から見れば無理では無い。併し躁狂の猛烈な發作の時だつて、そんな不思議な聲は出さない。狂人だつてどこかの國の人間だから、どんなに切れ切れにどなつても、聲が詞にはなつてゐる。そこで僕は君に見せるものがあるのだ。これを見給へ。氣違だつて人間だから、こんな毛が生えてゐはしない。」かう云つて友達は手の平に載せた毛を見せた。「これはレスバネエ夫人が握り固めてゐた拳の中にあつた毛だよ。君はこれをなんの毛だと思ふ。」

己はいよいよ氣味が悪くなつて云つた。「成程それは不思議な毛だね。人間の毛では無いね。」

「さうさ。僕だつて人間の毛だと云つてはゐないぢや無いか。併し僕の考を話すより前に、君にこの圖が見て貰ひた

い。これは僕があの時鉛筆で寫して置いたのだ。證人共が紫色になつてゐる痕だと云つたり、ドユマアやエチアンヌが皮下出血の斑點だと云つたりした、あのレスバネエの娘の頭の指痕だよ。」かう云つて友達は卓の上にその紙を擲けた。「この痕で見ると、一掴にしつかり掴んだもので、指が少しもすべらなかつたことが分かる。一度掴んだ手は、娘さんが死んでしまふまで放さなかつたのだ。ところで君の右の手を擲けてこの指の痕に當てがつて見給へ。」

己は出来るだけ指の股を擲けて、圖の上に當てがつて見たが合はない。

「ところでまだ君のその手が今の場合に合はないだけでは、正確な判断が出来ぬかも知れない。なぜと云ふにその紙は平卓の上に擲けてある。人間の頭は圓筒形になつてゐる。ここに圓い木の切がある。大抵大きさも人間の頸位だ。これにその紙を巻いて手を當てて見給へ。」

己は友達の云ふ通りにして、又手を當てて見たが、やはり合はない。この時己は云つた。

「どうもこれは人間の手では無いね。」

「よし。そんならここにあるこの文章を読んで見給へ。」かう云つて友達の出したのは、キユキエの著書で、東印度諸嶋に産する暗褐色の毛をした猩猩の解剖學的記述である。初の方には體の大きい事、非常に輕捷で力の強い事、ひどく粗

暴な事、好んで人眞似をする事などが書いてあつて、それから體の解剖になつて、手の指の説明がある。己はそれを讀んでしまつて云つた。

「成程、この手の指の説明は、君の取つた圖に符合するね。どうも猩猩より外にはこの圖にあるやうな指痕を付けることは出来まい。それに君の取つて来たこの毛の褐色な色合もキユキエエの書いてある通りだ。さうして見ると人殺をしたのは猩猩であつたのだらう。併しまだ僕には十分飲み籠めないことがあるね。證人の聞いた聲は二人以上で、中にフランス人がゐたと云ふのだからね。」

「成程、それは君の云ふ通りだ。君も覚えてゐるか知らないが、證人の中で大勢が聞き取つたフランス語の中に「畜生」と云ふ語があつた。あれを證人の一人が相手を叱るやうな調子だつたと云つてゐる。たしかモンタニイと云ふ菓子商の申立だつたね。僕はあれに本づいて解決を試みようと思ふのだ。僕はかう思ふ。あの殺人犯の現場を見てゐたフランス人がある。併しその男はあの血腥い事件の一一の部分に對する責任を持つてはゐないかも知れない。多分責任を持つてはゐないだらうと云つても好からう。そこでこんな想像が出来る。その男は猩猩を飼つてゐたところが、それが逃げた。そこで追つ掛けてあの家まで来たが、あんな残酷なことをしてしまふまで、そいつを掴まへることが出来なかつた。その間獸は自

由行動を取つてゐたと云ふのだね。これは只の想像で、僕にだつてきつとさうだとは思はれないから、人に同じ想像を強ひることは出来ない。併し僕はとにかくゆうべあの家を見た歸途にル・モンド新聞社に寄つて廣告を出させて置いた。あの新聞は海員の機關で、讀者には水夫が多いのだよ。そこでさう云ふフランス人があるとして、そいつが直接に血腥い事に關係してゐたら名告つて出はすまいが、さうで無いと名告つて出るだらうと思ふのだ。」

かう云つてドユバンは己にけふのル・モンド新聞の廣告欄を見せた。かう云ふ廣告がしてある。

「猩猩一頭、右は大いなる黄褐色のものにして、ボルネオ嶋に産したるもの如し。本月〇〇日（この所に殺人事件のありし翌日の日附あり）朝ボア・ド・プロニユに於て捕獲す。この動物はマルタ航海會社の汽船の乗組水夫が飼養しゐたるものなることを聞けり。同人は左の家宅に來り、動物の状態を説明し、捕獲並に飼養の入費を支辨するときは動物を受け取ることを得べし。フォオブル・サン・ジェルマン町〇番地第三層屋。」

己はドユバンに問うた。「マルタ航海會社と云ふのはどうして分かつたのだね。」

「それは僕も實際知らないのだ。少くもたしかには知らないのだ。併しこの紐の切を見てくれ給へ。これは布の襟子と油

染みた所とから見ると、水夫が襟子を縛る紐らしい。それにこの結玉を見給へ。これは水夫で無くては出来ない結方だ。それにこの結方をするのは、まづマルタ航海會社の水夫らしい。僕はあの避雷針の針金を支へた棒の下でこれを拾つて、そしてどうしても殺された女達の物で無いと思つたのだ。この紐が水夫になつてゐるフランス人の物で、その水夫がマルタ航海會社に使はれてゐるかどうだか、それはたしかには分からないが、とにかく僕はさう判断して廣告をして見たのだ。間違つたつて、この廣告は誰にも迷惑を掛ける處は無いからね。假に猩猩を逃がした男があるとして、その男がマルタ航海會社の水夫で無かつたら、其男は僕が何か聞き違へたものだと思ふだけの事だ。若し又僕の推測が當つたとする、大いに、こつちの利益になる。なぜと云ふにそれだけの事が分かつてゐると思ふと、その男がここまで出向いて來るのに來易いのだ。無論その男は自分で人を殺さないまでも、殺人事件に關係してゐるのだから、廣告の場所へ猩猩を受け取りに來るには躊躇せずにはゐられない。まあ、こんな風に考へるだらう。己は罪を犯してゐない。己は貧乏だ。あの猩猩は随分金になる代物で、己の身分から見れば一應の財産だ。それを餘計な心配をしてなくさ無いでも好い。どうにかして取り戻したいものだ。廣告で見ると猩猩を生捕つたのがボア・ド・プロニユだと云ふ事だ。さうして見ると人を殺

した場所からは大分距離がある。それに智慧の無い動物があれ程のことをしようとは誰だつて容易には考へ付くまい。警察もまるで見當が付いてゐないらしい。よしや動物の爲業だと分かつたところで、己が現場を知つてゐると云ふことを證明するのがむづかしからう。廣告で見ると動物を生捕つた人は己を知つてゐて、己が猩猩の持主だと認めてゐる。己の身の上で就いてどれだけの事を知つてゐるのだから知らぬが、己の物だと分かつてゐる猩猩を、あれ程の高價の物なのに、わざと受け取りに行かなかつたら、卻て嫌疑が己に掛かるかも知れない。とにかくあの猩猩や己の事に就いて世間が穿鑿をし出すと面倒だ。それよりか素直に猩猩を受け取つて來てしつかり閉ぢ籠めて置いて、あの血腥い事件の上に草が生えるまで待つに限る。まあ、こんな風に考へるだらうと思ふよ。」

ドユバンがここまで話した時、梯子を登つて來る足音がした。

「君、その拳銃を持つてくれ給へ。併し僕が合圖をするまでは出して見せては行けないよ。」ドユバンがかう云つた。

家の第一層の門口は開いてゐたので、來た人はベルを鳴らさずに這入つて、第三層まで梯子を登つて來た。それから我がのある室の外の廊下に来て、暫く立ち留まつてゐた。その内又梯子を下りる足音がした。ドユバンは忙しげに戸口へ出ようとした。その時足音は又梯子を登つて來るやうに聞え

た。今度は猶豫せず戸の外まで来て戸を叩いた。「お這入りなさい。」と暢氣らしい大聲でデュバンがどなつた。

這入つて来た男は水夫らしい。丈が高く、力がありさうで、全身の筋肉が好く發育してゐる。どんな悪魔にも恐れさうに無い大膽な顔附をしてゐるが、意地が悪さうには見えな。顔はひどく日に焼けてゐて、鼻から下は八字鬚と頬髯とで全く掩はれてゐる。手に大きい柄の木の杖を衝いてゐる外には、別に武器は持つてゐない。不細工な辭儀をして、純粹なパリイ人の調子で「今晚は」と云つた。

「まあ、掛け給へ。君は猩猩の一件で来たのだね。實に立派な代物だ。随分値も高いのだらうね。大した物を持つてゐるぢやないか。わたしは羨しくてならないね。あれで幾つ位になつてゐるのだらう。」デュバンはこんな調子で話し掛けた。

水夫は太息をした。やれやれ餘計な心配をしたが、この調子なら安心だと思つたらしい。そしてゆつくりした詞で云つた。「さうですね。わたしも好くは知りませんが、精精四歳か五歳位でせう。ここに置いてありますか。」

「いや、どうもこの家にはあれを入れて置くやうな場所が無いからね。ぢき側のデュブル町の貸屋に豫けてあるから、あすの朝取りに往つて下さい。君が持主だと云ふ證明は十分出来るでせうね。」

い。僕だつてあの病院横町の犯罪が君の責任だとは思つてゐない。併し君があつた事件に關係してゐると云ふことだけは分かつてゐるのだ。僕の廣告を見ても分かるだらうが、僕がどだけだけの事を知つてゐて、又これから先探らうと思へばどだけだけの事を探る手段を持つてゐると云ふ想像は君にも付くだらう。まあ、碎いて話せばからだね。君は何も悪い事をしたのでは無い。又させたのでも無い。君はあの場合に物を取らうと思へば取られたのだが、それを取らなかつた。だから何も君が隠し立をする必要が無い。併し君の知つてゐるだけの事は言はないではないのだ。あの事件のために無實の罪を蒙つて牢に這入つてゐる人があるのだからね。」

デュバンがこれだけの事を言つてゐるうちに、水夫は餘程氣色を恢復したが、この室に這入つて来た時の勇氣はもう無かつた。水夫は暫くして云つた。

「いや。わたしの知つてゐるだけの事を話させよう。併しあなたがそれを半分でもほんとうだと思つて下されば結構なのです。わたし自分でさへ謎のやうに思はれるのですからね。その癖あの事件はわたしの知つた事では無いのです。まあ、首に掛るかも知れないが、實際の所を話させよう。」

水夫の話は大略からである。水夫は近頃東印度群島へ往つた。その時ボルネオに上陸して仲間と一緒に山に這入つた。そして今一人の男に手傳つて貰つて、猩猩を生捕つた。その

「それは出来ます。」

「どうもああ云ふ代物を君に返すのは、惜しいやうな氣がするね。」デュバンはかう云つた。

水夫は答へた。「それはお骨折をして下すつただけのお禮はしなくてはなりません。大した事は出来ませんが。」

デュバンは云つた。「成程。そこで、まあわたしに考へさせて貰はなくしては。幾ら貰つたものかね。わたしの方からいづれ幾らと切り出さなくてはなるまいが、それより先に君に聞きたいことがある。君、あの病院横町の人殺事件をここですつかり話して聞かせてくれ給へ。」

デュバンはこの詞の後の半分を小聲でゆつくり言つて、徐に立つて戸口に往つて鎗を卸して鍵を隠しに入れた。それから内隠しに手を入れて拳銃を出して、落ち著き拂つてそれを卓の上に置いた。

水夫の顔は忽ち眞つ赤になつた。水に溺れさうになつた人の顔のやうな表情である。さうして跳り上つて柄の木の杖を持つて身構をした。併しそれはほんの一瞬間で、水夫は忽ち又死人のやうな蒼い顔になつて、身を震はせながら椅子に腰を卸した。己は側で見てゐて、心から氣の毒になつた。

その時デュバンは優しい聲で言つた。「君、何にもそんなに心配しなくても好いよ。我我は君をどうもしようと思つてゐるのではない。フランスの一男子として君に誓つても好

男は死んだ。そこで猩猩は自分一人の所有になつた。猩猩は中中馴れないので歸途随分困つた。併しとうとうパリイへ連れて戻つた。水夫は船にゐた時足を怪我をしてそれを直すために醫者の所へ通はなくてはならぬので、猩猩を部屋に閉ぢ籠めて置いて、足の創が直つてから賣らうと思つてゐた。さあ、あの殺人事件のあつた夜の事である。否、拂曉の事である。水夫は仲間の會があつて、それに出席して拂曉に歸つて来た。すると猩猩が閉ぢ籠めてあつた室から脱け出して、寢部屋に来てゐた。そして鏡の前に坐つて、顔に石鹸のあぶくを一ぱい付けて、手に剃刀を持つて、鬚を剃る眞似をしてゐた。多分水夫が顔を剃つた時、鎗前の孔から覗いて見てゐて、その眞似をするのだらう。氣の荒い、力のある動物の手に剃刀を取られてゐるので、水夫はどうしようかと暫く思案した。これまで猩猩が暴れ出すと、鞭で威すことにしてゐたので今度も鞭を出した。猩猩は鞭を見るや否や、直ぐに戸口から走り出て梯子を駆け下りた。それから第一層の窓が開いてゐたのを見て、往來へ飛び出した。水夫は一しよ懸命に追つ掛けた。猩猩は剃刀を持つたまま少し逃げては立ち留まつて、振り返つて見て、水夫を擲擧ふやうにして、追ひ付きさうになると、又逃げた。こんな風で餘程長い間追つて行つた。午前三時の事だから、人の往來は無い。そのうち病院横町の裏へ来ると、一軒の家の高い窓から明りのさしてゐる

のが猩猩の目に付いた。それがレスパネエ夫人の住んでゐた第四層の窓であつた。猩猩は窓の下へ駆け寄つた。そして避雷針の針金を支へた棒を見付て、それに登つた。そして壁にびつたり付くやうに開いてゐた窓の外の戸の棧に掴かまつて室内の窓の上へ飛び込んだ。それが一分間とは掛からなかつた。猩猩は室に這入る時、外の戸を背後へ撥ねたので、外の戸は又開いた。水夫は安心したやうな、又氣に掛かるやうな心持がした。なぜ安心したかと云ふに、猩猩は同じ棒を傳つて下りて来るより外は無いから自分で綱に掛かつたやうなもので、もう掴まへられさうだと思つたからである。なぜ氣に掛かるやうに思つたかと云ふに、あの窓の中で何か悪い事をしてかすかも知れぬと思つたからである。その氣に掛かるところから、水夫は決心して猩猩の跡から附いて登つて、窓を覗いて見ようとした。水夫の事だから棒に攀ぢ登るのは造作も無かつた。併し窓の高さまで登つて見ると、それから先へは往かれなかつた。窓は左手にあつて、大ぶ離れてゐる。體を曲げて覗いて見なくては、室内が見えない。やつと覗いて見た時、水夫はびつくりして、今少しで手を放して落ちるところであつた。この時救ひを求め恐しい聲が、病院横町の人の眼を破つたのである。レスパネエ夫人と娘とは寢衣一つになつて、例の鐵の金庫を室の眞ん中に引き出して、その中の書類か何かを整理してゐたらしい。金庫を開けてあ

つて、中の物が床の上に出してあつた。多分二人の女は窓の方を背にして坐つてゐたのだらう。なぜと云ふに、猩猩の飛込んだ時から、叫聲のした時まで大ぶ暇があるからである。二人はその間氣がつかずにゐたものと見える。窓の外の戸を撥ね返した音は聞えた筈だが、親子は風にあふられたのだと思つてゐたのだらう。水夫が窓から覗いた時には、猩猩はレスパネエ夫人の白髪を左の手で掴んで、右の手で剃刀を顔の前に持つて行つて上げたり下げたりしてゐた。床屋が人の顔を剃る眞似でもしてゐるやうに見えた。夫人の髪を掴んだのは多分夫人が髪をとかしてゐたので、猩猩がそれに手を出したのだらう。娘は床に倒れてゐた。氣を失つてゐたらしい。猩猩は最初いたづらをする積りであつたのに、夫人が叫びながら振り放さうとするので、獸もそれに抗抵するうちに氣が荒くなつたらしい。猩猩は力一ぱい剃刀で吭を切つた。頭が殆胸から離れさうになる程切つた。猩猩は血を見たのでいよいよ氣が荒くなつた。そして目を光らせ齒を剥き出して、倒れてゐた娘に飛び掛かつて右の手の平で吭を締めて、息の絶えるまで放さなかつた。そのとたんに猩猩のきよる付く目が窓を見ると、そこには恐怖の餘りに蒼くなつた主人の水夫の顔が見えた。その時猩猩の激怒は變じて恐怖となつた。主人は自分を威す鞭の持主だからであらう。そこで猩猩の自分のした罪に爲事の痕跡を隠さうと思つて、室内を走

り廻つて道具をこはしたり、毒藥の藥布圍を引き出したりした。それから娘の死骸を燧燼の中へ無理にねぢ込んで、夫人の死骸を窓から外へ投げ出した。丁度猩猩が夫人の死骸を窓へ持ち出した時、水夫はひどく驚いて夢中で棒をすべり下りて逃げ出した。そして急いで宿に歸つて、猩猩の行方には構はずにゐたと云ふのである。

この水夫の話に付け加へる事は格別無い。レスパネエ夫人の家に駆け寄つた人人が、梯子を登りながら聞いた聲は、猩猩の叫聲と、窓からどなつた水夫の聲とであつた。猩猩は人が外から部屋を破る時窓へ逃げて来て、外へ飛び出した跡の戸を撥ね返したものと見える。

猩猩は後に水夫の手に戻つて、水夫はそれをジャルダン・デ・ブラントへ高い値段に賣つた。それより前に、デュバンが水夫の話を書き取つて、それに説明書を添へて、警視廳へ出したので、ルボンは放免せられた。警視總監はデュバンに屈伏しながら、心中不平に堪へないので、人間は職分外の事に手を出すのは好くないとつぶやいてゐた。併しデュバンはそれに構はずに、こんな事を言つてゐた。「なんとでも勝手に云ふが好い。あれは自分が搜索を爲さなかつたので、自分で自分に分疏をしてゐるのだ。」

併しとにかく己はあの男の繩張内の爲事で、あの男に勝つて遣つた。どうもあの男にあの謎が解けなかつたのは無理も無い。あれは狡猾なだけで、深く物を考へる性では無いからだ。ああ云ふ男の智識には頭があつて胸が無い。精精頭と肩とだけしかない、大口魚の様なものだ。併しとにかくあれでも人に敏捷だと評判せられるだけぐえらいよ。あんな評判を取る人間は、ルソオの所謂 *De nier ce qui est, et s'expliquer ce qui n'est pas* (Nouvelle Héloïse) と云ふ秘訣を心得てゐるのだ。自分がどんな人間だと云ふことを隠して、自分のさうで無い人間に見せてゐるのだね。」

此小説の首にはサブ・トオマス・ブラウンの語を「モットオ」にして書いてある。それから分析的的精神作用といふものに就いて、議論らしい事が大ぶ書いてある。それを譯者は除けてしまつた。原文で六ベエチ以上もある論文のやうな文章を、「新小説」の讀者に讀ませたら、途中で驚いて跡を讀まずに止めるだらうと思つたからである。そんな勝手な削除なんぞをしては、原作者に濟まぬと云ふ人があるかも知れない。併し人が讀みさして讀まずにしまふのも、原作者のために愉快ではあるまい。

一體「病院横町の殺人犯」は世界に名高いボオの、世界に

名高い小説だが、今の讀者には向かぬかも知れない。近頃こつちではこんな小説を高等探偵小説と名付けることになつてゐる。高等探偵小説だの高等講談だのと名を付けて、こつちの批評家は流行以外の作を侮辱する権利を有してゐるのださうだ。して見ると、讀者に讀んで貰ふのも、矢張原作者を侮辱するに當るかも知れない。若しさうなら、譯者は謹んで原作者に謝罪することとしよう。

冬の王

(ハンス・ランド)

このデネマルクといふ國は實に美しい。言語には晴々しい北國の音響があつて、異様に聞える。人種も異様である。驚く程純血で、髪の毛は草のやうな色か、又は黄金色に光り、肌は雪のやうに白く、體は鞭のやうにすらりとしてゐる。それに海近く棲んでゐる人種の常で、秘密らしく大きく開いた、妙に赫く目をしてゐる。

己はこの國の海岸を愛する。夢を見てゐるやうに美しい、ハムレット太子の故郷、ヘルジンギョオルから、スエデンの海岸迄、さつぱりした、住心地の好ささうな田舎家が、帯の様に續いてゐて、それが田畑の緑に埋もれて、夢を見る様に、海に覗いてゐる。雨を催してゐる日の空氣は、舟からこの海岸を手の届くやうに近く見せるのである。

我々は北國の關門に立つてゐるのである。なぜといふに、ここを越せばスカンヂナヴィアの南の果である。そこから偉大な半島がノルエエゲンの激や岩のある所まで延びてゐる。あそこにイブゼンの墓がある。あそこにアイスフオオゲルの家がある。どこかあの邊で、北極探險者アンドレエの骨が

曝されてゐる。あそこで地極の夜が人を感してゐる。あそこで大きな白熊がうろ付き、ピングイン鳥が尻を据えて坐り、光つて深ひ歩く氷の宮殿のあたりに、昔話にありさうな海家が群がつてゐる。あそこに又昔話の磁石の山が、舟の釘を吸ひ寄せるやうに、探險家の心を始終引き付けてゐる地極の秘密が眠つてゐる。我々は北極の關の上に立つて、地極といふものの衝く息を顔に受けてゐる。

この土地では夜も戸を締めない。乞食もゐなければ、盜賊もゐないからである。斜面をなしてゐる海邊の地の上に、神の平和のやうなものが廣がつてゐる。何もかも故郷のドイツなどと違ふ。更けても暗くはならない、此頃の六月の夜の薄明りの褪めたやうな色の光線にも、又翌日の朝焼けまで微かに光り止まない、空想的な、不思議に優しい調子の、薄色の夕日の景色にも、又暴風の來さうな、薄黒い空の下で、銀鼠色に光つてゐる海にも、又海岸に棲んでゐる人民の異様な目にも、どの中にも一種の秘密がある。遠い北國の謎がある。靜かな夏の日に、北風が持つて來る、あちらの地極世界

の沙賦と憂鬱とがある。

己は静かな所で爲事をしようと思つて、この海岸の或る部落の、小さい下宿に住み込んだ。青々とした蔓草の巻き付いてゐる、その家に越して来た當座の、或る日の午前であつた。己の部屋の窓を叩いたものがある。「誰か」と云つて、その這入つた男を見て、己は目を大きく睜つた。

背の高い、立派な男である。この土地で奴僕を縛める淺葱の前掛を締めてゐる。男は響の好い、節奏のはつきりしたデネマルク語で、若し靴が一足間違つてゐないかと問うた。

果して己は間違つた靴を一足受け取つてゐた。男は自分の過を謝した。

その時己は此男の名を問うたが、なぜそんな事をしたのか分らない。多分體格の立派なものと、項を反せて、傲然としてゐるのとの爲めであつたらう。

「エルリングです」と答へて、軽く會釋して、男は出て行つた。

エルリングといふのは古い、立派な、北國の王の名である。それを靴を磨く男が名告つてゐる。ドイツにもフリードリヒといふ奴僕はゐる。併しまさかアルミニウスといふ名は付けない。この土地はおさんにインゲボルグがゐたり、小間使にエツダがゐたりする。それがさういふ立派な名を汚す

しまつた。丁度親友の内情を人に打ち明けたくないのと同じやうな關係らしく見えた。

そこで己は外の方角から、エルリングの事を探知しようとした。己はその後中庭や島で、エルリングが色々の爲事をすゝるのを見た。薪を割つてゐる事もある。花壇を掘り返してゐる事もある。櫻ん坊を摘んでゐる事もある。一山もある、濡れた洗濯物を車に積んで干場へ運んで行く事もある。何羽ゐるか知れない程の鶏の世話をしてゐる事もある。古びた自轉車に乗つて、郵便局から郵便物を受け取つて歸る事もある。

エルリングの體は筋肉が善く發達してゐる。その幅の廣い兩肩の上には、哲學者のやうな頭が乗つてゐる。たつぷりある、半明色の髪に少し白髪が交つて、波を打つて、立派な額を圍んでゐる。鼻は立派で、大きくて、しかも優しく、鼻梁が軽く驚の嘴のやうに中陸に曲つてゐる。髭は無い。口は唇が狭く、濫い表情をしてゐるが、それでも冷然なやうには見えない。齒は白く光つてゐる。

己の鑑定では五十歳位に見える。下宿には大きい庭があつて、それがすぐに海に接してゐる。カッタガットの波が岸を打つてゐる。そこを散歩して、己は小さい丘の上に、樞の木で圍まれた低い小屋のあるのを發見した。木立が、何か秘密を掩ひ蔽すやうな工合に小屋に迫つてゐる。木の枝を押し分けると、赤い窓帷を掛けた窓

わけでもない。

己はいつまでもエルリングの事を忘れる事が出来なかつた。あの男のどこが、こんなに己の注意を惹いたのだから、己の部屋に這入つた時間が餘り短かつたので、なんとも判断しにくい。目は青くて、妙な表情をしてゐた。なんでもずつと遠くにある物を見てゐるかと思ふ様に、空を見てゐた。悲しげな目といふでもない。眞面目なごく眞面目な目で、譬へば最も静かな、最も神聖な最も世と懸隔してゐる寂しさのやうだとも云ひたい目であつた。さうだ。あの男は不思議に寂しげな目をしてゐた。

下宿の女主人は、上品な老處女である。朝食に出た時、そのをばさんにエルリングはどこのものかといふ事を問うた。「ラアラランドのものでございます。どなたでもあの男を見ると不思議がつてお聞きになりますよ。本當にあのエルリングは變つた男です。」かう云ひさして、大層意味ありげに詞を切つて、外の事を話し出した。なんだかエルリングの事は、食卓なんぞで、笑談半分には話されなくても思ふらしく見えた。

食事が済んだ時、それまで公爵夫人でもあるやうに、一座の首席を占めてゐたをばさんが、只エルリングはもう二十五年ばかりも此家にゐるのだといふだけの事を話した。ひどく尊敬してゐるらしい口調で話して、その外の事は言はずに子が見える。

家の棟に鳥が一羽止まつてゐる。馴らしてあるものと見えて、その炭のやうな目で己をちつと見てゐる。低い戸の側に、澤の好い、黒い大きい、猫が蹲つて、日向を見詰めてゐて、己が側へ寄つても知らぬ顔をしてゐる。

そこへ弦のある籐籠にあかすぐりの實を入れて手に持つた女中が通り掛かつたので、それに此家は誰が住まつてゐるのだと問うた。「エルリングさんの内です」と、女中が云つた。さも尊敬してゐるらしい調子であつた。

エルリングに出逢つて、話を爲掛けた事は度々あつたが、いつも何か邪魔が出来て會話を中止しなくてはならなかつた。

或晩波の荒れてゐる海の上に、ちぎれんくの雲が横はつてゐて、その背後に日が沈み掛かつてゐた。如何にも壯大な、ペエトホオフェンの音楽のやうな景色である。それを見ようと云つて、己は海水浴場に行く狭い道へ出掛けた。ふと袖の音が聞えた。その方を見ると、浴客が海へ下りて行く階段をエルリングが修覆してゐる。

己が會釋をすると、エルリングは鳥打帽の庇に手を掛けたが、直ぐその儘爲事を續けてゐる。暫く立つて見てゐる内に、階段は立派に直つた。

「お前さんも海水浴をするかね」と、己が問うた。

「え、毎晩いたします。」

「泳げるかね。」

「大好きです。」

なぜ夜海水浴をするのか問はうかと思つたが止めた。多分

晝間は隙がないのだらう。

「多になるとお前さんどこへ行くかね。コッペンハアゲンだ

らうね。」

「いえ、ここにゐます。」

「ここにゐるのだつて。この別荘造りの下宿にかね。」

「ええ。」

「お前さんの外にも、冬になつてあの家にゐる人があるか

ね。」

「わたくしの外には誰もゐません」

己はぞつとしてエルリングの顔を見た。「溜まるまいぢや

ないか。多寒くなつてから、こんな所にたつた一人であ

は。」

エルリングは、俯向いた儘で長い螺釘を調べるやうに見て

ゐたが、中音で云つた。

「多は中々好うございませす。」

己はその顔を見詰めて、首を振つた。そして分疏のやうに

かう云つた。「餘計な事を聞くやうだが、わたしは小説を書

く。

「それはさうでございませす。お世辭なんぞはございません。」

己には此男が段々面白くなつて來た。

その晩十時過ぎに、もう内中のものが寐てしまつてから、

己は物案じをしながら、薄暗い庭を歩いて、風いだ海の鈍い

波の音を、ぼんやりして聞いてゐた。その時己の目に明りが

見えた。それはエルリングの家から射してゐたのである。

己は直ぐにその明りを辿つて、家の戸口に行つて、少し動

悸をさせながら、戸を叩いた。

内からは「どうぞ」と、落ち着いた聲で答へた。

己は戸を開けたが、意外の感に打たれて、闕の上に足を留

めた。

ランプの點けてある古卓に、エルリングはいつもの爲事衣

を着て、凭り掛かつてゐる。只前掛だけはしてゐない。何か

書き物をしてゐるのである。書いてゐる紙は大判である。そ

の側には厚い書物が開けてある。卓の上のインク壺の背後に

は、例の大きい黒猫が蹲つて眠つてゐる。エルリングが肩の

上には、例の烏が止まつて今己が出し抜けに來た訃を云ふの

を、眞面目な顔附で聞いてゐたが、エルリングが座を起つた

ので、鳥は部屋の間へ飛んで行つた。

エルリングは椅子を出して己を掛けさせた。己はちよいと

横目で、書棚にある書物の背皮を見た。グルンドキダ、ヤル

いものだからね。」

この時相手は初めて顔を上げた。「小説家でお出なさるの

ですか。デネマルクの詩人は多くこの土地へ見えますよ。」

「小説なんど云ふものを讀むかね。」

エルリングは顔を振つた。「冬になると、随分本を讀みま

す。だが小説は讀みません。若い時は讀みました。さうです

ね。マリイ・グルツベなんぞは、今も折々出して見ますよ。

ヤアコツブセンは好きですからね。どうも此頃の人の書くも

のは。」手で拒絶するやうな振をした。

己は自分の事を末流だと諦めてゐるが、それでも少し侮

辱せられたやうな氣がした。そこで會釋をして、その場を退

いた。

夕食の時、己がをばさんに、あのエルリングのやうな男

を、冬の七ヶ月間、こんな寂しい家に置くのは、殘酷ではな

いかと云つて見た。

をばさんは意味ありげな微笑をした。そして云ふには、こ

としの五月一日に、エルリングは町に手紙をよこして、もう

別荘の面白い季節が過ぎてしまつて、そろ／＼お前さんや、

避暑客の群が來られるだらうと思ふと、ぞつとすると云つた

と云ふのである。

「して見ると、あなたの御晶頂のエルリングは、餘りお世辭

はないと見えますね。」

「それはさうでございませす。お世辭なんぞはございません。」

己には此男が段々面白くなつて來た。

その晩十時過ぎに、もう内中のものが寐てしまつてから、

己は物案じをしながら、薄暗い庭を歩いて、風いだ海の鈍い

波の音を、ぼんやりして聞いてゐた。その時己の目に明りが

見えた。それはエルリングの家から射してゐたのである。

己は直ぐにその明りを辿つて、家の戸口に行つて、少し動

悸をさせながら、戸を叩いた。

内からは「どうぞ」と、落ち着いた聲で答へた。

己は戸を開けたが、意外の感に打たれて、闕の上に足を留

めた。

ランプの點けてある古卓に、エルリングはいつもの爲事衣

を着て、凭り掛かつてゐる。只前掛だけはしてゐない。何か

書き物をしてゐるのである。書いてゐる紙は大判である。そ

の側には厚い書物が開けてある。卓の上のインク壺の背後に

は、例の大きい黒猫が蹲つて眠つてゐる。エルリングが肩の

上には、例の烏が止まつて今己が出し抜けに來た訃を云ふの

を、眞面目な顔附で聞いてゐたが、エルリングが座を起つた

ので、鳥は部屋の間へ飛んで行つた。

エルリングは椅子を出して己を掛けさせた。己はちよいと

横目で、書棚にある書物の背皮を見た。グルンドキダ、ヤル

「心持の好きさうな住まひだね。」

「え。」

「冬になつてからは、誰が煮炊をするのだね。」

「わたしが自分で遣ります。」かう云つて、エルリングは左

の方を指さした。そこは籠のやうに出張つてゐて、その中に

竈や鍋釜が置いてあつた。

「此土地の冬が好きだと云つたつねね。」

「大好きです。」

「冬の間には誰か尋ねて來るかね。」

「あの男だけです。」エルリングが指さしをする方を見ると

祭服を着けた司祭の肖像が卓の上に懸かつてゐる。それより外には圓額のやうなものは一つも懸けてないらしかつた。

「あれが友達です。ホオルンベエタと云ふ隣村の牧師です。やはりわたしと同じやうに無妻で暮してゐます。それから餘り附合をしないことも同様です。年越の晩には、極まつて來ますが、その外の晩にも、冬になるとちよい／＼來て一しよにトツヂイを飲んで話して行きます。」

「多になつたら、此邊は早く暗くなるだらうね。」

「三時半位です。」

「早く寝るかね。」

「いゝえ。随分長く起きてゐます。」こんな問答をしてゐるうちに、エルリングは時計を見上げた。「御免なさい。丁度夜なかつた。わたしはこれから海水浴を遺るのです。」

己は主人と一しよに立ち上がった。そして出口の方へ行かうとして、ふと壁を見ると、今迄氣が附かなかつたが、あつさりした額縁に嵌めたものが今一つ懸けてあつた。それに、荆の輪飾がしてある。薄暗いので、念を入れて額縁の中を覗くと、肖像や書ではなくて、手紙か何かのやうな、書いた物である。己は足を留めて、少し立ち入つたやうで悪いかとも思つたが、決心して聞いて見た。

「あれはなんだね。」

「判決文です。」エルリングはかう云つて、目を大きく睨つ

て、落ち着いた氣色で己を見た。

「誰の。」

「わたくしのです。」

「どう云ふ文句かね。」

「殺人犯で、徴役五箇年です。」緩やかな、力の遣入つた詞で、眞面目な、憂愁を帯びた目を、怯れ氣もなく大きく睨つて、己を見ながらかう云つた。

「その刑期を済ましたのかね。」

「えゝ。わたくしの約束した女房を附け廻してゐた船乗でした。」

「そのお上さんになる筈の女はどうなつたかね。」

エルリングは異様な手付きをして窓を指さした。その後縁は海である。「行つてしまつたのです。移住したのです。行方不明です。」

「それは餘程前の事かね。」

「さやう。もう三十年程になります。」

エルリングは昂然として戸口を出て行くので、己も附いて出た。戸の外で己は握手して覺えぞ丁寧な禮をした。

暫くしてから海面の薄明りの中で己はエルリングの頭が浮び出て又沈んだのを見た。海水は鈍い銀色の光を放つてゐる。

己は歸つて寝たが、夜どほしエルリングが事を思つてゐ

た。その犯罪、その生涯の事を思つたのである。

丁度浮木が波に弄ばれて漂ひ寄るやうに、あの男はいつか此僻遠の境に來て、漁師をしたか、農夫をしたか知らぬが、或る事に出會つて、それから沈思する、冥想する、思想の上で何物をか求めて、一人であることと云ふことを覺えたものに見える。その苦痛が、さう云ふ運命にあの男を陥れたのであらう。そこでかうして、此別荘の冬の王になつてゐる。併し毎年春が來て、あの男の頭上の冠を奪ふと、あの男は淺葱の前掛をして、人の靴を磨くのである。夏の生活は短い。明るい色の衣裳や、麥藁帽子や、笑聲や、噂話は倏忽の間に閃き去つて、夢の如くに消え失せる。秋の風が立つと、燕や、蝶や、散つた花や、落ちた葉と一しよに、そんな生活は吹きまわられてしまふ。そして別荘の窓を、外から冬の夜の闇が覗く。人に見棄てられた家と、葉の落ち盡した木立のある、廣い庭とへ、沈黙が拔足をして尋ねて來る。その時エルリングは又昂然として頭を擧げて、あの小家の中の卓に靠つてゐるのであらう。その肩の上には鴉が止まつてゐる。この北國神話の中の神の様な人物は、宇宙の問題に思ひを潜めてゐる。それでも稀には、あの荆の輪飾の下の扁額に目を注ぐことがあるだらう。そしてあの世樂人も、遠い微かな夢のやうに、人世とか、喜怒哀樂とか、得喪利害とか云ふものと思ひ浮べるだらう。併しそれはあの男の爲めには、疾くに一

切折伏し去つた物に過ぎぬ。

暴風が起つて、海が荒れて、波濤がああ的小家を撃ち、庭の木々が軋めく時、沖を過ぎる舟の中の、心細い舟人は、エルリングが家の窓から洩れる、小さい燈の光を慕はしく思つて見て通ることであらう。

父の讎

(エエグ・マデルング)

此男が實際何者であるかは問ふことを須めない。兎に角今は北歐急行列車に乗つて、自動車雑誌「L'Auto」を讀んでゐる。どうも此男は自動車の主要機關を格別好く領解してはをらぬらしい。併し會話では自動車の事に精通してゐるので人を驚かす。

餘事ではあるが、此男は随分種々な構造の自動車に乗り廻つたことがある。それは遊戯のためと云ふよりは、他の目的のためであつた。併しそれを穿鑿する必要もない。

今乗つてゐる「C」號列車は一時間幾キロメートルと云ふ速度を出して、耳に喧しい噪響を發しながら、或るときは橋梁を渡つて登り、或るときは巖端を繞つて降る。

長い單調な噪響の間に、折々唐突な二拍子の劇動が起る。

これは線路を交叉する時である。忽然一の停車場の前を飛び過ぎる。驛長一人と取り残された旅人數人とが、幻の如くに過ぎる汽車を稍久しく見てゐる。

それが元の位置にゐながら、忽ち又消え失せてしまふ。

既にして車行の調子が變る。銀色を帯びて碧い河水が、工

場の水力機を挿んでうねり、きらめく堰に觸れて起ち上るのが見える。又寂しい城が斑な牧場や、圍まれた、物閑な苑園の中に聳えてゐるのが見える。その牧場や苑園は曾て人の拳が汗と詛との中に造り出したものであるのに、今は其人の地獄生涯を遙に隔たつて、物閑になつてゐるのである。

車中の旅人は自動車雑誌を下に置いた。そして城の一つと、巖端の下に見えてゐる、職工の住む小家に圍まれた工場との距離を、鋭い目で測つて見た。

旅人は心の中に思つた。人間は公平と云ふものを自覺してはゐない。その承認してゐるのは、只威力だ。只暴戾な腕力だ。それだから威力はなくてはならない。それだから我等は歴史の冷やかな文字の上に、焔のやうな「死」の痣を印す。蔑視せられてゐる公平の觀念が我等の母で、民衆の鈍い不平が我等の源である。我等は無名で生きてゐて、さて刑場に死ぬる盜のやうに、無名で此世を去る。旅人がかう思つた時、冷やかな雲が其顔を掠めて過ぎた。

旅人は目を閉じた。

一體己は盜をしただらうか。いや。只人殺しをしただけだ。人生のためにした。多數の人の幸福のためにした。これから先も、己は人殺しをするだらう。自分の名が消されてしまふまで、憎い人の名を消して行くだらう。

突然旅人は同じ車室にゐる二人の相客に目を注いだ。併し其表情は直に又冷淡になつた。全然没交渉な人々である。旅人は獨り寂しく車室の隅に身を靠せ掛けた。

旅人の顔には一種の疲が見えた。口を圍んだ鋭い皺が弛んだ。鈍い安息の中に陥つて、耳目を塞がずに眠つてゐるのである。

これは無間斷の危険を冒して世を渡つて行く人の眠である。かう云ふ人は一種の本能を有してゐて、遠距離にある事物を現前させる。過去をも未來をも現前させる。此感覺は仔細に前途を搜索して、遠い未來にある危険な物を見付け、又それを逆に辿つて、我足の其地點に到達する瞬間を味ふ。

そんな風で、旅人は黙坐して假寐してゐる。そしてその放たれた官能は事物の連絡を辿つて働いてゐる。

旅人は約一週間前から種々に姿を變へて諸方を遍歴してゐる。此間あらゆる交通機關を利用して、其全體と其一々とに就いて、試験をした。そして或るとき不幸にしてちよいと微行の手段に破綻を生せしめたので、歐洲列國間に大搜索の面倒を惹き起した。

それはなぜかと云ふに、此旅人は或る家柄の老幼を畏怖させる氏名を有してゐるからである。目下世界中の國々に、此旅人の本國から人が派遣してあつて、其手には此旅人の寫眞と、此旅人を見附けた時に取り取るべき手段を細かに記した訓令とが渡されてゐる。此人の首は一の懸賞品であつて、其賞は巨額で、それを獲た名譽は大きいのである。さうしたわけだから、世間が賊を獵する如くに此人の踪跡を捜してゐるのも無理はない。

然るに此人は其網を逃れてゐる。これまで度々逃れたやうに、此度も逃れてゐる。どうも此人の首を縛る案はまだあざなはれてをらぬらしい。

そこで此人は恬然として北歐急行列車の車室に坐してゐる。此車内でも何事もなしに済むのである。そこで面白いのである。

此旅人は給仕の呼聲に目を醒ました。給仕は食堂車から呼んだのである。

「あなたは午食をなさいませんか。せうか。」
「うん。午食をするのだ。」
旅人は丁寧な身じまひをして食堂車へ出掛けた。どの卓にも、もう客が一ぱいになつてゐる。只一つの卓には、子供が二人すわつてゐるだけで、まだ一人前だけの餘席がある。

旅人はちよいと會釋をして、子供二人と對座した。子供は

十三歳の童と十一歳の少女とである。二人はちよいと此旅人を見たが、なんの氣に留める程でもないので、居るも居らぬも同じやうに思つてゐた。

車窓の外は黄昏の灰色の闇である。大小の電燈が沙子のやうに其闇の上に亂點してゐる。譬へば此列車の奔りつつ吐く息は、其呻吟の聲と共に大地を焦がして、列車の苦悶に沸きかへる胸からは焔が出てゐるやうである。又譬へば大地は、鋼鐵の車牙で強情に押し通る長蛇に壓せられて、背を屈めてこらへ、膚からは汗を流し、腋理からは焔突を起して、焔と黄いろい焔とを噴き、其焔と焔とは、鐵屑の丘や、煤けた小家や、うめく鐵砧の上に熱病の幻視に似た影を畫いてゐるやうである。

ここはライン河畔の製鐵地、銀ふ錠と永遠に火を噴く焔突との天地である。

食堂車の中央には熾熱燈があやしげにゆらぎつつ燃えてゐる。丁度車の進行のために電流が震動してゐるやうである。車室内の一切の物は同時に目に映じながら、其中の何物も特に明瞭には見えてゐない。滑かな周囲の壁は外へ食み出したリ、又内へ狭まつたりするやうに見え、硝子戸は車輪の響に調子を合せてひしめいてゐる。卓の上にあるコップや皿は、目に見えぬ人の手でゆするやうに、ちやらちやらがたがた云つてゐる。そして其コップ其皿の物を飲食する人々は皆めい

つた、沈んだ顔色をしてゐる。なんだか物に驚いたやうな表情である。事によつたら脚下を背後へすべつて逃げる大地の運動を、それと意識せずに怖れてゐる表情かも知れない。折々旅人の中の一人が仰向いて、天井で廻轉してゐる大扇風機を凝視する。それが、自分の體の意志を離れて地上を走つてゐるのを不安に感じて、沈黙して無間斷に廻轉してゐる羽輪に、支撐點を求めてゐるのかと察せられる。

突然一の急行列車が摩れ違つた。そして耳の外聽道の中で紙繭で物をこするやうな音がした。

此時二人の子供と卓を同じうして坐し、食事をしてゐる旅人は、その摩れ違つた列車を見なかつた。其目には只稍長い電光の閃きが映じた。それは一切の物を包んだ焔の中を洩れて、しばし天地を引き裂き、跡には重くろしい、血腥い沈黙を留める閃きである。丁度此人の心の内の閃きのやうに。

旅人は此沈黙がどの位長く續いたか自覺しない。只此沈黙の中で、不意に人の聲が聞えた。

「わたし達が夫婦だとは誰も思ひけしなね。誰も。」

國際上に通用してゐる、極上品なフランス語で、それを聞いたばかりでは、どの國に生れた人だか、少しもわからない。かう云ふフランス語を使ふ家族が、全世界に二十位もあらうかと思はれる上品さである。

「あら。人にわからない語で仰やいよ。」

かう答へたフランス語も同じ調子である。その響がいかにも清朗で、いかにも柔軟なので、旅人は覺えず頭を擧げて視た。問答をしたのは對坐してゐる二人の子供であつた。

「わたし達が夫婦だとは誰も思はないと云ふのだよ。」

今度はボオランド語で童が云つた。少女の方では口に出さずこゝろで貰ひたいのを知りつつも、童はそれを言ふのが面白いと見える。

「あら。人にわからない語で仰しやいと云ふのに。」

少女は少し顔を赤くして、迷惑さを隠すやうに努力しつつ繰り返したのである。

童は又同じ事をロシア語で言つた。

少女はもうこらへられなくなつて、金色のちぢれた髪で掩はれた、小さい頭が、燃えるやうに赤くなつた。そして振り返つて、丁度自分と背中合せになつて、背後の卓にすわつてゐる貴夫人に言つた。

「あの又わたしをからかふのでございます。わたしの困る事を言つて。」

呼ばれた母は振り向いた。

「紳士は女の困るやうな事をしないものですよ。」

母はまだ何か跡を言はうとしたが、それをよして、自分の卓の會話を繼續した。此卓には少女の母の外に、男一人と女二人とがすわつてゐる。男は身の丈が高く、顔色が蒼く、世

間離れのした、黒い目をしてゐる。少女の母の落ち着いた、低い調子で物と言つてゐる所から推するに、此男は貴夫人の夫らしい。跡の二人の女達が家族だと云ふことも、會話の調子で察せられる。かうした、落ち着いた、しとやかな會話は只貴族の一門の中で行はれるばかりである。此人達は急行列車の贅澤な食堂にすわつてゐるのが、自分の邸にゐると同じやうに平氣で、少しも傍の人を氣にしない。

併し子供は流石子供である。勿論其態度は世間並の大人も及ばぬ程おとなびてはゐるが。

二人の子供は怒つて、互に顔を見ぬやうにしてゐる。中にも十一歳の少女は、レスの附いた、白い、短い髪を着けてゐる癖に少し拗ねて、あたりへ寄せ附けぬやうな風を装はうとして努力してゐる。

すると又童の方でも、イギリス風の海軍服を着てゐながら、なるたけ冷淡に構へてゐようとして、折々コップの中の礦泉水を一口づつ嘗めては澁面を造る。

沈黙は二人の間に大ふくしく續いた。そしてもうそろそろ我慢がし切れなくなつた時、童は丁寧な温和な調子で云つた。

「だつてあのサモイルスキイ伯があなたに取り入らうとした時なんぞは、わたしはあなたをからかひはしなかつたぢやありませんか。」

此詞に就いて、少女がまだなんとも言ひ出さぬ間に、旅人は二人の内証話を黙つて聞いてゐたくなかつたものか、突然ポオランド語でかう云つた。

「済みませんがそつちの鹽いれをちよつと取つて下さいませんか。」

二人の子供は急に、ためすやうに旅人の顔を見た。中にも少女はさつと赤くなつた顔をハンカチーフで隠した。

童はすぐに鹽壺を取つて旅人にわたしたが、それと同時にあわてたやうな態度は全く消え失せた。そして極軽く會釋をして、上品な、親切げな微笑を湛へつつ云つた。

「どうも子供らしい笑談ばかり言つてゐまして、さぞ御退屈で。」

童は一種のイロニイを帯びた調子で、此「子供らしい」と云ふ詞を云つたが、旅人がまだなんとも云はぬうちに、前と同じ、紳士らしい口吻で語を續いだ。

「實に外國で同郷人に出合ふのは嬉しいものです。あなたもパリイからおいでですか。わたし共も同じ事です。やつぱりコンチナンタルにお泊なすつたのでせうね。グラン・ドテルも随分宜しいことは宜しいですが。」

「いえ。わたしは自宅があります。」かう答へた旅人の顔は眞面目であつた。

「ああ。さうですか。わたし共も餘り久しくコンチナンタル

に住まつてゐませんでした。多分あなたもお聞になつたこと、がありませうが、パリイのアヴェニュー・ド・ラ・グラン・ド・アルメエにはわたしのをばの邸がありますから。」

旅人はちよいと飲み込み兼ねた様子で童子の顔を見た。今は餘事を忘れて、熱心に旅人の相手になつてゐる童が、かう云ふ問を發した。

「お國では御領分は内地の方におありですか。それともリトワの方ですか。」(内地とは王國ポオランド國を指し、リトワをもポオランドの外藩だとする意味で云ふ。これは旅人のポオランド語に少し訛のあるのを聞き出したからの問であらう。

「いや。故郷にも其外の土地にもわたしの領分と云ふものはありません。」

「あゝ。さうですか。」

「さうです。わたしは外國の或る自動車工場の技師をしてゐます。」

「はあ。面白いですね。わたし共は競馬馬も澤山飼つてゐるのですが、それでも自動車が好きで乗ります。あなたなども自動車は無論フランス型が一番好きでせうね。」

「さうです。わたしはフランス型が最精巧だと信じてゐます。」

「わたし共もフランス型にばかり乗ります。」

旅人は趣味の一致を喜ぶらしく頷いた。

童はこれだけ相手の職業に關する話をして置けば、初對面の人に對する會釋は充分だと思つたらしく、それとなく話頭を轉じて、又身の上話に移つた。

「まあ昨年から今年へ掛けての冬は、パリイの生活も格別退屈でもありませんでした。わたし共は毎年冬はパリイで過します。そして夏になれば國へ歸るのです。ポオセン侯爵領分へですね。わたしはこれからをばを領分へ連れて歸るのです。」

「はあ。さうですか。申しおくれましたが、わたしの名はレキンスキイと申します。失禮ながらあなたは。」旅人は此句を對話の間に挿んだのである。

「ラトシキウ侯爵です。」童は極軽い會釋をした。

レキンスキイと名告つた男が云つた。「立ち入つたお尋ですが、もう夫人がおりになるのですか。」

童は暫く黙つてゐたが、非常に敬虔な態度で少女を指して旅人に紹介した。

「ここにをられるモングシユコ侯爵夫人がわたしの妻です。」旅人は童に負けぬ敬虔な態度で少女に禮をした。

少女はいかにもおとなびた、貴夫人らしい微笑をしてこれに答へた。丁度どこかの帝室の宴で、衆人の崇敬的になつてゐる美人が答へるやうに。

此時深く刻まれた皺のある旅人の顔を、憂愁の影が掠めて過ぎたが、二人の子供はそれに氣が附かなかつた。

旅人は冷やかな調子で云つた。「若しわたしの記憶が間違つてゐませんなら、二三年前ロシア帝に仕へて市長をしてをられたモングシユコ侯爵があつたやうですが。」

かう云つてしまつて、旅人は此詞がどう云ふ所まで會話を進める媒になると云ふことに、始めて心附いた。果して二人の子供は忽ち眞つ蒼になつて、表情がひどく眞面目になつた。旅人の指した侯爵の一族だと云ふことは、もう疑を容れぬのである。

旅人は既に端緒を出したので、其筋道を辿らずにはゐられなかつた。

「これは御氣分に障るやうな事を申し出したかも知れませんが、どうぞ御免下さい。市長をなされた侯爵は夫人の御近親でしたとせうか。」

童は旅人と、きつと臍を見合せた。

「あなたは市長の侯爵とお識合でしたか。」

「さやう。そのお詞で思ひ出しました。わたしはたつた一度侯爵に交渉したことがあつたのです。關係してゐる工場の業務で、そして實に不思議です。それが侯爵の亡くなられるすぐ前でした。餘談ですが、わたしはモングシユコ家のお方がロシアの公職に就いてゐられるのを異様に感じてゐました。」

此詞を聞いてゐる間、少女は強く感動して身を震はせ、眞つ直にすわつて自ら抑へてゐる。

童はいたはるやうに少女を見て答へた。

「いえ。實はそれで一族皆あの人と義絶したのです。夫人令嬢までが。」

「はあ。子供衆があつたのですか。」

童は口を噤んで俯向いた。

此時突然少女が蒼ざめた顔を擧げた。

「わたくしが娘でございます。」

旅人の口の周圍には苦々しげな表情が現れた。そして目は不思議に小さく、物を覗ふやうになつた。

「いや。あなた方が悲しい事をお思出しになるやうな話をし出して濟みません。よもや市長のモングシユコ侯爵の令嬢がお出なさらうとは思はなかつたものですから。わたしはあの人に子があつたと云ふことも、今まで知らずにゐました。」

「父を殺しました人も、多分子があるとは思はなかつたのでございませう。若し子のあるのを存じてゐたら、殺さなかつたかも知れません。」

「さあ。それはなんとも申されせんね。わたしは記憶してゐる限では、あの兇行の顛末はとうとう判明せしむまつたやうですね。犯罪者も縛に就かずに。」

「ええ。唯ベエテルブルクから父を殺したらしいと云ふ嫌疑

者の寫眞を送つて貰つて見ましただけでございます。母が見たいと申して遣りましたので。」

「では其男にお出逢なすつたら、おわかりになりませう。そして捕縛させてお遣になることも出来ませうですね。實にめづらしい、又非常においたはしい事件ですね。」

少女は何か言はうとして蒼い顔を擧げて、對坐してゐる旅人の顔を見た。其刹那に少女は自分の言はうとした事を忘れて、きつと旅人の顔を見詰めた。

旅人と少女との目は、吸付いて離れぬやうに、久しい間見合つてゐた。そのうちに、少女の顔には次第に驚愕の色が現はれて、旅人の顔は同時に次第に蒼くなつた。

少女の唇が軽く震えたと思ふと、忽ち歎息の聲が起つた。最初は聲が微かであつたが、それが次第次第に募つて来て、とうとう顔を卓に押し當てて泣き出した。

童と背後の卓にゐた親戚等とが、急いで集まつて来て介抱した。

旅人も亦身を起した。何か言ふとか、又はするとかして少女を慰めたいと思ふらしく、ためらひつつゆつくり立ち上がったのである。併し言ふべき詞も浮はず、なすべき事も思ひ寄らなかつたものか、其儘食堂車を出て、元の車室の隅へ歸つた。

間もなく急行列車が或る大停車場に着いた。

旅人は小さいかばんを一つ持つて車室を出て、下車口に向つて進んだ。

此時旅人の目に映じた二人の紳士がある。それは改札をする人の傍に立つてゐて、前を通り過ぎる人を一人一人、顔を覗き込むやうにして見てゐるのであつた。

併し旅人は、早くからそれに心附いてゐながら、少しも意に介せぬらしく、自分の切符を役人に見せる時、二人の方を一目も見なかつた。そんな人がゐても、ゐなくても、好いと思ふらしくして通つたのである。此旅人の冷然たる態度を見ては、誰も傍へ寄り附くことが出来なかつたのである。

モングシユコ侯爵夫人の口からは何事も洩れなかつた。

鑑定人

(ボウル・ブルウジエ)

誰でも醫學に興味を持つてゐるものは、いつか大學教授クワリオオル先生の名を聞いた事があるだらう。あの人の書いた精神病學の教科書は随分名高い。丁度ドイツでクレエベリンやクラフト・エエビングが精神病學の權威として認められてゐるやうに、フランスではクワリオオル先生が、此學の大家として崇められてゐる。

此人の立てた「半精神病狀態」と云ふ理論が後世になつてから非難を招く事があるかも知れぬが、兎に角此人の著述は、文章に人を引き付ける力があつて、その叙事はイギリス人の所謂 *romance*。だと云ふ長所がある。此英語けどうもフランス語で譯する事が出来ぬから其儘使つて置く。此長所から考へて見ると、多分クワリオオル先生の著述は未來に於いても人に棄てられぬだらうと思はれる。

誰でも目のあたりクワリオオル先生を見た人は、決して其容貌を忘れる事は出来まい。一度見れば人の記憶に刻み付けられるやうな容貌である。大男で、髪は明色で、金眼鏡を掛けてゐる。ちよいと見るとドイツの學者かと思はれる。

併し其眼鏡の背後の目の表情を見ると、ラテン人種だと云ふ事が分かる。

クワリオオル先生の日課は極めて單調である。午前は巴里の町はづれにある病院で働いてゐるのである。午後には刑事裁判所に出勤する。そこには特に病室を設けて裁判所附屬診療所と名付けてある。犯罪者の中で精神病らしく見えるのがあると、それを先生に觀察して貰ふのである。この附屬診療所で、先生は毎週二回づつ、臨床講義をする。そこへ出席するのは、市の醫師と大學の學生とである。それから自宅に歸ると、先生は夜遅くなるまで専門の著述に従事してゐる。

先生がどの位その専門學科に熱心であるかと云ふ事を知るには、先生が患者を取扱ふのを見れば分かる。先生の目には感奮の火が燃えてゐる。先生は正確な診斷を下さうと思つて、緊張と興奮との爲めに震慄してゐる。先生は目前に坐してゐる男女いづれかの患者を、瞥へば狩人が獸を見る如く、又探偵が罪人を見る如くに觀察してゐる。

今目前にある患者は何者であらうか。精神病を裝ふ罪人で

あらうか。眞の患者であらうか。その病症はなんであらうか。此等の問題を解決して、診斷を下す時の先生の責任は大である。先生が二三字の病名又は斷案を書く時、それに依つて被告人は精神病院に送られる事もある。又放免せられる事もある。精神病院に送られる分は、まだ先生の責任が比較的軽い。なぜと云ふに病院に這入つてから患者は今一應診察を受けて、其時クワリオオル先生の診斷が其儘承認せられたり、又は多少變更せられるに過ぎぬからである。よしや先生の診斷が棄却せられたとして、これが爲めに先生の受ける迷惑は大したものではない。これに反して先生が被告人を健康だと斷定したとする。被告人は實際精神病に罹つてゐるのに、先生がこれを發見し得なかつたとする。さうすると被告人は放免せられて社會へ出ることがある。社會へ出ればその精神病の爲めに又犯罪を働くのである。

先生の額に深い皺の寄つてゐるのはかうした誤診をすまいと思ふからである。社會に對する此責任がある爲に、學術上には興味を以て扱ふ患者が、多少先生の心に苦痛を與へる。先生はどの患者に對しても、必ず同一の熱心を以て觀察する。其態度は先生の口吻を見れば分かる。先生の聲は患者に何物をも隠させぬやうに患者を探るのである。自分の目前にゐる患者はどれだけの悟性を有してゐるか。又その感覺の能力は如何なる程度にあるか。先生はそれを探らうとして、機

嫌を取るやうな、簡單な問を寛かな調子で患者に向つて發する。今も先生はさう云ふ態度で一人の患者を見てゐたが、先生は突然患者の方を背にして、學生の方に向いた。そして云つた。

「ボルトオオ君。君の診斷はどうです。」

「だ」と認めます。學生は遠慮深い調子で答へた。此符牒は病院で使つてゐる *Paralyse* の略字である。麻痺狂である。

「君はどうです。クルウルボア君。」

「僕は *Paranoia* と認めます。」此答へは稍自信があるらしく聞えた。病名は偏執狂である。

「わたしの見る所は兩君とは違ひます。」クワリオオル先生はかう云つて置いて、簡單に自分の所見を述べて、患者と引き合せて見せた。此時患者は微笑みつつ先生の詞を聞いてゐたり、又或箇所では立腹したり、又どうかすると冷淡に、どうでも好いと云ふ態度を見せて、自分はずづくまつて人のするが儘になつてゐる。先生は簡潔な詞で既往症を述べた。人の生涯を鋭い短い詞でゑがき出す事は、此先生の長所である。

小説家が人の履歴を話しても、とても先生には及ばない。刑事探偵がどんなに説明しても、先生の詞のやうに、精神病のある犯罪者が行ふ事を一々その動機に溯つて説明する事は

出来ない。先生の著眼は一箇條毎に非凡である。複雑な事實の中から、重要な點を引き出して説明するのを聞く人々の心に立ち入つて話すかと思はれる。
それが済んで患者は退場した。看護人が連れて出たのである。其時先生は靜に「次を」と云ふ。併し先生の心は靜ではない。次にどんなものが来るかと期待する情が盛だからである。どうかすると次に出て来るのが、非常に珍らしい詐病者であるかも知れない。先生の集めてゐる類例の中で出色のものであるかも知れない。要するに先生は類例を集める一種の蒐集家である。先生は待ち違ひやうな表情をして、開く扉を見詰めてゐる。そこへ看護人が次の患者を連れ出すのである。

去年の冬の初である。クウリオオル先生は専門の學科に熟中してゐるだけ、非常に喜ばしい經驗をした。それは數年前に世間で大評判をした犯罪人の事に就いて、先生が鑑定人として面白い判断をしたのである。

犯罪人は名をギヨム・リビエと云ふ。此男はグルノオブルの時計職人を殺したのである。世間では其罪をひどく憎んでゐたが、どうした事か陪審人が情狀を酌量して減刑を申し立てた。リビエは懲役十年になつた。さて懲役になつて
先生が云つた。「いや。さうぢやない。豫審の時は本人が自分の精神に異常のある事を知らなかつたのだから、何も云はなかつたとしても不思議はない。殺人をする前に精神病が發してゐて、それを自覺しなかつたと云ふ事は有り得るのだからね。わたしの疑はしいと云ふのはさうぢやない。書いてある事が如何にも條理井然としてゐて、驚くほど順序が立つてゐる。それに就いてわたしは或骨董商の詞を思ひ出すのだ。なんでも贓物は眞物よりは脈に整つてゐるものだと、其男が云つた。まあ、少し調べて見なくては。」

次いで附屬診療所の午後の臨床講義にリビエを呼び出す事になつた。其日も先生はいつものやうに卓に倚つて坐してゐた。さうして日程の紙を見渡して「どれか緊急なのがありますか」と、看護人に言つた。日程には其日に呼び出される患者の名が列記してある。

「いゝえ格別なのはございませんまい。」看護人アベエルは答へた。

「そんならリビエを呼び出して下さい。」
看護人アベエルは在郷軍人である。今は随分厭な職業をしてゐるのに、いつも赤い、上機嫌の顔に晴やかな表情を見せてゐる。

アベエルは先生の詞を聞いて、昔兵營でしたやうに、舉手敬禮をして患者を連れに行つた。先生はそれを見送つて學生

間もなくリビエは發狂して精神病院に入れられて、そこに數箇月間ゐて、治癒して監獄署に歸つた。リビエはそこから盛に請願する。大統領宛大臣宛、其外あらゆる官吏宛の請願書を出す。それに書いてある事は、自分の犯罪は發狂中に行つたので、それが今直つてから分かつたと云ふのである。

此請願書の一通が偶然代議士某の目に觸れた。此代議士は醫師で、特に精神病に興味を持つてゐた。其男が讀んで見ると、請願書が如何にも誠實らしく書いてある。病氣の容體を委しく述べてあるのが如何にも事實らしい。そこで代議士は請願書を取次いで自ら或判事に面會して話をした。判事も成程と頷いた。そこでクウリオオル先生を鑑定人として召喚する事になつた。

或日先生は學生に言つた。「わたしは關係書類を一應調べて見たがね、餘程面白いよ。どうぞ本人が早く見たいものだ。犯罪に先立つ精神状態を書いてゐるのが、精神病學者に書かせてもこれ以上には出来まいと思はれる程だ。本人は指物職で醫學なぞをした事はない。さうして見ると書いてゐるのは事實かと思はれる。只私には少し疑はしい所があるのだ。」これを聞いてゐた學生はポルトオオであつた。さうしてから云つた。「先生の疑はしいと仰やるのは豫審の時に陳述した中に、その精神状態がないからではございせんか。」

に言つた。「軍隊敬禮の *strenuous* だね。」

二分間程立つてアベエルは患者を連れて出た。監獄の服を着た二十五歳の男子である。先生は手眞似で腰を掛ける事を命じた。患者は沈着した態度で這入つて來たが、矢張り態度で腰を卸した。さうして先生の顔を探るやうに見た。先生も患者の顔を鋭く見た。

リビエは可なりの好男子で、顔も上品である。併し表情の缺乏の爲めに不快に見える。顔の筋肉が全然動かない。只假面のやうな顔の中で、目ばかりがあちこち彷徨ふ。譬へば猛獸が係蹄で捕へられて、どうにかして逃げようと思つて、機會を窺つてゐるやうである。

此男は物を云ふ時、少しも顔の表情が變ぜない。丁度木偶の唇だけ動くやうに拵へたのを見るやうに、此男は唇だけ動かす。

リビエの詞は疾い。さうして其一句一句を殆ど口を塞いだ儘で出す。此單調な陳述をしてゐる間此男は少しも興奮する様子がない。此場に呼び出されてから、此男は最後まで此態度を維持してゐる。

先生は普通の順序に問を發した。「お前はギヨム・リビエと云つたね。」

「さうです。」
「お前はグルノオブルの時計職人ジャカンを殺したね。そし

て其犯罪の爲めに懲役に於て、それから精神病院へ入れられたさうだね。」

「さうです。」

「そこでお前は其犯罪をした時、もう精神病になつてゐたのだと、今になつて云ふのだね。又裁判を受けた時も、精神病の爲めに、辯解が出来なかつたと云ふのだね。」

「さうです。」

「そこで犯罪をした前の心持を、今一度此席で話しておくれ。」

「承知しました。併しそれを申し述べる前にわたくしの母が精神病であつた事をお話し申したいのです。どうもわたくしには遺傳があるらしいのです。父は早く亡くなりました。わたくしは母の傍に寝る事になつてゐました。或朝母が大聲に叫ぶので、わたくしは目が覚めました。春の頃で天氣の好い日の朝でした。目が覺めて見ると母が明るい部屋の中で痙攣を起して轉がり廻はつてゐます。右の手で胸を抑へてゐて、左の手は引き付けてゐます。わたくしはどうかと思つて大聲で尋ねましたが、母は返事をしません。人事不省になつてゐるらしい見えました。それから母は體が板のやうになりました。喉がごろごろ鳴りました。其内母は目を開きました。空を見てゐて、わたくしのゐる●が分かりませんでした。」

「それはヒステリーかね。それとも顯痴かね。」先生はかう云つて問うた。

リビエエは答へた。「それは分かりません。併しわたくしは母の様子を見てひどく驚いたものですから、其跡で病氣になりました。暫く立つて母は亡くなりましたが、其時の病氣は肺病でした。それから後もわたくしは母の恐ろしい痙攣を見た時の激動の爲めと見えまして、神經質になつたのが直りません。何事にも感動し易くなりました。丁度犯罪をした六箇月前に、わたくしはなぜか分からずに沈黙になりました。其頃わたくしの付いてゐた指物職の師匠は好人でした。わたくしは其人の差圖を受けて、なんの不平もなく働いてゐました。其時わたくしは始終頭痛がして、食が進まず、夜は安眠が出来ませんでした。丁度犯罪をする一週間前に、わたくしの容體はがらりと變りました。わたくしはひどく氣分が好くなりませんでした。其時わたくしは仲間の職人にかう云つたのを覚えてゐます。なんだか世界中が己のものになつたやうだとわたくしは云つたのです。其内容體が又變つて、わたくしはひどく興奮しました。一秒間もちつとして同じ處にはゐられません。なんでも思ふ事が驅逐をするやうに變るのでね。わたくしもなんだか變だと思ひました。殊にをかしいのは、それまで厭でならなかつた事が、急にひどく爲たくなつたのです。厭で溜まらなかつた燒酎をわたくしは飲み出しました。」

それまで見返りもしなかつた女に、わたくしは關係を付けました。犯罪をしたのも矢張り女の爲めでした。其娘はそれまでわたくしと普通の穩な交際をしてゐたのに、わたくしは急に劇しい戀を爲出したのです。丁度わたくしが其娘を連れて散歩をしてジャカンの店の窓の所に通り掛りますと、娘がそこにあつた時計と鎖とに指をさして欲しいと云ひました。わたくしは是非直にそれが買つて遣りたかつたのです。そこで代價を貸して置いてくれとジャカンに掛け合ひましたが、ジャカンは現金でなくては賣らないと云ひました。其時わたくしはひどく腹を立て、背後から押されるやうにジャカンに飛び付きました。どうしても血を見なくては氣が済みません。わたくしはとうとうジャカンを殺しました。其時から精神病院を出されるまで、わたくしの精神は譬へば何か布でも被つてゐるやうに、ぼんやりしてゐました。捕縛せられたのも、監獄に這入つたのも刑の宣告をせられたのも夢のやうでした。犯罪をした時から今日までの時間を考へて見ますと、非常に久しい間のやうに思はれます。それから精神病院にゐた間の事はわたくしにはどうしたのだから分りません。ところが或日の朝精神病院で目が覺めて見ますと、わたくしの精神は今日と同じやうにはつきりしてゐました。其時病院の醫員がわたくしの監獄で發狂した事や、其前に犯罪をした事を言つて聞かせてくれました。

それから考へて見ますと、どうしてもわたくしは犯罪をした前に發病したに違ひありません。それだからわたくしは調べ直して貰ひたいと云ふのです。」

先生は問うた。「併し今お前が話すやうなわけだと、少し分からね事があるぢやないか。お前はジャカンを殺した跡で金庫の錠前を開けて、中から粧飾品や株券を出して取つたのだ。その價格はジャカンの残して置いた帳簿に據つて計算すると、六萬フランから七萬フランまでの間であつたさうだ。どうしてそんな事をしたのだ。」

リビエエは答へた。「え、さう云ふものが無くなつてゐたと云ふ事は、わたくしも聞きました。わたくしの考では、わたくしは夢中で人を殺して、誰かが跡で物を取つたのでせう。兎に角わたくしの狙つてゐた品物は、女の欲しがつた時計と鎖だけです。其事はわたくしも始終覺えてゐました。なんでも綺麗に物事を忘れてしまつたのは、病院に入れられてからです。」

「そんならお前は物を取つたのは別の人だと思つてゐるのかい。」

「さうです。豫審の時の書類を御覽になつたら分かりますやうが、わたくしがジャカンの所へ往つたのは午後五時でした。その時刻はしつかり分かつてゐます。それから近所の人やジャカンの店で八時になつても戸を締めず、明りを點けずゐる。」

るので、變だと思つたのです。それまでの間に、誰か這入つたのだらうと思ひます。空巢狙ひのやうな奴が好機會に乗じて這入つたかも知れません。わたくしはジャカンの死骸を bagmat の上に乗せて置きました。跡から這入つた奴はそれを見たか見なかつたか分かりません。どうとも考へられませぬ。」

「併し鍵はどうしたのだ。ジャカンが持つてゐた鍵を、跡から這入つたものがどうして手に入れたのだらう。」

「それは矢張りどうにかして跡から這入つたものが手に入れたのでせう。鍵は帳場にあつたかも知れません。それともジャカンは奥の間から店へ出る前に、丁度金庫に何か出し入れをしようとして、鍵をさして置いたかも知れません。又奥の間にあつたジャケツの隠しに鍵のあつたのを盗坊が見付けたかも知れません。ジャカンは熱があつてジャケツを脱いでチヨツキに上シャツばかりになつてゐましたからね。兎に角盗坊はどうして鍵を手に入れたにしても、又どうして金庫を開けたにしても、それはわたくしの犯罪とはなんの関係もないのです。わたくしの犯罪は精神病の時にしたので、わたくしの責任ではありません。病人だつたのですからね。何をやるのか分らなかつたのです。後になつて病院へ入れられてから、やつと分つたのです。それだからわたくしは調べ直して貰ひたいと云ふのです。今のやうに精神が健康になつてゐれば、

ば、辨解する事も出来ませぬから。」

此問答の間、リビエエは始終單調な聲で物を言つてゐた。一語一語が丁度時計の秒のやうに聞えた。顔の表情も少しも變らない。なぜそんな態度であるかと考へて見るに、自分の言語學動に極端な注意をしてゐるのだとも思はれようし、又精神に今でも異常があつて、表情は制止せられてゐるのだとも思はれよう。先生は此態度に特に深く注意した。

先生は更に云つた。「そこでお前のさつき云つたおつ母さんの容體の事をもう一遍考へて御覽。おつ母さんがそんな風になつてゐた時、お前の外に誰かまだ見てゐたものがあるかい。」

「母の病氣は父が知つてゐたばかりで、誰も知らなかつたのです。いつも夜起るのですから。」

「おつ母さんの病氣は若い時からあつたのだらうか。」

「さうです。母に聞いて見ましたら、それまで三度起つたさうです。最初に起つたのは二十七の時だつたと云ひました。」

「それではおつ母さんは自分の病氣の様子を知つてゐたのだね。」

此問答はちよつと聞くとなんでもないやうだが、實は其間に恐ろしい争があるのである。聞いてゐたものの中で、學生ポルトオオは先生の問の意味を了解してゐるが、病理を知ら

ぬ看護人アベエルには、先生の掛ける係蹄が分からない。今の詞なんでも、頗る重大な意味がある。ヒステリイでも、癲癇でも、その發作の間の出來事は、患者が知つてゐる筈がない。そこで先生は今一度念を押して問うて見た。矢張母が知つてゐたと答へたら、詐病であらう。自分が遺傳を受けてゐる事を證明しようと思つて、母の病氣を拵へた事になる。

リビエエもそこに氣が付いたらしく、此時答をし變へた。「それは父が母に話して聞かせたもんですから、母が知つてゐたのです。自分では氣が付くまでした事は分らなかつたのです。」

「何かその起つた時の外に、おつ母さんは變つた様子をしてゐたかね。」

此問は先生が少し間を置いて發したのである。患者が答へてゐる間、先生は鋭い目で觀察してゐた。兎に角職工風情で、これだけの精神病學の智識を有してゐるのは不思議である。どこで覺えたか。いつ覺えたか。どうして覺えたか。

今度こそ馬脚を顯はすかと思つて、先生は聞いてゐた。併しリビエエの話す容體は如何にも事實らしい。此男は眞に癲癇を煩つてゐた母を持つてゐたか、さうでなくば恐ろしく精密に癲癇の徴候を知つてゐたかの二つに歸着する。リビエエの答へた一々の細い徴候が悉く癲癇に符合したのである。

リビエエはこんな事を云つた。「どうかすると母は恐ろしく眠たがりました。何か爲掛けて、突然眠る事がありました。そんな時は目が覺めてからひどく頭痛がすると云ひました。それからどうかすると母は手足が震える事がありました。それに最一つ思ひ出した事があります。母は體を變な恰好にして其儘ちつとしてゐる事があつたのです。何か物をし掛けて、その途中で體が固まつてしまふのです。さうして傍から聲を掛けるまでは、其儘ちつとしてゐたのです。或時なんぞは瓶を手を持つて水を汲まうと思つて蹲んだのです。さうして其儘水も汲まずに半時もちつとしてゐました。まあ其位な事で其外には普通の人と變つた事はありませんでした。」

先生はこれまで聞いて、更に話頭を轉じてリビエエ自身の上で就いて問ひ始めた。監獄や病院にゐた時の事を、根柢り葉掘り問うたのである。

リビエエは靜にゆつくりと答へてゐる。まるで意志の無いやうな態度をしてゐる。此態度はなるべく詳細に答へようとする注意から出てゐるのかとも思はれる。成るだけ詳細に正確に答へて無罪にならうと思つて、非常に努力してゐるのだとも思はれる。

最初から一時間程立つて、先生は看護人に言つた。「もう好いから連れて行つておくれ。」

先生がかう云つた時、リビエエはやつと安心したらしく見えた。

そして席を立ちながら先生に言つた。「ねえ、先生。どうぞ早くわたくしの身の上の極まるやうにして下さいまし。夢中でした犯罪の爲めに監獄に入れられてゐるのは、随分ひどいのですからね。わたくしの爲めには夢中であんな恐ろしい事をしたと云ふだけでも溜まらない程氣味が悪いのです。」

リビエエが出て行つた跡で、戸が締まつてから、先生は學生ポルトオオに問ふた。「君はどう思ふ。」

「非常な詐病者ですね」と、學生は答へた。

先生は頭を揮つた。「君は餘り早く判断し過ぎるやうだ。あの母の容體と云ふのを、君も聞いただらうが、何一つ間違つてゐない。あれだけの事を架空に饒舌ると云ふ事は殆ど想像が出来ないぢやないか。あの男の話した徴候は、カアルハウスが 'Catonie' と名付けて居る。事に依つたらあの男は監獄にゐる間に精神病の事を書いた通俗の本を手に入れて讀んだのかも知れない。併しわたしはきつとさうだとは云兼ねる。本人の容體も初め沈鬱になつて、それから突然愉快になつて、非常な犯罪をして、すつと後になつて突然恢復するまでの経過が如何にも事實らしい。愉快になつた時から犯罪を

するまでの順序なんぞは、躁狂の特徵だ。わたしが自分で詐病の陳述をするとしても、あれ以上には出来ない。併し兎に角わたしの見込では、あれは精神病者ではないね。そこでわたしは、あした今一應あの男を驗して見る。これはあの男が通俗の本やなんぞで知る事の出来ない徴候だ。わたしが自分で研究した語尾の徴候を驗して見るのだ。」かう云つた時、先生の顔には無邪氣な満足が見えた。

先生は語を繼いだ。「精神病には二つの方面がある。無感性と過感性とだね。無感性のものは極寒に裸體で町を走つても凍えない。過感性のものはそれと反対で尋常の人より鋭敏にあらゆる刺激に反應する。過敏になつてゐる。これまでリビエエの話した所では、精神病の無感性の方面しか見えてゐない。過感性な方面があるか、わたしの研究した同じ語尾を韻脚のやうに繰り返す癖があるか、あしたそれを驗して見る。」

先生がかう云つた時、戸が開いて書生タルウルボアが這入つて來た。

先生は云つた。「今來たかね。少し遅かつた。君は非常に興味のある患者を觀察する機会を逸してしまつた。遅刻した罰だから爲方がないよ。次はどんな患者だか、シユザンヌさんに聞いて見よう。」シユザンヌと云ふのは、今戸口から這入つた看護婦である。

タルウルボアが遅刻のことわりを云つてゐる間に、看護婦は、戸口を出て間もなく八十ばかりの婆あさんを連れて來た。颯風に逢つた跡の船のやうな體である。脚をしかと踏み締める事が出来ず、顔をぶら／＼と揮つてゐる。目は無意味に空を見てゐる。

先生は二人の學生を顧みて囁いた。「ねえ君、わたしは度々云つた事だが、年の寄つた女は悪相なのが多いね。爺いさんはさうではない。あの唇をしつかり結んで、人を疑ふやうな目附をしてゐる所を見給へ。女と云ふものは、年が寄るに従つて内情を隠蔽しなくなるのだね。」かう云つて先生は笑つた。此患者の診察が済んで、先生はポルトオオと一しよに附屬診療所を出た。大抵退出する時は、二人の學生のどちらかが先生の宅の前まで送るのである。先生はポルトオオに言つた。「君あのタルウルボア君は此頃婦人關係でも出來たのではないかね。さつきのやうに遅刻して、歸る時も急いで暇乞をしたぢやないか。どうも此二三日全體の調子が狂つてゐる。さつきもわたしがああ婆あさんを見て、女子性惡論をするるとタルウルボアはこんな事をした。」かう云つて先生はタルウルボアの眞似をした。療養のやうに隣をしたのである。ポルトオオは答へた。「先生に打ち明けては濟まないやうですが、先生のお眼鏡通りです。タルウルボア君は此頃或女に關係してゐます。それが質の悪い女です。それでゐる非常

な別品ですから、あの男は今にひどい目に逢ひはしないかと思ひます。」

先生は云つた。「世間で戀愛と云ふのも、やつぱり一種の精神病だね。どうかして其女と切れさせて遣りたいものだね。君が打ち明けてくれて好かつた。わたしがあの男に努力をさせて、氣を變へるやうに爲向けて見よう。御苦勞ながら君はすぐにあの男の所へ往つてくれ給へ。さうしてかう云ふのだね。今晚からあしたの午前へ掛けて、自分は用事があつて先生に頼まれた研究をする事が出来ない。そこで是非自分に代つてあのリビエエを見に往つて貰ひたい。かう云つて、君はけふの事を細に話すのだ。さうして、あの男に監獄まで往つてリビエエの其後の様子を見させるのだ。どうしてもさうしなくては行けないと云つて見給へ。多分あの男の事だから聽くだらう。」

先生は表向きそつけないやうな人で、其癖ひどく親切である。それだから犯罪者リビエエの精神状態に非常な注意をしてゐながら、一方には、學生のタルウルボアの身の上を案じてゐる。そこで翌朝附屬診療所へ來ると、すぐに看護人アベエルに問うた。「タルウルボア君が來はしないか。」アベエルは答へた。「タルウルボアさんは、さつき來まし

だが、すぐに歸りました。」

「なに、すぐに歸つたと。」先生は驚いたやうな顔をした。「ええ、すぐに歸りましたが、手紙を置いて参りました。」

先生はその手紙を開けて見た。「昨晚御差圖の通りリビエエを訪問いたし候處、同人は極めて安靜に相見え候。さて犯罪事件に付き二三問答を試み候に、同人は飽くまで裁判の過失の爲めに有罪となりしものなる由主張いたし候。其態度虚偽にあらざる如く相見え候。本日午後一時ちよつと訪問候ひしに、精神状態の過敏症を發しをり候を認め候。應對の間兎角同一の響ある語を襲ね用ひ候。恰も詩の韻脚の如くに候。ドキユルバンドが臍部に於いて觀察したる徴候に似たるものと認め候。母より遺傳したる精神異常ありと申し候處に注意すべきものと存せられ候。」

此手紙は先生に強い感動をさせた。先生は繰り返して全文を讀んで、署名までも綿密に見た。其時先生の顔は非常に嚴重に見えた。それを見て看護人はポルトオオに囁いた。「今クルウルボアさんが来ると大變です。わたくしは先生の顔色を能く知つてゐますが、今はひどくおこつてお出でなさいませ。」

ポルトオオは云つた。「なに。僕が好いやうにするよ。」併し此詞は法螺であつた。さう云つたもののポルトオオは先生に一言も言はずにゐる。

先生は云つた。「ゆうべは好く寝たと見えるね。」
「ええ、でもわたくしは寐てゐても、起きてゐても、身の上の事を案ぜずにはゐられませぬ。」此詞は始ど唇を動かさずに言つたのである。

「寝てゐても、起きてゐても」と先生は反復した。そして云つた。「併し兎に角わたし共もお前を助けたく思つてゐるのだからね。わたし共はお前を委しく診察するやうに言付けられてゐるだけの事だ。お前の精神状態をはつきり見極めたいと思つてゐるだけの事だ。」

「どうも餘り残忍な目に逢ひますと、勘忍が出来なくなつて困ります。」

「残忍、勘忍」と先生は反復した。そしてドイツ語でポルトオオに云つた。「君はクルウルボア君の手紙を見たかね。」

「いえ、まだ」とポルトオオは答へた。
先生は置手紙の中の「精神状態の過敏症」と云ふ所を指さした。

それから一時間程の間先生はリビエエに種々の事を問うたが、その返事の中には必ず響の似た語が襲なつてゐた。

それに先生のリビエエに對する態度は、きのふと少しも變らない。きのふ一旦調べた事を又調べるのかと見えた程である。ポルトオオはそれを不思議に思つた。

「お前が犯罪をした日は熱かつたのだね。」先生は熱かつた

自分も先生がひどくおこつてゐるやうに思ふからである。

ポルトオオは今年二十四歳ばかりになる。優しい顔を明色になちやれた髪が圍んでゐる。どうも精神病の研究をする人にはふさはしくない。此男よりはいつも眞面目で、苦み走つた顔をしてゐるクルウルボアの方が、この診療所の境界に似合つてゐる。クルウルボアは學術の成績もポルトオオより好いので、先生も特別に目を掛けてゐた。そこで其男に對する不満も甚しいのである。先生は看護人を呼び掛けた。「リビエエを呼び出しておくれ。」此聲は荒々しく聞えた。

それから先生はポルトオオに言つた。「君はきのふわたし頼んだ通りにクルウルボア君に話をしただらうね。」

「勿論いたしました。」かう云つたポルトオオは吃つてゐる。きのふの事を委しく話すと、友達の悪口を云はなくてはならぬので、困つて顔を赤くして云つた。「丁度女が誘ひに来てゐましたので。」

「ふん。君は友達を辯護をしようと思つてゐるね。まあ、君にきのふ言附けて置いた研究を見せ給へ。これはリビエエの跡で呼び出した婆あさんの病狀を書かせたのである。ポルトオオが原稿を出して讀んでゐる中に、看護人がリビエエを連れて來た。」

顔の表情は前日の通りである。あらゆる筋肉が動かさずにゐて、目だけがあちこち彷徨つてゐる。

と云ふ語に力を入れて言つた。

「見つかつたら大變だと思つただけで、外の事は分かりませんでした。」

「そんな風なら目も好く見えなかつたらうし、耳もまるつきり聞えなかつたらうね。」

リビエエはちよつと躊躇した。その様子は昔のことを思ひ出さうと努めるかとも見られるのである。そしてゆつくり云つた。「耳も目もはつきりしてゐて、まるつ切り健康な時と變りませんでした。」

暫くして先生は「宜しい」と云つた。それから看護人に合圖して、リビエエを連れ出させた。

リビエエは突然診察が済んだのを怪しむ様子であつた。そして何か言はうとして、考へて見てよした。只「そんなら、先生、お暇をいたします。」と云つただけである。

リビエエの出て行つた跡でポルトオオは云つた。「先生。あの男は詐病者ではありませんね。同じ響のある語を繰り返すと云ふ事を知つてゐる筈がありませんから、あれは自然です。詰まり過敏性になる時期が丁度來たのです。」

「さう。クルウルボア君も君と同じ判断をしてゐる。あれは今どこにゐるだらうね。」

「さあ、悪くすると例の女の所にみませう。」
先生は云つた。「君、御苦勞だが辻馬車を備つてすぐに往つて見て、若しみたら急いでわたしの宅へ来てくれるやうに言つてくれ給へ。なんの用だと聞くかも知れないが、若し聞いたら先生も君と同意見だから急いで鑑定書を書いて貰ふのださうだと云ひ給へ。わたしはこれから歸つて要點を書いて置くから。辻馬車なら手間は取るまい。其女はどこに往つてゐるのだね。」

「リユウ・モンジュです」
「宜しい。君にはそれが済んでから回診を頼まなくてはならぬ。患者が四人あるからね。早くしてくれ給へ。」

半時間ほど立つてから、ケエ・ド・ラ・メジツスリウのクワリオール先生の宅で、先生とクルウルボアとが對坐してゐる。

初めクルウルボアが這入つて来た時、先生は鋭い目で顔を見た。クルウルボアは恐ろしさに心臓の鼓動が留まる程であつた。それから先生は手眞似で腰を掛けさせた。そしてかう云つた。「クルウルボア君。君の關係してゐる女が君に金をねだつて、その調達が出来なかつたから縁を切つて貰はうと云つたのだね。そこで君はどうにでもして金を拵へようと思つた。君はきのふからけふへ掛けてわたしの診察をしてゐるリビエエが、七萬フラン近い^一貨を盗んで其贖物の行方が

知れないのを知つてゐる。それから君は友人の口から、けふわたしがリビエエの過敏性を験さうと思つてゐるのを聞いてゐる。そこで君はわたしに頼まれて監獄署にゐるリビエエを訪問した時、隠してゐる金を分けてくれるなら、精神病者と診断の極まるやうにして遣らうと云つたのだね。それをリビエエが承諾したので、君は同じ響の語を繰り返すと云ふ、過敏性の徴候を教へて遣つたのだね。ところがどうも君はまだ新前だ。賊の同類になつたのが間が悪くて、けふは臨床講義に出られなかつたのだ。君は置手紙をした。ところがわたしは年來手蹟で精神状態を察する事を研究してゐる。君のあの手紙の文字はひどく震えてゐて、君がどれだけ興奮してあれを書いたかと云ふ事が一目で分かる。それからわたしはけふ同じやうな事をリビエエに問うて見た。リビエエは同じ響の詞を重ねて答へたのは好いが、答の意味が昨日のとは違つてゐる。わたしはこれだけの徴候を見て、君とリビエエとの間に成立つた事をはつきり看破した。どうだ。それに違ひはあるまいね。返事をし給へ。まだ今の中に後悔して事實を話せば、わたしは君の不始末を發表せずに置く。」最後の詞は、鋭い目で學生の顔を見ながら、聲を勵まして云つたのである。

クルウルボアの顔は先生の詞を聞いてゐるうちに、煩悶に堪へぬやうな表情になつて来た。とうとうしまひには啜泣を

しながら云つた。「先生。どうも済みません。お察しの通りです。わたくしは女に迷つて良心を失ひました。わたくしは人非人です。もう自殺する外ありません。」

先生はこれを聞いて、ひどく氣の毒に思ひながら、それを抑へてゐるやうな調子で云つた。「いや、それには及ばない。君は只後悔して其女と別れさへすれば好いのだ。併しすぐでなくては行けないよ。わたしが今晚君を連れて停車場まで往くから、すぐにミュンヘンへ立ち給へ。クレエマリン教授に宛てた紹介状を上げる。それから十箇月間位ドイツにゐられるやうに、金も君に渡して遣る。君は大ぶドイッ語も出来るから、あの人の講義を聞くのに差支あるまい。毎日どんな事を聞いて、どんな事をしたと云ふ事を、一々わたしに報告し給へ。どうだ、それが君に出来るかい。」

學生は泣きながら答へた。「きつと仰しやる通りにいたします。一かう云つて學生は先生の手に接吻しようとしたが、先生はそれを拂ひ退けた。」

そして先生はかう云つた。「さう。まだ君に聞いて置かなくてはならぬ事があつた。君はリビエエといろく話をしただらうが、あの男はどうして躁狂の眞似をあれ程にするだけ、精神病學上の智識を得たのだから君はそれを聞きはしなかつたか。」

學生は答へた。「それは聞いて見ました。なんでも猥褻罪

に問はれた醫者が同じ監獄にゐて、それが教へたのださうです。」

「その醫者の名を聞いたかね。」
「いゝえ」と學生は答へた。

先生は云つた。「わたしは其醫者の罪を問はうと思ふのではないが、名が分つてゐれば聞きたいのだ。あれ程に人を爲込んだとすると、其男は非常に豪い。なんでも餘程多數の精神病者を見た男に違ひない。わたしはそれがうらやましい。」

復讐 (レニエエ)

バルタザル。アルドラミンは生きてゐた間、己が大奮し
く知つてゐたから、己が今あの男に成り代つて身上話をし
て、諸君に聞かせることが出来る。もうあれが口は開く時は
無い。笑ふためにも歌ふためにも、ジェンツアの葡萄酒を
飲むためにも、ピエンツアの無花果を食ふためにも、その外
の事をするためにも、永遠に開く時は無い。なぜと云ふに、
あれはサン・ステファノの寺の石壘みの下に眠つてゐるから
である。兩手を胸の創口の上に組合せて眠つてゐる。此創が
一七七九年三月三日にあれが若い命を忽然絶つてしまつたの
である。

バルタザルは三十になり掛けてゐた。丁度バルタザルの父
と己の父とが小さい時から近附きになつてゐたやうに、バル
タザルと己とも早くから親しい友達になつてゐた。己達二人
は殆同時に父を喪つた。その亡くなつた父も略同年位であつ
た。あれが館と己の館とは郷同士になつてゐて、二つの館が

それを多く味ふために夜を以て日に繼いだ。その遊びの中で
主位を占めてゐたものは戀愛であつた。

バルタザルは女に好かれた。そして己を好いてくれた。そ
れだから宴會の席でも散歩の街でもあれと己とは離れずにゐ
た。そこで二人が一層離れずにゐられるやうに、あれと己と
は友達同士になつてゐる女を情人にした。偶に情人と分かち
てゐる時は、二人は中洲へ住つて魚や貝の料理を食つた。凡
そ市にありとあらゆる肉欲に満足する遊びには、己達二
人の與らぬことは無い。そしてそんな遊びの多いことは言を
須たない。尼寺の應接所に二人が据わつて、干菓子をかじつ
たり、ソルベットを啜つたりしながら、尼達の饒舌るのを聞
いて、偷目をして尼達の胸の薄衣の開き掛かつてゐる所をの
ぞいてゐたことは幾度であらう。二人が賭博の卓に倚つて、
人の金を取つたり、人に金を取られたりしてゐたことも幾晩
であらう。カルネワレの祭の頃、二人で町中を暴れ廻り跳ね
廻つたのも幾度であらう。假裝無恥に一しよに往つて、一し
よにそこから歸る時は、二人の外套の袖と袖とが狭い巷で觸
れ合つてゐたものである。彼誰時の空には星の色が褪め掛か
る。運河の岸まで歩いて來ると、潮氣のある風が海から吹い
て來て、二人の著物の裾を翻す。二人は色色に塗つた假面の
下の熱した頬の上に、曉の冷たい息を感じたのである。
こんな風に己達の青春は過ぎた。エネチアの少女等は戀愛

同じ運河の水に影をうつして、變つた壁の色を交ぜ合つてゐ
た。バルタザルが館の正面は白塗で、それに大さの違ふ淡紅
色の大理石で刻んだロゼットが二つ嵌めてあつた。それが化
石した花のやうに見えた。己の家族の住んでゐる館、即ちキ
マニ家の館は壁が赤み掛かつた色に塗つてあつた。館から運
河に降りる石階の上の二段は、久しく人に踏まれて禿びてす
べつこくなつてゐた。上から三段目は水に漬つたり水の上に
出たりするので、濕つてぬるぬるしてゐた。

大抵バルタザルは毎日此石階に出た。朝か晝か、さうで無
いと松明の光に照されて晩に出た。あれが己の館の石階に片
足を踏み掛ける時、反對の足に力が入ると、乗つて來たゴン
ドラの舟がごぼごぼと揺れた。己はあれが石階の上から呼ぶ
聲を聞いた。あれは随分善く話して善く笑ふ男であつた。あ
れも己も少しも拘束せられずに青春を弄んでゐたのである。
大抵遊びの場所へ己を引き出すのはあれが首唱の力であつ
た。あれは強い熱心と變つた工夫とを以て遊びを試みる男で
あつた。受用はあれが性命の核心になつてゐたので、あれは

でこれに味を付けて過ぎさせてくれた。波の上をすべるゴンド
ラの舟が、ひまな己達の體をゆすつてくれた。歌の聲や笑聲
が、柔かい烈しさで己達のひまな時間を慰めてくれた。その
時の反響がまだ己の耳の底に残つてゐる。こんな樂しかつた
日の記念の數は、運河のうねりの數よりも多、その記
念のかがやきは運河の水の光より強い。今から思つて見て
も、あの生活を永遠に繼續することが出來たなら、己は別に
何物をも求めようとはしなかつたらう。あの生活をどう變
更しようかと云ふ欲望は、己には無かつたらう。只目の前に
ゐる美しい女の微笑が折折變つて、その唇が己に新なる刺戟
を與へてくれさへしたら、己はそれに満足してゐたらう。

併しバルタザルはさう思はなかつた。己の胸はあれが館の
窓が鎖されて、只白壁の上に淡紅色の大理石の花ばかりが
開くやうに見えてゐた時、どんなにか血を流したたらう。バ
ルタザルは遠い旅に立つた。世間を見ようと思つたのであ
る。あれは三年の間遠い所にゐた。そして去る時飄然として
去つたやうに、或る日、又飄然として歸つて來た。朝が來れ
ば、あれの聲が石階の上から又己を呼ぶ。晩にはあれと己と
が又博奕の卓を圍む。己達は又昔の通りの生活を始めた。そ
のうちに或る日不思議な出來事があつて、あれを永遠に復起つ
ことの出來ないやうにしてしまつた。それからと云ふもの
は、あれはサン・ステファノの寺の石壘みの下に眠つてゐ

る。両手を胸の創口の上に組み合せて眠つてゐる。それだから己の口から今諸君にあれが身上話をしなくてはならぬことになつた。そこで己、ロレンツォ・キラミは諸君にことわつて置くが、己の話すのは、己の確かに知つてゐる事では無い。只あれが不思議な死を説明するために、己の推察したあれが生涯である。只或る夜、幹の赤い椏の木の林で、己の友人のエネチア人、バルタザル・アルドラミンが己に囁いたやうに思はれた傳記である。

ロレンツォや、聞いてくれ。或る日の事であつた。己(バルタザル)は情人バルビさんと一しよにスキアヲニ河の岸に立つてゐた。バルビさんは日の當たる所にゐるのが好きだつた。それは髪が金色をしてゐて、それが日に照されると、美しい所を己に見せて、己に氣に入るやうにと努めてゐたのだ。そこでなるたけ久しく日の當たる所にゐようと想つて、自分のまはりを飛び廻つてゐる鳩に穀物を蒔いて遣るのが面白いと云つた。バルビさんの手から散る粒は、金色の雨が降るやうに見えた。併し己にはバルビさんは容色が餘り氣に入つてゐなかつたので、それを眺めてゐる代りに、その手から餌を買つてゐる小鳥を見てゐた。十二羽位もゐたらう。羽は滑かで足には鱗が疊なつてゐて、喙は紫掛かつて赤く、嘴

は珊瑚色をしでゐる。皆むくむく太つてゐるのに、争つて粒を啄んでゐる。この卑しい餌を食ふのが得意らしい。そのうち鳩は仲間を呼び寄せた。仲間が密集してそこへおろして來た。このとたんに己は目を轉じて赫々ラタナの水を見た。一羽の大きい純白な鳩が暖腹れた聲をして鳴きながら飛んで通つた。鋭い翼で風を截つて、力強く又素早く飛ぶ。己は此時鳩と鳩との懸隔に心附いて、己の身の上を顧みた。なんだかあの水鳥が己に尊い訓誨を垂れてくれたやうであつた。けふはここに、あすは遠方に、いつも活動してゐる水鳥の氣象は、毎日暖い敷石の上で僥倖の餌を争つてゐる鳩とは違ふと思つた。ロレンツォや。聞いてくれ。己はこの鳥の寓言を理解したのだ。

ロレンツォや。己は即日世間へ出て、その千態萬狀の間に己の樂を求めようと發意した。先づ己の第一の最愛の友たるお前を回抱して別を告げた。次にバルビさんに暇乞をした。それから銀行へ往つた。そして喜んで己の命を聴く役人共の手に金をわたした。どこへ往つてもたつぶり金を賭けて、博奕をして、土地の流行の衣服を著て、その外勝手な爲拂をするに事足る程の金をわたした。

それから出立した。ゴンドラの舟に身を托して陸に上つた。エネチアの運河の網は、少し乗り廻つてゐると、川筋がちよつと曲ると思ふや否や、元の所に歸つてゐる。なんだかた。國國の女を一一驗してゐる。別荘の部屋や庭にゐて、餘り世間へ顔を出さぬが、主人はまだ頗る立派な風采をしてゐる。

さう云ふ交際を好まぬ人ではあるが、主人は好意を以て己を迎へてくれた。只その顔の表情にどこやら不安の影があるのに、己は氣附いた。物を言ふ間にも、白髪かつらの長い毛の端を口に銜へて咬んでゐる。己が此度の旅立の事、その目的の事などを話して聞かす間も、主人はぢつとして聞いてゐられぬらしい。

己が話してしまふと、主人は旅立をするに云ふことにも、何を旅の目的にするに云ふことにも同意してくれて、何かの用に立つたらうと云つて手紙を二三通くれる約束をした。それからその手紙を書くに云つて席を起つた。長い廊下の果に、主人の花紋を印した上衣の後影が隠れた。上衣の裾は軽く廊下の大理石の上を曳いて、路には麝香と龍涎香との匂を残した。

己は此香氣と、さつき己の來たのを見て不快を掩ひ得なかつたらしい態度とを思ひ合せて、多分主人が色氣のある催をしてゐる最中に、己は飛込んで來たので、邪魔になるのだからと推察した。昔久しい間自分の主な爲事にしてゐた色氣のある事を、主人がまだ斷つてゐないと云ふことは、主人の年が積もつてゐるにも拘はらず、世間で認めてゐる。甚しきに

自分が往來で自分に出逢ふやうな氣がする。それに今陸に上つて見ると、これから眞直にどこまででも行かれる。元の所に歸るやうな處は無い。これまでとは大ぶ工合が違ふ。ずんずん歩いて行くうちには、きつと何か新しい事に出逢ふに違ひ無い。乗つてゐる馬車からして己には面白い。巖壘に出來てゐて、場席も廣い。己は先づゆつたりと身をくつろげた。車の輪が一廻轉する毎に、竝木の木が一本背後へ逃げる毎に、己は今までに知らぬ歡喜を覺えた。一匹の小犬が己の馬車に附いて走りながら、己の顔を見てひどくおこつて吠える。己はそれを見て、涙の出る程笑つた。そんな風で、どんな瑣細な事でも、面白く無いものは無かつた。

己は親類の老人アンドレア・バルヂビエロの別荘に泊る積りであつた。別荘はメストレから五時間行程の所にある。己はアンドレアに暇乞をしに寄つて、一晚泊らうと思つたのだ。別荘の建築は物好を盡したもので、庭園も立派だ。庭園は主人の老護官が自分で手を入れて、絶えず大勢の植木屋を使つてゐる。主人は大抵此別荘にばかりゐる。土地の空氣は好い。主人が人間の齡の尋常の境を廻かに越してゐて、老後に罹り易い病のどれにも罹らずに、壯んな氣力を養つてゐるのは、好い空氣の賜である。主人は生涯に赫赫たる功名を遂げた人である。廣く世間を見た人である。主人は一面剛毅な人で、一面又温和な人であつたから、随分種種の女をも愛し

至つてはこの目的のためには、主人は或る冒険をも敢てするので、女房妹を持つてゐる人は主人を怖れてゐるときへ云ふものがある。さう云ふ噂をする人に聞けば、主人は目的を達するために、暴力をも權謀をも、其他のあらゆる直接間接の手段をも避けない。女を盗み出したとか、待伏して奪つたとか云ふ噂もあつた。併しそれがいつも密かに計畫して、巧みに實施せられるので、世間には只ぼんやりした流言が傳はつてゐるだけで、證據や事實の擧げられたことは無い。己はさう云ふ催しのある所へ来たのでは無いかと思つたので、手紙を受け取つたら、なるべく早く此別荘を立去らうと決心した。手紙はロオマとパリイとに宛てて書いて貰ふ筈だつた。實は己はどちらへ先に往かうかと迷つて、どうもフランスの方へ心が引かれるやうに感じてゐたのだ。

このどちらを先にしようとか云ふ問題の得失を、とつおいつして考へて見ながら、己は此間にあつた大鏡に姿をうつして、自分の風采の好いのを楽しんでゐた。絹の上衣、刺繡のしであるチョッキ、帯革に金剛石を飾めた靴、この總ては随分立派で、榮耀に慣れた目をも満足させさうに見える。己の目の火のやうな特別な光も人を誘ふには十分だ。これだけの服裝と容貌とを持つてゐれば、幸福の女神に對して、極大膽な要求をしても好ささうだ。噂に聞けば、フランスの美人は或る風姿や態度の細かい處に氣が附いて、その欲望にかなふやう

にしてゐれば、決して情を通ずるに吝で無いさうだ。それに己はエネチア製の首飾の鎖や、レエスや、小さい肖像を嵌めた印籠を澤山爲入れて来た。女に贈る品物にも事は關かない。

己は庭に降りて歩きながら、自分がきつと經驗するに極まつてゐる千差萬別の奇遇の事を想像した。無論その相手は女である。己は目の前に戀愛の美しい幻影が新に現するのを見た。戀愛などと云ふものは、どこの國でも同じ事で、風俗習慣に従つて、變態を生ずることは少いと云ふことを、己はまだ悟つてゐなかつたのだ。なんでも自分に千萬無量の奇蹟や、意外の出來事が發見せられるやうに思つて、其間に何の疑をも、披まなかつた。己は忽然強烈な欲望を感じた。そしてもう自分がその物語めいた境界に身を置いてゐるやうに思つた。若し此刹那に己を呼び醒まして、お前はまだエネチアを距ること數哩の譏官アンドレア・バルヂビエロの別荘にゐるのでは無いかと云ふものがあつたら、己は何よりも奇怪な詞としてそれを聞いただらう。そんな風に自分の平生の活計と慣熟した境遇とを脱離したやうな感じが、己の胸一ぱいになつてゐたので、自分が極めて奇怪な極めて愉快な目的に向つて往くのだと云ふことが、己には争ふべからざる事實のやうに思はれた。こんな我ながら不思議な期待の情のお蔭で、現在の心で觀察すれば、尋常一般の物が皆異様の形相を呈す

るやうに見えた。今歩いてゐる細かい粒の揃つた砂の敷いてある庭の小徑も、一曲り曲つた向うには、意外な眺望が展開しはせぬかと疑はれた。圓形に刈り込んである「あさまつげ」の木を見れば、そのこんもりした緑の中にも秘密が藏してありはせぬかと疑はれた。

かう云ふ心持で己は或る岩窟の前に来た。入口は野生の葡萄が鎖してゐる。もう日は稍西に傾いてゐるが、外は著いから常なら己は只涼しい蔭を尋ねて其中に這入つただらう。然るに此時入口を這入る己の心の臟は跳つた。この田舎めいた岩窟の中の迂回した道を歩いて行つたら、際限の無い不思議のある處、又事によつたら己の生涯の禍福が岐れる處に出はせぬかと思つたからだ。

岩窟の中は涼しくて愉快であつた。濕つた石壁に凝つて滴たる水が流れて二つの水盤に入る。寂しい妄想に耽りながら此中の道歩く人に伴侶を與へるためか、穹窿には銅で鑄た種種の鳥獸が据を附けてある。最初這入つた一室の奥には第一の稍暗い室がある。その又奥には第三の全く暗い室がある。ここでは只水の滴たり落ちる聲が聞える。それがこの寂寞の境の單調な時間の推移を示す天然の漏刻かとあやまたれる。床にはひどい凸凹がある。己は闇の中を辿つて行くうちに足を挫きさうになつた。その先きは低い隘道になつたので、己は腰を屈めて進んだ。折折岩角が肩に觸れる。暫く歩

くうちに屈めた腰が疲れて來た。己は推測した。多分此道はわざと難澁にしてあるのだらう。ここを通り過ぎて、又日の目を見、軽らかな空氣を呼吸する時の喜を大きくするために、わざと難澁にしてあるのだらうと云ふのである。此推測は吾を欺かなかつた。潛り抜けて出た處は、絶勝の地點で庭園の全體は勿論、別荘の正面と其石柱の美しい排列とをも見わたすやうになつてゐる。晴れ切つた空を、別荘の屋根の線がかつきりと横断してゐる。己はこれを眺めながら、あさまつげの苦味のある香と、柑子の木の砂糖のやうに甘い匂とを吸つてゐた。

己は此二様の香氣を嗅いでゐるうちに、ふと妙な事に氣が附いた。それは別荘の室は悉く開け放つてあるのに、只一箇所の室が鎖してあると云ふ事である。熟く視れば、この二つの室は重ねな扉で嚴重に閉ちてある。全體の正面は開けた窓だの硝子に日光がさして光つてゐる。この二つの密閉した窓だけが暗い。なぜだらうか。己が怪訝の念を禁じ得ずして立つて居ると、己の肩の上に誰やらの手が置かれた。それは主人バルヂビエロの手であつた。主人は今一つの手には己のため書いた紹介状を持つてゐて、それを己にわたした。

二

己は禮を言つて、すぐに出立しようとした。まだノレッタ

まで住つて泊られるだけの日足は十分あつたのだ。ところが意外にも主人は己を留めて一晩泊らせようと云つた。己はとうとう主人の意に任せることにして、それから二人で庭を歩いた。主人は己にまだ見なかつた所を案内して見せた。主人の花紋のある長い上衣の裾が、砂の上を曳いてゐる。そして手には長い杖を握いてゐて、折折その握りの處を齒で噛む癖がある。

バルヂビエロはまだ杖に縋つて歩くやうな體では無い。綺麗に剃つた頬に刈株のやうな白い髯の尖が出掛かつてはゐるが、體は丈夫でしつかりしてゐる。己達は緑の木立に圍まれた立像の前に足を駐めた。主人はその裸體を褒めたが、其詞は此人が形の美を解してゐると云ふことを證する詞であつた。その外主人は杖の握りに附いてゐる森のニップをも褒めたが、その褒めかたに己は殊に感服した。そのニップの影物は、主人の太い、荒荒しい手で握つてゐる杖の頭に附いてゐて、指の間からはそれを締た黄金がきら附いてゐるのである。

そのうち食事の時刻になつた。奢を極めた食事で、随分時間が長く掛かつた。己達の食卓に就いたのは、周圍の壁に鏡を爲込んだ圓形の大廣間であつた。給仕は黒ん坊で、黙つて音もさせずに出たり這入つたりする。その影が鏡にうつつて、不思議に大勢に見えるので、己はなんだか物に魅せられぬが、それでもその冒険が度を過ぎてゐるらしい。

いろいろ話をしてゐるうちに、己がかうではあるまいかと思ひ遣つたやうな事を、主人が公然打ち明けて訴へ出した。己を爲合せだと云つて褒めて、それを自分の老衰に較べた。その口吻が特別に不満らしかつた。己は氣を著けて聞いてはゐない。己の考では、それはどうせ人間の一度は出逢ふ運命で、人間は早晚さうなると云ふことを知つて、さうならぬうちに早く出来るだけの快樂を極めるが好いのだ。そこで己は話をしながらも盛んにジエンツァアの葡萄酒を飲み續けて、肴には果物を食つた。その果物は黒ん坊が銀の針金で編んだ籠に盛つて來たのだ。己は果物の旨いのを機會として、主人に馳走の禮を言つた。主人がこれに答へた辭令は頗る巧なものだつた。餘り思ひ設けぬ來訪に逢つたので、心に思ふ程の馳走をすることが出来ない。只庭を見せて食事を一しよにする位の事で堪忍して貰はんではならない。その食事面白い相客を呼び集める餘裕は無いから、自分のやうな不機嫌な老人を相手にして我慢して貰はんではならない。せめて音楽で

たやうな心持がした。黒ん坊は縁れた毛の上に黄絹の帽を被つてゐる。帽の上には鶯の羽がゆらゆらと動いてゐる。耳には黄金の環が嵌めてある。黒い手で注いでくれるのは、己の大好なジエンツァアの葡萄酒だ。己はそれを飲めば飲む程機嫌が好くなつたが、主人の顔は見る見る陰氣になつた。己に盛んに飲食させながら、主人は杯にも皿にも手を著けずゐる。併し此場合に己の食機の振つたのは、矢張模範として好い事かと思ふ。無論旅をして腹を空かしてゐるので、不斷より盛んに飲食したには違ひない。併しそればかりでは無い。一體世間を廣く渡つた人の言つてゐる事が誰で無いなら、己は今にどんな事に出逢ふかも知れず、又その出逢ふかも知れぬ事が千差萬別なのだから、己はしつかり腹を拵へて掛かるべき身の上ではあるまいか。とにかく己はいつに無い上機嫌になつて來た。己は酒に逆せて、顔が健やかな濃い紅に染まつた。それを主人は妬まじげに見てゐるらしい。心身共に丈夫な主人の事だから、誰をも妬むには及ばぬ筈なのに。

主人は岩盤には相違無い。併し明るい燈の下でつくづく見てゐると、どうも顔に疲勞の痕が現れてゐるやうに思はれた。庭を餘り久しく散歩した爲か、それとも外に原因があるのか。此人は見掛けが丈夫らしくても、どこか悪い處があるのだらうか。バルヂビエロの年齢はもう性命を維持して行くだけの力しか無くなる頃になつてゐる。あれでも若し將來にもあると好いのだが、それも無いと云ふのだつた。己はかう云ふ返事をした。相客や音楽は決して欲しくは無い。先輩たる主人と差向ひで靜に食事をするのが愉快だ。只主人の清閑を妨げるのでは無いかと云ふ事だけが氣に懸かる。勿論かう云ふ機會に聞く有益な話がどれだけ自分の爲になると云ふことは知つてゐると云つた。主人は項垂れて聞いてゐたが、己の詞が盡きると頭を擧げた。そしてかう云つた。お前の禮儀を厚うした返事を聞いて満足に思ふ。お前も今さう云つてゐる瞬間には、その通りに感じてゐるかも知れない。併しも少しするとお前の考が變るだらう。それはお前が一人で敷布圍と被布圍との間に潜り込む時だ。若いものにはさう云ふ事は向くまい。殊に女に可哀がられる若いものにはと、主人は云つた。

女と云ふ詞を聞くと同時に、なぜだか自分にも分からぬが、さつき見て氣になつた、鎖してある窓の事が思ひ出された。己は主人の顔を見た。今此座敷にゐるものは主人と己との二人切りで、給仕の黒ん坊はゐなくなつてゐる。己には天井から吊り下げたある大燭臺がぶらぶらと揺れてゐるやうな氣がする。そして其影が壁の鏡にうつつて幾千の燭火になつて見える。己はもうジエンツァアの葡萄酒を随分飲んでゐる。そして今主人の何か言ふのに耳を傾けながら、ビエンツァアの無花果の一つを取つて皮をむいてゐる。己はその汁の多い、

赤い肉がひどく好きなのだ。

主人の詞が己の耳には妙に聞える。なんだか己の前にある主人の口から出るのでは無く、遠い所から聞えて来るやうだ。周囲の壁に嵌めてある許多の鏡から反射してゐる大勢の主人が物を言つてゐるやうにも思はれる。それにその詞の中で己に提供してゐる事柄には、己は随分驚かされた。尤當時の己の意識は此驚きをもはつきり領略してはみなかつたが、とにかく己は驚いてゐたには違ひ無い。なぜと云ふに己は突然かう云ふことを聴き取つたのだ。己は只即座に立ち上がつて、さつき氣にした、あの窗の鎖してある部屋に往けば好い。そこには寢室の上に眠つてゐる女があると云ふのだ。それに就いて己は誓言をさせられた。それはその女が何者だとか、どこから来たのだとか云ふことを、決して探らうとしてはならぬと云ふのだ。それから己はかう云ふことを先づ以て教へられた。その女は必ず多少抵抗を試みるだらう。併し主人は己をそれに打ち勝つだけの男と見込んで頼むと云ふのだ。いかにもその位の氣力はある。

己は急劇な猛烈な欲望の發作を感じた。己は立ち上がつた。それと同時に周囲の鏡にうつつてゐる大勢のバルヂビエロが一齊に立ち上がった。そしてその中の一人が己の手を取つて、鏡の廣間を出た。

廣間を出て見れば、寂しい別荘はどこも皆眞つ暗だつた。

廊下が盡きて梯になる。梯の下の前房には人影が無い。己は柱列のある所に出た。朝の空氣には柑子の香が籠つてゐる。

己の馬車には馬が附けて中庭に待たせてある。己は車に乗つた。そして車が動き出すと共に、己はぐつすり寐入つた。

バルヂビエロの別荘での不思議な遭遇は、己を夢のやうな状態に陥いらせた。旅の慰みが次第に此夢を醒した時、己は其願末を考へて見て、どうした事か分らぬやうに思つた。又それをどうして分らせようと云ふ手段も己には見出されな。一體あの沈黙した未知の女は誰だつたか。それに對してバルヂビエロの取つた手段にはどう云ふ意味があつたのか。主人があつた女を憎んで己を復讐の器械に使つたのだらうか。それとも主人はわざと只周囲の状況を秘密らしくして、己にする饗應に味を加へたまでの事か。

己はミラノへ來た。滯留が長引いた。己は上流の人達と一しよに遊び暮らした。己を優待してくれた女は大勢ある。その中で己を一箇月以上樂ませてくれたのが一人ある。其女は己に自分の内で逢つたり、芝居で逢つたり、又己と一しよに公園を散歩したりした。夜燭火の下で逢ふ時は、其女は顔をも體をも己に隠さなかつた。そのうちにバルヂビエロの別荘に、た未知の女の佛は、己の記憶の中で次第に醜氣になつて、己がフランスへ旅立つ頃には、とうとう痕無く消えてし

主人は己を延いて、梯を一つ登つた。その著てゐる長い上衣の裾が、大理石の上を曳いて、微かな、鈍い音をさせる。己の靴の踵がその階段を踏んで反響を起す。幾度も廊下の角を曲がつた末に、主人と己とは一つの扉の前に立ち留まつた。鍵のからから鳴るのが聞えた。續いて鍵で錠を開けた。油の引いてある櫃が滑かに廻つて、扉が徐かに開いた。主人は己の肩を衝いて、己を室内へ押し遣つた。

己はひとり闇の中に立つてゐた。深い沈黙が身邊を繞つてゐる。己は耳を澄まして聞いた。微かな、規則正しい息遣ひが聞えるやうだ。室内は只なんとなく暖く、そして勻のある闇であつた。

此夜は奇怪な名状すべからざる夜であつた。

己はこの室内で、不思議なことに遭遇して、そのうちにどれだけ時間が立つたか知らない。

やうやう己は起つて戸口に往つた。そして肩で扉を押し開けようとした。併し扉は開かない。誰か外から力を極めて開けるのを妨げてゐるやうだつた。その際に衣服のさわつく音がして、續いて廊下を歩み去る軽い足音がした。

己は又扉を押しした。戸は開いた。己は二三歩出て、又跡へ引き返さうとした。曉の薄明かりと共に室内へ歸らうと思つたのだ。併し己は前の誓言を思ひ出して、急ぎ足にそこを立ち退いた。

まつた。

パリイと云ふ美しい都會の遊興は、その多寡を以て論じても、その精粗を以て論じても、全く人の意表に出てゐる。己はあらゆる遊興に身を委ねて、月日の過ぎるのを忘れてゐた。無稽があり合奏會があり、演劇があるが、そればかりでは無い。バルヂビエロの紹介状が用に立つて、己は種種の立派な人達に交際することが出来た。己は昏迷の中に目を送つて、エネチアの事やその友達の事を忘れてしまつた。併しそれは己ばかりの咎では無い。ロレンツオや、君も外の友達も己を忘れてゐたやうだ。そんな風で殆一年ばかり立つた。

己はベロンワルと云ふ女を情人にしてゐた。體の小さい、動作の活潑な、舞踏の上手な女であつた。己は此女とロンドンへ往つた。これは女のためには職業上の旅行で、己はその道中の慰みに連れて行かれたのだ。ところがロンドンでロオド・プロツタポオルと云ふ大體那が段段不遠慮に此女に近づいて來て、女は又ロオドと己との共有物になりたさうな素振をして來た。そこで己はベロンワルと切れた。

パリイに歸つて見ると、イタリヤから己に宛てた大きい封書が届いてゐた。中にはバルヂビエロの長い手紙があつた。種種な事が書いてある。ジエンツァの葡萄酒やピエンツァの無花果の事がある。それから例の不思議な事件の其後の成行がある。あの事件はそつちのためには不愉快では無かつた

だらうが、そつちを或る葛藤の中に引き入れたのは、氣の毒だと云つてある。とにかく客にあんな事をさせる主人は無い筈だから、主人を變に思つたらうと云つてある。今其手紙の一部を讀んで聞かせよう。

「ああ、我が愛する甥よ。御身もいつかは老の哀を知ることだらう。御身が顔を見なかつたあの娘を、その住んでゐた土地から、非常な用心をして秘密に奪つて來させた時、己は自分の老衰を好くも顧慮してゐなかつた。御身が來るまでにはあれはもう二週間ばかり己の所にゐた。それに己はまだ一度もあれを遇すべき道を以てあれを遇することが出来なかつた。御身にも氣が附いたらしなかつた己の不機嫌はそれゆゑであつた。それに御身の若い盛んな容貌は己の心を激させた。ああ、己は御身の青春をどれだけか妬く思つたらう。此思を機縁として、己のあの晩の處置は生れて來たのだ。己はあの鏡の間で御身と對坐した時、あの美しい囚人のゐる密室を、御身がために開かうと決心した。己はあの女に、あいつの運命が全く我手に委ねられてあると云ふことを、此處置で見せ附けて遣る積りであつた。それと今一つの己の豫期した事がある。それはあの女が御身に身を委せたこと知つたら、己の戀が褪めるだらうと云ふことであつた。己の既往の經驗によれば、己は自分の好いてゐる女が別の男に身を委せたこと知ると、己の戀は大抵褪めた。畢竟情人の不實を知ると云ふこと

は、戀を減す最好の毒である。そして御身は苦も無く己がために此毒を作つてくれるだらうと、己は豫期したのだ。己が御身の肩を押して、御身をあの暗室に入らせたのはかう云ふわけであつた。然るになんと云ふ物數奇か知らぬが、己はふとあの暗室の戸口に忍び寄つて、扉に耳を付けて偷聽をする氣になつた。御身等二人の格闘、あの女の降服、呻吟が己の耳に入つた。戰は反復せられる。暗中に鈍い音響が聞える。ああ、此時己は意外の事を感じた。形容すべからざる嫉妬の念が、老衰した己の筋肉の間を狂奔して、その拘攣してゐた生活力を鞭うち起したしめた。己は鬨を排して闖入しようとしたことが二十度にも及んだだらう。さて最後に御身が戸を開けて出た時、己は卻つて廊下傳ひに逃げ去つた。なぜかと云ふにあの時御身の顔を見たら、己には御身を殺さず置くことが出来なかつたからだ。己は自分の徳としなくてはならぬ御身を殺すに忍びなかつたのだ。實に嫉妬の効果には驚くべきものがある。己の嫉妬は己の氣力を恢復せしめた。己はあの時に再生した其氣力を使役してゐる。

あの女は漸く自分の境遇に安んずる態度を示して來た。そこで己は女を密室から出した。鏡の間の壁に嵌めた無數の鏡は、女の艶姿嬌態を千萬倍にして映じ出だした。庭園には女の輕輕とした歩みの反響がし始めた。己が晩年に贏ち得た、これ程の楽しい月日は、總て是れ御身の賜ものだ。己は折折併し、我が愛する甥よ。御身はまだ若い。己は御身に警告せずして罷むに忍びない。己の次は御身だ。危険が御身に及ぶと云ふことは、この珍らしい娘の目の中で己が讀んだ。己が此危険を御身に豫告するのは、己が嘗て御身に禍を遣した罪を讀ふ所以である。

此豫測は或は御身が思ふ程厭ふべき事では無いかも知れない。今からは目に視えぬ脅迫が御身の頭上に垂れ懸かつてゐる。併し今から御身が一切の受用に臨んで、一層身を入れて一層熱烈にこれを享けるのは、此脅迫の賜ものであらう。青年はとかく何事をも明日に譲つて恬然としてゐるが、御身のこれまでの快樂には必要な刺が無かつた。己は其刺を御身に貽るのだ。御身は己に感謝しても好からう。さらばよ。我指はもう拘攣して來た。老いたるバルヂピエロは恐らくは今晚最終の一杯を傾けたのだらう。」

三

評議官の手紙の中で言つてゐることは吾を欺かなかつた。此手紙を讀んだ日から己の心の内には新しい感じが生じた。此精神状態はこれまで夢にも見たことの無い状態である。手紙によれば己の性命を覗ふものがある。少くも心の内では、己の玉の緒を絶たうと企ててゐるものがある。これまで己の死ぬる時刻を極めるのは自然そのものであつたが、もうこ

女と一しよにあの岩窟に入ることがある。其時は女の若やかな涼しい聲があつた。岩の隙間から石盤の中に流れ落ちる水の音にも優つて聞える。己は幸福の身となつた。女は己に略奪せられたことを、過度の用心のために己に拘禁せられてゐたことを、最早遺恨とはしなかつた。今の新生活が女には氣に入らなかつた。女は此間に己の心を左右する無制限の威力を得た。己はとうとう御身の名を白狀した。女は今御身が誰だと云ふことを知つてゐる。そして己を憎むと同じやうに、御身をも憎んでゐる。

女は毎晩己にジェンツァの葡萄酒一杯を薦める。黒ずんだ、ふくよかな瓶を織い指で擽げて酌をする姿はいかにも美しい。酒は青み掛かつた軽い古風な杯に流れ入る。唇に觸れて冷やかさを覺えさせる此杯を、己は楽しんで口に銜む。併し己は此酒には丁寧な毒が調合してあることを知つてゐる。女は毎日手づから暗赤色の藥汁を、酒の色の變ぜぬ程注ぎ込んで置く。己は次第に身に藥の功効を感じて來る。己の血は次第に脈絡の中に凝滞して來る。なぜ己は甘んじて其杯を乾すかと云ふに、己の命にはもう強ひて保存する程の價値が無いからだ。均しく盡きる命數を、よしや些ばかり早めたと云つて、何事かあらう。可哀い娘が復讐の旨味を嘗めるのを妨げなくても好いでは無いか。己は毎晩その恐ろしい杯を、微笑を含んで飲み干してゐる。

high beat

れからは自然が單獨にそれを極めることは出来ない。或る一人の人が己の性命の時計の鍼を前へ進めることを自分の特別な任務にしてゐるのである。その人のためには己の死が偶然の出来事では無くて一の願はしい、殊更に勝ち得た恩恵である。此人の手に偶然の出来事がいつ己の性命を委ねてしまふか知れない。そればかりでは無い。この目に見えぬ脅迫を避けようとか、この作用を防過しようとか云ふ手段は、毫も己の手中には無い。己の只生きてゐると云ふだけの事實が、己を迫害の目的物にするのである。

まあ、なんと云ふ事態の變りやうであらう。己はこれまで謂はば總ての人の同意を得て生きてゐた。己の周圍には己を援助して生を聊せしめてくれよう云ふ合意が成立してゐた。己を取り巻いてゐる總ての人が此問題のために力を借してくれてゐた。生活と云ふものの驚歎に値する資料を己に供給しようとして、知るも知らぬも、直接又間接に、幾たりの人が働いてゐた。己の食ふパンを焼かうとして小麦粉を担ねてゐたパン屋も、己の著る衣類を縫つてゐた爲立物師も、己にそのパンを食はせよう、その衣類を着せよう云ふより外には、何等の欲望をも目的をも有してゐなかつた。己のために穀物が收穫せられ、己のために葡萄が醸造場の桶に投ぜられた。その外人一人を生きてゐさせるために働いてゐる工匠の数を誰が數へ擧げることが出来よう。人間と云ふものは

する所のものは何か。答へて曰く、己の死である。なぜ己の死を欲するか。答へて曰く、己に侮辱せられた報酬である。併しその侮辱は己が故意に加へたのでは無い。第三者の盲目なる器械となつて、期せずして加へたに過ぎない。それに或る未知の女は己の死を欲する。想ふにそいつは必ず目的を達することだらう。事によつたら明日己を殺すかも知れない。己がその女の名も知らず顔も知らぬのだから、女は目的を達する上に一層の便宜を得てゐるのである。

以上の事柄を總括して見るに、己に不安を感じしむるには十分の功力がある。最初此自覺が己に憂慮を感じしめたことを、己は告白しないわけには行かない。併しそれは暫時にして経過してしまつた。そして程無く己は一種の満足を感じた。バルヂビエロ翁は眞に吾を欺かない。己の頭の上に漂つてゐる此脅迫は、己を煩はす程に切迫してゐるものではない。只己の未來を不確實にするので、己はそれを望んで、一層力を放つて現在の受用を完全にするのを努めなくてはならぬのである。

その頃から女の顔と云ふものが、己のためには特別の意味のあるものになつた。それは彼未知の女を搜索するからである。己の現にゐる所に其女が来てゐるさうには無い。併し此事件の全體には随分偶然が勢力を逞しうしてゐるのだから、それが愈活動し續けて、深く己の運命に立ち入り、遂には觀面

幾多の勞作の形づくつてゐる團練の中心點に立つてゐる。併しそれは皆人生の必要品ばかりを言つたのである。若し更に進んで贅澤物に移つて見たら、どうだらう。理髮師と踊の師匠は、丁度外の工匠が己のために必要品を供給してくれるやうに、己に裝飾や消遣を寄與してゐるでは無いか。謂はば己は一切の人間の共同して造り上げてゐた製作物であつたのだ。又不幸にして己が或る災難に出合つたとすると、すぐに醫者や藥劑師が現れて来て、創や病氣の経過を整へてくれ、悪い轉歸を取らせぬやうに防ぎ止めてくれた。全體人體の構造を窮め知つて、自然の次第に破壊して行く力を遮り留めるやうにするのは、決して容易な業では無いのだ。

約めて言へば、人間が孤立してゐて、只自己のためにばかり警戒し憂慮してゐたら、必然陥る筈になつてゐる危険と疲勞とを、或る程度まで周圍のあらゆる人間が抑留してくれて、己はその恩澤を蒙つて生きてゐたのだ。世間は己の需要を豫測して、潤澤に己に屬屬させてくれた。世間は己の活動して行くに都合の好いだけの意欲を己に起させてくれた。然るに今や忽然として或る未知の女が現れて来て、この一切の好意に反抗しようとする。そいつは實に周圍の援助を妨礙しようとするばかりでは無い。卻つて反對の方向に働かうとする。そいつは公公然として己の敵だと名告る。そいつは個個の善意の團體を離れて、獨立して働く。そいつの意志の要求

に其女と己とを相對せしめることになるまいものでも無いのである。

かう云ふ己の感じは、程無く己の許に屈いたバルヂビエロの計音によつて一層強められた。老人は死に臨んで己にその別荘とそこに蓄へてある一切の物品とを遺贈した。併し己はあの美しい莊園を受け取りに往くことを急がなかつた。なぜと云ふに、丁度その時己は或る地位の高い夫人に對して戀をしてゐて、それに身を委ねて飽くことを知らなかつたからである。夫人の戀愛は己に總ての事を忘れさせた。バルヂビエロが遺贈の事も、久しく故郷を離れてゐると云ふ事も、警戒を興へられてゐる脅迫の事も忘れさせた。現在の戀愛に胸を刺るやうな鋭さがあり、身を殺すやうな劇烈な作用があつて見れば、何も未知の女の己の上に加へようとする匕首や毒藥を顧みるには及ばない。

この不幸な戀をのがれようとして、己は一時旅などをしたこともある。そのうち一年ばかり立つた。或る時己は忽然本國が見たくなつた。中にも見たかつたのはエネチアである。丁度その時己はアムステルダムにゐた。あそこは幾多の運河が市を貫いて流れてゐる所だけ戀しいエネチアに似てゐるが、土地の美しさも天の色も遙かに劣つてゐる。己は博奕の卓に向つて坐して、勝つたり負けたりしてゐるうちに、ふいと卓に覆つてある緑の羅紗の上に散らばつた貨幣の中に、金

のチェツキノが一つ交つてゐるのを見附けた。己はそれを拾ひ上げて手まさぐつた。貨幣はエネチア共和国の鑄造したもので、羽の生えた獅子の圖がある。その時己の目の前に料らしい天が晴れ渡つてゐる。そこには宮殿があり、鐘樓がある。そこにはアルドラミン家の館の淡紅色の大理石の花形がある。そして、ロレンツオよ、君の住んでゐる館の赤み掛つた壁と水に漬つた三段の石級とがある。己は忽然として又リワ・スキアラニに立つてゐる。遊歴を思ひ立つた其日のやうに、立つてゐる己の傍にはバルビさんが立つてゐる。ラグナの澄み切つた空気を穿つて、大きい白い鷗が飛んでゐる。バルビさんは鳩に穀物を投げて遣つてゐる。鳩は皆餌に飽いて、むくむくと太つてゐる。己はその鳩の一羽を手の平に載せてゐるやうな気がした。その鳩は白くて温かで、吭の下に丁度七首で刺されたやうな、血痕のやうな、赤い斑を持つてゐる。

二三週の後には己はもうイタリアへ歸る途中にゐた。此旅行にはなんの故障も無かつた。己はバルヂビエロの譲つてくれた別荘に泊つた。丁度その日は天氣が好くて、庭には花の香が満ちてゐた。己は黒ん坊に案内させて、別荘の間毎の戸を開けさせて見た。併し己を不思議な目に合せて、續いて老人が手紙で注意してくれたやうな運命に陥らされた、例の部

屋は見附からなかつた。どの部屋へも窗から日が一ぱいにさし込んでゐる。どの部屋も秩序と平和との姿を見せてゐる。己は記憶のある鏡の廣間に食事をさせて食べた。その時己は考へた。この一切の事件は悉く己の妄想の産み出した架空の話ではあるまいか。あの日に飲んだジェンツァアの葡萄酒に酔つて見た夢ではあるまいかと考へた。バルヂビエロのぢさんのよこした手紙だつてあの日の笑談の續きだと思はれぬことも無い。無論をぢさんは死んだには違ひ無い。併しあの年になれば死ぬのは當前である。何も誰かがわざわざ手段を弄してそれを早めたを見なくてはならぬことは無い。己はこんな風に考へて疑問の解決を他日に譲ることにした。

エネチアに歸つてから己の最初に尋ねたのは、ロレンツオよ、君だつた。丁度昔のやうに、己は波にゆらいでゐるゴンドラの舟を離れて、水に洗はれて耗つた、君が館の三段の石級を踏んだ。丁度昔のやうに、己が石級の上から君の名を呼ぶと、君はすぐに返事をした。己は白状するが、あの時己は豫期しなかつた嫉妬を感じた。それは君が昔のやうに獨りでゐないで、青年紳士と一しよにゐたからである。己が這入つて行くと、その紳士が立ち上がった。紳士は可哀らしくして、上品な體附きをしてゐた。己の這入つたのを見て、紳士は手に持つてゐた樂器を氣の無いやうな表情をして、無造作に卓の上に投げて、心から相許した友達同志が互に顔色を覗

ひ合ふやうな様子で、君の顔を見た。己は初の間此人のゐるのを稍不快に感じた。それは此人が君の親友になつてゐて、己が獨りで占めてゐるやうに思つた地位を奪つたらしく見えるからであつた。併し己はこの最初の感情に打勝つた。己はかう思つたのである。己は長い間留守を明けてゐた。長い間君に背いて交情を曠うしてゐた。さうして見れば、己の不實にも放浪生活をしてゐた間、此人が君を慰めてくれたのは、感謝しなくてはならぬ事だと思つたのである。そこで己は青年紳士に好意を表した。紳士は十分に品格と禮節とを備へた態度を以て己に接した。そして君は紳士と己との二人の手を一つにして握つてくれた。

そんなわけで、君が彼青年紳士レオネルロの友人になつたやうに、己も亦あの人の友人になつた。己は君がどうしてあの人と相識になつたかと云ふ來歴を聞いた。レオネルロはパレルモに生れたのだ。それを兩親が當世風の生活に慣れさせるためにエネチアに來させたのだと、レオネルロが自ら語つた。もう此土地に來てから一年ばかり立つてゐて、レオネルロはどうかやら此土地を第二の故郷にして、パレルモの事を忘れてしまつたらしかつた。レオネルロは全くシチリア風の特徴を具へた美少年である。目は生生として表情に富んでゐる。鼻には上品な趣がある。口も人に氣に入る恰好をしてゐて、髪は少しも生えてゐない。それに歩く様子がひどく好

い。それから手のひどく小さいのは己は珍らしく思つた。段段心安くなつて見ると、温和と謙遜との兩面から見て、あの人の性格がいかに懐かしかつた。あの人は女好では無い。わざとらしく女に接近することを避けてゐた。宗教の信者だらうと思はれた。併し君と己とが遊ぶ時は、あの人も一しよになつては遊ばぬまでも、傍看者として付き合つてだけくれた。

己達は又青春の最も美しい快樂を味ひ始めた。君と己とのはもう行樂の時代が過ぎ去らうとしてゐるのに、あの人はまだ水の出端である。それにあの人が控目にしてゐるのだから、君と己とはそれを手本にして節制を加へなくてはならなかつたが、二人にはそれが出來ぬのであつた。己達は昔のやうに又鳩の俱樂部の卓を圍むことになり、それよりは賭博奕の卓を圍むことになつた。紙で拵へた假面は己達の顔を掩つた。己達は興を縱まにした。一體エネチアと云ふ土地ではさうせずにはゐられぬ事になつてゐる。君も己もエネチアの子だから爲様が無い。二人の癡戲を窺めるのを見て、レオネルロは微笑んだ。

そのうち千七百七十九年のカルネワレの祭日が來た。祭日は例年よりも華美で賑かであつた。遊びは厭きる程ある中に、己達は一日を己の別荘で暮らすことにした。先づそれだけの約束をして置いて、己は先へ別荘に來て、準備をした。

翌日は君とレオネルロと二三の親友とが来る筈である。その又次の日には大勢の客が案内してある。寒気が珍らしく軽いので、大勢の客の来る日には、暮れてから庭で遊びをすることにしてある。己はそれが餘程立派なることを期待してゐた。

君は約束の日に期を愆らずに来てくれた。一しよに來たのは、兼て極めてあつた五人の友達である。君達は皆假裝をして、それを一輛の美しい馬車が満載して來た。そこで己は君達を別荘の所に連れて廻つて、あすの遊びの準備を見せた。あすの晩には、庭の岩窟に蠟燭を焚いて舞踏會をして、それから鏡の廣間で宴會をしようと思ふので、己は君達と種種の評議をして、今宵は明かりの工合を試験して置くと思ふことになつた。己はレオネルロと臂を組み合せて鏡の廣間に立つてゐた。レオネルロは笑ひながら假面を扇のやうにして顔のほてりをさましてゐた。己は中央に吊る蠟燭の明かりをためすためこ、窓を締めて窓掛を卸すことを、家談共に命じた。眞つ暗で無くては、明かりの工合が分からぬからである。窓を締め窓掛を卸して、蠟燭がまだ附かぬので、廣間が一刹那眞の闇になつた。己達はその中に立つてゐて、己は家談共に明かりの催促をした。「早くしないか。いつまでも暗くしてゐては困るぢやないか」と云つたのである。その時突然己は或る冷やかな尖つた物が胸を貫いて、己の性命の中心

に達し、己の口一ぱいに血が漲るのを感じた。

蠟燭が附いてから、己達がバルタザル・アルドラミンを抱き起して見たら、その胸には一つの匕首が深く刺し貫いてあつた。その尖は心の臓を穿つたと見えて、アルドラミンは即死してゐたのである。

四

我我七人の客はあつけに取られて、身動きも出來ずに、屍體の周圍に立つてゐた。七人と云ふのはルドキコ・バルバゴ、ニコレ・ラレダン、アントニオ・ビルミアニ、ジュリオ・ポッタロール、オクタキオ・エルヌツチ、それからレオネルロと己とである。どれもこれもアルドラミンの親友で、愛したり愛せられたりしてゐるのだから、一人として危険を冒しても此別荘の主人の性命を救つて遣りたいと思はぬものは無い。我我は互に嫉妬などをし合つたことが無い。喧嘩と云ふ程の衝突をもしたことが無い。我我の間には只敬愛の情があつただけである。

さうして見れば、アルドラミンは自殺したに違ひ無い。此男の性命を絶つた鋭い匕首は、自分で胸に刺し貫いたものに極まつてゐる。併しなぜこんな事をして死んだのだらうか。

年はまだ若い。財産はある。幸福に暮らしてゐる。かうした身の上でゐて、我我一同にどんな憂悶を隠してゐたのだらうか。我我はどう考へて見ても解決が附かぬので、皆眉を顰めてゐた。我我は早速支度をして、亡き友の死顔を石膏型に取つたが、その型の石膏と同じやうに、皆の顔には血の色が無かつた。

どうしてもアルドラミンは自殺したとより外思ひやうが無い。我我は只いつまでも死骸を目守つてゐる。そのうち我我一同の中に同時に恐るべき、非常な疑惑が生じて來た。それは一應自殺らしく見えるものの、ひよつとしたら我我の中の一人が窓を閉ぢ窓掛を卸した闇を利用して、アルドラミンを刺したのかも知れぬと云ふ疑惑である。人間の心は秘密を藏してゐるものである。世間には隠蔽せられてゐる事が澤山ある。併しそれにして其刺客は誰だらう。誰がこれ程の陰險な事を敢てしただらう。あれだらうか。これだらうか。

誰の胸の中にも不安の念がひそやかに萌して來た。そして互に相猜疑して、平氣で目を見合せることが出來なくなつた。我我は物を探る様な目なざしをして鏡の影を見た。鏡の一面毎に我我の顔とアルドラミンの死骸とが變つてうつつてゐる。そしてその死骸が我我の中の誰をも皆仇敵として指さしてゐるかと思はれる。

アルドラミンの死骸はサン・ステファノの寺に葬られた。

兩手を赤い剣の上に組み合はせて葬つたのである。葬式が済んでからも我我は同じ疑惑を除くことが出來ない。バルバゴだらうか。ラレダンだらうか。ビルミアニだらうか。それともポッタロールだらうか。我我は出逢ふ度毎に猜疑の念を起さずにはゐられない。握手するにも氣が置かれてならぬ。絶えずかう云ふ不安の念に悩まされて、次第に雙方機嫌の悪くなつたバルバゴとポッタロールとは、とうとう爭論をして決闘することになつた。爭論の生じた眞の原因は公に言はれぬので、二人はつまらぬ尾籠な事を表向の理由にした。ポッタロールは負傷した。バルバゴはそのために大陸へ逃亡しなくてはならなくなつた。

己は深い悲みに沈んだ。それはアルドラミンの死を忘れることが出來ぬからである。レオネルロは己を慰めようとした。種種の樂器を弄することが上手なので、その音色で己の鬱を散じてくれようとした。己とレオネルロとは相變らず毎日逢つてゐる。此男を疑ふ念は一度も己には萌さなかつた。此男は物柔なものと物事を打ち明けるので、己を陰氣な思想に耽らせぬやうにして、己の絶えず胸に思つてゐる事を口に出させずにあつた。

或る日は己はラレダンに逢つた。ラレダンはレオネルロほどうしてゐるかと思つた。丁度レオネルロが己の館に住むことになつてから、暫く立つた時の事である。ラレダンは己の返

事を聞いた後に、毒毒しい笑をして、「暗い所では用心して
る給へよ」と云つた。己は胸を裂かれるやうな気がした。レ
オネルロとの交誼を傷ける詞だからである。

レオネルロは己の憂鬱が日加はるのを見て、己に旅行を
勧めた。理由として言つたのは、ロオマに用事があると云ふ
ことと、それからバレルモから手紙が届いて、急に歸つて貰
ひたいと云つて来たことと二つである。己はレオネ
ルロが只此土地を離れようとしてゐて、口實を設けるのだと
悟つたが、それを色にあらはさず、其表面の理由を信ずる
やうに欺つた。己は實にエネチアの生活が厭になつてゐた。
館に近いサン・ステファノ寺の鐘の聲は己の心を戦慄させ
る。それは悲惨なアルドラミンの事を憶ひ起させるからであ
る。己はレオネルロの勧誘に應じて、少しばかりの旅の支度
をして、あの波に洗はれて寤んでゐる館の石段を降りた。其
時己は度度アルドラミン家の白い石壁を振り返つて見た。赤
い大理石の二つの花形が雨に洗はれたのが、二つの創の新し
い痕のやうに見えた。

レオネルロと己とは一つ馬車に乗つた。二人はビエンツァ
に泊る筈であつたのに、市より餘程手前で日が暮れた。そこ
はひどく暗いビニイの林の中であつた。今少しで林を出離れ
ようとした時、恐ろしい叫聲が聞えた。一群の鬪盜が馬車を
取り巻いた。中にも大膽な奴等が馬の鼻の先で松明を振る

と、外の奴等は拳銃の口を己達に向けた。己達の連れてみた
家奴は皆逃げてしまつた。

己達は圍を突いて出ようとしたが、二人の劍は功を奏せな
かつた。己は造做も無く打ち倒されて、猿轡を嵌められ布で
目隠しをせられた。己はまだレオネルロが賊を相手にして切
り合つてゐるのを見ながら、目隠しをせられたのである。賊
の二人が己の頭と足とを持つて、大ぶ遠くへ己を運んで行つ
て、それから己を下に置いた。己が起ち上がると、賊は己の
肩を撲つて追ひ立てた。足の踏む所は一面に針葉樹の葉で掩
はれてゐて、すべつて歩きにくかつた。暫く歩かせた後、賊
は己の衣服を剥いで、己をビニイの木に縛り附けた。己
の背は木の皮でこすられて、肌には樹脂が熱り附いた。

己の周囲に足音がした。多分レオネルロを己と同じ目に逢
はせるのだらう。どうもそれにレオネルロが抵抗するらし
い。己のやうに賊のする儘にさせてゐないらしい。物音で判
断するとさう思はれるのである。己はレオネルロが抵抗し
て、ひどい怪我をしないと好いと思つた。こんな時には敵
對しないで、人のするやうにさせてゐるが好い。避けられぬ
事を避けようとしたつて、なんの役にも立たぬからと、己は
レオネルロに忠告したかつたが、猿轡を嵌められてゐるの
で、詞を出すことが出来なかつた。

暫くして周囲がひつそりした。己は賊等が目的を達してし

まつたのだなと思つた。その時突然大勢が何やらどなりなが
ら大聲で笑ふのが聞えた。併しそれは只一刹那の事で、其跡
は又ひつそりした。己は賊等が爲事をしおほせて満足して逃
げたなと思つた。風が靜かに木木の頂をゆすつてゐる。夜の
鳥が早い、鈍い羽搏をして飛んで行く。そして折折ビニイの
木の實が濕つた地に墜ちる音がする。

己とレオネルロとの二人は寂しい林の眞ん中にあるのだ。
一人一人ビニイの木に縛り附けられてゐるのだ。此境遇
は随分悲惨であるが、己はそれを考へるよりは、どうにかし
て今の苦痛を軽減しようと工夫した。幸な事には目隠しの布
が少し弛んだので、己は次第にそれをみざらせて、とうとう
ずば抜かせた。そして己はあたりを見廻した。

地に挿した一本の松明が今少しで燃えてしまふ所である。
そのゆらめく燄がビニイの木の赤い幹を照す。それに裸體の
人が縛り附けられてゐる。レオネルロであらう。忽ち一陣の
風が吹いて来て、松明がぱつと明るくなつた。レオネルロに
違ひない。闇夜を背景にして白晝な體が浮いて見える。併し
これは夜目の迷であらうか。まやかしの幻影であらうか。そ
の體は女の體である。併し女の體であつた、矢張レオネルロで
ある。顔はそむけてゐて見えない。見えるのは只髪を短く刈
つた頭と項とだけである。併し體は女で、それがレオネルロ
に違ひない。木の幹を握むやうにしてゐる、小さい、優しい

手は、見覚えのあるレオネルロの手である。

女だ。思ひ掛けぬ發見は殘酷にも己の心を極き亂した。そ
して恐ろしい疑念を萌さしめた。女であつたか。併しなせ男
装してゐたのだらう。なぜそんな秘密をしてゐたのだらう。
女であつた。レオネルロが女であつた。ああ、七首の一あぐ
り。紅の創口。アルドラミン。

松明は次第に燃え盡した。猿轡は己の口を嚙ませてゐて
も、己の頭には思想が相駈逐してゐる。此思想は初め生じた
時紛糾して曖昧であつたが、それが次第に透徹になつて來
た。事實の真相が露呈して來た。そして己はアルドラミンの
口から、今己の話した通りの事を聞くやうな気がした。

夜が明けて樵夫が一人通り掛かつた。それが己の繩を解い
てくれた。その時は己は苦痛と疲勞とのために失神してゐた
のである。己は氣が附いて見ると、地に倒れてゐた。己の目
はすぐにレオネルロに似た裸體の女の縛り附けられてゐたビ
ニイの木を尋ねた。併しもうそこには姿が見えなかつた。察
するに其人は夜の明けぬ間に繩を抜けて逃げたのだらう。己
は木の下に歩み寄つた。一箇處繩で牽かれて、木の皮が溝の
やうに窪んでゐた。そして木の根にはちぎれた繩が落ちてゐ
た。樵夫はそれを拾つて囊に入れた。薪を束ねる料にしよう
と云つたのだらう。己は黙つて樵夫に附いて小屋まで往つ
て、樵夫に荒い布の衣服を買つた。

己は無事にエネチアに歸つた。紫色の空気を波立たせて、サン・ステファノ寺の鐘が響いてゐた。そしてアルドラミンの家の館の古い壁に嵌めてある、血のやうな色の大理石の花形が、運河の水にうつつてゐた。

アンドレアス・タアマイエルが遺書 (シュニツフレル)

小生は如何にしても今日以後生きながらへをること難く候。何故と申すに、小生が生きながらへをる限は、世間の人嘲り笑ひ申すべく、誰一人事實の真相を認められ候もの有之まじく候。假令世間にてなんと申し候とも、妻が貞操を守りゐたりしことは小生の確信する所に有之、小生は死を以てこれを証明する考に候。今日まで種々の書籍に就いて、この困難なる、又疑團多き事件に就きて取調べ候處、著述家の中には、かかる事實のあり得べきことを疑ふもの少からず候へども、知名の學者にして此の如き事實のあり得べきことを認めをるものも少からざるやう相見え候。マルブランシュの記録する所に依れば、某氏の妻、聖ピウス祭の日にピウスの肖像を長き間凝視しをりしに、その女子の生みし男子の容貌全く彼の肖像に似たりし由に候。生れたる赤子は彼の聖者の如く老衰したる面貌を呈し、生れし時、兩手を胸の上にて組み合せ、開きたる目は空を見をり肩の上に鬘マニありて、聖者の戴ける垂れたる帽子の形になりをりし由に候。若しこの記者マルブランシュの著名なる哲學者たり、デカルトの後繼者た

るをも猶信じ難しとなすものあらば、小生は更にマルテン・ルウテルの傳へし所を紹介すべく候。ルウテルの食卓演説の中に左の如き物語有之候。ルウテルがキツテンベルヒに在りし時、頭の形、髑髏に似たる男を見しことありて、その履歴を問ひしに、その男の母は妊娠中死骸を見て甚だしく驚きしことありし由に候。其他ヘリオドルがリブライ・エチオビコオルムに記載したる物語の如きは、最も信を置くべきものゝ如く存せられ候。エチオピアの王ヒダスベスは后ベルシナを娶りて十年の間子無かりしに、十年目に姫君誕生ありし由に候。然るにその姫君は白人種に異ならざりし故に、父王に見せなば、その怒りに觸るべしと思ひ、密に人に渡して捨てさせし由に候。さりながらその子を捨つる時、この不思議なる出来事の原因を記したる帶を添へて捨てさせし由に候。帶に記したる所は、后が王の寵愛を受けし場所は、王宮の花園にして、そこには希臘の男女の神體を刻める美しき大理石の立像許多有りし由に候。后は王の寵愛を受くる時、常にその石像を目守りをりし由に候。今一つの事例は、千六百三十七

年佛國にて證明せられし出来事にして、是等は此の類の事件を信するもの、必ずしも無教育者若くは迷信家のみにあらずることを證するに餘りあるやう存せられ候。その事實は四年間良人に別れをりし妻、一男子を生みしが、その女は始終良人と同衾する夢を見をりし由に候。當時の醫師産婆等はみなかゝる事實のあり得べきことを表白し、ハアウルの裁判所にて、生れし男子に嫡出子のあらゆる權利を與へし由に候。ハンベルヒの著述「自然に於ける不思議なる事實」の七十四面にも似寄の記事有之候。或婦人の生みし子、獅子の頭を有しをりしが、その婦人は妊娠して七箇月目に、母と良人に伴はれて獅子使の見せ物を見物せし由に候。又リムビヨツタの著述「母の物を見ることに依つて生れし子の、母の見し物に似る現象に就いて」といふ書の十九面にも、似寄の事件有之候。この書は千八百四十六年バアゼルの出版に候。或婦人の生みたる子の片頬に大なる赤き痣ありしに、その母の物語る所によれば、その女子の住みし家の向ひの家、産の二三週前に焼けし由に候。只今手紙を認め候時、小生はリムビヨツタの著書を目前に開き、筆を執る前にも種々讀み試み候。この一書の中には、猶許多の學術上に證明せられたる似寄の事件記載しあり有之候。是等を見る時は、小生の妻が貞操を守りしものなること十分に證明せらるゝものと存せられ候。嗚呼、我が愛する妻よ。御身は小生が先立ちて死する

ことを許さるべく候。何故といふに、小生の死するは世間の人の御身を嘲り笑ふを見るに忍びざるが爲めに候。小生の遺書一度世に公にせらるゝに至らば、世の人の御身を笑ふことは止み申すべく候。此遺書を發見する人は、小生がこれを認め候時、傍の部屋にて妻の安眠しむたりしことを承知せられ度候。良心に責めらるゝ如き人は此の如く安眠することなからむと存じ候。妻の生みし我子は、生れてより十四日目にありをり、やはり妻の臥床の側なる搖籃の内に、これも眠りをり候。この手紙を書き終り候はば、小生は妻子の眠りをる部屋に行き、二人の目を醒さぬやうに靜かに二人に接吻して、此家を立ち出づべく考へをり候。かゝる瑣末なる事を精しく認め置き候は、この手紙を讀む人の小生を狂人と思ふが如きことありては遺憾なる故、小生が虚心平氣に將來の爲めを思ひ、靜かに死に就くものなることを證明せむが爲めに候。此手紙を書き終り候はば、夜の暗きに乘じて人跡絶えたる町をドルンバハに向つてずつと先まで歩み行く考に候。此道は新婚の頃妻と二人にて屢々散歩に行きし道に候。此道の行く手には森あればその森に行く考に候。此手紙は熟慮したる上にて定めたるものに候。小生の精神のたしかなることは是等に察せられ度候。小生の名はアンドレアス・タアマイエルと申し候。當年三十四歳に相成候。奥太利帝國の貯蓄銀行の役員を勤めをり、ヘルナルゼル町六十四番地に住しをり候。小

生の結婚せしは四年前に候。妻は娶りし前七年間の近附にて、小生を愛し、小生の娶るを待つとて結婚を申込みし人を二人まで卻けしこと有之候。その一人は千八百グルデンの俵給を受くる立派なる役人にて、今一人はトリエスト生れにて、妻の里の部屋を借りをる醫料の學生なりしが、若き美男子に候。この二人の申込を拒絶せしに依りて思ふに、妻は富めるにもあらず、美しくもあらずる小生の約束を重んじて、永き年月を待ちをりしこと疑ひなかるべく候。世の人は七年間小生の爲めに辛抱せし妻が、一朝にして小生を欺きしものゝやう風聞いたし候へども、小生はかゝる事を信じ難く候。世の人は智慧足らず、人の不幸を見聞する事を喜ぶものなる故、小生の心中を察しくれざるものと思はれ候。併しこの書状を見たる上は、世の人も今までの判断の誤りなりしことを知り、妻の貞婦なることを知りて、小生の自殺を憐み、自殺せずともあるべかりしものを申すならんと存じ候。さりながら小生より思へば、この自殺は必要に候。何故と申すに、小生の生存しをる限りは、彼等の嘲笑は止む時有之間敷候。世の人のみな嘲笑を事とするが中に、只一人は高尚なる思想より小生の心中を察しくれしもの有之候。そは老醫師ワルテル・ブラウネル氏に有之候。醫師は小生が生れし子を見せし時、決して驚き給ふな、又夫人の興奮する如きことを爲し給ふな。かやうなる事は世間にその類少なからず、明日リム

ビヨツタの著書を君に贈りて、君の疑を晴すべしと申し候。只今目前に開きをるは、このドクトル、ブラウネル氏の貸しくれし書籍に候。此書籍をドクトルに返却することを遺族に申残し候。其他には申残すべき事も無之候。遺言状は餘程以前に認めあり、今日に至りてその内容を變更する必要無之候。何故といふに、遺族たる妻は貞操を守りし女にして、子は我が嫡出の子なる故に候。その子の皮膚の色如何にも異様なるは、十分説明すべき理由あることに候。それを異様に解釋するは、世の人の無教育なると、惡意あるとの致す所に外ならず、若し世の人にして智慧あり惡意なきものならば、事實の真相は一般に承認せらるべく、小生も自殺するを要せざることゝ相成るべく候。不幸にして世の人みな愚にして根生惡しき故、誰も小生の詞に耳を貸すことなく、申合せたる如く嘲笑いたしをり候。妻のをぢグスタア・フレンゲルホオヘル氏は、小生の平素敬愛しをる人に候へども、初めて我子を見せし時、異様なる面持にて小生に目配せいたし候。我が生みの母も初めて孫の顔を見し時、小生に氣の毒の感あるらしき様子にて握手いたし候。小生の事務所に勤めをる同僚は、昨日小生が出動せし時、互に顔を見合せて叫きをり候。小生の借家の差配人は平素目を掛けをるものにて、昨年のクリスマスにも機械の破損せし懐中時計を子供の玩弄物にいたすやうにと贈り遣りしことあるものなるに、昨日門口にて出

會ひし時、可笑しさを耐へる如き顔付をいたし候。召使ひをり候下女は何か可笑しさに耐へざる如く、殆ど酒に酔ひたる人かと思ゆる様子をいたしをり候。町の曲り角なる荒物屋の主人は、小生が通り過ぐる毎に跡を見送りしこと三四度にして、小生の通り過ぐる時、店に在りし知らぬ老婦人に向ひて、あの男なりと、小生を指さし示し候。此の如き有様ゆゑ、この無根の風説の世間に傳はることの早さは想像の外に候。小生の平素全く知らざる人にして、いづくより聞き知りしか、この風説を聞き知りをも有之候。一昨日電車にて宅に歸り候時車内にて老婆三人話しをるを聞くに、その話は小生の身の上に候。小生の名を稱へるを明白に聞き取り候。かゝる次第ゆゑ、これに對して小生の爲すべき決心は如何なるを至當とすべきか。小生とてもありとあらゆる人に向ひて、ハンベルヒの「自然に於ける不思議」を讀め、リムビヨックの「生れたる子の母の見し物に似る現象に就いて」の書を読めと勧告することは出来申すまじく、又その人々の前に跪きて、我妻の貞操を保ちをることを承認しければと一々頼むわけにも参り兼候。事實は彼のリムビヨックの著書にあると殆ど同一にて、妻は去る八月妹を連れて動物園に参りしこと有之候。その頃動物園には、黒人仲間滞留しをり候。小生はその數日前實父の病氣見舞の爲めに田舎に歸り候。不幸にして實父は數週の後死亡致し候。その留守に妻は

一人にて暮しをり、小生が歸宅せし折は妻は床に就きをり候。妻は小生を待つこと餘りに久しくなりて健康を害せしものなること、小生の確信する所に候。小生の不在は僅かに三日間なりしに、健康を害するまで待ちくれしにても、妻の小生を愛しく候ことは察せられ候。小生は直ちに妻の臥床の縁に腰を掛け、この三日間を如何に暮しをりしかと尋ね候。小生のこの間を反覆するを須たずして、妻は何事も包み隠すことなく精しく話しくれ候。事實の真相を明かにする爲めに、其話を洩さず次に記し置き候。月曜日には妻は午前宅にをり、午後フリツチイを連れて買物のため町へ出で候。フリツチイは妻の妹にて、眞の名はフリーデリイケに候。フリツチイは目下ブレエメンの港なる大商店に奉公しをる男と結婚の約束を爲しをり、遠からず彼地に赴く筈に候。火曜日に雨の爲めに妻は終日在宅せし由に候。此日には小生の参りをりし田舎も雨にて困りしことを記憶いたし候。次は水曜日に候。此日妻はフリツチイを連れて夕方動物園に参り候。動物園には其頃黒人参りをり候。この黒人をば後九月になりて小生も一見いたし候。友人ルウドルフ・リットネル夫婦、小生を誘ひて日曜日の晩に参り候。妻は水曜日の事を思ひ、その時同行を拒み候。妻の話に依れば、彼の水曜日の晩只一人にて黒人の中に取り残されし時程恐ろしかりしことは生涯無かりし由申し候。何故一人にて取り残されしかといふに、そ

はフリツチイが忽然隠れ去りし故に候。この手紙は最後の手紙なれば、フリツチイの事を悪様に記さむは不本意に候へども、この事實は記さざるを得ず候。フリツチイに對してこゝにしかと申残したきこと有之候。若し今の儘にて行を改めざる時は、ブレエメンに在る許嫁の良人は定めて不幸に感ずるならむと存じ候。彼日フリツチイは某君と小生の妻を捨て置きて、いづれへか立ち去りし由に候。某君は小生の熟知しをる人にて、妻子もあるものなるに、不都合と存じ候へども、こゝに姓名を記すこと丈は遠慮いたすべく候。水曜日の晩は夏の末にありがちな霧深き晩なりし由に候。かやうなる晩には、小生も動物園にて出會ひし事ありしが、芝生の上に灰色の靄立ち罩め、燈火の光これに映りしを見しこと有之候。思ふに妻が一人にて取り残されしは、かゝる夕なりしならむと存じ候。妻はかゝる夕彼の黒き髻簇り生じ、赤き眼驚くべく輝ける大男共の群に取り残されしものに候。妻はフリツチイの歸りを待つこと二時間なりしに、遂に歸り來らずして、動物園の門を閉づべき時刻となり、已むことを得ず歸りし由に候。この事實は小生が歸宅して直ちに妻の臥床の縁に腰を掛けをりし時、妻の物語りし所に候。その時妻は小生の頸に抱き付き震ひをり、兩眼潤みをり候。その時は妻も今日の如きことあるべしとは夢にも知らず、小生もまた當時何事も知らざりしものにて候。若し小生が妻の妊娠しをることを

知りたりしならば、假令實父の許に歸り候とも、妻が霧深き夕、妹を連れて動物園に行く如き事をば許さざりしならんと存じ候。何故にといふに、妊娠中は些細なる事をも、冒險と覺悟すべきものに候。又假令動物園に行き候とも、フリツチイが逃げ去ることなくば何事もなかりしなるべく、フリツチイが逃げ去り、妻が其身の上を心配せしは、實に此不幸の原因に候。事實此の如くに候。かく詳細に此事を書き遺し候は、只事實の真相を明かにせむとするに外ならず候。若し小生にしてこの手紙を認めずば、世の人は小生を誤解し、彼男は妻に欺かれて怒り、自殺せしなどと申さむ計り難く候。否々、世の人よ。小生の妻は貞操を守りをり、小生の子は飽く迄も小生の子に相違なく候。而して此妻子をば、小生最後の息を引き取る迄愛しをり候。只小生をして一命を捨てしむるに至りしは、世の人の愚にして、根性悪しきが爲めに候。小生の生存しをる限は如何に學術的に此事實を説明せむとすとも、世人は嘲罵の聲を斷たざるべく、假令面前にては小生の詞に首肯すとも、背後に於いてはやはり嘲笑し、遂にはタアマイエル發狂せりとまで申すに至ることと存じ候。只今自殺する上は、世の人の此の如き讒誣は最早行はれざるべく、妻の爲めにも十分名譽を恢復するに足るならむと存じ候。世の人も眞逆に小生の一死に對して、此上妻を嘲笑する如きことは有之まじく、彼のハンベルヒ、ヘリオドオル、マ

家の報告の如き事實をも承認せざることを得ざるべく候。母も最早氣の毒なる面持にて、小生に握手する如きこと有之まじく、必ずや妻に向ひて罪を謝するならむと存じ候。この手紙にはこの上書くべき事も無之候。掛時計は一時を報じ候。さらば我が家族よ。小生は今一度傍なる部屋に行きて、妻子に接吻し、さてこの家を立ち出づ可候。

辻馬車

(モルナル)

此對話に出づる人物は

貴夫人

男

の二人なり。作者が女も女子も云はずして、貴夫人と云ふは、其人の性を指すと同時に、齢をも指せるなり。この貴夫人と云ふ詞は、女の生涯のうち或る五年間を指すに定れり。男をば單に男と記す。その人所謂男盛と云ふ年になりたれば。

貴夫人。なんだかも百年位お目に懸らないやうでございませぬ。

男。ええ。そんなに御疎遠になつたのを残念に思ふことは、わたくしの方が一番ひどいのです。

貴夫人。でも只今お目に懸かることの出来ましたのは嬉しうございませぬ。過ぎ去つた昔のお話が出来ますからね。まあ、事によるとあなたの方では、もうすっかり忘れてしまつて入らつしやるやうな昔のお話でございませぬ。男。妙です。あなたがそんな風な事をわたくしに仰やるの

が、もうこれで二度目です。なんだか六十位になつた爺いさん婆あさんのやうぢやありませんか。一體百年も逢はないうやうだと初に云つて置いて、又古い話をするなんと仰やるのが妙です。

貴夫人。なぜ。

男。なぜつて妙ですよ。女の方が何かをひどく古い事のやうに言ふのは、それを悪い事だつたと思つて後悔した時に限るやうですからね。詰まり別に分疏ぶんすがなくつて、「時間」に罪を背負はせるのです。

貴夫人。まあ、感心。

男。何が感心です。

貴夫人。だつて旨く當りましたのですもの。全く仰やる通なの。ですけれどそれが又妙だと思ひますわ。それはわたくしあなたに悪い事だつたと思つてゐる事をお話したす積りに違ひございませぬ。そこで妙だと存じますのは、男の方が何かをお當になると云ふことは、御自分のお身の上に関係した事に限るやうだからでございませぬ。

男。はてな。それではそのお話がわたくしの身の上に関係した事なのですか。

貴夫人。大いに關係してゐますの。

(問。男は思案に暮れるる。)

男。どうもちつとも思ひ當る事がありませんね。

貴夫人。それは思ひ出させてお上申しますわ。ですけれど内證のお話でございますよ。

男。それは内證のお話と内證でないお話位はわたくしにだつて。

貴夫人。いゝえ。そのお話し事柄が内證だと申すのではございせんわ。事柄丈なら幾らお話なすつても宜しうございますの。只それがいつの事だと云ふことが内證でございますの。きつとでございますよ。

(男黙りて誓の握手をなす。)

貴夫人。そのお話は十年前の事でございますの。場所は此ブダベストで、時は十月。

男。どうも分かりませんな。

貴夫人。まあお聞なさいましよ。十年前にあなたと或る所の晩餐會で御一しよになりましたの。其時はあなたがまだ栗色の髪の毛をして入らつしやいました。わたくしもあの時から見ると、髪の色が段々明るくなつてゐます。晩餐を食べましたのは、市外の公園の料理店でございました。丁度

宅はベルリンに二週間程滞留しなくてはならない用事がありましたのでわたくしはひとり其宴會へ参りました。夜

なが過ぎて一時になりました頃、わたくしは雜誌をいたしてゐるのが厭になつて來ましたので、わたくし共を呼んで下すつた奥さんに暇乞をいたしましたの。其時あなたはその奥さんの側に立つて入らつしやつて、わたくしの顔をちつと見て入らつしやいましたの。

男。その時の事ですか。もう分かりました。

貴夫人。まあ、聞いて入らつしやいました。其席であなたは最初からわたくしをひどい目に逢はせて入らつしやいましたの。さう。丁度三週間ばかり前からあなたわたくしを附け廻して入らつしやつたのです。それでゐてわたくしに何も仰やるのではありません。只黙つて妙な顔をしてわたくしを困らせて入らつしやいましたの。顔ばかりでございせん。の。妙な爲打をなさるのですもの。お据わりなすつたかと思へば、すぐお立になる。又お据わりになる。戸の外へお出になつたかと思へば、すぐ這入つて入らつしやる。詰まり、氣の利かない青年が初戀をしてゐると云ふ素振をなさいましたのですね。

男。なる程。なる程。

貴夫人。そのうちわたくしが奥さんに、「ねえ、テレエゼさん、わたし今夜はもう歸つてよ」と云ふと、あなたがその

奥さんの側を離れて、ゐなくなつておしまひなさいましたの。それからわたくしが料理屋の門口から往來へ出て、辻馬車を雇はうと思ひますと、あなたが出抜にわたくしの側へ現れてお出なすつたのですね。

男。えゝ。さうでした。

貴夫人。そして内へ送つて往つて遣らうと仰やつたのですね。

男。えゝ。さうです。

貴夫人。それを伺つた時、わたくし最初は随分氣違染みた事をなさると思つて笑ひましたの。それに人の思はくをお考なさらないにも程があると思ひましたの。其辭わたくしとうとうおことわりは申さなかつたのですね。そのおことわり申さないには、理由が二つございました。一つはあなたがいかにも無邪氣に、初心らしく仰やつたので、「おや、この方はどんな途方もない事を仰やるのだから、御自身ではお分かりにならないのだな」と存じましたの。それから今一つはまあ、なんと申しませうか。わたくしあなたに八分通迷つてゐましたもんですから。

(長き間。)

男。えゝゝ、なーんーでーと。

貴夫人。えゝ。全くでございましたの。

男。(目を大きく睨く。)あのあなたがわたくしに。

貴夫人。ですけれど本當に迷つてゐたと申すのではございせんよ。八分通でございましたの。まあ、これから先は男

の方の出やうでどうにでもなると云ふ所まで來てゐましたのですね。女と云ふものは或る時期の來るまで、男の方のなさる事をちつとして見てゐて、其時期が來ると、突然さう思ひますの。「もうからなれば、これから先は此人のする儘になるより外無い」と思ひますの。

男。そしてあの時さうお思なすつたのですか。

貴夫人。えゝ。

男。そしてなぜそれをわたくしに言つて下さらなかつたのです。

貴夫人。ですけれどそれを申さないのが女の心理上の持前なのでございますわ。

男。あゝ。わたくしはなんと云ふ馬鹿でせう。

貴夫人。(溜息を衝く。)まあ、それはさうといたして置いて、跡をお話申しませうね。さつき申しましたでせう。最初はあなたが送つて遣らうと仰やつたのを、亂暴だと思つたのにとりとうおことわり申さなかつたと申しましたでせう。實際最初はどういたして宜しいか分からなかつたのでございますね。そのうちわたくしふら／＼と馬鹿な心持になつて來まして、つひ「願ひます」と申してしまひましたの。其時あなたがなんと仰やつたとお思なさいますの。「そ

「んなら馬車をさう言つて来ませう」と仰やいました。あれはまづうございましたのね。あれがあなたの失錯の第一歩でございましたわ。

男。なぜですか。

貴夫人。お分かりになりませんの。あなたが馬車を雇ひに驅け出してお出になつた跡に、わたくしは二分間ひとりでした。あなたはわたくしに考へる餘裕をお與なさいましたのですわ。その間にわたくしが後悔しておことわりをせず、我慢してみましたのは、餘つ程あなたに迷つてゐた證據でございますわ。一體冷却する時間をお與なさんと云ふことは、女に取つて、一番堪忍出来にくいのでございますけれど。そのうち馬車が参りましたのね。

男。ええ。わたくしは一頭曳の馬車を雇つて来たのでした。

貴夫人。さうでした。それでも好くあの馬車が二頭曳だつたのを覚えて入らつしやいましたことね。そこが肝心なのでございますわ。二頭曳でなくつて、一頭曳だつたのが。

男。でも一頭曳しか無かつたのです。

貴夫人。いゝえ。あんな時はどうしても二頭曳の見附けて入らつしやなくてはならないのです。あなたそれからどうなすつたか覚えて入らつしやつて。

男。それから御一しよに参りました。

貴夫人。さうでした。そしてわたくしの内まで二十五分間そ

の馬車のうちに御一しよにみましたのでございます。あなた一頭曳と二頭曳とはどれだけ違ふか御承知。

男。いや。分かりませんなあ。

貴夫人。第一、一頭曳の馬車は窓硝子ががちゃ／＼鳴つて、並んで据わつてゐる人の話が出来ませんでせう。それから一頭曳の馬車に十月に乗りますと、寒くて氣持が悪いでせう。二頭曳ですと、車輪だつて窓硝子だつて音なんぞはしません。車輪にはゴムが附いてゐて、窓枠には羅紗が張つてあります。ですから二頭曳の馬車の中は好い心持にしみりしてゐて、細かい調子が分かります。平凡な詞に、發音で特別な意味を持たせることも出来ます。あの時あなたわたくしに「どうです」とさう仰やいましたね。御挨拶も大した御挨拶ですが、場所が場所でしたわね。わたくしは「結構」と御返事いたしました。窓硝子のがちゃ／＼云ふ。車輪はがら／＼云ふ。車全體はわたくし共を目の廻るやうにゆすつてゐました。ですから一しよ懸命に「けつこり、けつこり」とどならなくてはなりませんでした。丸で雄鶏が時をつくるやうでございましたわね。あれが軟い、静かな二頭曳の馬車の中でしたら、わたくしは俯目になつて、小さい聲で、「結構でございますわ」とかなんとか申されたのでございます。そしてわたくしはその聲に「おとなしい催促」やら「物靜かなはにかみ」やらを勻は

せることが出来ましたのでございませう。そしてそれをお聞になつたあなたも其聲の中からわたくしがあなたと御一しよで好い心持がいたしてゐると云ふことや、わたくしがあなたを少しはがつてゐると云ふことや、又そのこはいのが却つて好い心持でゐると云ふことや、まあ、いろ／＼な事をお聞取になることが出来ましたでございませう。その只結構と云ふ丈の詞でも、それをわたくしが自分の詞の調子で申すことが出来ましたら、わたくしがもうあなたの自由になつても好いと思つてゐると云ふことを、随分はつきりあなたにお知らせ申すことになりましたでせう。ところがわたくしどならなくてはならなかつたのですから、「これで結構ですよ、打ち遣つて置いて頂戴」とでも云ふやうに聞えたぢやございせんか。それからわたくしあの跡で五分間程黙つてゐましたの。ところがその黙つてゐると云ふことも、がら／＼云ふ一頭曳の中で本當には出来ませんでしたのね。あれが靜かな、軟いむく／＼した二頭曳の中だつたら、あなただつてわたくしが黙つてゐるのにお氣が附いて、なぜ黙つてゐるかとお尋ねになつたでせう。するとわたくしまあ、ちよいと泣き出したかも知れませんのね。

男。ははあ。なる程。なる程。

貴夫人。ところが一頭曳では黙つてゐると云ふことがなんで

も無い事になつてしまひます。なぜと云つて御覽なさいまし。物を言つたつて聞えない程やかましい馬車の中では、黙つてゐるより外爲方が無いと云ふことになりまますから。ね。むづかしく申しますと、「無聲に聴く」と云ふことが一頭曳の馬車では出来なくなりまますのですね。そこで肝心のだんまりも見事にお流になりましたの。それと一しよに何もかもお流になりましたのね。まあ、本當に迷つてしまつてゐる女にだつて、何もかも大きな聲ではつきりさう言へど仰やることは、男の方にも出来まますまい。ところで何を打ち明けるにも、微かな溜息とか、詞のちよいとした不思議な調子とか云ふものしか持ち合せない女が、まだ八分通しか迷つてゐなかつたのでございませうから。

男。さうですか。ああ。さうでしたか。わたくしは馬鹿ですなあ。

貴夫人。そこであれからは、御一しよに馬車から出てお暇乞をしてからは、ちつともお目に掛かりませんでしまひましたのね。それはあなたがわたくしを避けて逢はないやうになさいましたのも御無理ではございませぬ。わたくしの手からなんの手掛かりをもお受にならなかつたのですから。ね。そんなわけで、まあ、けふお目に掛かつたのは本當に久しぶりでございましたわね。わたくしの申す事はお分かりになりましたでせう。あの時二頭曳の馬車を雇つて入らつ

しやつたらと申すのでございますよ。
男。ああ。ああ。

貴夫人。本當になんでも無い事のお蔭で、どんな結構な事でも出来たり出来なかつたりするのが世の習とかでございませぬのね。あなた、もうなんにも仰やりつこなしよ。後悔なすつたつてあなたのお爲にもわたくしの爲めにもなりませんわ。まあ、あの時の理合せにこれからわたくしを内へお送下さいまし。しつかり宅の主人の手におわたしなさいませやうにね。

男。そんなら馬車を見附けて来ませう。

貴夫人。ええ。それが好うございます。雨が降つてゐますから。

男。そこで今日は、あなたを尊敬いたして、一頭曳にいたしますよ。

貴夫人。あら。それは餘計な御會釋でございますわ。矢つ張二頭曳を雇つて来て戴きませう。さういたすとわたくし今になつてはどんな静かな、軟い二頭曳でも役に立たなくなつてゐると云ふことを、あなたにお見せ申しますから、あなたもお積でお附合なさいませやうにね。ほんに、男の方と云ふものは物分かりが悪くつて入らつしやいますことね。わたくし厭になつてしまひますわ。さあ御面倒でも雇ひに入らつしやつて下さいまし。くだいやうで失禮です。

はございますが、女を内へ送つて遣る時には、いつでも一番餘計に馬の附いてゐる馬車を連れて来るものと云ふことをお忘れにならないやうにね。さあ、入らつしやいませよ。

(男首を俛れて辻馬車のたまりをさして行く。昔のおろかなりし事の苦澁なる記念のために、その面上には、憎むべき苦みの影浮べり。灰いろの空よりは秋めける雨しとくさ降りり。)

秋 夕 夢

(ダヌンチオ)

第一幕

エネチアの貴族の邸宅。アレンタ河の岸にあり。故大統領が未亡人に譲りたるものにて、未亡人は日蔭者の如く住ひる。秋の日暮り。前の方に家の一翼を見る。大理石もて圓狀に造りたるものにて、圓き塔の形をなし階段を圍めり。階段も、圓柱も、欄干も、螺旋狀に登り行く。その様エネチアのホルテ・コンタリナにあるアル・ボヨロ宮殿の階段に似たり。この華麗にして開潤なる階段は上に廻廊を戴けり。廻廊は圓の全部と河と遠景を見渡すやうに造りあれど、舞臺の穹窿に遮られて見えず。下の方、門の前に廣間あり。廣間は一種の屋根なき柱列にて彫像、松火臺、腰懸、トルコ製の甍にて飾りあり。廣間と圓との界に砂柱の上に立てたる格子あり。格子の處に金減金の大燈籠數個を懸く。この燈籠は昔船の軸に吊りしものなり。格子はエロナなるスカリシエリ家(一二六〇乃至一三八七年)の墓にあるものと似た

り。格子の製作は極めて精巧にて、そよ吹く風にも揺るべきレエスの優しき織物のやうに見ゆ。格子より向うに見ゆる果知らぬ華麗なる遊園は、もみぢせる木の葉、萎める花、餘りに熟したる木の實の茂みにて埋めらる。この遊園の傾斜をなしてアレンタ河に臨める狀は、譬ば色氣ある、疲れたる女の、今一度己の衰へたる色の最後の閃きを寫し見んと、鏡に俯向き覗きたる如し。斜に照れる日光の下に、秋の丹朱の紅と、サフランの黄とは常ならぬ力に輝けり。物の影の殆ど錆色に見ゆるは、數多の黄金を積重ねたる洞窟の内なる物の影と同じ。山毛櫨の木の上、相の屋根の上、すらりとしたる糸杉の金字塔の上には、清き琥珀の大塊の如き、重く、動かず、輝ける雲を見る。この一切の物の静けさの上には、胸苦むき期待の情の漂へるを見る。大統領未亡人ガラアニガ夫人は、顔を格子に押付け、色蒼き手の、指輪多く飾めたる指は、何物をか待ちある。物狂は、きほどのじれたたきに、格子の黒き棧に搦まりある。身を揉むほど

に、鐵の格子は撓たがひて揺めけり。譬たとひ網のうちに捕はれたる猛獸の如く、夫人は斯く格子に縋すがりて立ち、聲高く圓の方へ向きて呼ぶ。

夫人。(荒らかなる怒りの聲。) ルタレチアや。オルデルラや。オルセオラや。バルバラや。カタリナや。ネリツサや。誰も歸つて来ないの。まだ誰も歸つて来ないの。ルタレチアや。カタリナや。(烈こしき怒の發する儘に鐵の格子を揺れば、格子は揺らめき、きいきい鳴る。苦くるき息を吐き、ごこを見ることもなく迷へる目にて、後を振向き見る。容よう貌ぼう凝こり固こりて、色いろ蒼あざめた様、苦痛くるしみと忿怒ひんがとの物狂くるほしき痙攣けいれんに身を委まれんとする刹那せつなに似たり。飾物の内に古銅こどうにて造れる、殆たど黒くろきエクス像ざうの裏あり。夫人は二三歩進すすみて、この臺の上の銀の鏡を掴み取り、ちよこ顔を見る。さて驚おどき憎にくむ状じやうにて鏡を臺の上にはたき取落し、螺旋梯子らせんの方かたに向むきて駈かけ行き、呼ぶ。) ベンテルラや、ベンテルラや。どこにゐるのだい。何が見えるかい。返事をおし。

ベンテルラ。(見物には見えぬ廻廊の上にて。) プレンタ河を船が一つ参ります。旗を澤山立て、大勢で樂を奏してゐます。段々近ちかくなつて参ります。併ひし例の船ではござりません。そちらへ物の音は聞えませんか。(遠方より音楽聞ゆ。間。) 又一艘参ります。一番目の船が。又一艘参ります。

窪には拳こぶしを入れるほどの透間とけまが出来た。自分で何をいつてゐるのか、ちつとも耳に聞えないで、たゞ動悸どうきと脈みとが槌つで物を打つやうに打つのが聞えるばかりだ。咽のどが乾かわく、始終しじう乾かわく。それでゐて一口でも物を飲めば、熱あつが一層いっしやうひどくなる。焔えんに油あぶらを掛けたやうに。手を泉水すいずいに浸ひけて見れば、心持こころもちが好よくはならず、體中ていぢゆうがその水の波立なみだつやうに顛うへて来る。頭あたまから爪先つまさきまで、體ていは衰おとろへて行くばかりだ。體ていを循したがる血ちといつては涙なみだの交まじつた血ちばかりだ。

ベンテルラ。おう。基督きりすと様。奥様おくさまのこのお苦しみを救すくひなされて下さりませ。

夫人。わたしは死ぬる。わたしは死ぬる。それまでにたつた一度逢あつて死しにたい。たつた一度で好よい。わたしはあの方を一度もはつきり見た事ことがないやうだ。わたしの物ものであつた時とき、一度もはつきり見て置おかなかつたやうだ。わたしの處ところへお出でならなくなつて、お顔おんこの記念きねんまでを、わたしの處ところから持もつて逃にげておしまひなさつた。わたしの心こころであの方あの方のお顔おんこを思おもひ浮うべて見みようとすると、わたしの目が昏くらんで来る。心に浮うんで来るものが、みんなぼやけて流れ合あつて焔えんの中に漬ひつてしまふ。何もかも只ただ一色いっしきに、燐りん燼せんの中なかの火ひのやうに、地獄じごくの中なかの罪つみのやうに、一色いっしきになつてしまふ。おう。ベンテルラや。地獄じごくに墮おちてしまふまでに、あの方あの方に一度逢あはせておくれ。あの方あの方の體ていに障さらせておくれ。

す。四つ、五つ、六艘でござります。皆旗を澤山立て、大勢で樂を奏してゐます。流を下つて参ります。河中かみづかが金色きんいろに光あつて参りました。祭まつりが始はまるのでございませう。赤い旗あかばかり立てゝゐる、千の焔えんが燃もえ立たつやうな船ふねが一艘いっさうござります。あれがそでござりませう。(夫人は夢中むぢゆうになりて階段かだいを駈かけ上あらんだす。) いえ、いえ。さうではござりません。花はなと獅子ししとの記章きしやうでござりました。ノランツオでござりました。

夫人。(最早もはや煩悶ぼんもんに堪たへぬ様子ようすにて踏ふめき色いろ蒼あざになる。) 下りてお出で。こゝへ。そしてどうかしておくれ。わたしは死しにさうだ。胸むねが、胸むねが裂ひけさうだ。(夫人は櫃こに寄り掛かり、兩手りょうてにて胸むねを押おふ。遠方とんぱうより音楽聞ゆ。腰元こしもとベンテルラ廣ひろき螺旋梯子らせんを馳かせ下くだる。その足取あしとの早はやき爲ためめ、腰元こしもとの着物きものは鳥とりの翼よくの如ごとく飄ひる。さて夫人の傍かたわらに駈かけ寄り、腕うでを伸のべて夫人を支たふ。)

ベンテルラ。おう。基督きりすと様。奥様おくさまのこのお苦しみを救すくひなされて下さりませ。

夫人。(弱よわ々々しく。あの、わたしの脈みを見ておくれ。何なんだかわたしは毒どくに中なつて死しぬるやうだ。わたしの唇くちびるには色いろも何も無なくなつてゐるだらうね。わたしの頬ほは緑き色いろになつてゐるやしないかい。目を塞ふぐと險けんが目の玉たまをこすつて傷やめさうだ。わたしの體ていは心こころの心こころまで燃もえてゐる。わたしの目の

れ。わたしを可哀あはれがつた事ことがあつたか、わたしの胸むねに顔かほを押お付けて下さつた事ことがあつたか、問とうて見みさせておくれ。行いつて来ておくれ。お願ねがひだから。わたしは死ぬる。死しなうと思おもつてゐる。お喜よろこびなさるやうに死しんで上げようと思おもつてゐると、さういつておくれ。入いつしやつてさへ下くだされば、わたしは、目を瞑つぶつて、決して又また開ひけないから、つひ指ゆびで險けんを押おしてさへ下くだされば好よい。わたしはあの方あの方の足元あしもとに倒たれて、決して又また起た起きないから、つひあの方あの方が土つちを掛かけて埋うめて下くだされば好よい。行いつておくれ。行いつてさう云いつておくれ。お願ねがひだから。何でもお前の欲ほしいものをやるから、どうぞ逢あはれるやうにしておくれ。どんなものでもやらないとは云いはない。わたしの持つてゐるものでさへあれば、みんなやる。飾かざりでも、トルコ珠トルコたまでも、毛革けがしでも、帶おびでも、布團ふだんでも、サン・ルカの宮殿みやてんでも、リアルトオの傍かたわらの屋敷やしきでも、キルラ・ボナの領地りやうちでも、あの方あの方をこゝへ連れて来てさへくれるなら、皆みななお前にやつてしまふ。行いつておくれ、行いつて来ておくれ。

ベンテルラ。参まります、参まります、参まります。どうでもいたします。基督きりすと様。奥様おくさまのこのお苦しみを救すくひなされて下さりませ。お救すくひなされて下さりませ。

夫人。どこにお出でならざるだらう。あの賣女うりめの處ところにお出でならざるやら。お前はあの子こを見た事ことがあるのかい。ベンテ

アといふ女子を。
 ベンテルラ。はい、見ました事がござります。
 夫人。世間の人のいふやうに本當に美しいかい。
 ベンテルラ。(ためらひつつ) いゝえ。美しいはござりませ
 ん。

夫人。嘘をお云ひでない。美しくないものが、何で男といふ
 男を、みんな傍へ引寄せて奴隷のやうにする事が出来よう
 か。嘘をお云ひでない。(腰元黙る。夫人暫く何物をか聞
 き定む。遠方より、アレンタ河を下り来る船にて奏する音
 樂の聲聞ゆ。) お聞きかい。お聞きかい。あれが凱歌だよ。
 けうがあいつの凱旋の晩だよ。奴隷にした男をみな連れ
 て、あの河を下つて来るのだ。その中にある方が入らつし
 やるだらうか。お前は何んと思ひだえ。

ベンテルラ。(何と云ひて好きか迷ふ。) 入つしやらないかも
 知れませんが。ことによつたらミラにでも入つしやるかも知
 れません。

夫人。えゝ。誰も知らないとばかりいふ。その癖心當りに
 は、わたしの廻し者のやつてない處はない。それがなぜ歸
 つて来ないやら。ルタレチアも、バルバラも、カタリナ
 も、オルセオラも何處にゐるやら、ことによつたらあの女
 子共は何處かの木蔭で男とふざけてゐるはずまいか。
 ベンテルラ。お女中達は晩になるまで様子をみてゐるのかも

知れませんが。

夫人。そして魔女はどうしたやら。日の暮ないうちに連れて
 来てくれるだらうか。日の暮ないうちに、術をして貰はな
 くてはならない。お前にはわたしの心が分るかい。わたし
 は死ぬるのだよ。わたしの氣分のはつきりしてゐるのも、
 もうけふ位かも知れない。もう今夜出る星の光を見ずに死
 んでしまふかも知れない。(腰元は再び大理石の階段を登
 りて見廻す。) 誰もわたしに云つては聞かせないが、わた
 しはよく知つてゐる。女子めがあなたの方を自分の船にかくま
 つてゐるに違ひない。自分の布團の中に隠してゐるに違ひ
 ない。あの方より好い獲物が外にある筈はないから、あ
 の方が「若さ」に包まれてお出でなさるのは尊い果物が旨い
 肉に包まれてゐると同じ事だ。あの方の體中には愛の血
 が漲つてゐる。手足の指の爪の根までその血が脈を打つて
 ゐる。丁度猛獸が怒つてゐる時のやうに。まだわたしの物
 であつた時、折々わたしはあの方を、豹のやうだと思つた
 事がある。體がしなやかで、強くて、わたしの唇のむく吸
 付いた跡がべたべたと見えてゐるのが、豹の皮の斑のやう
 に思はれた。あの方の指がわたしの體に障ると、脈と脈と
 を一本づゝ、髪の毛を分けるやうに、掻き分けられるやう
 な心持がした。(燃ゆる如きあこがれに身を委れて、夫人
 は空想が夕暁の中に描き出す形に身を寄せかけんとする如

し。) えゝ。假令あなたがどの女をあの指でいちぢつてお出
 でなされても、あなたを初めて我物にしたのはわたしだ。
 どの女の唇でも、あなたの口に障るのは、わたしのに障つ
 た後だ。あなたの愛とあなたの力とは、最初にわたしの物
 になつたには違ひない。誰が二番目の女であらうが、誰が
 最後の女であらうと、最初の女はわたしに違ひない。假
 令あなたがわたしより紅な唇をお見出しなかつても、假
 令わたしのより達者な胸があなたの體に抱き付いても、假
 令あなたがわたしよりふくよかな體にお寄添ひなされて
 も、それが何の役に立ちませう。何の役に立ちませう。わ
 たしがあなたを我物にしたやうに、外の女子はあなたを我
 物にする事は出来ませう。あなたの體の顫へるのをわた
 しの腕に覺えたやうに、外の女はあなたの體の顫へるのを
 覺える事は出来ませう。あなたはほんの子供であつた。
 詞少なにはかんだ子供であつた。わたしの目で見られる
 たびに、あなたのお顔が赤くなつたり蒼くなつたりする様
 子は、生と死とが往つたり来たりするやうで、わたしの瞳
 毛の開くたびに、わたしの魂が灰と煙とで交る交るあなた
 を掩ふかと思ふやうでありました。わたしの戀の力が、あ
 なたには恐いので、一足づゝ恐る恐る近付いてお出でなさ
 された。あなたのお腰は、獵の後の獵犬の腰のやうに顫へま
 した。或晩の事、閨の外の關際に倒れていらつしやつた事

もある。あの頃わたしがあなたの體に潜んでゐる「若さ」
 の力を探り出したのは、丁度巴旦杏の肉を食べて白い核の
 出るまでにすると同じであつた。(男の體の障るやうな振
 を手にてなし、身顫する。) あの時わたしの脈の中には、
 まあどれだけの渴きがあつたらう。どれだけの饑があつた
 らう。あなたを吸取らう。あなたの「若さ」を吸取らうと
 思ふわたしの力はどれだけであつたらう。夢の中でわたし
 の魂は、酒を飲むやうに、蜜を食べるやうに、あなたの命
 を飲込んだ。あなたの胸の奥にある生々した心の臓を、わ
 たしが痛くないやうに開けて上げた。わたしの爲めには、
 あなたの血の滴が柘榴の核のやうであつた。暗い處であな
 たの口に接吻すると、あなたの血の好い味がして、それと
 一しよにわたしの頂に、死の息がぞつと觸れた。あの時の
 事を覺えてお出でなさいませう。覺えてお出でなさいませ
 う。あなたとわたしとの唇は、死が二人の冷たい齒の上に
 押あてゝ潰す、たつた一つの木の實のやうでございまし
 た。そして二人の目からは闇を照らす稲妻が出ました。丁度
 入り亂れた髪の毛や睫毛に、渦巻く顫顫の煙が移つたやう
 に、あなたのお顔は血の味がいたしました。そして今一つ
 何か知れぬ氣味の悪いものゝ味がいたしました。あなただ
 つてこの氣味の悪い物をわたしと一しよにお味はひなされ
 たに違ひない。大統領がモオルだらけの繻の着物と、皮衣

との重りに押されて、眠つてゐる姿を、あなたが御覽なさる時、あなたのお目は蠟のやうでございました。二人の戀の眞中へ、死を呼んでお出でなされたのはあなたです。それでわたしは海に祈願を籠めました。わたしの身を波に隠してくれるやうに、わたしの秘密を海底に埋めてくれるやうに、わたし共二人を積つた水の強い背中に背負つてくれるやうに、祈つたのでございます。奢の船を蠟物の國へ走らすのを、窓から見ても、わたしは體に巻いてゐた、まだ暖い帯を解いて、祈願の印に投げました。そして海を越えて死を迎へに行つたのはあなたです。體に觸れずに人を殺す、ストラヲニアの魔女を、あなたが連れてお歸りなされた。(最後の詞を寛かに云ひ終りて、自分は物思ひに沈みゐる。目をば空想の描き出せる人物に向けて睨りゐる。半ば閉せる唇の上には、殘酷なる表情を見る。)ほんにあのストラヲニアの女子は上手であつた。二磅の蠟で人形を拵へた。それから本人の齒を一本、蠟の膏を三滴、お祈をした晩餐のパンを一片欲しいと云つた。それをわたしが出してやると、蠟の中へ練り交した。こんな事をわたしにしたのは、みんなあなたの爲であつた。わたしの床にあなたを寢せて見てゐたい爲であつた。蠟には地獄の蠟がした。この人形に着せる着物は、大統領の袍の隅を、わたしが自身で鉄で切つた。蠟には地獄の蠟がした。それを火鉢へ持つて

行くとも見る見る焼けて流れてしまつた。それからといふものは、あの年寄は日に日に體が細くなり、顔色が蒼くなつた。額にあつた大創の痕までがしまひには色が認め見えなくなつた。祭の儀式のある日にも、錦の袍が重過ぎて出られぬやうになつてしまつた。體が次第に衰へて、脈といふ脈は處になつた。そしてその血が何處へ行つたやら誰も知る者はない。とうとう玉座の上に坐つたまゝで、息の絶えた時の様子は、金の御厨子に据ゑてある聖者の遺骨のやうであつた。息の絶える直ぐ前に、アアメンと一言いつてわたしの顔を見た時に、枯委びた口の中で、あの齒の抜けた蠟の窪みが見えた。その目ざしは骸骨の穴から光つた。恐しい深い處から光つた。おう。こんな事をわたしにしたのはみんなあなたの爲であつた。この死骸と罪とを背負つて、わたしはわたしの玉座を降りてあなたの處へ行きました。あなたと誓を一しよにゐる爲め、あなたと夜を一しよにゐる爲に行きました。そしてわたしはあなたの命と入交つてしまけうといはりました。丁度あなたの魂があなたの肉と交るやうに。そしてわたしはあなたの中に入込でしまけうといはりました。丁度あなたの息があなたの胸の中にあるやうに。これだけの事をわたしにしたのはみんなあなたの爲であつた。そしてあなたはわたしを可哀がつて下さつた。可哀がつて下さつた。葡萄を食べて肥るやうに、わ

たしの甘みでお肥りなされた。わたしの甘みはあなたの體一ぱいになつて、首まで、目まであなたの體に充ちました。その時はあなたの目にも、わたしが美しく見えました。わたしの體に蘇合香や眞珠のあるのを、あなたは見付て下さつた。あなたはわたしを、八重の花をむしるやうに、一枚一枚おむしりなされた。あなたの爲にもわたしの髪が海や密兒拉のやうに匂つた。蠟物の山を積んだ船の繩のやうに薫つた。(問。夫人は夢見る如き舉動にて、我髪、我頰、我腮を撫でて見る。)それなのに、わたしの顔が直に死んだものゝやうにならねばならないのでございますか。一日に枯れる木の葉のやうにならねばならないのでございますか。わたしの頸の肌の上には、あなたの息がまだ温にかゝつてゐるのに。(夫人は頰を撫で、見て皺を探さんとする如くなりしが、力抜けたる如く顔ふ。)わたしの頸に年浪の寄せた跡がある事に、あなたは気が付きましたのか。(蠟の上に落ちたる鏡を取上げ、照し見る。悲みに色蒼ざめ、夫人の顔は溶け去らんぞす。鏡を持ちたるまゝに、兩手は暫く力無く垂れて、夫人は絶望の餘り、化石したる如く凝立す。)

はゐないかい。ペンテルラ。驢馬を一定連れてゐます。驢馬には女子が乗つてゐます。囚人のやうに驢馬の背に括り付けられてゐるやうでござります。夫人。(喜びの叫びを發す。)魔女だ。連れて來た。連れて來た。(圓の上に懸れる、紅と黄金色とに輝ける雲を、目を見開きて仰ぎ見、深き息をなす。折々遠方より、流を下る船にて奏する音楽の音聞ゆ。生きんこし、受用せんぞする、物狂はしき促しに胸張る。)おう、パンテア奴。そちが髪の毛一本でも、そちが着物の切端でも、そちの體の中の何かを、そちの身に付いたものゝ切端を手に入れたいものだ。そちの指の爪でも好い。そちが着物のほつれ糸一本でも好い。その代りにならわたしの財産をみなでもやる。けふの中にそちが襟の裝飾の糸一筋を持って來たものには、わたしの金を、領分を、家屋敷をみんなやる。(夫人は顔を格子に當て、網に押付くる如く押付け、木の葉の茂分を透し見て呼ぶ。)ネリツサヤ。カタリナヤ。オルセオヤ。ヤコベルヤ。お前達のうち、誰がわたしに死を持つて來てくれるかい。誰がわたしに命を持つて來てくれるかい。(夫人は茂れる園より上り來る成熟と壞滅との葉を吸ふ。)まあ、果物の薫る事。重りに堪へない枝々が惜み嘆いてゐる間に、甘く熟して崩れて行く木の實の匂の重々しく不思

讀な事。誰もあれを摘みはせぬ。誰もあれをわたしの爲に籠の中に摘入れて、船の上に積みはせぬ。重みに押されて疲れた木は、餘り榮耀を爲過ぎた罰で、嘆きの聲を立てゝゝある。落ちた木の實に土は肥えて、崩れた木の實の甘い肉が、土の表を油ぎらせて明るい色に替へてしまつた。物言はぬ、大きな口があれをみんな食べてしまふ。おう。あれがみんな無駄になる。わたしの戀や促しがあれを摘まずに置いたので、あれがみんな無駄になる。あれがみんな一つ一つわたしの手に渡つて、愛らしい、天鷲絨のやうな生毛がわたしの手に觸れる筈であつたのに。促しがわたしに幾千萬の唇をくれたなら、あの果物みんなの汁を一日に吸ふのであつたらう。それがみんな駄目になつた。駄目になつた。(夫人の指輪を絞めたる色着き指は格子の鐵の棧を滑りて、柘榴の實のはじけて、露滴るやうになり、近く此方へ差出でたるを掴む。) おう。この果物の黨や甘みがわたしの五官の上に着物のやうに被さつてゐた時であつた。大統領の夫人と呼ばれた頃は、この果物の收入が錦の切に代るやうに法律で極めてあつた。玉座に坐つたわたしの姿を美しく立派に見せる爲に、島の園といふ園が裸體にせられる頃は、あの方があたしを可哀がつて下さつた。窓から港を見てゐれば角の入物に溢れるほど物を盛り上げたやうに果物を積んで大船の通るのが見えた。子供が舷にゐて、さ

もおいしさうに林檎に齒を立て、葡萄の房にしやぶりつくど、果物が鋭い齒に噛まれて血を出すかと思ふやうであつた。わたしは大石で積み上げたわたしの街へ這入つて行つて、その民を喜ばせるこのおいしい果物を見て、胸の内土地から上る税金の高を勘定して見て、わたしの身につける絹や錦の爲立の工夫をしたものだ。さういふ風に水々しいお前達の黨や甘みを、わたしは着物にして身に付けて、あの方を嬉しがらせた。え。そのお前達の水々しさ、今日はもうわたしの身には付いてゐぬ。わたしの着物や被の裏の間に付いてはゐぬ。だが今のわたしの脈の中にお前達の熱した心持が解けて流れてゐて、お前達の肉から溢れ出た甘みがわたしの血に沁込んでゐるやうだ。憎い女子に騙されて、わたしを忘れてお出でになるあの方が、ふいと歸つてお出でなされたら、あの方はわたしの唇に、まあどんな人を酔はすやうなおいしい味があるのを、お味けひなさるだらう。え。パンテア奴、パンテア奴。
(愛さ憎みさに氣を失はんとして、目は醉へるが如く、怪しく迷ひて、少し跟きつ、振向く。)
え。生きて見たい。今一度生きて見たい。そしてあの方を火の中へ入れるやうに、このわたしの苦痛の生涯で包んで上げたい。あの方の夜晝に新しい戀を覚えさせて上げた。まだお覚えなかつた事のない樂みを、世に未曾有な新

しい工夫の樂みと悶えとを覚えさせて上げたい。あ。わたしはこの體に持つてゐる熱と毒とで、新しい美さを作り上げて見ようと思ふ。

(慌しく落ちたる鏡を取上げ、その上に伏して、再び姿を照し見る。)

まあ。わたしの目のこんなに大きかつた事はない。そしてその周圍にこれほど暈のあつたことはない。あの方がお出でなかつたらわたしの顔は見えないだらう。わたしの目の焔が、あの方に見せないやうに、顔を隠してしまふだらう。毎晩毎晩熱がわたしを待つてゐる。血に飢えた豹のやうに、熱がわたしの枕の處で、わたしの來るのを狙つてゐる。そしてわたしの顔を、骨になるまで食つてしまふ。

(唇を開け、指にて眼を指示す。)

わたしの唇は萎れてしまつた。だが、齒けまだ光つてゐる。昔わたしが嗜着を着てサン・マルコオからリワへ下りて行くと、船の中にある船頭達がわたしの微笑の光るのを見たさうだ。あの方も、わたしが黒闇でお話をすると、わたしの齒の光るのを御覽なさつて、何をお話申したかお耳には入らなかつた。今歸つて入らつしやつたら、この齒を何んと御覽なさるだらう。ひからびた花の裏の底に置いた白露のやうなこの齒を。

ペンテルラ。(螺旋梯子の上より。) 船が十二艘ファイサオレか

ら下つて参ります。櫻ん坊のやうな赤い色のダマスコの絹で、屋根が張つてござります。軸は銀で拵へたシレンの姿で飾つてあります。船は花を編込んだ綱で繋いで二列に並べてあります。編んだ花が河面を一ぱい掩つて、それが水のまに／＼浮いてゐます。船の中にも花が一ぱいあるのを、手に手に取つて河に投込んでをります。花に付いた葉の緑色で、河が一帶に緑に染りました。初は夕焼の雲のやうに薔薇色に見えましたのに。あら。何んといふ大きい雲でございませう。あちらのミラの方に。段々高くなつて参ります。高くなつて参ります。火が付いて燃え上る幕のやうに見えます。

夫人。(この邊の立像の、強き日の光に照さるゝに驚き心配げに。) そして馬に乗つたものはどうなつたのだえ。それに驢馬は。驢馬は。オルランダの街道にまだ見えてゐるかい。段々近くなつて來るのかい。急いで來るかい。

ペンテルラ。只今は森に隠れて見えません。あれ、あれ。只今森の處から出て参りました。段々近くなつて参ります。併し馬が並足でござります。お庭を女子が一人こちらへ参ります。ルクレチアでござります。ルクレチアでござります。今一人跡から参ります。おや、又一人参ります。カタリナとオルセオラでござります。

夫人。(格子に駆寄る。) あ。やう／＼の事で。

(癡癡したる指にて格子戸を開けば、戸はきいきい鳴りて揺めく。忍びの老ルクレチア登場。すらしきして、振舞の敏捷なる事獵犬の如し。息を切らしてゐる。錆色の衣を着、首には巾を被りたるが、風にひらめけり。夫人は女の手頭を掴み、烈しく前に引寄せす。)

あゝ。やう／＼の事で。わたしは氣が揉めて胸が裂けるやうなのに、お前は歸つて来ないのだから。歸つて来ないのだから。何んとかお云ひよ。何んとかお云ひよ。何か知れたかい。何か見て来たかい。聞いて来たかい。何んとかお云ひよ。

(顔にまで掛りある巾を引外し、息忙しき口の邊を露はしやる。女は前に跪く。)

あの方を見て来たかい。どこにお出だえ。あの女子の處にお出かい。

ルクレチア。(がっかりしたる様子。)奥様。
(廻し者に出しやられたる外の女中二人も歸り来る。カマリナもオルセオラも錆色の衣を着たるが、姿すらりとして、振舞の敏捷なる事獵犬の如し。何れも息を切らしある。)

夫人。カタリナや。お前はどうかだえ。オルセオラや。お前はどうかだえ。こゝへお出で。こゝへお出で。何んでも好いから、云つてお聞かせ。あの方がどこに入らつしやるか、早

く云はないと、お前達を繩で縛らせて河へ漬けてやるよ。あの方はパンテアの處にお出でかい。

ルクレチア。(吃りつ。)いゝえ。奥様わたくしはあのお方のゾリアナに入らつしやるのをお見受け申しました。夫人。(ルクレチアの髪の毛を掴み引動かす。)嘘をおつきでない。嘘をおつきでない。オルセオラや。お前お云ひ。あの方はどこにお出でだえ。

オルセオラ。はい。奥様。わたくしはあのお方のパンテアが船に入らつしやるのをお見受け申しました。

夫人。(ルクレチアを突放し、前に跪きたるオルセオラを引寄せす。)こゝへお坐り、こゝへお坐り。さあお云ひ。お前の見た事を云つてお聞かせ。何んでも好いから、みんな、お云ひ。さあ、さあ。これを遣るから。
(指輪を一つ外して遣る。)

まだ金で百ゾカアト遣るよ。

オルセオラ。(べら／＼と。)はい。奥様。そのお船に入らつしやるのをお見受け申しました。御馳走の出でゐる食卓の前に、天蓋の下に坐つておいでなさりました。食卓の上には、葡萄酒を一杯ついだ盃が幾つも置かれてありまするのに、パンテアはその食卓の上を、踊つて歩いてをりました。盃を倒しませず、こはしも致しません。素足の足首には、眞珠と寶石とを鑲めた小さい羽が括り付けてござります。

す。踊つてゐますのは、いつぞやマンツアの公爵へ御馳走に工夫したといふ評判の翼踊りと申すのでござります。あのお方は食卓の前に坐つていらつしやつて、一しよう懸命に見て入らつしやるうちに、お顔が段々机の上に伏さるやうになつておしまひなされます。さういたすと女子は羽の付いた素足で、葡萄酒のついである盃に障つたり、あのお方の髪の毛に障つたり致します。とう／＼しまひには、女子が踵で、あの方の顚顚をしつかり押へてしまひます。あのお方は目をお瞑りなさいまして、お顔の色は食卓に掛けである巾のやうに眞白におなりなされます。

(夫人はマンチの上に腰を据ゑたるが、譬ば鐵砧の上に置ける熱鐵の如く、殘酷なる槌に打たれて、曲りくねり、火花を散す。)

夫人。あの方が眞白におなりなされたといふのかい。それから。後を話しておくれ。話しておくれ。さあこれを遣るか

(おのづから屈む指より第二の指輪を抜取りて、女中に遣る。カタリナ、ルクレチアの二人争ひてこの貴重なる裝飾品を掴まんぞす。)

オルセオラ。その時女子は、體を弓のやうに曲げて、あのお方の唇に接吻いたします。その途端に女子の帯が、丁度琴に張つてある絃の切れるやうに、ぴんと音を立て、切れて

しまひます。女子は帯なしに立つてゐるのでござります。夫人。(顔ふ、澤なき聲にて。)それから、それから。

オルセオラ。あのお方は飛上るやうにお立ちになります。お膝が顚へてゐます。そしてお體も顚へてゐます。女子は笑ひながら、あなたのお口の冷たい事、お體の血はどこへ行つてしまひましたのでせうと、さう申します。

夫人。(堪え難き苦惱に身をよぢる。)あなたのお口の冷たい事といつたのだね。それはわしが知つてゐる、知つてゐる。オルセオラ。女子がさう云つたのは、あの方を擲擧ふ積りなのでござります。あのお方は氣の狂つたやうに手を伸して

女子をつかまへようとなさる。女は素早く逃げて、ちよつとの間に遠い處に行つてをります。そして、やはりあのお方を擲擧ふ積りで歌なんぞを歌ひます。歌は譏官コンタリニ様の御寵愛なさて入らつしやつた美しいホルテンシアを、アレツサンドロオ・ストラデルラが連れて逃げた事を作つた歌でござります。

情に足を取られてはさうして逃げて行かれよう。

あのお方は氣の狂つたやうに追馳けてつかまへようとなされまます。女子は身輕に、手際をよく體をよちつて逃げまますのが、まるで踊を踊つてゐるやうでござります。さういふ風に船の體から舳へ、舳から舳へと、女の笑つて逃げるのを、あのお方は、つかまへたら引裂いてでもおしまひなさ

りさうな御様子で、うめきながら追馳けてお出でなさります。そのうちあのお方はとうとう女子の着物の端をおつかまへなさりました。

夫人。(半ば息のつまりたる様子。)そしてどうなさつた。どうなさつた。

オルセオラ。女子の着物は頸から膝までばらりと裂けまして、その巾があのお方のお手に残りました。女子は留めどもなく笑つてゐます。そして机の傍を通りながら、葡萄酒の一ぱいついである盃の一つを取つて、あのお方のお顔へ葡萄酒を打掛けて、さあ召上れ、咽がお渴きなさいませうと申すのでござります。そのうちいつもあの子の船の周囲を附廻す貴族方の小さいお船が、次第に傍へ寄つて来まして、女子の船をぐるりと取巻きます。船の数は次第に殖える。河面は船で掩はれてしまひます。その寄つて来た大勢が、あの子を見よう見ようと致しますので、船はみなな過ぎまして、も少しで船端が水に付きさうになります。貴族方はみなお顔が眞蒼になつてお出でなさります。そして目だけが燃えるやうになつてお出でなさります。船頭達も同じ事でござります。どの男の體の中にも同じ願が満ち溢れて、どの男も氣が狂つてをります。誰も誰もお方の方へ両手を伸して、みんな自分があの子を手に入れようと致して居ります。そして口々に、パン

テア、パンテアと叫びます。しまひにはこの呼聲が河一ぱいになつて聞えまするので、パンテアも吃驚いたして立留りました。

夫人。そしてどうしたえ。

オルセオラ。その時あのお方は、一飛に女子の傍へ寄つてお出でなさりました。あの子を一呑に呑んででもお了ひなさりさうに見えました。併し女子は今度も素早く逃げ退きまして、あのお方のお手には又着物の巾が残りました。その時女子は、もう體中に着物といふものはなくなりまして、たゞ兩足に寶石の翼が付いてゐるだけでござります。そして耻し氣もなく、金で飾つた船の舳に出て参りまして、大勢の男達に自分の體を見せます。丁度自分の體を火焰の中へ投げるやうに、大勢の男の目に、自分の體を見せまします。男達はみな氣が違つたやうに女子の體を見詰めてゐて、パンテア、パンテアと叫びます。あの子が神様でもあるやうに見えます。どの男も、自分一人であの子を見てゐるやうに、自分の腕であの子を抱いてゐるやうに、逆せ上つてをります。船頭達があひ腰になつて女子を見てをりますのが、丁度恐しい猛獸が獲物を見て飛びさうに致してゐると同じやうに見えます。夫人。そしてあのお方は。あのお方は。オルセオラ。暫の間は、お手に残つた着物の巾を足元へお投

げ棄て遊ばして、動かずに立つてゐらつしやいました。何だかその儘息が絶えて倒れておしまひなさはすまいかと思はれるやうでございました。お見上げ申すのが、氣味が悪いやうでございました。云つて見れば、眩暈が旋風のやうに、あのお方のお命の周囲を廻つてゐるとも申したいやうでございました。(間。)そのうち急に身顛ひをなさつて、船の舳に立つてゐる女子を一目御覽なるや否や、矢のやうに傍へ飛んで入らつしやつて、おつかみ付きなさりました。側で見えてゐる大勢の男の百千本の手の力が、あのお方の手に入つてゐるやうに見えました。そして旗取の勝負の時、旗を引抜いて取るやうに、金で飾つた舳から、女子を抱下しておしまひなさはりました。

夫人。(眞直に突立ち、吼ゆるが如く。)あゝ、あゝ。いまいましい。口惜しい。

(譬ば大蛇にくるくる巻かれて、身を抜く事の出来ざる如く、悶え苦しむ)

パンテラヤ。パンテラヤ。

パンテラ。(螺旋梯子の上より。)ブレンタ河には、旗を立てた船の数が百艘以上見えます。フィサオレからも、ミラからも、レ・ポルテからも段々船が下つて参ります。(間。)マリビエロの鷲も見えます。グリマニの東も見えます。ロレダンの薔薇も見えます。

夫人。パンテラヤ。降りてお出で。降りてお出で。お出でといふのに。

(苦痛と憤怒とに鞭打たれて、夫人は廣場をあちこち馳せ巡る。さて脅かす如き態度にて女中達に向ふ。)

そしてお前達のうち誰一人あの子の着物の糸一筋、髪の毛一本持つて来、呉れるものがないのだね。えゝ。あの子を殺す事が出来なかつたら、お前達を生かしては置かないよ。

(パンテラが戸口に現はるゝや否や、夫人はつかまへて突放し、急し立つ)

早くお出で、走つてお出で。そしてストラオニヤの女子を通してお出で。一刻も早くこゝへ連れてお出で。そしてさうお云ひ。黄金と寶石とであの婆の體を埋めてやる。何でもわたしの持つてゐるだけの物は、みなあの婆に呉れてやる。早くお出で。走つてお出で。早くこゝへ連れてお出で。

(女中は格子の外に出で闇を走りつゝ、見えなくなる。)

そしてルクレチアや。お前は何にも云はないね。何にも云はないね。そしてカタリナや。お前も云ふ事がないのかい。

(猩々緋の布圍を敷きて、寢床にしたる長椅子の上身に何か投ぐ。)

何とかお云ひよ。お云ひよ。

(夫人は布團の上に長く横たわり、顔を布團に埋む。折々涙なき歌歌き夫人の體を揺る。女中等はしなやかに、恭々しき態度にて、長椅子に近づく。オルセオラは微笑みつつ、貰ひたる二つの指輪を眺む。)

ルクレチア。あの奥様、わたくしもあのお方がパンテアの船にお出でのお見受け申しました。女子は流行歌を歌つてゐますと、あのお方がそれに合せて笛を吹いて入らつしやりました。周囲を取巻いてゐる船の中の人達は息を詰めて聞いてをります。女子の歌ふのは羅馬の流行歌でござります。

もう戀はいや。
もう熱はいや。

カタリナ。あの、奥様、わたくしもあのお方をお見受け申しました。あのお方がヘアブの箏の前に坐つて入らつしやりますと、女子は髪を解きまして、樂器の蓋の上に伏さつてをります。女子の顔はも少しであのお方の顔に障るやうになつてゐまして、髪の一束があのお方のお頭に巻き付いてをります。あのお方が箏をお弾き遊ばす。女子は、俯向いて入らつしやるあのお方の耳に口を寄せて、小聲で歌を歌ひます。箏の音は女子の髪の上を滑つて参ります。丁度女子と、あのお方と、そして箏とがたゞ一つの物のやうで、あのお方と女子とは際限もない樂みを感じてゐるやうに

うに見えました。

ルクレチア。あの女子が河の上で歌ひますと、その聲を聞くものはみな引寄せられて付いて参るのでござります。杜氏は酒桶を打やつて河岸へ馳付けます。昨日も鞭を打つた牡牛が二疋女子の聲に聞き惚れて、河に飛込んださうでござります。坊様達は贊卓を打やつて馳出します。坊様達の中にも、侯爵様の御殿で歌を歌つた事のある赤法師といふ仇名の付いてゐる方がござります。それからサンタナトリアの聖アゴスチノの組合の坊様で、サンステファノのオルガン弾を致してゐる坊様がござります。この二人であの女子の爲に流行歌やマドリガレの小歌の譜を作つて、地獄に墮ちても構はないと申してゐるさうでござります。世間の噂には、あの子は水に住むシレネといふ化物の秘密を持つてゐると申します。

カタリナ。世間で申しますには、あの子はカラブリア公爵様の御寵愛を受けてナポリにゐました時、或晩自分の住つてゐる宮殿の下、波打際の洞穴の中で、睡つてゐるシレネを見付けたと申します。

ルクレチア。奥様、本當の話でござります。オルセオラ。奥様、本當の話でござります。トリストタン・チベルレットもキプロスの島から歸りまして、お妃コルネル様がアルフォンソ王に御再縁を遊ばすお世話をいたして

ゐる時、海で寝てゐるシレネを見たさうでござります。そして死なうと思ひまして、金剛石を呑込んださうでござります。

カタリナ。世間ではこんな事も申します。パンテアはシレネの寢てゐるのを見まして、髪に挿す針をシレネの頸に突差しまして、その創口に口をあて、シレネの魂を體から吸取つてしまつたと申します。その時あの子の瞳は、元兩方とも黒かつたのが、片々碧くなつたと申します。又外の人のお申しますには、シレネといふ化物は死ぬといふ事はござりませんので、パンテアはそれを網で取りまして、大きな生洲に入れました。それでシレネは海へ放して貰ふ代りにあらゆる秘密をパンテアに教へてしまつて、それからはそのシレネは啞になつてしまつたと申します。そのシレネは、パンテアの死ぬるのを待つて、自分の聲を取戻さうと思つて、今でもあの子の船の通る處で、折々夜中に波の間にあるのが見える事があると申します。

(夫人は忽ち布團を離れて起上る。顔は蒼ざめて異様になりゐる。譬は海の深き渦巻に巻き込まれたる人の、折々呼吸せんが爲に、水面に浮び出る如し。)

夫人。あの子を殺さすには置かぬ。殺さすには置かぬ。(夫人は園の方へ歩み出で、パンテアの冤女を伴ひて歸るが待遣しき様子にて、彼方を見る。戀の船々より音楽

の音亂れて聞え来る。)

オルセオラや。行つておくれ、行つておくれ。ペンテルラはどうしてゐるか見に行つておくれ。行つてさうお云ひ。早くおし、馳けてお出でとさうお言ひ。さあ、お行きよ、お行きよ。ルクレチアや。お前はあの中庭の上の部屋へ上つて行つて火鉢に火が起してあるか見て、火が起してあるならこゝへ持つてお出で。

(オルセオラは園の方へ馳せ行き、見えぬ。ルクレチアは螺旋梯子を登り行く。)

まあ、ネリツサや。バルバラやヤコベルラはどうしたのだらう。まだ歸つて来ないね。もしあれらの内誰一人、あの子の髪の毛一本をも持つて来なかつたらどうしよう。カタリナや。お前はあのお方のお弾になる箏の傍にゐたではなかつたかい。

カタリナ。いゝえ。わたくしはあの子の船に乗つてゐたのではござりません。わたくしは餘處の船から始終の様子を見てゐましたのでござります。

夫人。(憤然として。)ええ。お前達みんなを殺してしまはねば氣が濟まない。(間。)

おら、魔女が、あれ、そこへ連れられて来る様だね。(夫人は出で迎へんとする如く踊り上る。さて自ら抑ふる如く坐りて、女中等の冤女を連れ来るを待つ。オル

セオラ、メンテルラの二人に引かれて、魔女登場。疑ひ深き氣色。目はエマイユの如く輝きて残酷に見ゆ。白目は氣味悪く、橄欖の如く褐色なる顔の上にきらめけり。魔女はその目にてあちこち見廻す。身に着けたるは長き、縞ある衣にて、頭には黒き巾を纏ひたり。その巾額と額を掩ひ隠せり。魔女は大統領夫人の前に進み、身を屈めて敬禮す。

夫人。ストラニアのお婆さん。お前はわたしが呼んだのに来まいとしたね。

魔女。(へり下りて。) いえ、奥様。わたくしは参らうと存じたのでござります。生憎不實な女子の爲に、惚薬を拵へて貰はうと申しまして、或若者が参つてみました。その若者がわたくしを引留めましたのでござります。その若者が何んと申しまして、惚薬を拵へるには、月の纏度と申すものがござりまして、丁度その時に薬草を摘んで来て入れて煮ねばなりません。それで直ぐには出来ないと申すのをその若者が聞入れずに、無暗にわたくしを引留めましたのでござります。惚薬を呉れぬなら殺してしまふと申します。あなた様の御家來達が、とう／＼その男と打合つて、無理にわたくしをお連れなされました。わたくしはまだ命のあるのが不思議なやうでござります。荷物のやうに縛られて驢馬の背中へ括り付けられましたので、繩が肉に食込んで

を着てスフォルツァ形の帽を冠つてをりました。

夫人。は、あ、お前は中々油断の出来ない女子だね。それはさうと、わたしはお前に蠟人形を拵へて貰はなくてはならないよ。お聞かい。パンテアは生かしては置れないのだよ。お聞かい。パンテアは生かしては置れないのだよ。分つたかい。その代り何でもお前の欲しい物は、受合つてお前にやる。お前が故郷へ歸つて行くなら山のやうに寶を積んだ船に乗せて送つてやる。お前が生きてゐる間何不足なく自分の家で暮して行くやうにしてやる。

魔女。よろしうござります、奥さん。今宵人形を拵へませう。

夫人。いや、いや。今宵までは待たれない。今、今直に、そこで、即座に、このわたしの目の前で拵へておくれ。分つたかい。蠟の用意もしてある。火鉢には火がおこつてゐる。ルクレチアがこゝへ持て来る筈だ。メンテルラや。お前は急いで金の心の臓の間へ行つて蠟を持つてお出で、二磅用意がしてある。それから籐箱にある寶石と櫃にある銀貨の入物を持つてお出で。早くおし。

(ルクレチア、耳の二つ付きたる火鉢を持ちて梯子を降り来る。メンテルラは梯子を登り行く。)

魔女。(貪慾の心萌す様子。) 蠟人形は只今直に拵へませう。併し、奥様、蠟には何をませるのでござりまするか。晚餐

で、體中が創だらけになりました。

夫人。(頭に掛けたる飾の鎖を外して魔女に投げやる。) さあ、お前の肉に食込んだその繩の代りにこの鎖を取つてお置き。マヨルカ王の秘法の書物はこゝへ持つて来ただらうね。

魔女。書物は持つて参りました。

(魔女は懷中を探り、一巻の書物を取り出す。書物は、古びて切れ切れになりたる鞆革の平紐にて巻きあり。)

夫人。お前はパンテアといふばいたの事を聞いてゐるだらうね。大統領の夫人でもあるやうな、贅澤な風をして、遊山船でブレンタ河を漕せてゐる女子だ。

魔女。パンテアでござりまするか。あの片々碧い、片々黒い目をした女子でござりませう。エタバナの魔女の申す事を聞かないで死んだ、怖しいアレクサンドロス王のやうな二色の目を致してゐる女子でござりませう。あの女子の星なら存じてをります。

夫人。いつかあの女子を見た事があるのかい。

魔女。はい。見掛けた事がござります。つい近頃の事で、エネチアでの事でござります。あの女子は出窓の上に立つてをりました。髪の毛の黄金色を晒すと申して、日の光を浴びてをりました。その時リワの方からその姿を見詰めてゐた若い男がをりました。その男は櫻の實のやうな赤色の上着

式に使つた髪包、尊い膏、それから抜けた齒でもござりませうか。

(夫人ざくりとする様子。夫人の燃ゆる如き目の前に、は、重き、黄金の飾りある裝束を付けたる、衰へ果てし老人の靈の過ぎ行くを見るかと覺し。)

夫人。齒が入るといふのかい。まだ何にもない。今迄待つてゐるのにまだ何にも手に入らぬ。衣裳の糸の一筋も、髪の毛の一本も。だが待つてお出で、少し待つてお出で。まだ女中達が歸つて来る筈だ。(間。) オルセオラや、圖の方から歸つて来るのが見えはしないか、見てお出で。え、何にも取つて来なかつたら、わたしは女中を殺してやる。一人も残さず殺してやる。

(じれつたささ、腹立しさに、夫人は狂氣の如くなる。ルクレチアは焔の燃立つ火鉢を絨緞の上に下す。メンテルラは蠟、寶石の入物、金入を持ち来る。)

夫人。(魔女に蠟を渡す。) これこゝに蠟がある。清淨な蠟だ。御覽。蘇合香のやうに眞黄色で、水のやうに形を變へる事が出来る。人形を拵へるのには一秒間もかゝるまい。それからこのお金は少し計りだが手附に取つてお置き。間。どうだらうね。蠟計りで外の物を交すには目差す人

を取殺す事は出来まいかい。

魔女。それは出来ないにも限りません。今日は好い日でござ

ります。今日の天使はアンホエルでございます。夫人。さう思ふならやつて見て呉れ、さあ、お始め。お前を海の向うへ乗せて行く船の支度を直にさせて、その船には寶を一ばい積んでやる。あのパンテアめはどうしても殺してやらねばならぬ。

魔女。今日の天使はアンホエルでございます。

(魔女支度に取掛る。魔法の書物を開けば、解きほぐしたる鞆革の紐、だらしと垂る。魔女はその書物をエヌス像の臺の上に、立像の銅の足に寄せかけて置く。これにて像の臺は見臺のやうになり、立ちながらその書物を讀む事を得べし。魔女は火鉢の上に俯向き、蠟を熔さんとする。さて小聲にて書物のうちの、分らぬ文句を讀みつゝ、指にて人型を作る。夫人はあからめせず蠟人形の出来るを見詰める。その様憎悪の力のありたけを蠟人形の内に込めんとす。如し。河の方、遠き處より戦争の如き人音幽に聞ゆ。)

夫人。(踊り上る) お聞きかい。お聞きかい。

(ペンテルラ様子を見に梯子を登る。)

オルセオラ。(の方より、息を切らして云ふ) ネリツサが参ります。ヤコベルラが参ります。ヤコベルラの顔は血みどろになつてゐます。

(ヤコベルラ、息を切らし、色蒼ざめ、片頬を傳ひて血

流る、姿にて登場。血は顔の創より流れ出づ。ネリツサは聲を立て、泣きつゝ、附添ひて登場。)

ヤコベルラ。奥様。

ネリツサ。奥様。

夫人。(ヤコベルラの近く進み寄るを見て) その血はどうしたのだえ。誰がお前に創を付けたか。云つてお聞かせ。

(舞臺にゐたる女中達、みな今歸れる二人の周圍に寄集まる。魔女は構はずに爲事をしてゐる。)

ヤコベルラ。(物に恐る、如き聲にて) わたくしは奥様に差上げるものを持つて歸りました。パンテアの髪の毛でござります。渦巻いた髪の毛で、長い髪の毛でござります。

夫人。(思ひがけぬ喜びに夢中になりたる様子) 何んとお云ひだえ。何んとお云ひだえ。

ヤコベルラ。わたくしの切取つた、あの女子の髪の毛でござります。たしかにこの手で切り取りましたので、ござります。(問) こゝに持つてをります。こゝに持つてをります。

(癡癡する指にて胸の邊を探す。その間ネリツサは涙にてぐつしより濡れたるハンケチを手に持ち、ヤコベルラの頬に流る、血を、優しく拭ひやる。)

夫人。(四邊の物事に構はず、爲事をしてゐる魔女に向ひ、物狂ほしき喜びの聲にて) お前聞いたかい。聞いたかい。

あの女子の髪の毛が手に入つたのだよ。(問) あの女子の命はこつちの物だ。

ヤコベルラ。こゝにござります。こゝに。

(胸の邊より、この尊き臍物を入れたる、糸にて幾重にも巻ける小さき包を取出す。)

こゝにござります。糸を解かねばいけません。結び玉が幾つも幾つもござります。出来る事なら百も千も結んで置かうと存じましたのでござります。ネリツサさん。お前さんが結んでおくれたたね。大相堅く結んでお置きだつたね。さあ、お解き。お解き。

(二人にて結び目を解かんす。夫人は待兼ねたる様子にて、折々手を包の方に差伸す。)

ペンテルラ。(この間に螺旋梯子の上より) 船がみな引返します。船に力を入れて上手へ登らうと致してをります。かしぎさうになつてゐるやうに見えます。(問) 下の方、レ・ポルテの方向に大相な物音が聞えます。(問) 稲光のやうなものが見えます。(問) 河は一體に眞暗になりました。

ヤコベルラ。(やう／＼包を解きて、髪の毛を取出す) こゝにござります。こゝにござります。長いではござりませんか。大したものではござりませんか。わたくしが、わたくしが、切り取りました。隠して持つてゐた、此の鉄で切取

つてやりました。

オルセオラ。まあ、長い毛だ事ね。

カタリナ。まあ、びか／＼光つてゐるではありませんか。

ルクレチア。ほんに大した光澤でござりますね。

(夫人は詞無く、両手を皿のやうにして、殺すべき仇の身より盗み取りたるこの品物の方へ差出す。さてヤコベルラの渡す髪の毛を受取りて、両眼を閉ぢ、譬へば毒蛇に觸れたる如く、忽然堪へ難き氣味悪さを覺えて、全身凝り固りてあり。夫人は斯く、色蒼ざめ、詞なくしてあること數秒間。さて再び兩眼を開き、そのまゝの姿勢にて、徐に、彼の開きたる書物の前、銅像の足元にて蠟人形を作りある魔女の方へ持ち行く。魔女は、夫人の手のうちなるパンテアが髪の毛を見んと身を屈む。)

ペンテルラ。(この隙に上より) 下の方、レ・ポルテの方向に大相な物音が致します。(問) 何千人かの人の聲が致します。(問) その聲はパンテア、パンテアと申すやうでござります。河は一體に眞暗でござります。たつた一筋赤く見えてゐる河面には、まだ流れて行く花の鎖が見えてゐます。幾つも幾つも見えてゐます。(問) 船が一艘、乗つてゐる人もなんにもないのが、水のまにまに下の方へ流れて参ります。

夫人。(魔女に) さあお取り。これであの女子の生命はお前

の手に渡つたのだよ。利目のある強い呪文を唱へておくれ。

(魔女髪の毛を受取り、蠟人形の頭に巻き附く。)

魔女。これで宜しうござります。もうこれで、硝子玉が二つあれば宜しうござります。黒いのを一つと碧いのを一つと、両方の目に入れるのでござります。

夫人。誰か硝子玉を繋いだ鎖を持つてゐないかい。金の鎖と替へてやる。

ルクレチア。わたくしが差上げます。

カタリナ。わたくしが。

オルセオラ。わたくしが。

(三人の貧れる女中等頭に懸けたる硝子玉の鎖を引ちぎり、慌しく碧玉と黒玉とを探す。)

カタリナ。こゝに黒いのがござります。

ルクレチア。こゝに碧いのがござります。

(二人は硝子玉を魔女に渡す。魔女受取りて、その玉を小さき蠟人形の頭に、確として嵌め込む。女中達の空手を差出すを見て、夫人は程々緋の長椅子の上に置きある寶石入を開く。)

夫人。(二人に頭師の鎖を渡しつゝ。)これがお前のだよ。これがお前のだよ。(女中達は夫人の両手の上に身を伏せて接吻す。さて嬉

しげに微笑みつゝ、貫ひたる頭師を持ち、身軀に、華々しく引下る。ヤコベルラは離れて脇の方にゐる。ネリツサは白き巾にてヤコベルラの額を包みやる。白き巾には忽ち血にじむ。夫人この様子を二人の傍に寄る。)

ヤコベルラ。お前には何をやらうかね。お前一人脇へ退いてゐておとなしくしてゐて、そして血を出してゐるのだね。お前にはわたしの一番大事な飾をやりませう。その血の出てるお前の額へ。眞珠の冠を冠せてやりませう。お前はいつまでも内へ置いて、わたしの傍を離さない積りだ。いつまでもわたしが鼻負にしてやる。これから先のお前の生涯は小川の水が流れるやうに樂にしてやる。(間。)

そしてネリツサも、お前の仲好のネリツサも鹿末にはせぬ。お前はネリツサが好きなのだね。あれを御覽。目に一ぱい涙をためてゐる。お前の創を苦にしてゐるのだ。いつまでもネリツサがお前に別れないやうにしてやる。二人ともいつまでもわたしの手元に置いてやる。お前達二人には苦勞といふものをさせない積りだ。(間。)

創が痛い。わたくしに云つてお聞かせ。さあ云つてお聞かせ。誰がお前を打つたのだい。あの女子かい。お前が髪の毛を切つた時、あの女子が打つたのかい。一體どうしてあの髪の毛を手に入れたのだい。さあ、好い子、云つてお聞かせ。わたしが聞くから。

(夫人はヤコベルラを長椅子の處に連れ行き、布團を背中へ當がひ寄掛らす。)

魔女。(進み出づ。)さあ、蠟人形が出来ました。

(魔女は夫人の手に、髪の毛を頭に巻き付けたる、黄色なる裸體の蠟人形に硝子玉の目を入れたるを渡す。蠟人形は異教の民の祭る偶像の如し。女中等は心に恐怖を抱きつゝ、無言にてこれを見る。)

これが死なねばならぬ淫婦ペンテアの人型でござります。今日の天使はアンホエルでござります。

(この呪の人形を受取る時、夫人の両手は顫ひわな、けり。夫人は程々緋の布團に腰掛け、人形を膝の上に据え、一秒間ほど、身を屈めてぢつと見る。その目には憎悪の全破壊力を集中せり。さて烈しき動作にて、忽然自分の束髪に挿しある長き、黄金の針を抜き取る。その様七首の鞘を拂ふが如し。さてその針にて蠟人形を突刺す。魔女は銅像の臺の傍に立ち、半ば口の内にて魔法の書物に書きある呪咀の文句を讀み、折々香氣高き粉を燃ゆる火鉢の火に撮み入る。眞黒になりたる團の上には、重き、青緑色の雲棚引く。)

ペンテラ。(この隙に螺旋梯子の上より。)河面に、レ。ポルテの方向に火が見えます。(間。)

火が段々大きくなつて、近くなつて参ります。水の上で動いてゐる様子が船火

事らしいござります。それとも慰みに火を焚くのかも知れませんが。變な色でござります。火に照されてゐる處に人の影が黒くなつて見えてゐます。丁度桶を桶つてゐるやうでござります。火は段々大きくなつて参ります。

夫人。(憤怒の有様にて、又束髪より針を一本抜き出し、蠟人形を突刺す。)えゝ。地獄の火の中へそちを投込んでやりたい。

(夫人は魔女の方へ振向く。)

ストラオニアのお婆さん。あらゆる天使をお呼び。あらゆる悪魔をお呼び。そして彼女子を、慰みの眞最中に、粉微塵にしてやるやうに骨を折つておくれ。何んでも約束をしただけのものはみんなお前にやるのだから。そればかりではない。まだ云はなかつたものも添へてやる。分つたかい。どうしてもあの女子を殺すことだけは殺して貰はねばならないのだよ。あの女子を咄つておくれ。咄つておくれ。

(夫人はまた一本の針を髪より抜き出し蠟人形に刺す。さて束髪に手をやりて針を探せども見當らず。腹立たしげに傍を見返り、絨緞の上に坐りゐるヤコベルラの髪に挿したる針を抜き取る。ヤコベルラ額の創に觸れられて痛みの叫びをなす。)

おう。ヤコベルラ。創があつたのだつたね。まだ血が出るかい。巾が赤なつてゐるね。(間。)

さう、お前はまだ

云つて聞せないね。其創は誰に打たれた創なのだえ。あの女子が打つたのかい。お前に髪を切られる時、打つて創を付けたのかい。どこの髪を切つたのだえ。耳の傍のかい。頭に垂れてゐたのかい。頭の、脈の打つてゐる處に垂れてゐたのかい。

ヤコベルラ。頂の髪でござります。女子はそれを氣取りました。鉄の音が聞えたのでござります。(間。)大相髪の多い女子で髪を削いてゐる時は、一體なら物音も聞えず、目にも見えないのださうでござります。何でも髪が重くつて、丁度布團を一枚も被つてゐるやうな心持なのださうでござります。髪を削いてゐると息が詰ると申します。餘り髪が重いので、折々は泣くと申すことと申します。丁度重荷を負うて山を登る人のやうに折々は溜息をつくさうでござります。丁度垣の中に隠れてゐる鶯のやうに。

(夫人はまた手を束髪にやりて、残酷なる針を挿せども得ず。身の周囲には女中等跪きある。夫人は女中達の頭を探る。そのうちオルセオラ自分の髪より針を抜き取りて夫人に渡す。夫人受取りて憤怒の様子にて、その針を蠟人形に刺す。)

夫人。それではお前は、船まで行つたのだね。どうして騙して乗込んだのだえ。それをわたしに云つてお聞かせ。ヤコベルラ。パンテアは廣告を致したのでござります。變つ

しい、素早い指の百本位ある女子が欲しいものだ、申すのでござります。わたくしはぶる／＼顔へてをりました。あのお方はわたくしをちつと見て入らつしやりました。夫人。どんな御様子だつたえ。ヤコベルラ。何んとも申しやうのないほどお美しくお見えな

さりました。(夫人は胸を刺されたる如く首を後へ投ぐ。夫人の手は鋭き獲物を求むる如く、覺えず女中達の方へ差伸さる。ルクレチア我が束髪の針を抜きて夫人に渡す。夫人受取りて蠟人形を突刺す。蠟人形は數多の針に貫かれて、蠟の如くに見ゆ。)

夫人。わたしの問ふのは、どんなお心持で入らつしやるやうに、お見受け申したかと云ふのだよ。嬉しがつて入らつしやつたか。ぼんやりして入らつしやつたか。

ヤコベルラ。左様でござりますね。何だか額を曇らせて、眉根を寄せて入らつしやるやうでござりました。お目は燃えるやうで、どちらかと申せば、曇つてゐる方でござりました。

夫人。なんとか仰やつたかい。ヤコベルラ。何か考へ込んで入らつしやるやうでござりました。わたくしをちつと見て入らつしやりましたが、それから腰に挿して入らつしやつた小さい七首をお抜きなさりま

た髪結が抱へたいと申すので。何か新しい工夫をして結つて貰ひたいといふのでござります。あの女子は、もう自分ではどうして見ようといふ工夫がなくなつたのでござります。これまでは色々な結方を致して見て世の中の美しいもの、派手なものを、何でも自分の髪で拵へて見たのでござります。蜂の巢のやうにして見たり、牛の角のやうにして見たり、ヒアシントの花のやうにして見たり、海の波のやうにして見たり致したのでござります。わたくしは廣告の事を聞きましたので、女中の一人にわたくしの手際を吹聴して抱へて貰ふやうに致しました。爲合せな事には、そんなら試に結はせて見ようといふ事になりました。わたくしは船に乘込みます。ネリツサは傍の小船で待つてゐます。わたくしはあの女子の船に乘込む時、やまならしといふ木の葉のやうに、ぶるぶる顔へてをりました。

夫人。その時船にあのお方が入らつしやつたかい。あのお方をお見上げ申したかい。

ヤコベルラ。え。入らつしやりました。香水の瓶を手にお持ちになつて、その薫りに酔ひたいといふ風で、嗅いで入らつしやりました。パンテアはわたくしの參るのを見まして、半分はじれつたがり、半分は可笑しがるといふ様子で、さう申すのでござります。おや。この女子も手は二本しきや持つてゐないのだね。わたしの髪を掻かせるには優

して、その切先を瓶にお漬けなさるのでござります。刃に匂をお付け遊ばすのか、毒になやうになさるのか、わたくしには分らなかつたのでござります。わたくしは女子の髪の重い束に束ねてあるのを解きながら、體中が顫へてをりました。廣々とした黄金の森に迷つた二枚の落葉のやうに、わたくしの手は髪の中をうろついてをりました。髪の中に隠れてゐる女子が、何をするのだえ、何をするのだえと申すのでござります。大相腹を立てたやうな聲なのでござります。わたくしはその時、ふいとあらがふやうな心持で氣が強くなりました。そこでわたくしは稻妻のやうに、手品遣のやうに素ばしこく毛を一本切り取つて隠してしまひました。それを致してからといふものは、わたくしはもう逃げようと思ふ外には何んにも思つてゐなかつたのでござります。兩手は死んだものゝやうに、利かなくなつてしまひました。女子は大相怒りましてわたくしを追出しました。突出しました。キプロス生の一人の女中はわたくしを殺さうといたします。ストラヲニヤ生の一人の女中はわたくしに犬をけし掛けます。

ネリツサ。(涙をはら／＼と溢す。)まあ、奥様、お聞き下さいまし。あの時にヤコベルラがどうしてその場を逃れなかつたか、不思議なやうでござります。體中に打たれない處は少しもござりません。腕にも肩にも、胸の處にも一ぱい創

が付きました。

夫人。(ネリツサに。) さあ、さあ。ヤコベルラを連れてあつちへお出で。そして介抱をしておやり。ペンテルラにさう云つてバルサムを付けておやり。ペンテルラや、ペンテルラやペンテルラや。

ペンテルラ。(高き處より。) 火が段々近くなつて参ります。水の流れに従つて下つて参ります。河中が火に照らされて参りました。(間。) 船がみんなその火を取巻いて、込合つて、幾つともなく付いて参ります。大相な物音でござります。

オルセオラ。あの女子の乗つてゐる船は、外の船と一しよにこのお庭の傍を通るのださうだね。

カタリナ。夜中ブレレンタ河で遊んで東の白む時エネチアのジウデツカに乗込む筈だね。

オルセオラ。さう、さう。テオドラ様の遊ばしたやうに、園や野原の朝露を集めさせて、毎朝行水をするのだつてね。

ヤコベルラ。あの女子は世の中にありとあらゆる薫物や香水を入れた、色々な大きさの瓶や壺を千許りも持つてゐるのだとね。いつも乗つてゐる船にも薫物だけを入れる入物が

あるさうだね。それから連れて歩く女中のうちに、モルガシナといふものがあるつてね。その女中が寢屋の秘密を何でも心得てゐて女の色の衰へないやうにする香薬や遣ひ水や膏薬や白粉を拵へるのださうだね。

ルクレチア。世間ではいふのに、あの女子の體には黒子一つ無いのだとね。ただ脈の網が青く透通つて見える計りだね。肌の色は白といふよりは、少し青味がゝつた方で、小さい子供の白目の色のやうに見えるつてね。

カタリナ。世間でいふのに、カラブリアの公爵様が、コンスタンチノポリスからお持歸りになつた盃がある。その盃は希臘の彫刻のヘレナの像の乳房の型を取つたのだとね。そこで公爵様がペンテアの乳房の型を取つて、今一つお盃をお拵へになつた。それがヘレナの乳房で取つたのと双児のやうに揃つてゐるのだとね。

(女中等は斯く語りながら、おの／＼頭より抜きて出す針を、色々な白と科とにて夫人に渡し、夫人はそれを受取りて蠟人形を突刺す。一目碧く、一目黒き妖婦にかたごる蠟人形の周圍に、絶えずきらめく針のさまは、譬ば古代の打物のきらめき鳴るが如くなり。魔女はそれに構はず、銅像の臺と火鉢との間に立ち、マヨルカ王の魔法の書物を讀みあはる。折々河の方より戦争の物音の如き物音聞ゆ。雲は次第に消え失せんとす。)

オルセオラ。あの物音をお聞きよ。

ルクレチア。まあ何んといふ聲だらう。何んといふ聲だらう。

カタリナ。世間で云ふのに、男があの子を見るとき、牡牛が蛇に附かれたやうに氣が違つてしまふのだとね。

オルセオラ。本當だよ。本當だよ。金で飾つた船の軸に出た時は、周圍の船にゐる男達がみな氣が違つたやうでした。ヤコベルラ。あの女子が目で見ると、二通り見やうがある。碧い目と黒い目で見られると、見られた男は何んにも分らないやうに夢中になるのだとね。

ルクレチア。あれお聞きよ。何んだかあの聲は遊山をしてゐる聲ではなくつて、戦争をしてゐる聲のやうではないか。

カタリナ。何んでもあの子は代々の大統領夫人の遊山に負けないやうにしようといふのだとね。これまで名高い遊山をしたのは、昔のモロシナ・モロシニ様、それからチリア・ブリウリ様、それからこちらの奥様、グラデニガ様なのだが、それよりも、立派な遊山をして見せようといふのだとね。

ヤコベルラ。何千か知れない、ミルツスや、月桂や、糸杉の編物を河に投げて、ジウデツカまでも、サン・マルコまでもその緑の鎖が浮いてゐる間を船で行かうといふのだと

ね。先へ投げた編物はエネチアへ流れ付いて、船の来る光觸になるのだとね。

オルセオラ。ほんに糸杉の分が先へ流れて行けば好い。カタリナ。東が白む時、エネチア中の人が目を見て、水に浮いた緑を見て、ペンテアさんが乗込むのだといふやうにするのださうだ。その時十人の譏官達や、大役人達が。

(突然夫人の探す針の、誰の頭にも無きに心付て、詞を切る。)

オルセオラ。奥様、もう誰の髪にも針はござりません。(斯く云ひつゝ、女中等は猶銘々の髪を手探りにしてゐる。)

夫人。(魔女に。) スラヲニヤのお婆さん、どんな様子だえ。呪文の利目はどうだらうね。あの女子は體の創を覚えるだらうかね。断末魔の苦しみを覚えるだらうかね。御覽。わたしはこんなに針で刺してやつたのだよ。蠶のやうになつてゐるのだよ。

(河の遠き處より、怪しき物音再び聞ゆ。)

お聞きよ。お聞きよ。スラヲニヤのお婆さん。あの凱歌の聲をお聞きよ。お前はもう一時間もかゝつて唄つてゐるのに。

(魔女は靜に、魔法の書物を開けたるまゝに持ち、左に向き、夫人の方へ歩み寄る。さて數多の針のきらめける